

仲良くなりたいていって  
いう気持ち、忘れちゃダ  
メだよね

雨降り

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

僕は自分を変えるんだ！絶対に！

妖精が見えることをきっかけに提督になった男。

彼にはやりたいことがあった。

ブラック鎮守府で傷付いた艦娘を相手に彼はどうするのか。いや、変わるしかないで  
しょ！

# 目次

始まる	1
前途多難	6
睨まれた	10
睨まれた2	14
睨まれた3	19
睨まれた4	25
意地っ張り	33
妥協案	38
活路	42
見えない何でも屋	49
見えない何でも屋2	57
見えない何でも屋3	61

見えない何でも屋4	68
見えない何でも屋5	72
見えない何でも屋6	77
見えない何でも屋7	84
見えない何でも屋8	90
いきなり頓挫	96
不穏な空気	103
不穏な空気2	109
不穏な空気3	114
不穏な空気4	120
戦闘	124
戦闘2	129
戦闘3	133

初仕事	140
初仕事2	144
初仕事3	150
地下牢	155
地下牢2	158
地下牢3	164
地下牢4	168
地下牢5	173
地下牢6	178
地下牢7	182
ヘル・アンカーズの尖兵	192
ヘル・アンカーズの尖兵2	200
ヘル・アンカーズの尖兵3	205

ヘル・アンカーズの尖兵4	209
ヘル・アンカーズの尖兵5	220
スーパーライブ	226
スーパーライブ2	235
スーパーライブ3	245
スーパーライブ4	250
スーパーライブ5	258
スーパーライブ6	262
吹雪インパクト	279
余談	284
吹雪インパクト2	292
吹雪インパクト3	297
吹雪インパクト4	303

鎮魂祭	431
川内の想い	425
栄枯盛衰 2	417
番外編：目覚まし時計	408
栄枯盛衰	400
鎮守府防衛戦 5	392
鎮守府防衛戦 4	380
鎮守府防衛戦 3	369
鎮守府防衛戦 2	357
鎮守府防衛戦	347
運命の日	322
朝潮マジック	318
朝潮インパクト 5	311

鎮魂祭 2	439
鎮魂祭 3	446
鎮魂祭 4	452
鎮魂祭 5	458
鎮魂祭 6	471
鎮魂祭 7	477
役割分担	487
朝潮の意志を継ぐ者	494
六艦集結	512
六艦集結 2	517
役割分担 2	528
川内の想い 2	538
混乱の時	552

増援	729
絆	718
すれ違い	697
後悔	690
再会	666
交戦そして崩壊	645
地下牢 8	634
川内の想い 3	621
反撃の狼煙	610
夜明け	600
元気でね	579
因果応報	567
大逃亡	562

# 始まる

伝えるって意外に、いや普通に難しい。

相手に自分の気持ちを素直に伝えられなくなったのはいつからだろうか。

こんなことはないだろうか：自分の想いを無視して、相手の顔色を伺って、相手に合わせて、思ってもないことを口にする事。

そして、そんなことをし続けるうちに自分の想いが分からなくなる、自分が見えなくなる。

自分を見失ったら伝えるもなにもない。

僕は、そんな自分を変えたかった。

「着いたか…」

僕は自分がこれから生活をする場所を前にそう呟いた。

古びた門、建物も見限り蔦が生い茂って、ところどころ壊れかけている…いやもう崩壊していると言っていいかもしれない。

とはいえ、やはり威圧感を感じさせる。腐つても鎮守府ということか。

そう、僕は廃れてはいるが、歴とした鎮守府の前に立っているのだ。

「これは思ったよりひどいな」

とりあえず僕は門の前でインターホンが無いか探してみた。無かった…。いや、どうやって入るんだよ。

話は遡る。

僕には小人が見えていた。それが妖精という存在だと知ったのは、海から深海棲艦という化け物が現れ、僕たちの町を：いやここだけじゃない、世界中の至るところに現れては破壊の限りを尽くししばらくたつた頃だった。

人類に対抗の術は無かった。もちろん抵抗しなかったわけではない。しかし人類が使う兵器はことごとく深海棲艦の前では無力だった。

そして人類の最大戦力を投入した最後の賭けとも言える戦いで僕たち人類は大敗した。

僕は忘れないだろう。この決戦はテレビで中継されていた、もちろん人類が大勝利する歴史的瞬間を記録に残そうということだったのだろうが…。

僕は、いや世界中の人は見たんだ、深海棲艦がこれだけ激しい戦いの中でも無傷で、容

赦なく攻撃をしてくる姿を。人類を蹂躪しようと進軍してくるその姿を。

もはや希望など無い。あの決戦を敗走してからというもの、皆がいつくるか分からない自分の死に震えながら過ごしていた。

そんな時だ、艦娘が現れたのは。

艦娘が現れてからはあつと言う間だった。

最初こそ、新手の敵かと震えあがった人類だが、艦娘は友好的で、共に戦おうと人類に申し出てきた。もはや打つ手なしの人類は藁にもすがる思いで、共闘を受け入れたのだった。

そして、簡単に絶望的な状況をひっくり返したのだ。

平和は艦娘の出現により取り戻された。

人類は再び訪れた平和に歓喜し、艦娘に感謝した。

艦娘も人類と共に平和を勝ち取ったこと、人類を守れたことを喜び、人類と艦娘はこの世界から完全に深海棲艦がいなくなるまで共に戦い続けることを誓ったのだ。

そして現在。世界中に鎮守府が配置され、提督となった者が艦娘を指揮し、深海棲艦と戦いを繰り広げることとなった。

「まさか僕が提督になるとはな……」

僕はインターホンの無い門の前で座りこんでいる。変な人だよな、これじゃ。

提督になれたのは、冒頭で触れた小人もとい妖精が関係している。提督になるには妖精が見えることが必須である。

僕は何故だか分からないが、妖精が見えた。そして、そのことを知った海軍が僕をスカウトし、士官学校を卒業した後、ここの鎮守府に着任したのだ。

一応上層部からここに来る前に聞かされていた。ここは艦娘を酷使した鎮守府、つまりブラック鎮守府だと。

悲しいことに、人類と艦娘は友好関係を築いたはずなのに、提督の中には艦娘を奴隷のように扱う者がいる、そしてそんな提督は決して少なくない。

僕はもちろん艦娘を奴隷のように扱わない、平等に接して……。

ふと思う、僕にそんなこと出来るのか。自分の本心もさらけ出せない僕にここの艦娘と仲良く出来るのか。奴隷のように扱わない？…そんなの当たり前だ。

というか平等に接するのかなんとか考えてる時点で何様という感じじゃないか。

「やってやるぞー、これは人生の転機なんだ！僕は変わりたい！自分の想いを素直にぶつきたいんだ！」

ああ、そうさ。海軍にスカウトされた時、快諾したのは人類を守りたかったからじゃない、自分を変えるため。

上層部からブラック鎮守府に着任するよう言われて、動揺したが…。

ここの艦娘は確かに気の毒だ。だけど、ここの艦娘を守りたいとか傷を癒せたらつていう熱意があるかと言われれば無い、ただ自分を変えたかっただけ。

正直に言おう！僕は変わるんだ！本音をさらけ出すんだ！自分を見つけるんだ！

「門の前で通せんぼくらつてるのなに考えてんだろう」

まずはこの門を乗り越えなければ！文字通り乗り越えるか…？高さに無理だな。

僕はため息をつきながら門に寄りかかった。するとギイと音を立てて門があくではないか。

僕の時間返してよ。

とりあえず、僕は門の中に入って行った。これから何があるかと自分を変えてみせると思いながら。

## 前途多難

しばらく歩いてみたが、鎮守府は広かった。

この鎮守府は規模が大きく、所属する艦娘も多いと聞く。ただブラックだし、ポロだし、肝心の艦娘は見つからないけど…。

「ふう」

僕は一息ついてもう少しこの鎮守府内を歩いてみることにした。

とにかく誰かとコンタクトをとらなければ…

正直来たばかりだし、ブラック鎮守府だったことも考えると危険な気もするけど、自分から歩み寄っていかないと永遠にこの鎮守府をさ迷うことになりそうだ。

うーむ、さつきからまあまあ歩いているんだがこの鎮守府、本当にデカイ。今現在、中庭みたいなどころにいるのだが…途方もないぞ、これ。

「どれくらいあるんだ、この鎮守府の敷地は…」

門のところで思わぬ足止めをくらって、歩き回って、時刻は18時を回ろうとしている。

「下手したら、誰にも会えず初日終わるな」

僕はため息をついた。

「ダメだー！誰一人見つからない！」

疲れた足を無理やり動かし歩き回ったが、全然会わないぞ！艦娘に！

もういい加減辺りも暗くなってきた。本格的にまずいぞ、これは。

「まさか、もう誰もいないんじゃない？」

こんな寂れたところで独りは正直怖い。幽霊とか信じてないけど、周りの雰囲気の不気味でなんかやだ。

そもそも上層部からはブラック鎮守府ということしか聞いてない。それ以上は言わなかったし、こちらも尋ねるなという上層部のオーラに気圧され何も聞かなかった。（こういうところが自分の嫌なところだ、オーラなんてものに左右されず、しっかり聞けばよかった）

だから、このブラック鎮守府で何が起きていたのか（大方艦娘を奴隷のように扱ったのだろうけど…）、詳細は分からないし、今現在艦娘がどれだけ所属しているのかも不明

だ。

「いや、でもないなら着任させる必要ないよな」

自分で自分につっこむ。そうだ、誰もいないなら僕がここに来る必要もない。だけど僕はここに着任した。つてことは誰かいるつてことだ。

「探しますか…」

僕は艦娘を探して再び歩き始めた。

「ふう」

何だこれ。

「いねえじゃん！」

驚いた、本当に見つからない。まだまだ鎮守府内全てを見た訳じゃない。でもさすがに一人くらいいてもいいんじゃないか？見掛けさえしなければ、声も聞こえなかったぞ！

実を言うと、今この鎮守府は電気が点いていない。まだ見たところの範囲内ではあるが、どこも点いていなかった。中庭からどこか電気は点いていないかと探してみたが、

パツと見た感じでは点いていない…。ええ…。

どうしよう？

??? ??? 「姉さん、侵入者です」

??? ??? 「分かってるよ、追い払おうか」

僕は気付かなかった。

この鎮守府にはまだまだ沢山艦娘はいる。(この時点では知らなかったが)  
そして、尋常じゃないくらい人間に対して艦娘が憎悪を抱いていることに。

## 睨まれた

「こうなったら自力で行くか…」

鎮守府内を歩き回って、精魂尽き果てた僕はそう思った。

「行けるのか、執務室…」

うーむ、執務室に行かないことには、この鎮守府のことも艦娘のことも何も分からない。  
い。

ではなぜ最初無闇にこの鎮守府内を歩き回ったか？艦娘を探したか？

「鎮守府内の案内図が無いんだよな…」

まず手元に鎮守府内のどこがどんな場所なのか記した案内図は無い。案内役（艦娘）もいない。

だからこちらから案内役を頼もうと艦娘を探したのだが…結果はご覧の有り様だ。

くう…最初から執務室を探しとけばよかったのだろうか？まさか艦娘と会えないなんて想定していなかったしな。本当に想定外だ。というか、門のところ案内役の艦娘いると思ってたのだが…え、この鎮守府、相当ブラックだったのか!? 歓迎されてない!?

そんなことをぶつくさ考えながら鎮守府内の廊下を歩いていると、廊下の先…突き当たりに誰かいる？

いた！やっつー！

電気が点いていないから、非常用に持ってきた懐中電灯で辺りを照らしているので、すっかりとは見えないが、多分艦娘だろう。

ああ、でもこちらに背を向けて顔が見えないな…

どのみちこれだけ薄暗くて、この距離じゃこちらを向いても顔までは分からないかもしれないが…

ふふ、どんな感じで声を掛けようか、フランクな感じでいくか？いや、初対面だし、元ブラツク鎮守府だからな、礼儀正しくいこうか…：…などと考えているうちにその艦娘との距離は縮まっていく。

そして、その艦娘との距離がもう一メートルもないって位になった時。

え？なんで振り向かないんだ!?

確かにまだ声は掛けてはいないが、足音聞こえてるはずだぞ!?!というか、懐中電灯の

光当たってるし…

なんか気味が悪くなってきた。まさか精巧な人形とかじゃないよね!?

落ち着け…。まずは声を掛けよう。相手も警戒しているんだろう。刺激しないように刺激しないように…

恐る恐る僕は彼女に声を掛けてみた。

「あつ、あの…あの、こんばんは」

??? 「・・・」

「本日からここでお世話になる者です。えっと提督が来るみたいな話…聞いているかな…?」

??? 「・・・」

「え、えつと…」

??? 「・・・」

何だこれは!?! え、無視されてるのか!?

え、もしかして死んでるのか、立って!?

??? 「・・・」

依然として喋らない彼女を前に僕は恐怖を覚えた。

異質だ。逃げた方がいい。直感的にそう思う。

だけど……

「何か喋れない事情があるのか……？もしそうならすまない。ただ自分もここに来るのが初めてで何も分からなくてな……。よければ、執務室まで案内してくれないか？」

やった！言えたよ、僕！恐怖に負けず、しっかりと提督らしい口調で話せたぞく

僕はこんな状況だが、自分の言いたいことを言えて内心喜んでいた。

??? 「ここに人間はいりません」

冷たく無機質なその声を聞くまでは。

## 睨まれた2

は？人間はいりませんか？いませんじやなくて？え、どゆこと？

目の前にいる艦娘、やつと喋ったかと思えば「ここに人間はいりません」と言う。

聞き間違え…ではないよな、この距離やぞ（汗）

いや、ここが元ブラツク鎮守府ということを考慮すれば、この言動も無理はないのか？

だけど、その時の僕はその返答に焦ってしまい、冷静に物事を考えられなかった。

「えっと、それはつまりどういう……」

なんとか口を開いて出た言葉。

だけど次の瞬間、僕は廊下に仰向けに倒れていたんだ（なにそれ怖い）

それが、目の前の艦娘が急に振り向き、突っ込んできたかと思えば、思いつきり押し倒してきた為と理解するのにやや時間がかかった。

背中を床に強打したので、思わず「うう」と唸ってしまったが、背中だけじゃない、何

故だか腹部に違和感がある…。

お腹のところがなんか重い…??背中の痛みを堪えながら、なんとか自分の腹辺りを見  
てみる。驚いた！

その艦娘が僕の腹部に馬乗りになっているではないか…。

ちよつといい匂いする…：…：馬鹿なこと言つてられないな。まず状況を判断しよう。

体はあんまり自由が利かないな、手足をばたつかせるくらいなら出来るが…。それ  
で、艦娘の顔は…暗くてよく見えん！だつて押し倒された拍子に懐中電灯、手から落と  
しちゃったんだから。

で、この後どうなるんだ！

人間はいらないと言われたんだから、あまり結末を想像したくないが…。

とりあえず、相手を落ち着かせる為に声を掛けるか？いいや、もう緊急事態と考えて  
強引にでも抜け出すか？

頭の思考回路をフル回転させ、なんとかこの状況を打破しようとしていた僕。ただ、  
艦娘が再び口を開いたことでその思考は一瞬にして止まった。

???'「ここに人間はいりません」

ええ、どうしよう…

???'「ですから、貴方にはここを出ていってもらいたいです」

いや、それは無理な話だよ。着任先はここだし、着任した初日に追い出されたとしたら提督の面目は丸潰れ!

つまり僕の野望である自分を変えるってことが出来なくなるじゃないか!!でも、このままじゃ…。何か言い返さないと…。

??? 「ここを出ていきなさい!」

ああ、なんか語気が強くなってきたよ!というかこの状況じゃ出ていけないじゃん。

「まず、どいてくれないか。そうしなければ出ていくこともまともに話すことも出来ない。違うか?」

勇気を出してそう言い放った。

??? 「それは無理な要求です」

ええ、じゃどうすんのさ!このまま床這いずって出ていくのか?

??? 「こちらに応援を要請しました。すぐにでもここに他の艦娘が集まって来るでしょう…。応援が到着次第、より嚴重に拘束、連行し追放します。」

ああ、なるほど。味方呼ぶのね…。あああ、無線で仲間呼んでるよー、僕の腹の上で。

ふう、覚悟を決めるか!

僕は話し合いは出来ないと踏んで、多少手荒なことをしてでもこの状態から抜け出す

ことを選んだ。

「ただ、この艦娘手練れだろ…。とうか、僕あんまり武闘派じゃないんだよね（汗）いや、力負けしてる可能性充分あるぞ！」

「！ いやまだだ。あれを使えば…」

「僕はさつき落とした懐中電灯を必死に手繰り寄せて掴むと相手の艦娘の顔めがけて光を浴びせてやった。」

「??? 「くっ…!!!」」

「やった怯んだぞ！今だ！」

「僕は思いつきり体をよじった。怯んで力の抜けた今なら…。ビンゴ！馬乗りされる状態から抜け出した。」

「そのまま僕は急いで立ち上がると、廊下を全速力で駆け抜けた。とにかく逃げるんだ！！」

「?????? ??? 「おのれ…!!」」

「とにかく姉さんに連絡しなきゃ」

「?????? ??? 「こちら神通。侵入者を取り逃がしました。これより追跡し、拘束します！」」

??? 「無理しちゃダメだよ、神通！私もすぐ合流する！」  
神通 「大丈夫ですよ！すぐに確保してみせます！」  
私はそう言っただけで無線を切り、侵入者を追った。

## 睨まれた3

「・・・」

神通「・・・」

「・・・」

神通「・・・」

「・・・」

いや、捕まるの早すぎだろ！

艦娘から逃れ、廊下をひたすら走っていた僕。懐中電灯、またどつかで落としちやつた。それだけ夢中で走ったんだよ…。うん、だからさ、暗くて前よく見えなくて転倒しました。はい。

今度はうつ伏せにされて腰辺りに馬乗りになられてるよ。しかも両手は後ろ手にされるおまけ付き。というか片手で僕の両手押さえつけてるところ見るとやっぱり力負けしてたんだな…。

あくまた無線でなんか話してるよ…。

神通「はい。はい。無事確保しました。」

神通「大人しくしていますよ。逃げられないと悟ったのかもしれない。」  
クソツ！いくらなんでもあんまりだ、こんなの！

僕が心の中で悪態をついていると、廊下の向こう側から誰かやって来る。援軍かな？  
艦娘の。

???「神通！大丈夫!?怪我は無い?」

へえー、この艦娘、神通っていうのか。

神通「大丈夫です。姉さん」

???「良かった。神通に何かあったらお姉ちゃんどうしようかと…」

神通「もう／＼／ 姉さんったら／＼／」

え、僕は何見せられてんの??? 姉妹愛ですか、ごちそうさまです。もう結構です。

???「で、こいつが侵入者ね」

神通「はい。容易く確保出来ました」

グハッ！

???「ねえ、あんたさなんでここに来たの?」

おお、でもこつちの艦娘は話出来そうか…?

正直口調とか気にしてられない、なんとか分かってもらおう！

「僕はここに着任した者だ！本日から提督として君たちの指揮に当たる！よろしく！」  
とりあえず精一杯声を張り上げて言ってみた。にしても、最後のよろしくとかフラン  
ク過ぎて意味分からんな…。

??? 「ツ！うるさいな！」

神通 「姉さん、少し痛め付けましょうか？」

えー、やーめーてー

??? 「いいよ、あんまりやると後から何されるか…。今だって結構危険な橋渡ってるよ、  
私たち？長門さんだってこのこと知らないんだから…」

神通 「そうですね…」

ちよつと、また別の艦娘の名前出てきたよ！さん付けてことはこの艦娘達より偉い  
のか!?

??? 「さーて、こいつさっさと捨ててこよ！折角の夜なんだからさ」

あー、もう夜ですか、そうですね。

神通 「はい！誰かに見られたらことですからね」

年貢納めますか…。

僕は二人の艦娘相手に、もはや打つ手無しとこれからの僕の運命を受け入れる気持ち

になっていた。早い話、諦めたのだ。

ん？廊下の向こう側からまた誰か来るぞ！処刑専門の艦娘かな？

??? 「シッ！誰か来るね…」

神通 「誰でしょうか」

??? 「ばれるとヤバイからね。さっさと捨てにいこ！」

神通 「はい！」

ん？んんん??? ばれるとまずいのか……………？

おいおいおいおい！これは好機じゃないだろうか！

幸い二人の艦娘は廊下の向こう側に注意が向いている。

僕は手は動かせないが、足を思いつきりばたつかせ、とにかく大きな音を立てた。

??? 「こいつ！静かにしろ!!」

神通が後ろに回されている僕の手を強く締め上げる。

めっちゃくちや痛い!! けど…………。

僕は思いつきり声をあげた。

「助けてー！ー!!!!二人の艦娘に襲われている!!」

私、陸奥は本日の任務を終え、自分の部屋に戻ろうと廊下を歩いていった。はあ、それにしては暗いわね。

いくら節電とはいえ、早く消しすぎよ。まあそれも仕方がない。この鎮守府はかなり崖つぶちの状態なのだ。ライフラインは辛うじてあるが、いつ止まってもおかしくない。

提督は……いない。あんな提督ならいない方が絶対に良いけど。今は私の姉妹艦である長門が提督の役割を果たしている。

「やつとみんなあの地獄から解放されたのかな…」

私はふと呟く。

いや、それはない。あの提督が私たちにしたことは絶対に忘れない！みんな心身ともに酷い傷をつけられた。だから忘れられないのだ。

今日は正直迎えたくなかった日だ。長門から聞いたのだが、新しい提督が着任するらしい…。

このことはこの鎮守府の全艦娘が知っている。長門が全体に放送で呼び掛けたから…。

多くの子は怯えていた。あまりの絶望に耐えられなかったのか、それとも以前のトラウマを思い出したのかは分からないが、主に駆逐艦の子を中心に泣き出す子、嘔吐する子、失神する子が続出した。錯乱して、奇声をあげている子も少なくなかった。

長門も提督の着任についてもっとデリケートに扱うべきだったと反省していた。でも、長門は悪くない！悪いのは全てアイツ!!

はあ、この先私たちどうなるのかしら？

私はため息をついた。その時、バタバタと廊下の向こう側から床を蹴るような音が聞こえた。

陸奥「なに？」

私はその音の出ている方向を注視して、その音の出所と思われるところへ歩みを進めた。

そして聞いたのだ。

男性の悲痛な叫びを。

## 睨まれた4

??? 「黙れ！」

「むぐっ!？」

艦娘が僕の口を手で塞ごうとする。でもここで黙って塞がれるわけにはいかない、非常に申し訳なかったのだが、その艦娘の手を噛んだ。

??? 「痛ッ!!」

よし! まだ叫べそうだ!

「たす…」

神通 「ツ! よくも姉さんを!!」

そう言つて神通はさらに締め上げる力を強めてくる。

痛い痛い痛い! 折れる折れる折れる!

「ツカ…ア」

僕は痛みのあまり声が出せなくなっていた。ああ、あとちよつとで助かるんだ! 頑張れ僕!

「あああああああ! 痛い痛い痛い!!!」

最後の力を振り絞って悲鳴をあげた。

??? 「この！黙れって!!」

黙るもんか！こちとら生死懸かつとんじや！

??? 「何をしているの、あなたたち!？」

??? 「ヤツバ！逃げるよ!!」

神通 「え、でも…」

??? 「いいから!!」

艦娘はそう言うのと僕の上に馬乗りになっていた神通を連れて、走り去っていった…。

た、助かった。うう、腕が痺れてる…。

??? 「あ、こら！待ちなさい！」

??? 「貴方、大丈夫？」

おそらく艦娘だろうが、僕のことを心配してくれているのか!?!この艦娘なら!

「は、はじめまして！今日からここに着任することとなりました！どうぞ、よろしくお願

いします。」

僕はなんとか立ち上がり、声を掛けた。

??? 「・・・」

あ、あれ!? なんか黙っちゃったぞ！ウツソだろ、お前!

??? 「貴方が提督ね。よろしく。」

ふうと一息ついてからその艦娘は答えた。心なしかその声が震えているような気がする…。

??? 「それで、何があつたのかしら?」

うーむ、なんか絞り出すように喋っているな…。だけど、この艦娘を逃したら本当に終わりだぞ。なんとか突破口にしなければ…。そうだな、まずは…。

「うん。いろいろ聞きたいこともあるけど、まずは場所を変えない?ここだと、その、暗いし、立ち話もなんだからさ…」

??? 「そ…そうね。場所を変えましょう。執務室でいいかしら?」  
「もちろん!」

僕は即答した。するとその艦娘はビクツと体を震わせた。声、大きかったかなあ。ああ、それと…。

「君の名前を覚えてもらつてもいいかな?」  
??? 「陸奥よ」

私は提督と思わしき人物を執務室まで案内している。

おそらくこの男が提督なのだろう。今日ここに来た人間は彼一人。そもそもこの鎮守府に滅多に人間は訪れない。

ただ確証は持てない。なぜなら、提督着任に関しての書類の諸々は全て長門が管理しているから。まあ執務室に連れていけば分かることだ。

うーん、気まずい！この陸奥という艦娘、執務室に連れていってくれるらしいが、名前を聞いてからその後は全然話が続かない。たとえば…

「そういえばなんかこの鎮守府電気ついてないよね？」

陸奥「ええ」

「なんか理由あるの？」

陸奥「節電の為…よ」

「そっかあ、節電かあ…」

陸奥「…」

あ、あれ？?気さくに会話出来ると思っただけだな…。

陸奥「着いたわよ」

うわっ!? 急に喋ったからびっくりした。  
というか、ここが執務室か。

なんとなくだが、僕はここに入るのがとても怖いと感じた。多分、直感的に。だけど、入らないと埒あかないよな。よし! 覚悟を決めよう。

執務室に入ると、陸奥とは別の艦娘が机の上で海図を睨んでいた。そして、入ってきた陸奥に気が付いた。

???「おお、陸奥か。どうした? こんな時間に? 今日の任務は終わったはずでは……………」

陸奥、そちらの人は?」

陸奥「今日からここに着任する提督よ。というか長門。提督着任に関しては貴方の管轄じゃない。」

「は、はじめまして! こんばんは。今日からここに着任することになりました。よろしくお願いします!」

僕は第一印象を大切にしようと、丁寧に挨拶をするよう心掛けた。

長門「貴方が……提督か。」

すると長門は机の引き出しから書類を取り出し、こちらを一瞥するとそのまましばらく書類を睨んでいた。

長い沈黙が流れた。そして、長門がふいに顔をあげ僕の顔を見た。

長門「確かに貴方は今日ここに着任する提督だ」

ふうく、やつと正式に提督として認められたか…。ここまで長かった。

長門「ただ、」

あれ、なんか凄い目付きで睨まれているのですが…。

長門「貴方がここですべきことは何も無い。申し訳ないが、お引き取り願いたい」

は？は？はあああああああああ？？

ええ、ワケワカメ。

「そんな、なんでだ！」

こちららもつい語気が強くなる。

「上層部からここに着任しろと言われてたんだぞ！」

長門「それについてはこちららも知っている。だがな、ここがブラック鎮守府であったことを聞いているか？」

「ああ、もちろんさ。具体的な内容についてはまでは聞いてないが…」

あー、余計なこと言ったかも。

長門「ならば話が早い。この艦娘の多くが人間を憎み、人間に怯えている。人間不信ということだな。それは前提督らによる産物だ。そしてその原因が排除され、やつとほんの少し落ち着いてきたのだ。」

つまり何が言いたいんだよ……。

長門「人間が再びこの鎮守府にいることになれば、そのささやかな安寧がまた崩れるだろう。私は貴方が着任することを全艦娘に伝えた時、その時の艦娘たちの様子を見て悟ったのだ。この鎮守府に人間は一人もいらないと。」

「……」

長門「せっかくここまでお越し頂いたのに申し訳ない。ただ、分かつて欲しい。上層部の方には私から伝えよう。もちろん貴方にこれ以上迷惑のかからないように伝えるつもりだ。」

「……」

長門「すまないが、お引き取り願いたい。陸奥に門まで案内させよう。陸奥、頼まれてくれるか」

陸奥「え、ええ」

「……」

執務室を出た後、僕はなにも考えられず、ただ陸奥の後を追うことしか出来なかった。そして僕は再び鎮守府の門のところまでやって来た。

陸奥「それじゃ、ここまでだから…」

「……」

陸奥はそう言つて、今来た道に戻つていった。

僕はその姿が見えなくなるまで……見えなくなつてもそこに立っていた。

## 意地っ張り

納得いかない。納得いくわけない。

僕は先程長門という艦娘にここでの役目がないことを告げられ、追い出されてしまった。

ただ、ブラック鎮守府についての認識が甘かったかもしれない。この鎮守府で何が起きたのかよく分かってないのに、どの面さげて提督を名乗るのだろうか…。

僕は自分の浅はかさを恥じた。

ただ、上層部も上層部だ！ちゃんと見えよ！こんなに根深く傷を残していきやがって、前任もとんだ馬鹿野郎だ！

「ふう」

僕は落ち着こうと息をついた。

うん、今後のことを考えよう。過去に責任転嫁していたらこの状況は一向に良くならない。

長門に言われたことを思い出せ。そこに解決の糸口があるはずだ。

……おそらく大きな問題はここの艦娘が人間にひどく痛め付けられ、人間を信じられ

なくなっているってことだ。

そこに僕が入っていけば、皆と仲良く、傷を癒してハッピーエンド……とはいかないだろうな。むしろ事態は悪化するだろう。

神通だっけ、前みたいに襲われるってことも考えれば正面から堂々と艦娘に向き合うには少々無理がある気がする。長門を言いくるめて提督になったとしても力に訴えられたらもう終わりだ。うーん……………。

いっそ上層部に頼むか!? ここの鎮守府に着任出来るよう上から圧力を……………ってあれ? なんで僕はそうまでしてここに来たいんだ?

上層部にだつて長門から連絡もいくと思うが、僕からも事情を話せば別の鎮守府に着任させてもらうことだつて出来るかもしれないのに……。別の鎮守府でだつて僕の野望を達成することが出来るはず。むしろここで駄々こねてるより全然いい……………。

だけど僕はどうしてもこの鎮守府に着任したいと何故だか思っていた。あれだけやられて言われたのにも関わらず…だ。そして運よく着任出来ても前途多難なこの鎮守府に何故拘つてしまうのだろうか。

「あーもう! 分かんないな!」

「とにかく、もう一回長門に会おう」

僕はもやもやした自分の疑問を拭い去るかのように今来た道を駆け戻っていった。上手くいくかは分からないが、やれるだけやってやる！

執務室にてー

長門「もう夜も遅いのにすまないな、陸奥」

陸奥「いいのよ、長門にばかり負担はかけられないわ」

長門「ありがとう、陸奥」

陸奥「／＼／＼」

陸奥「早いところ終わらせちゃいましょう」

私はあの男を門まで送り届けた後、こうして執務室に戻り長門の手伝いをしている。長門もこのところあまり休んでいないようだし、私も力になりたい。

それにしても……。

陸奥「まさか貴方が提督を追い出すなんてね。てつきり貴方は受け入れるのだと思つたわ」

長門「ああ、そのことなんだが……いろいろ思うところがあつてな……」

陸奥「思うところ？」

長門「私が皆に提督着任を伝えた時があつただろう？あの時の皆の顔を見たらな

……。いくら上からの命令と言えど、受け入れがたいと思つたんだ」

陸奥「私にいろいろ相談してくれてもよかつたのよ？」

長門「すまないな、私もいろいろ考えたのだ。ただ、今後は陸奥にも相談するとしよう」

陸奥「ふふ、そうね。私たちは姉妹艦なんだから」

長門「ああ！心強いな！」

長門と話している時、私はあの地獄の時間を忘れられる。私は長門がいるから今まで持ち堪えられたのだ。だからこそ私は長門の力になりたい！もう以前のように長門ばかりに責任を負わせたくない！

長門「さて、そろそろキリがいい。私たちも部屋に戻ろうか」

陸奥「ええ、そうね」

私たちは執務を終え、自室に戻ろうとした。その時だ。

突然執務室のドアがノックされた。

私と長門はお互いに顔を見合わせた。誰かしら？

「すいませーん!!ちよつとだけ時間をくれー!」

## 妥協案

執務室のドアをノックし、僕ははつきりと言った。

「すいませーん!!ちよつとだけ時間をくれー!」

返答は……ない。沈黙。

ただどこかで食い下がるなら戻ってこないって!!

「開けまーす」

そう言つてドアノブに手をかけた時、部屋の中から少し驚いたような声が聞こえた。気にしない。

執務室には長門と陸奥がいた。長門は驚いたような顔をしているが、あれ、陸奥さん顔が怖いですよ……すつごい睨んでくるのですが。これも気にしない気にしない。

「話がしたい。すぐに終わらせるから聞いてくれないか?」

長門「話は先程済んだと思うのだが……」

長門も睨んでくるじゃないか。さすがに二人に睨まれると、その心が……。

「頼む、話をさせてくれ!話を聞いてそれでも納得出来ないのであれば、僕は潔く……」

去ろう！だから聞いて欲しいんだ！頼む！」

僕はそう言つて、頭を深々と下げた。少し大見得切りすぎた気がする……。納得させるつて結構難題だぞ!?

長門「無駄だと思つて……陸奥はどう思う？」

陸奥「…長門に賛成よ。意味がないわ。さつき言われたこと聞いてなかつたの？」

うう、心が張り裂けそう。

陸奥「しかも戻つてくるなんて…あり得ないわ。早くここから立ち去りなさい!!」

長門「陸奥……」

長門「分かつて頂けたか、これが私たちの意志だ。話はしない。早々にお引き取り願いたい！」

「聞いてくれればいい！」

顔をあげると長門も陸奥も呆れた顔をしているが、瞳には明らかな敵意を感じさせるものがあつた。でも、話さねば。

「まず、この鎮守府であつた出来事をろくすっぽ知らなかつたのに、提督を名乗つたこと、本当にすまなかつた。心から謝罪する」

「長門の言つた通り、僕たち人間のせいでは大變申し訳ないことをした。なのになまた人間が戻つてきて、その生活を脅かそうとしている。それは受け入れがたいよ

な」

一瞬だが長門が小さく頷いたような気がした。

「だが、僕はここに来たいんだ。理由は……正直自分も分からない。これは僕個人の問題なのだが、僕は人に左右されやすくてね。自分の意志をないがしろにして、本当のことを言えないことが殆どだったんだ」

「だけど、僕は提督になるってことをきつかけに変わろうと思つたんだ！ちゃんと自分の想いを伝えようって」

陸奥「貴方の願望を叶えるためにまた私たちに犠牲になれというのね。貴方も言葉だけ……前任と変わらないわ！話にならない」

「ああ、確かに僕の願望だけのために君たちに犠牲になれと言っているようなものだな……だがこれは僕の根幹だ。これを折つたら元も子もない」

長門「交渉決裂……ということだな」

「それはまだ早い！」

何勝手に話終わらせようとしてんの!!!

陸奥「この期に及んでまだ意味の分からないことを言うの？もう行きましょう、長門」

「妥協案がある！」

そう言うのと長門と長門の手をひいて部屋から出ていこうとしている陸奥がこちらを

見た。今だ！ここしかない！

「僕は提督になることを放棄する!!!」

## 活路

沈黙が執務室内を支配していた。

それは僕の発言によるものだ。長門も陸奥も驚いた顔……というか訳が分からないというような顔をしている。

今、僕の言った言葉は目の前の艦娘に疑問を抱かせている。だからこそ、必ず！必ず僕の発言にあつた矛盾点を突き付けてくるはずだ！！食いつけ!!!

長門「どういうことだ？貴方は提督になることを望んでいるのだろうか？一体、今の発言は……」

陸奥「妥協案……と言つたわね？それは貴方が提督になるのを諦める代わりにこちらに見返りを求めているように聞こえるのだけど……こちらの代償は何？」

よし！食いついた！まさか長門だけでなく陸奥も食いついてくるとはな……でもこれは好機!!こつからが正念場だ！

「順を追つて話すよ」

「まずは……提督になるのを放棄するって件だけど、完全に放棄するって訳じゃない。然

るべき時が来たら提督として迎え入れてもらうつもりだ。では、その然るべき時とはいつか？それはここの艦娘に完全に受け入れられたと判断出来た時だ。判断するのは………君たちに任せるよ」

「次に、代償…とはいかないまでも、確かにそちらにも折れてもらうべき点がある。それはつまり僕がこの鎮守府にしていることを認めろ………つてこと」

長門「話の途中ですまない。一つ質問させてもらう。放棄の件については分かったが、それまでこの鎮守府にどういう存在として居座るつもりなのだろうか？」

陸奥「何もしないのにこの鎮守府にいらなんて不自然だわ！それこそ動機は？それに、提督としてじゃなくても貴方がここにいるだけで嫌な思いをする子がたくさんいるのよ!？」

「ああ、それについてだが…。仮にここにいることが認められたら僕は何をするのか………これは確かに返答に困るが、強いて言うならこの鎮守府を少しずつつ立て直していくつもりだ。今日来たばかりだが、この鎮守府、かなり修繕すべき場所があると見た！それに電気が点いてないのだから、節電と言っていたのを聞く限りギリギリなのではないか？」

陸奥「確かにこの鎮守府はボロボロよ。電気だけじゃないわ…水道、ガスもカツカツな状態よ！だけども、それでも私たちはなんとか生き抜いてきた!!苦しかったことも

あつたけど、提督……人間がいたあの頃と比べたら全然幸せだったわ!!!」

長門「陸奥の言う通りだ。私たちは今のままで幸せなんだ。何故それを分かってくれない!?!」

陸奥も長門も悲痛な声でそう言った。この艦娘にどれだけのことをしたら、ここまです信用が無くなるのか? ほとほと前任は馬鹿野郎だったらしい。

けど、陸奥も長門もこちらの目をみて、しっかりと気持ちを伝えてくれたんだ。僕もしっかりと気持ちを伝えよう。

「僕はさ、どうしてもここに来たいんだ……」

「それこそ動機を聞かれると、やっぱり分からない。ただ、自分の気持ちに嘘をつかないで伝えるっていう僕の願いを叶えるのはここだ! つて直感的に感じたんだとしか言えない」

「でも、それが君たち艦娘を不幸せにするのなら僕も前任と同じだ。だからこそその妥協案!」

「説明が足りなかったね。僕はここの皆に認めてもらえるまで、提督にはならない。そして、この鎮守府を再興させるため尽力する。だけど、僕は艦娘には見えない存在なんだ」

長門「……どうということだ?」

「簡単な話さ！僕は艦娘の前に出ていかない。姿を見せない。隠れて生活する」

「そして、ここの艦娘に見られずに鎮守府を立て直すため働く。艦娘たちは知らない間に鎮守府が綺麗になっていくのを驚くんじゃないか!？」

陸奥と長門が啞然とした顔でこちらを見ている。構わない、続ける。

「そして、提督業は僕の代わりにしばらく長門が受け持つのだろうが、上層部には僕が無事に着任したと伝える。そうすれば、僕の名で上層部に資源の援助を求めたり、何らかの支援を受けることだって出来るはずだ。長門だって僕を追い出して上層部になんと言明するか実は困っていたんじゃないか？僕が無事に着任したと見せかけ、上層部とは円滑な関係を保つ。だけど、裏では長門、君が好きにしているんだ。僕を大いに利用してもらって構わない」

「まあ、せっかく長門が作戦を成功させても僕の実績になつてしまうのは癪かもしれないが……そこは失敗した時の責任を全て僕が負うということで、おあいこにして欲しい。あ、長門が作戦を失敗させると言ってるわけじゃないよ!？」

長門「……」

陸奥「……」

陸奥「でも、もしたら貴方はずっと提督になれないんじゃない？だって姿が見せれないなら、艦娘に恐がられることはなくても好かれることもないわよ?」

「ああ、確かにね。でもこの鎮守府、皆がみんな人間に怯えているわけだとは思えないんだ。嫌われているかもしれないけど、人間に危害を加えられるくらい度胸のある艦娘がいると思う。少なくとも僕は二人知ってる。だからそんな度胸のある艦娘なら姿を見せても平気だと思うんだ！それで話を何度もしたり、信頼されるように動いて徐々に信用を勝ち取っていけばいいと思う」

陸奥「確かに、襲われていたわね……」

「それでも……もし、もし僕の存在が気に食わないというなら、その時は追い出せばいい。だから今だけ、この時だけでも信じて僕をこの鎮守府に入れてくれ!!頼む!」

これが……これが僕の精一杯の答えだ。

あとは天に身を委ねる。

長門「……」

陸奥「……どうする?長門?」

長門「私はこの鎮守府を、この鎮守府の仲間たちを守る責務がある」

長門「すぐに返答することは出来ない。しばらく時間をもらえないか?」

「もちろん!」

僕は笑顔で答えた。この先の結果がどうなるかは分からないが、少なくとも僕の気持ちには伝わったということだ。僕はそれが嬉しかった。

長門「では、それまでこの鎮守府の空き部屋で待機していてくれないか？もちろん姿は見せないように願いたい。案内は陸奥に頼む！いいか？陸奥？」

陸奥「ええ、構わないわ！」

こうして僕は追い出されそうなところを首の皮一枚で繋がっている状態まで持つてこれた…。ひとまず今日はもう疲れた、寝たい……。

陸奥が僕を空き部屋まで案内してくれた。他の艦娘に見られないよう注意しながら。

陸奥「一ついい？」

ふいに声を掛けられた。

陸奥「どうしてそこまでしてここに来たいの？自分を変えたいって言ってたけど、それは提督になるより大事なの？」

「うん、提督ってのはあくまで変わるためのきっかけだよ。でもこの場所が変わりたいていうのは紛れもないことだ。まあ、ここに拘る理由が分かってないんだけどさ…本当にそこは直感としか言えないかな。ただ、僕の中では提督の座よりここでの野望達成が上回った、それだけだよ」

陸奥「…そう」

陸奥はその後何も喋らず僕を空き部屋まで案内し、足早にどこかへ行ってしまった。

た。僕は気が抜け、あまりの疲れにそのまま横になるとそのまま深い眠りに落ちていった。

## 見えない何でも屋

「うう、うーん」

上体を起こして軽く伸びをする。目が覚めたな…。

部屋の中を見渡してみる。くたびれた煎餅布団に壊れかけの棚、カーテンが閉めてあるってことは窓があるのか？カーテンの外側からぼんやり明かりが差しているのでもう朝なのだろう。他には何も無いな。時計も無い。

「とりあえず、顔を洗おうか…」

おもむろに立ち上がる。そしてハツとした。

そういえば、部屋の外に出られないじゃないか。まだ長門から返答をもらえていない。それなのに部屋の外に僕が出たら、昨日の努力が水の泡になってしまう…。

「待つしかないな…」

かといってこの部屋には本当に何も無い。仕方がないので僕は再び布団に横になり、その時を待った。果報は寝て待てだ。

どれくらい時間が経っただろうか？この部屋のドアがノックされる。さて、僕の命運

はいかに？

ドアを開けると陸奥が立っていた。

陸奥「：おはよう」

「おはよう」

陸奥「昨日の答えを伝えに来たわ。とりあえず中に入れてもらっていいかしら？」

「もちろん」

緊張の瞬間だ。

陸奥「単刀直入に言うわ。貴方がここにいることを長門が認めた」

僕はジワツと体の中心から熱が広がるような感じがした。顔がにやけそうだ。

陸奥「ただ、私たちは貴方を信用したわけじゃないの。不審な挙動が確認され次第、直ちに出ていってもらうわ」

「望むところさ！昨日言ったことは絶対に違えない！」

そう言うのと陸奥は僕の目をじっと見つめてきた。でも昨日程の敵意は感じない。というか、昨日は緊張のせいかわからなかったけど、陸奥は美人さんだなく。いや、陸奥だけじゃない、思い返せば長門もとても美しかった。

ついこちらでも陸奥の顔をまじまじと見つめてしまった。

陸奥「ッ！」

ああ、顔をそらされてしまった。うーん、惜しい！

陸奥「とりあえず、そういうことだから…」

陸奥はそう言つて部屋の外に出ていこうとする。あ！ちよつと待つた！

「その前にいくつか頼まれてくれないか？」

陸奥「…なに？」

陸奥はそう言つと少し身構えた様だつた。やつぱりそう簡単に距離は縮められないか…。

「この鎮守府の案内図があれば欲しい。さすがにトイレとかにも行きたいもんで、トイレ探して無闇に歩くわけにもいかないしな」

陸奥「分かつたわ」

「それと長門にこの鎮守府の艦娘リストのようなものがあれば見せて欲しいと頼んでくれないか？こちらでも把握しておきたくてね、もちろん悪用はしないさ。ただ無理にとは言わない」

陸奥「そう…それも分かつたわ。もう無いかしら？」

「最後にもう一つ」

少し陸奥の顔が曇つたような気がする…。そりゃこれだけ頼んだら面倒に思うよな。しかも今から言うことは、結構手間をかけさせるかもしれない。

僕は本当に申し訳なさそうな顔をして最後の頼みを伝えた。

「とある艦娘たちをこの部屋に呼んで欲しい」

神通「昨日は残念でしたね、姉さん」

???「うん…」

神通「どうしますか？あの男が提督として着任した今、私たちのことを探し出すのも時間の問題かと」

???「そうだね…。昨日の時点で勝負を決められなかったのが痛かったな」

神通「罰せられるのでしょうか？」

???「提督に暴行を加えたからね。少なくとも私と神通は…ね。ごめんね、私が不甲斐ないばかりに神通に迷惑かけちゃって…」

神通「いいえ!!姉さんは悪くありません!全て人間が悪いのです!」

???「本当にごめん…。せめて那珂に危害が加えられなければいいけど…」

神通「那珂ちゃん、ぐっすり寝てますね…」

??? 「はあ、ずっと可愛い妹たちといたかったなあ…」

神通 「姉さんを一人にはしません！私がお供します！」

??? 「それじゃ那珂が独りぼっちになっちやうでしょ？だからさ……………」

神通 「？」

??? 「ごめんね、神通」

ドカッ!!!

神通 「ね…姉さん…。な、何を…………」

??? 「神通と那珂は私を守るから」

そう言つて私は部屋を飛び出した。可愛い妹たちをあゝの男の毒牙にかけてはいけな

い。たとえ何をされても私はあの二人を守ってみせる！絶対に!!!

神通 「待つ……………て、姉…さん」

陸奥 「全く人使いが荒いんだから！」

私は今とある艦娘たちの部屋に向かっている。

とある艦娘…神通とその姉の艦娘を探してきて頼まれたのだが、理由は聞いていな

い。ただ、私も連れていったらその場に同席するつもりだ。もしあの男がなにか下手なことをするならば私が守らなければならないし……。

よくよく考えれば、あの男の方が危害を加えられる可能性の方が大きい様な気もしてきた……。

とにかく早いところ連れていきましよう。

すると向こうから誰か走ってくるのが見えた、あれは…。

陸奥「川内！」

川内「！」

川内「陸奥さん！おはようございます」

陸奥「おはよう。丁度貴方たちを探していたのよ」

川内「！それは提督となにか関係があるのででしょうか？」

陸奥「（提督？ああ、そうか私と長門以外は昨日提督が着任したと思っっているのね）ええ、そうね」

私がそう言うのと、川内は一瞬震えたように見えたが、すぐに覚悟を決めた目で私を見てきた。

川内「私も提督の所へ行こうとしていました。提督は執務室にいらっしやるのでしやうか？」

陸奥「いいえ、訳あって今は別室にいるの。私が案内するわ」

川内「ありがとうございます！よろしく願います！」

陸奥「それで神通も一緒に連れてくるように言われているのだけれど、連れてきてもらえるかしら？」

川内「・・・」

川内「いいえ！提督は勘違いされているようですが、関係があるのは私だけです！その事で私も話がしたいので・・・」

陸奥「そ、そう…。なら行きましようか」

私は川内があまりに真剣に訴えてくるので、気迫に押し切られる形で川内だけを案内することとなった。

正直、いつもの川内とは様子が違って見えるが、私は既視感を覚えた。そして思い出した。以前にも川内のこのような姿を見たことがある、それは前提督が神通と那珂を作戦が失敗したことを理由に暴行しようとした時だ。川内が間に割って入って、提督と二人きりになりたいと訴えたんだよね……。あの時も川内から鬼気迫るものを感じた。

その後提督と川内の間でどんなやり取りがあったのかは分からないけど、神通と那珂は不問になったらしい。

……あの後、川内が執務室から出てくるのを見た艦娘がいたらしいが、凜とした顔

をしていた反面、着衣は大きく乱れ、肌の見えているところは生傷が絶えず、異様な姿だったらしい……………。

川内「はい！」

私は一抹の不安を覚えながらも川内をあの手のある部屋まで案内した。

## 見えない何でも屋2

「失礼します！」

ノックの後、はつきりとした声がドアの向こう側から聞こえてきた。聞き覚えのある声だ……。そうか、昨日の！

ガチャとドアが開かれると、陸奥と艦娘が一人部屋に入ってきた。

??? 「川内型軽巡洋艦、一番艦の川内と言います」

川内 「この度は提督の召集命令を受け、参上しました」

えー、なんか昨日会った時と印象が違うんだが……。それで名前は川内と言うのね……。

ひっそり考えていたフランクに声掛けて仲良くなるうよ大作戦は、あつという間に頓挫した。あれー？

「朝早くからすまない」

あ、そう言えば神通いないな……。

「神通はどうした？」

川内と神通の二人を連れてくるように陸奥に頼んだはずだが……。

川内 「それについては私から説明します！」

そう言つて川内は一呼吸置いた。ほんの一瞬だが、川内の顔に怯えが表れていたような気がする。

川内「つきましては、提督と二人きりでお話をさせて頂けないでしょうか？」

この発言に僕と陸奥は驚いた！いや、正確には陸奥はどこかそう言うかもと予想していたような顔をしている。

「え、えっ!?えーと、えーとですね、この部屋で川内と二人きり……ですか？」

おいおいおいおい！童貞臭溢れる返答しちやつたよ！まあ童貞だけどさ。急に敬語になつちやつたし！

あ、陸奥が軽蔑したような顔でこつちを見る。やめて、まだ追放はダメ。

川内「はい！お願いします！」

陸奥「川内、私に聞かれてはまずいことなの？」

川内「いえ…そういうわけでは…」

よし、僕も口調に気を付けて…。

「そうだな、陸奥が同席していた方が川内としても安心なのではないか？まだ会つて間もないのだから、落ち着い……」

川内「いいえ!!!私には気になりませんので、差し障り無ければ是非提督と二人で話をさせて下さい!!!」

僕が言い終える前に、場の空気を一変させるくらい大きな声で川内がそう言い放った。これには僕だけでなく陸奥も圧倒されたようだ。

凜とした表情でそう言い放った川内は、とても美しく見えた。だけど、やっぱりさ、氣付いてしまうんだよね。今まで人の顔や態度を見て生きてきたからさ。

表情も声も覚悟を決めた武人のようだけど、ほんの少し体が震えているんだよね。

………。よし、分かった！ここは川内の言う通りにしよう。正直、また襲われたら太刀打ち出来ないけど、ここで川内の要望を無下にするならそもそも仲良くなつてなれない！

「分かった！陸奥、少し席を外してくれないか？」

陸奥「……」

すると陸奥が僕に近づいて来て、そつと耳打ちした。

陸奥「分かっていると思うけど、川内に変なことをしたらただでは済まないわよ」

「分かっているよ。僕を信じてここは任せてくれ」

陸奥「川内は貴方を提督だと思つているわ。昨日襲われた貴方なら分かると思うけど、艦娘の中には危害を加えようとする娘もいるのよ？」

「そうだね。ちなみにおそらく昨日僕を襲つたのは川内と神通だ」

陸奥「!? なら尚更二人きりはまずいんじゃないの？」

お、心配してくれてるのかな。それなら嬉しい。

「覚悟の上さ」

陸奥「……何かあったらこれを使いなさい」

そう言つて陸奥は僕に何かを渡してきた。これは……無線機か。士官学校で使つたことあるぞ！

陸奥「使い方は分かるわね？」

僕が頷くと、陸奥は川内にも何か耳打ちして部屋の外へ出ていった。

川内「感謝します！提督！」

川内が深々と頭を下げる。

「構わないさーさて……」

と僕がこれから何を話そうか考えている時、川内が自分の衣服を捲り、脱ぎ始めた。ヴァツ!!?

脱衣場じゃないよー。

僕は昨日とは違った意味でマズイ状況に陥った。

## 見えない何でも屋3

私は目を瞑って全てを受け入れた。

目を瞑っていても分かった、提督がどんどん近づいてくるのが。私の心臓がバクバクと音をたてているのが。

耳には提督の激しい息遣いが聞こえていたのだが、段々と耳鳴りのようになって、終いにはキーンと甲高い音しか聞こえなくなった。

そして、提督が私の目の前に立ったのだろうか、キーンという音の中に吐き気を催すような下品な笑い声が聞こえてきた。強烈な臭いが鼻をつく。涙が溢れそうだった。でも……。でも、私は……。

私は目の前の現実から逃げようと心を無にし、思考を停止させた。そうしないとこれから来るであろう現実立ち向かえなくなるから。

ただどどんなに頑張っても、心からは嫌悪感が溢れ、思考はこの場から逃げる方法を模索して止まらない。

私からこの状況を作り出したのに……だ。

そうこうしている内に、提督の手が私の後頭部と背中に回され、強引に提督の方へ引

き寄せられた。そして、後頭部に回されている手が私の髪を無理やり引つ張り、上を向かされた。そこで私は不意に目を開けてしまった。

ああ、さようなら、幸せだった頃の私。

次の瞬間、私の唇に提督の乾ききった唇が激しく押し付けられた。胃の方から何かが入り込んでくるような気持ち悪さを感じる。唇を固く結び、なんとか堪えようとしていたが、あまりの力強さに押され、口の中に提督の舌が侵入することを許してしまった。私の頬を涙が伝うのが分かる。先程、あれだけ回転していた私の思考はすっかり止まってしまった。けれど、心は相変わらず、いや更に勢いを増して、止めどなく不快感が溢れていた。

しばらく提督は私の唇にむしゃぶりついていたが、飽きたのか、次は首の辺り、鎖骨の辺りに顔を埋めて、同様にしゃぶりに来た。そしてそれにも飽きると、私は否応なしに激しく床に押し倒された。私は叫びたかった。でも、喉まで出かかったその叫びは口から出ることにはなかった。それが、私に残された最後の意地によるものだったのかどうかは分からない。だけど、私が今ここで叫べば、間違いなく提督の毒牙は別のところに向いてしまう。私はその毒牙の向く先がどこか知っている。知っているからこそ、私は覚悟を決めて受け入れたんだ！

その後私がどうなったかは容易に想像がつくだろう。提督に問答無用で乱暴され、心

も体も弄ばれた。

「また頼むぞ」

提督がせせら笑いを浮かべながらそう言つて私から離れていった時、私はどんな顔をしていたのだろうか？

慰みものにされた私には分からなかつた。

それから私は、ことある毎に呼ばれては提督の鬱憤の捌け口にされた。提督は、さすがに毎回執務室では出来ないと隠し部屋を幾つか設け、そこで私を痛ぶつた。酷い時には、素性の分からない人たちを呼んで散々私を蹂躪した時もあった。

それでも私は受け入れた。

もう恐いものは私には無かつた。今では人間が怖くはない。嫌悪感はずごくあるけど……。あ、でも、一つだけ怖いことがある。私の、私の大事な妹たちに人間の汚い手が及ぶことだ。

私の全てを差し出してでも守つてみせる。それが、提督に嬲られた時に固く心に誓つた私の存在価値でもあつた。

川内が服を捲つて、その綺麗な肌を露出した時、僕は咄嗟に目を瞑った。

何だ!?何が起きている!?!心臓がバクバクと脈を打っている。ふうー、ふうー、鼻息が荒くなってきた。

とりあえず、もちつけ!?!僕は深呼吸をしようとしたが、カヒユツカヒユツと浅くしか呼吸が出来なかった。動揺しすぎ!!

この状況に至る意味が分からないから、思考はすんなり停止してしまった。いや、このままでは本格的にまずいぞ!川内のような美少女と万が一何かがあつて、訴えられたりしてみろ!?!それこそ、この鎮守府を追い出されるだけじゃない、牢屋に閉じ込められる……下手したら陸奥に殺されかねない。

昨日みたいに事情を話そうとしたって、衣服がはだけた美少女と提督の肩書きの無い暇人のどっちの言い分を聞くかと言われたら、全会一致で前者の言い分が通るに決まつてる!!

「川内待つてくれ!何で服を脱ぐんだ!?!」

僕は必死で言い放った。

返事は……ない。代わりに衣服がスルスルと床に落ちていく音だけが聞こえる。

「僕はね、君と話がしたいだけなんだ！頼むから服を着てくれ」

「またもや返答はなし。無言。こうなったら無線機で……。いや、呼んだら終わる。八方塞がりか。」

目を瞑っているせいか、耳が敏感になっていられるらしく、段々と近付いてくる足音が聞こえた。

「分かった！分かったよ！一つだけ答えてくれ！何が君にそこまでさせる！」

僕はつい叫んでしまった。

でもこの問い掛けは川内の重い口を開いた。

川内「お願い、神通と那珂には手を出さないで……」

聞こえてきたのは消え入るような涙声だった。

ああ、そうか……。僕はやつぱりダメな奴だな。ここに彼女たちを呼ぶ前に前任が何をしたのか、しっかりと把握しておくべきだった。案内図？所属する艦娘リスト？そんなことよりもまず頼むべきは、この鎮守府で起きたことを纏めた報告書だろ！！あるはずだ！前任がした悪行を克明に記した文書が！それが無いというなら、この鎮守府は存在の意味がない！いや、それだけじゃない！ブラック鎮守府の原因だけを排除して解決したと思っっている上層部だって無用の長物だ！

僕は心の底から激流のように溢れ出す怒りに身体中が熱くなるのを感じた。決して

目の前にいる美少女の裸を想像して熱くなっているのではない！断じてない！

今、僕がすべきこと！それは！

誠心誠意の謝罪だ！！

僕は目を瞑ったままその場に土下座した。おそらく相手は今真ん前にいるのだろう。そして……。

「この度は、本当に本当に申し訳なかった！！！」

と言いながら何度も頭を床に打ち付けた。額から流れ出るものがあるが、きつとこの鎮守府の艦娘たちが受けたものに比べれば安いものに違いない。

川内「！」

息を呑む声が聞こえた。そして直ぐ様……。

川内「何してんのさ!? 頭から血! 血が出る!!」

慌てた声が聞こえる。すまない、本当にすまない！

「申し訳なかった！本当に申し訳なかった!!」

僕は構わず床に頭を打ち続け謝罪し続けた。

川内「や……やめてよ……。もう分かっちゃから！」

川内「服着ればいい!? 服着たらやめてよ!?!」

激しく頭を打ち続けたせいかな、何が何だか分からなくなってきた? あれ、僕は? でも、

なぜか口からは呪文のように謝罪が出てくるし、頭を打ち付けるのも止められない、いや止めてはいけない！

川内「ほら！服着たよ！」

川内「もうやめてよ!!どうしたらいいの!?!」

ああ、なんか言ってることが理解出来なくなってきた…。ボーツとする。体がフワフワして浮いているような感覚に襲われた。

川内「ツ！」

川内「いい加減にしろー!!!」

僕の記憶は背中に重味を感じたところで途切れた。

## 見えない何でも屋4

「うつ、うつ……」

呻き声をあげながら、僕は目を覚ます。頭がガンガンする。それでも僕はゆつくりと上体を起こして、辺りを見回した。この部屋、見覚えがあるぞ。ここは……。

陸奥「あら、目が覚めたのね」

陸奥……。僕は立ち上がろうとした。

陸奥「無理しなくていいのよ……」

僕は執務室のソファーに寝かされていたようだ。確かにまだひどい頭痛は続いているが、僕は聞かずにいられないことがあった。

「川内は？」

部屋には僕と陸奥、そして……

長門「川内なら自室にいるぞ」

机に海図を広げ、作戦を練っていたのだろうか……長門がいた。

「そうか……」

陸奥「川内が貴方を背負って執務室に駆け込んできたのよ、驚いたわ」

長門「しかも、川内は青い顔をしているし、貴方は額から血を流していた。」

陸奥「私たちは最初、貴方が川内に何か変なことでもして返り討ちになつたんじゃないかと考えたの」

ええ、ひどくない？

長門「しかし、川内が事情を話してくれてな…」

陸奥「川内、貴方のこと心配していたわよ？ 貴方が目を覚ますまでここに居ると言っていたのを何とか論じて部屋に戻ってもらつたわ。…随分、仲良くなつたようね？」

川内…。そして、僕はハツとした。やらなければいけないことがある！

「長門！」

長門「何だ？」

「この鎮守府について纏められた報告書みたいなのはないか？」

長門「ここの設備や資源について書かれたものでいいの？」

違う、それじゃない。聞き方が悪かつたな…。

「それではなくて、前提督について書かれたものはある？」

正直、前提督のことを口に出すのは抵抗があつた。それを口にするので、嫌な思ひ出を呼び起こしてしまうかも知れなかつたから。

長門「…」

陸奥「……」

案の定、長門も陸奥も黙りこんでしまった。でも、ここで退くわけにはいかない。どうしても、ここであつたことを知らなければならぬ。

長門「何故、そんなものが見たいんだ？」

この言い方…資料自体はありそうな言い方だな。

なら！

「ここ」で生活する上で必要と感じたからだよ。正直、艦娘と仲良くなるうにも、人間にひどく怯えているのか、それとも敵意をもつて僕に危害を加えようとしているのか判別がつかない。僕としては、後者の艦娘たちに接触していききたいからね…。人間が恐い艦娘にアプローチをかけるのはお互いにいいとは思えないし…」

長門「そうか…。それならばお見せしよう。ついでに案内図と艦娘リストも一緒に。」  
「ありがとう」

陸奥「……」

陸奥「一つ忠告しておくわ。貴方がこれから何をするのか見当もつかないけど、この娘たちにひどいことをしたら許さない。それだけは覚えておいて」

「うん、心得た。陸奥もありがとうね」

陸奥「それから、川内のこと…。これからどうするの？」

そう、今まず資料を読み漁って知らないといけないのは、川内のことだ。もちろん、川内のことだけでなく他の艦娘についても調べなければならぬが、あの川内が言った

川内「お願い、神通と那珂には手を出さないで……」

という言葉は、今も僕の頭から離れようとしなかった。

長門「待たせたな、これがご要望のものだ」

「ありがとう」

僕はそれを受け取り、執務室で読む許可を長門にとると、夢中で資料を読み込んだ。

## 見えない何でも屋5

僕は執務室のソファに座り、資料を読むことに没頭していた。

そして、お目当ての川内に関する記述を見つけたが、そこに書かれていたのはあまりに凄惨なものだった。自分の頭に叩き込む為、その記述を何度も読み込んだが、はつきり言つて目を覆いたくなるような内容だった。

「川内……」

僕は資料を読むことを止め、静かに顔をあげる。長門は先程から海図を睨んでいるし、陸奥は机の上の資料を整理しているようだった。

僕は後悔していた。人間に危害を加えられるくらいの艦娘なら、仲良くなれる、接触できると言つたことを。

あまりに浅はか、稚拙な考えだったと。川内の言葉が僕の頭にこだまする。

人間に危害を加えられるなら、傷は浅い？そんなこと全然なかった。少なくとも、川内が受けた傷はあまりに大きく深い。なのに、それなのに、初めて会った素性の分からない人間を襲い、妹たちを庇うため身を差し出し、人間である僕を助けるため執務室まで運んでくれた。

すぐにでも川内に会いたかった。それでまた陸奥にでも頼んで、川内を呼び出してもらおうと思っていた。

でも……。

これだけ人間に弄ばれた川内に接触していいのだろうか？川内が震えている姿、今思えば恐怖を無理に押し殺していたのではないか？本当は人間などと同じ場所にいたくはないのではないか？面と向かつて話などしたくないのではないか？

「そつとしておいてあげるべきなのかもな……」

僕は川内に接触することは諦めた。とりあえず、陸奥に自分が大丈夫だったことと運んでくれた礼を伝えてもらうか。本来は僕が言うべきなんだがな……。

僕はソファから腰をあげ、陸奥に話しかけた。

川内「大丈夫かな？あいつ……」

私は今、自室にいる。この部屋に戻ってきた時、那珂が神通を布団に寝かせ、心配そうに顔を覗き込んでいた。

那珂「あ、お帰りー！川内ちゃんー…というか、神通ちゃんが床で倒れてて…それで…」  
川内「ああ、それやったの私」

那珂「ええー!!?何してんのー!!?」

やっぱり那珂は元気だ。那珂の元気な姿を見ると私の心は一緒に元気になる。慌てている那珂をよそに私は神通の顔を覗きこむ。

川内「神通…」

神通はいつでも冷静で、私たちの中で一番落ち着いている。これじゃ、どっちかお姉ちゃんか分からないね。

でも、いつも私や那珂のことを考えてくれている、そんな優しい娘だ。

神通「うう…」

あ、どうやら目が覚めたようだ。

神通「姉…さん？」

川内「おはよ、神通。さっきはごめんね？」

神通「姉さん!!」

神通が飛び起きたので、顔を近付けていた私の頭と神通の頭がぶつかる。しかも神通は額当てをしているから結構痛い……。

神通「ご、ごめんなさい…。」

川内「大丈夫だよ……。気にしないで？」

神通がホツとしたような顔をしている。妹ながら可愛い。

那珂「なんか忘れられてる気がする〜!!!」

後ろでずつとやり取りを見ていた那珂が私と神通の間に割り込んできた。顔を膨らませて怒っているようだけど、これまた可愛い。

川内「あ、あれ……？」

私は自分の顔に違和感を覚えた。頬を何かはずつと伝っているのだ。それに顔が熱を帯びて、視界も霞んできた。どうしたのかな……。

神通「!! 姉さん!! どうされたのですか!?!」

那珂「あー、川内ちゃん泣いてるー!! 神通ちゃんが泣かしたんだ〜!」

神通「ええ!?! そうなのですか!?! ごめんなさいごめんなさい!!!」

那珂「よし、よし! 痛かったね〜川内ちゃん」

神通「姉さん本当にごめんなさい!!」

ああ、この二人がいれば私は……。

川内「大丈夫だよ! 神通のせいじゃないからさ!」

私は涙を拭くと、神通と那珂を抱き寄せた。

神通「姉さん？」

那珂「？」

神通と那珂は不思議そうに互いに顔を見合わせている。私は構わず、二人を抱き締め続ける。

私は幸せ者だ。二人にまた会えて。

正直、解体も覚悟していた。もし、私の体だけで満足しなかつたら解体を申し出ようと思っていたのだから。

でも、解体されることも体を差し出すこともなかった。

提督は…。提督は私に謝ってくれたのだ…。何度も何度も、頭を打ち付けながら…。

…これから私はどうすればいいのだろうか??

二人を抱き締めながらそんなことを思っていると、部屋のドアがノックされた…。提督…??

陸奥「ちよつといいかしら？」

陸奥さんがドアを開け、部屋に入ってきた。

一体、どうしたんだらう？

## 見えない何でも屋6

陸奥「私は貴方の伝書鳩じゃないのよ？」

陸奥がそう言つて僕の顔を見た。すみませぬすみませぬ。だけど、これが最善だ。川内には会わない方がいい。

僕の顔を陸奥がじつと見ている。ふつくしい。

陸奥「はあ。分かったわ。長門、少し席を外すわね？」

長門「…ああ、分かった」

随分、悩んでいるみたいだな。海図から目を話さずに長門は陸奥に返事をした。

陸奥が部屋を出ていったの後、僕はまた資料に目を通し始めた。少しでも早くこの鎮守府のことをしっかりと知らなければ……。

陸奥「ちょっといいかしら？」

そう言つて、部屋の扉を開けると川内が神通と那珂を抱き締めていた。お邪魔だったかしら？

神通「陸奥さん、どうされたんですか？」

陸奥「ええ、川内に言伝てがあつてね。いいかしら？」

川内「私に？」

そういうと川内は二人から離れ、私に近づいてきた。

私はそつと川内に耳打ちした。

陸奥「提督から言伝てを頼まれたの」

川内「!？」

川内は驚いた顔をしていた。ただ、川内には他にも私から聞きたいことがあつた。だから場所を変えようと提案した。川内も何かを察したようで、それに応じた。

神通がついてこようとしたが、川内が何とか諭して、今私たちは人気の少ない所までやつて来た。

川内「それで、陸奥さん、提督はなんて？」

陸奥「ああ、貴方に自分の無事を伝えてくれてつて」

川内「提督、目を覚ましたんですね!？本当に大丈夫なんですか？」

陸奥「ええ、元氣そうだったわよ？それと、執務室まで運んでくれたこと、ありがとうとも言っていたわ」

川内「そ、そうですか……。よかつた」

そう言うと川内は胸を撫で下ろしたようだった。

陸奥「川内」

川内「はい！何でしょうか？」

陸奥「何で提督にあんなことしたの？」

私は率直に聞いた。川内があの男を執務室に連れてきた時、事情は聞いた。川内があの男に迫ったことも。しかし、詳しい理由などは聞けていなかった。だから私は気になつたのだ。

川内は俯きながらポツポツと話始めた。

川内「提督が着任してすぐ、私は提督に暴行を加えました。本当であれば、誰にも見られない内に提督をどこか遠くへ置き去りにするはずでした……」

陸奥「だけど、私に見られてしまったのね」

川内「……はい」

川内はばつの悪そうな顔をしている。

川内「それで、私がやったと提督に見破られる前に提督に許しを請おうと思ひ、体を差し出そうと思ひました」

陸奥「……」

川内「私が勝手に襲つて、勝手に体を差し出したんです……。提督は何も悪くありません

ん！」

陸奥「・・・」

川内「今回の件、自分でもとんでもないことをしてしまっただと思っております。私は  
∴。私は解体も辞さない覚悟です」

陸奥「提督は私に解体などということは一言も言っていないかったわ」

川内「し、しかし……」

陸奥「それに、本当に貴方だけが提督を襲ったの？ 私は複数人いたように思うのだけ  
ど」

川内「！」

川内「いいえ！ 全て私一人で行ったことです！」

一瞬動揺したようだったが、すぐに真つ直ぐな目で私の顔を見ながらそう言いきった  
川内の顔は、凛々しい姿を覗かせていた。でも私はあの男から聞いている、誰と誰が  
やったのかを。目の前のこの娘はそれを知らずに全て自分で背負おうとしているのだ。  
はあ、本当にこの娘は……………。

少し話題を変えましょう。

陸奥「フフツ、貴方いつからそんなに提督と仲良くなったの？」

川内「なっ!? / / /」

川内「からかわないでください！陸奥さん／＼」

顔を赤くしながら、首を何度も横に振って否定する川内はとても可愛らしく見えた。

陸奥「私の用件はこれまでよ」

川内「あ、あの提督は…今どこに…？」

陸奥「執務室じゃないかしら？私も今から戻るところだけど、一緒に来る？」

川内「はい！お願いします！」

あー、読めば読むほど前任のクソさにはとほと呆れる。よくここまでの悪行をやったものだ。

艦娘に対するパワハラ、モラハラ、セクハラと言えば可愛いもんで、そんな風に括らず、もつとちやんとした言葉で表すなら、補給もろくにさせず出撃させ、大破しようが轟沈するまで戦わせたとか、戦績が悪い艦娘には激しく暴行を加えたとか、艦娘に性的関係を強要したとかもう目も当てられない。

特に性的被害を受けた艦娘が多い。そりや人間に怯えるのも無理はない……。

コンコン

ん？

陸奥「入るわね」

ああ、陸奥が戻ってきたのか。礼を言わねばな。

しかし、僕は固まってしまった。なんと、陸奥の後に続いて川内がいるではないか？  
え、入ってきそうじゃん!?

What the fuck!?

陸奥さん、意味ないよー、これー。まあ陸奥にちゃんとやっていなかったのが悪かったのだが。どうしましょー!?今は話すべきではないのに。

あ、川内、俯いているのかこちらには気付いていないようだ…。今ならッ！やるしかない！

川内が部屋に入ってくる前に僕は目をそっと閉じ寝た振りをした。

川内「失礼します！」

あ、提督…

川内「あ、あの提督…」

あれ？目を閉じてる。…寝てる？

私は提督が起きるまで隣にすることにした。  
私も言わないと、ちやんと。

## 見えない何でも屋7

起きないなあ……。

私はソファに座り、静かに目を閉じている提督の顔を見ながらそんなことを考えていた。

提督にはきちんと謝りたい。彼を組伏せ、追い出そうとしたこと、彼に迫ったこと。ちゃんと提督の目を見て謝りたかった。

川内「提督……」

隣に座っているとなんだか安心する。提督の寝顔を見ていると、私は何故だか今までの心の重荷が浄化されるような気がした。

川内「まだ会って間もないのにね」

私はクスツと笑う。何でだろう、提督に対する敵意が私からは全くと言っていい程、消失してしまった。

提督が私に謝ってくれたから？ それとも私が体を差し出したのを拒否してくれたから？ 理由は私にも分からない。

ただ言えるのは、私は初めてこんな風に大事に扱ってくれる提督、いや人間に会えた。

私はそれが心から嬉しいのだ。

……………。私は途端に解体を申し出ようとした自分が恐くなった。

川内「あれ？私、また……………」

私の頬を涙が伝う。妹たちを汚される以外私に怖いものはないはずなのに…………。

うーむ、全然離れる気配ないな。

咄嗟に寝た振りをしたまではよかったが、川内は僕の隣から一向に離れようとしな  
い。

一瞬、呼び掛けられたり、笑われたりした時、寝た振りがバレたのかと肝を冷やした  
が、そういう訳ではないらしい…………。

しかし、このまま寝た振りをしているわけにもいかない事情が僕にはあった。トイレ  
……………行きたいんだけど…………。

艦娘たちに見つからないように過ごすには、極力あの空き部屋を出ないようにしないと  
いけない。つまり、極力トイレに行くのも避けた方がいいってことだ…………。それで僕は  
昨日からトイレに行っていないかわけだが、そろそろ限界が近いらしい。さつき、被  
害の報告書を見ている時、バッチリ案内図も見てトイレの場所も確認していたのに…………。

うう、膀胱が破裂する……………。

まだだ！まだ堪えるんだ！頑張れ僕の膀胱！！

無理…限界！川内は完全にここを離れる気はないらしい。僕はここで漏らすという最悪の事態を避けるためにトイレに行くことにした。そしてこんな緊急事態に思いついたんだ。かなり強引だが、これしかないと思った。

「はあ、よく寝た！」

川内「！」

川内「あ、て、提督…」

「おお！川内！この前はありがとう。僕は平気だ」

随分と早い口調でしかも棒読みだったが、はち切れそうな膀胱の方に意識がいつて、これが精一杯の受け答えだった。

川内「そんな！私の方こそ……………」

「あ、あああああ！腹が…！腹が痛い！！」

僕は大き袈裟に腹を抑え、痛がる演技をした。おしっこは…少し漏れた。まだだ！まだ終わらんよ！

僕の考えではこうだ。川内がここまで離れないのには何か僕に話があるというのが最も納得のいく答えだ。

それならこちらから強引に話が出来ない状態にしてしまえばいい！正直、別用があつてくらいだと待ち続ける気がした…そこで腹痛だ！腹痛なら川内も無理にとは言わないだろう……。

川内「提督！」

川内は僕の肩を支えようとしてくれた。なんていい娘や…。長門と陸奥もこちらに近づいてきた。

長門「大丈夫か!？」

陸奥「どうしたの!？」

二人ともこちらを心配そうに見ている。罪悪感が…。

「大丈夫！トイレ行つてくるからさ…」

僕はそう言つて執務室のドアへ向かう。勝つた！この戦い、僕の勝ちだ!!

川内「私がトイレまでご案内します！」

ヴァッ!!?

「え、い、いいよ！一人で行けるよ！」

何故だ！何故ついて来ようとする!？」

川内「提督にもしものことがあれば一大事ですから！」

フアー……wwwwwwww

「え、あつ、ええ!？」

僕は完全に動揺した。こんなことって……。正直、腹痛はないが、おしっこは限界をとうに超えている。くっ！

「あー、ダメだ！腹いたーい!!」

僕は川内を振りきるように執務室の扉を開け、トイレへ走った！もうなんだコレ!?

川内「て、提督！」

川内「長門さん！陸奥さん！私、提督を追いかけます！失礼しました！」

川内はお辞儀をすると、そのまま執務室を出ていった。

川内「提督……死なないで……」

「いや、なんで追ってくんのか!？」

川内は完全に僕の後ろに張り付いている。

川内「お気になさらず！」

アカンわ、この娘……。

僕はもうトイレも限界だったので、川内をトイレの入り口付近で待たせ（決してそういうプレイではない）、便座に座りやつと用を足せた。

「ふう〜ふう〜。さて、これからどうするかな…」

## 見えない何でも屋8

「さてと…」

僕は手を洗いながらそう呟く。川内はきつと健気にもトイレの入り口付近で待っているのだろう。

……一体川内はそこまでして何を僕に伝えたいのだろう。分からないことばかりだ。でも一つ、はっきりしていることがある。

「なんだ、変われてないじゃん」

僕は自嘲するかのように独り言を言う。

僕は身勝手なやつだ、それこそ前任と変わらないじゃないか…。

最初は川内のような艦娘が仲良くなるのに最適だと思っていた。でも川内の発言や報告書から、それは大きな過ちだと気付いた。だから川内から距離を置こうと考えた。

しかしながら、その川内の言動をしつかりと見ていただろうか。もし川内が明確な敵意を見せていたら、距離を置いて正解だろう…でも果たして川内はそうだったろうか。違う。

川内は僕に何かを伝えようとしてくれている。歩み寄って来てくれている。

僕はそんな彼女に背を向けた。僕は蔑ろにしたんだ、川内を。彼女を氣遣ったんじゃない、氣遣うことを口実に逃げたんだ。

僕は居てもたつてもいられず、無意識の内に駆け出していた。こんなに近くに居ても、早く川内に会いたかった。

伝えよう、僕も、しつかりと。

「川内ー!」

僕は彼女に声を掛けた。

川内「提督! お腹の方は大丈夫ですか?」

「そんなこと、どうでもよかったんだ!」

川内「え、それは…どういう…」

僕は彼女が言い終える前に彼女を思いつきり抱き締めていた。素直に彼女に僕の氣持を伝えるために。

恐らく川内が人間を恐いつていうのは間違いない。

…だけど僕も同じように川内から拒絶されるのが恐かったんだ。きっと。だから自分の中で勝手に川内と離れた方がいいと決めつけた。

川内「て、ててててて提督!!? / / /」

川内の鼓動を感じる。僕はそれを嘔み締めながら彼女に語り掛けた。

「川内、すまなかつた。僕は再び君を失望させるところだつた」

川内「ううう／＼／＼」

川内の顔は紅潮し、熱を帯びているようだった。僕は川内と目を合わせようとしたが、彼女は視線を逸らしてしまった。構わない。僕は続けた…。

「川内、まず謝らせて欲しい。僕は君のことを蔑ろにしてしまった。本当にすまない！」

川内「！　そ、そんな一体なんのことでしようか？私こそ提督に謝ろうと…」

「僕に？」

川内「はい…。私達は提督を襲いました。それは許されることはありません」

確かに二重の意味で襲われたな…。一つは男冥利に尽きそうだけど、理由が理由だからな…。

川内「ですから、わ、私は…！」

大粒の涙を流しながら川内は言う。

川内「あ、あれ…？また…。どうしてだろう…」

「川内、大丈夫…。ゆっくりでいいんだ。ゆっくり、君の伝えたいことを教えてくれるかい？」

川内の背中をさすりながら、諭すように声を掛ける。

川内「はい…」

川内「私は…。私達は提督に酷いことをしてしまいました。本当に申し訳ございません！」

川内「上官に刃向かった私達は、処分されるのでしよう…。ですが！処分されるのは私だけにして頂けませんでしょうか！提督にこんなことを懇願するのは筋違いだと思います！でも、どうか…。どうか私の処分だけにして下さい！！解体でも何でも受け入れます！」

今まで塞き止められていた思いを全てぶちまけるかのように川内の口から悲痛な思いが溢れ出てくる。

「川内」

僕は依然として涙で顔を濡らしている彼女の名前を呼んだ。彼女は弱々しく返事をした。

「確かに上官を襲ったら、相当の処分を受けなければならぬと僕も思う」

川内「はい」

消え入りそうな彼女の声。

「けどね、君は…。川内も神通も提督を襲ってやしないんだよ？」

川内「ど、どういふことでしょうか？私達は確かに貴方を…」

「ああ、それはね……」

僕は昨夜長門と陸奥に話した内容を川内にも淡々と話した。

川内「そう、でしたか……。それでも！」

「川内。僕は今、提督じゃないんだ。見えない何でも屋みたいなもんさ！だから、川内たちが気に病む必要はこれっぽっちもないんだよ？」

川内「し……しかし……」

彼女は精一杯僕の顔を見て、誠意を示そうとしていた。頑固なんだな……それが良いところなんだろうけど。

「川内……」

僕は彼女をさらに強く抱き締めた。

川内「あう／＼／＼」

「川内。今までよく頑張ったね。よく妹たちを守ろうと一人で頑張ったね。でも、もう君も頑張らなくていいんだよ。妹たちと幸せに過ごしていいんだ。僕が保証する、まだ提督じゃないけどさ。それでも、もし君の中で納得がいかなければ僕と仲良くなってくれないか？ そうだな……。上官と部下ってより友人としてさ！ どうか、川内。僕と友達になつてくれるかい？」

僕はそう言い終わると、自分が今言った恥ずかしい言葉のオンパレードに身が悶えそ

うになった。思えば、友達になろうって素直に言えたのは子ども頃だけだよな…大人になるとき、素直になれないというかなんというか…。

ただ、川内には思いが伝わったのだろう。

彼女は僕の胸に顔を埋め泣いていたのだ、それこそ子どものように声を出しながら…。

「お疲れさま、川内…」

僕は彼女の頭をそつと撫でながら、そう呟いた。

## いきなり頓挫

「落ち着いたかい？」

僕は川内の背中を軽くさすりながら話し掛ける。

川内「はい。大分落ち着きました」

川内は先程よりもいくらか気持ち安定したようで、目元は少し腫れているもの、笑顔をを見せてくれた。

「それはよかった」

僕達は今、執務室に向かっている。

川内と話をするにもここ（トイレの入り口）は最適ではない。

執務室に入ると陸奥から激しく問い詰められた。それはそうだ、川内が目を見ながら、僕は彼女と肩を組むようにして入ってきたのだから。こういう時も長門は海図から目を離さない辺り、さすが提督を今まで代行してきただけある（何様）。

なんとか誤解を解いた後、僕は川内に聞いてみた。

「川内さ、僕に敬語使ってるけど、普通に喋ってくれていいんだよ？」

川内「そんな！とんでもありません！」

「僕は気にしないんだけどなく。むしろ普通に喋ってくれた方が友達らしくていいと思うのだけど……」

川内「……提督はそちらの方がよろしいですか？」

「うん、無理にとは言わないけどね。後、僕は今提督じゃないって！」

川内「……それならお言葉に甘えて、敬語は使いません」

「うん……（使ってるやん）」

「よろしくね！川内」

川内「はい！……よ、よろしく」

川内はぎこちない様子だった。

うーん、一番最初に会った時の姿とは程遠いな。まあ、あんな感じで話し掛けてくれるようになったら、仲が深まった考えるとして、今はゆっくり仲良くなっていけばいいか！

長門「少しよろしいか？」

うん？長門？いつの間にか彼女は僕と川内の隣に来ていた。

長門「貴方に聞きたいことがある」

真剣な眼差しが僕の目を捉えている。あれ、なんか怒ってるね!?

長門「貴方は一時的に提督になることを放棄し、艦娘には見えない存在として、この

鎮守府の建て直しに努める……。その気持ちに偽りないか？」

「あ、ああ……もちろん。だけど、前にも言ったけど、例外もある。今、僕の隣にいる川内みたいに仲良くする艦娘だっている。そこは慎重にいくつもりだけどさ……」

川内「／＼／／」

長門「……」

長門「それは構わない。私も陸奥もそれを了承して、貴方を追い出さなかったのだから……」

長門「ただ……」

「ただ？」

なんか長門の顔色が先程より曇ってきてる気がする。

長門「ここからは川内も関係のある話だ」

川内「私ですか？」

長門「ああ。単刀直入に言うとなんかかの艦娘が私の元に来てな、川内が人間に危害を加えられていると報告してきたのだ」

「な、なんだってええええええ!!」

僕はつい叫んでしまった。隣にいた川内が目を丸くしている。あ、陸奥がじつとこつちを見てる、やめて、長門と一緒に睨まないで。

「そんな！僕は危害なんて…」

川内「そうです！この人は私を…」

長門「慌てるな。私達はなにもこのことを責めているのではない。貴方と川内が今ここで仲良く隣り合わせに座っているのが報告が誤っている証拠だろう」

川内「なっ！／＼／＼」

川内が顔を真っ赤にしている。あれ、頭から煙出てね？

さてと、冗談はさておき。

「では、一体何が長門の顔を曇らせているんだい？」

長門「！ 私の顔が曇っていたか、そうか」

そう言うのと長門は少し笑って、いくらか柔和な顔で話す。

長門「このことが艦娘たちの間で噂になっていてな。駆逐艦たちが怯え始めている。

また一部の艦娘が貴方に危害を加えようとしているという情報も耳に入ってきている」

なんてこった…。いきなり事態は最悪じゃないか。見えない何でも屋、無理があつたか？

長門「…だが、貴方が川内とそれだけ仲良くなっているのを見て、私は少し安堵しているんだ。貴方が少なくとも前任とは違うと分かったからだろうか」

長門は微笑みながら言う。

「……」

「そう言ってくれれば僕も嬉しい。だけど、駆逐艦が怯え始めているのは、かなりまずい状況だよな? どうしたらいい……」

川内が不安そうな顔で僕の顔を見つめている。

長門「そこでだ。私は全体に提督の着任は無くなったと伝えようと思う」

全体に? 別に構わないが……。というか、まだ僕の着任が無くなったことを言っていなかったのか……。なんでだ?

……ああ! そうか! 提督が着任しないと全体に伝えるってことは、人間がこの鎮守府いてはいけないんだ。

つまり、見えない存在なだけなら問題はないけど、艦娘と仲良くなるってことは不可能になる。姿を見せずに、話もせずに仲良くなるのは絶対無理だ……。長門はそのことを気にしてくれたのか……。

僕はしばらく考えていた。長門も陸奥も黙って、僕の返答を待っている。そして……。

「ああ! 構わないよ」

長門「……いいのか?」

「もちろん。長門と陸奥には気を遣わせちゃったね。元より無謀な話だったのかもしれないし……」

長門「……」

陸奥「……」

「とは言え！僕も諦めるわけにはいかないからね、別の方法を模索するさ！」

僕は満面の笑みで言った。そうさ！別のやり方がきつとあるはず。今はとにかくこの事態を収集するのが先だ。

長門「……すまないな」

陸奥「……」

川内「な、なんだかよく分かんないけど、協力するよ！」

「ありがとう」

大丈夫だ、きつと。今は一人じゃないんだから。

陸奥「貴方に危害を加えようとしている艦娘について詳しく話を聞かなくていいの？」

陸奥が唐突に口を開いた。

「まあ、知っておいて損はないね」

僕は聞いてみることにした。

陸奥「駆逐艦が人間に怯えている……これは前にも話したわね？」

陸奥「逆に言えば、駆逐艦以外は怯えよりも強い憎悪を抱いていると言えるわ。もち

ろん、怯えが全くない訳じゃないと思うけど……」

うーん、深刻な状況だ。

陸奥「軽巡、重巡、戦艦、空母。これらの艦種の娘たちは貴方に危害を加える可能性の高い娘たちよ」

ワーオ！……リンチされるかも。

陸奥「気を付けなさい。貴方、ブーツとしてるから」

陸奥……。

「陸奥、ありがとう。心配してくれて」

陸奥「／＼／＼」

陸奥は僕が礼を言くと、そっぽを向いてしまった。怒ったのだろうか？

川内「大丈夫！私が皆と仲良くなれるように紹介するよ！」

「川内もありがとう」

川内「ツ~~~~!!」

また顔を赤くしている。可愛い。

川内「ま、まずは私の大事な妹たちを紹介してあげる！」

そう言つて川内は僕の手を引く。

僕達は執務室を後にしたのだった。

## 不穏な空気

「……」

神通「……」

「……」

神通「……」

「……」

いや、デジヤブかよ！

僕はあの後、川内に案内されるがまま彼女いや彼女達の部屋まで来た。そして入った  
まではよかつたのだが……。

僕は神通と目が合った瞬間、再び床に仰向けに倒されていた。そして、いとも簡単に  
馬乗りになられてしまった。

川内「神通！」

神通「姉さんに何をした！お前！答えろ！」

かなり頭に血がのぼっているように思える。初日に彼女に会った時は敬語使ってた  
のに……今は激しい憎悪を目に宿し、僕の目を見据えながら怒鳴っているのだから。

川内「神通！止めて！」

川内が神通を押し退けた。

川内「大丈夫……？」

川内がそつと手を差しよべる。

「平気よー！」

僕はその手を握つて立ち上がると、わざとらしくガツポーズをしてみせたりと川内たちに気を遣わせないようにした。

川内「神通！いきなり何するの！」

神通「ね、姉さん、何を……」

神通は困惑しているようだ。そりや、僕を追い出そうとした姉の態度が一変してるのだから無理もないが。

神通「おのれ！人間！姉さんに何をした！」

再び僕に掴みかかろうとする神通とそれを止めようとする川内。僕はこの修羅場の中で、どうしたらこの状況を変えられるか必死で頭を動かし考えていたが、なかなか妙案が思い浮かばない。

那珂「はーい！ストップストップ！川内ちゃんも神通ちゃんも落ち着いて？」

すると、今まで口を閉じていた、恐らく那珂という艦娘が二人の間に割つて入った。

那珂「川内ちゃん、どういうことかちゃんと説明してくれるんでしょ？神通ちゃんもまずは話を聞こう？」

神通「でも…」

那珂「大丈夫だよ」

とびきりの笑顔で神通に諭すように語り掛けるその姿は、この修羅場において誰よりも冷静であった。

神通「・・・」

川内「私がちゃんと話すね？」

僕にそう言うと、川内は今までの出来事を妹たちに丁寧に話していた。神通や那珂が途中から悲しそうな顔をしていたので、僕はそれを見ないように下を向いて黙って聞いていた。川内も話の最中に声が上ずる場面もあったが最後までしっかりと話していた。

長い沈黙が流れる。しかし…。

那珂「川内ちゃん！」

静寂を那珂の元気な声が破った。

那珂「川内ちゃんにはいっぱい無理させてたんだね。ごめんね」

川内「那珂…」

神通「姉さん、ごめんなさい…。姉さんが私達のためにそんなに苦しんでいたなんて

知らなくて…」

川内「神通…」

那珂「だからさ、これからは川内ちゃんだけに無理はさせないよ！」

神通「はい！姉さんだけにはしません！」

そして、神通と那珂が川内のことをそつと抱き締めた。

那珂「これからはちゃんと頼つてよ？艦隊のアイドルの本気、見せちゃうんだから!!」

神通「姉さんのこと、しっかりとお守りします!!」

川内「じんつうくく！なかくく！」

川内は顔をくしやくしやにして泣いていた。神通も那珂も同じように泣いていて、三人とも抱き合いながらわんわんと泣いている。でも、とても幸せそうだ…。

ここで話し掛けるなんて、野暮なことにはしない。僕はそつと部屋を後にした。

??? ???

「やっぱり噂は本当だったみたいね！」

「人間とか…マジパナイわくく！」

??

「川内さんたちはどうして人間なんか部屋に入れたのでしょうか？」

「洗脳？脅し？やっぱ人間がやることはパナイわ〜！」

「下劣な！人間とはやはり相容れないですね」

「ちよ、ちよつと〜！あたし抜きで話さないでよ〜！除け者にしないでえ〜！」

「！も、申し訳ございません！」

「あ〜！駆逐艦のことイビってる〜！！姑だあ〜！」

「な、なんですつてえ〜！！」

「お二人とも、落ち着いてください!!!」

「何をしているの…？人間の動きは…？」

「人間なんて直ちにこの鎮守府から追い出すべきです！」

「ああ、お二人とも！任務、ご苦労様です！」

この時、僕をこの鎮守府から追放しようとする五人の艦娘たちが動き出し始めていたのを僕はまだ知らなかった。

そして、五人とも艦種も背格好も喋り方も様々だが、一つだけ共通点があった。全員、首からネックレスをかけているのだが、その首飾りのデザインは逆さの頭蓋骨、その

下顎から頭頂部にかけて錨が突き刺さっているという異様なものだ。

彼女たちが身動きする度、その逆さドクロは怪しげに揺れ動いていた。

「さあ、ちゃんとあたしの指示に従ってくださいよお？」

「え〜！やだなあ」

「もお、締まらないでしょー!!!」

「はーいよ！」

「それでは……人間の排除のために〜」

「ヘル・アンカーズ、始動……つてね！」

「あたしのセリフ取らないでえ〜!!」

????????????????????

## 不穏な空気2

「なんか、ドツと疲れたな〜」

僕はあの空き部屋に再び戻ってきていた。なんか艦娘たちに見られないように過ごそうとしてる割には、執務室に運び込まれたり、川内の部屋に行ったりと、結構大胆に動いているな…。

「長門にその内部屋から一歩も出るなって言われるかもな…」

僕はフツと笑いながら、そう呟く。

とりあえず、煎餅布団に横になる。久々の静寂。

しばらくすると眠気が僕を襲う。心身共に色々あつて疲れていたのだろうか、とても

眠い…。 z z z

「・・・」

「寝て…いるのでしょうか？」

「恐らくね…。ただ慎重にいきましよう。罨かもしれないわ」

「人間め！こうしてやるっ！」

艦娘の一人が大きく足を振り上げる。

??????????

「待ちなさい！ここでやるのは抑えて。バレたら一貫の終わりよ」

「くうう、早く運びましょう！運び終わったら痛い目に遭わせてやるんだから！」

「その通りですね。ではこの麻袋に……」

川内「まったく、勝手に出ていつちやうんだから！」

那珂「もお、川内ちゃん歩くの早いよ!!」

神通「気を遣って下さったのかもしれないよ?」

私達はあの人を探し歩いてきた。どこいったのかな? 妹たちを紹介するつて言ったのに、ふと見たら居なくなってるんだもん! 執務室には居なかつたみたいだし……。

那珂「あの人、提督じゃないんでしょー?」

川内「ま、まあね」

神通「なぜ彼を探しているんですか?」

川内「二人を紹介するつて言ったの! せっかくだから仲良くなつてもらいたいと思っ

てさ……」

那珂「へええ!! 川内ちゃん、あの人のこと好きなの!!?」

川内「な！なんでそうなるの?!?!?」  
神通「やはりあの男…」ギリッ

川内「違う！そういう意味での紹介じゃないの！」

前に彼が私に話してくれたことを私は妹たちに話した。

神通「…仲良くなれるのでしょうか？」

川内「大丈夫だよ！私だって最初は人間となんてって思ったけどさ…。アイツは…。とにかく！いいやつなんだって！」

那珂「あゝ！川内ちゃん、顔真つ赤かゝ!!」

川内「うるさーい／＼／＼」

神通「姉さん…」

あ、そういえば、あの部屋はどうだろう？彼に迫った、あの部屋は…。そこになら居るかもしれない。

あの部屋は確か…。

あ、あれ、なんか息苦しい？なんだ？

僕は目を開ける。なッ!?

暗ッ！夜か!?!というか、なんだこれ!?

え、狭いよー！なんか密閉されてる!?

………。なんか話し声が……。

「ふう、やっと入れ終わりました……」

「ご苦労様」

「入れるためとは言え、人間に触るなんて……吹雪一生の汚点です!!」

「もう少しの我慢よ。早くあそこへ連れていきましょ？あそこへ行くのは、正直

嫌なのだけど……。ただ、防音もされていて、閉じ込めるのには打ってつけの場所だけど  
ね」

吹雪「雲龍さんもあの牢に入れられたことあるんですね……」

雲龍「忌々しい場所……ね。あの部屋が存在している時点で吐き気を催すわ」

吹雪「朝潮ちゃんは？」

朝潮「私ですか？私は牢に入れられたことはありませんが、妹たちは何度か入れられて  
います。牢から出て、部屋に戻った妹たちの顔を見たら……うう」

吹雪「ご、ごめんね!?!嫌なこと思い出させちゃったね？」



## 不穏な空気3

状況を整理しよう。

今、僕は袋のようなものに入れられていて、どこかへ連れていかれようとしている。恐らく話し声から察するに三人の艦娘が周りにいて、助けを呼ぼうにも無線が取り上げられていると…。

うーむ、艦娘一人くらいなら暴れてどうにかなるかもしれないが、三人となると…。全員手練れなら、もうこの場でリンチにあうかもしれない。

…というか、日々深海棲艦とやりあつての彼女たちに力で挑むのは、無謀にも程があるか…。

ただ、話を通じる相手とも思えない。吹雪？という艦娘は僕に手を出そうとして諫められていたし、雲龍？っていう艦娘も声からは落ち着いた雰囲気を感じ出しているけど、それは冷静というより冷酷という感じだ。

となると、朝潮？という艦娘が残るわけだけど、妹が酷い目に遭ったという過去を持つている以上、迂闊には話しが出来るとは思えないし…。

雲龍「さあ、運びましょう」

朝潮「お任せください！」

吹雪「はい！」

……唯一の救いは僕が寝ていると思ってくれていることだな。もし起きていると知られたら吹雪という艦娘にボコボコにされるかもしれないし…。

コンコン

ん？ドアがノックされた!?これは…。

吹雪「…誰でしょうか？」

雲龍「分からないわ。ただ少々厄介ね」

吹雪「無視しますか？」

雲龍「それは良い策だと思えないわ。ノックされている以上誰かに会いに来たと考えるのが妥当でしょうね…」

朝潮「つまり…」

吹雪「この人間にですか!？」

雲龍「ええ。この空き部屋に用があるという時点で、その可能性が一番高いわ」

雲龍「中に人がいると知っているからノックをした…。さて、どうしましょうか」

朝潮「フフフ、この朝潮にお任せください!!」

雲龍「何か策があるのかしら？」

朝潮「いいえ。ですが、いざという時はこの朝潮を切り捨てて頂いて構いません！」  
吹雪「そ、それって……」

雲龍「なるほどね……。分かったわ、ここは貴方に任せます。ただ貴方を犠牲にするつもりはないわ、忘れないで」

吹雪「朝潮ちゃん……」

朝潮「この朝潮、ご期待に添えるよう行つて参ります!!」  
その後、ドアを開ける音がした。

あのさ………。

この娘たち気付いてないかもだけど………。

今の会話、ドアをノックした人物に聞かれてるんじゃない？

最初こそ、静かに会話をしていたようだけど、朝潮（たしかこの娘だよな）がその流れを一気にぶった切ったからな……。

お任せくださいの一声、めちやくちやハキハキしてて、聞いてて惚れ惚れしたけど、バレルよ、それ。声、大きすぎよ。

朝潮 「どうされたんですか？ 川内さん……」

私がドアをノックして、しばらくすると私の思っていた人物とは別の者が部屋から出てきた。

いや………思っていた人物が出てきたと言うべきかな。

川内 「……朝潮、この部屋で何してたの？」

私は静かに尋ねてみた。朝潮の顔をじっと見ながら。

朝潮 「な、何もしていませんよ……」

川内 「……」

神通 「……」

那珂 「……」

彼女は直立不動で、目を見開きながらそう言った。

朝潮、あなたは隠し事をするには純粹で正直すぎる。

私たちはドアの前でアイツを待っていた。

そして、中から聞こえてきたのだ。朝潮にお任せくださいと……。私たちは聞き耳を立てた。ドアも分厚いわけではないので、中の会話など容易く聞いた。

朝潮と、恐らく二人別にいる……。私は、少し胸騒ぎがした。

川内「他に誰かいるの？」

朝潮「いいえ！私一人です」

耳を真つ赤にしながらそう言う朝潮。

川内「そう……」

朝潮「はい！」

川内「那珂！」

那珂「……えっ!?私!？」

川内「うん、朝潮を抱き締めてあげて？那珂のアイドル活動を応援したいんだって」

朝潮「な……何を……」

那珂「あー、そういうことね！川内ちゃん！」

那珂「ふふ、朝潮ちゃん！ちよつと私と遊ぼうか！」

朝潮「け、結構です」

那珂「謙虚だね。私のファンならドーンと来なよ!!それっ!」

朝潮「ひゃっ!!」

那珂が朝潮を抱き締め…いや羽交い締めしてくれているうちに……。

川内「行くよ!神通!」

神通「はい!」

私たちはドアを開け、部屋に勢いよく入っていった。

## 不穏な空気4

雲龍「あら、川内に神通……そんなに怖い顔をしてどうしたのかしら？」

私たちが部屋に入ると、予想通り二人の艦娘……雲龍と吹雪がいた。そして、二人の側にひと一人が入りそうな巨大な麻袋が転がっている。吹雪は私の顔を見るや否や俯いたが、雲龍は澄ました顔で私に問いかける。

川内「……何しているの？ここで」

雲龍「掃除よ、この部屋汚いでしょ？」

川内「あなた、そんなに他人の部屋を掃除してあげる程お人好しだったけ？」

雲龍「この部屋は空き部屋よ……。粗大ゴミこそあれど、誰かが居るわけないじゃないかい？」

川内「掃除用具も持たずに掃除？」

雲龍「ええ、本格的な掃除はこれから……。今は大きなゴミだけ処分してきたのよ」

吹雪「……川内さんたちこそ、この部屋になにか用があるんですか？」

川内「うん、人を探しにね」

吹雪「！」

雲龍「そう……。でもあいにくその目当ての人はいないと思うわ」

神通「その麻袋はなんですか？」

雲龍「ああ、これは……」

吹雪「ゴミです!!」

吹雪「汚ならしい、この鎮守府にあつてはいけなない廃棄物です!!今から雲龍さん、朝潮ちゃんと捨てに行くんですよ!?!何か問題あるんですか!?!」

先程俯いていた同一人物とは思えないほどの気迫で叫ぶように言う吹雪。目はカツと見開き、激しい憎悪を宿しているようだ。

私は分かってしまった。吹雪がこれだけの嫌悪感を示すもの、つまりその麻袋の中身が粗大ゴミではなく、私の大切な人だということに。

川内「……アイツはいいやつなんだよ」

きつと私にしか聞こえないであろう声量でそつと呟く。

川内「ねえ」

川内「そのゴミ、私たちが捨ててくるよ」

川内「だから……」

川内「貸して？」

雲龍「……」

吹雪「そ、それは……」

雲龍「はあ……」

すると雲龍が目を瞑って、ため息をこぼした。

そして直ぐに目を開ける。その瞳からは、なんの感情も感じ取れない。だが、それも一瞬。

雲龍「茶番は終わりよ」

私は思わずたじろいだ。

威圧感：私を深い海の底へと突き落とすようなそれは、先程まで何の感情も読み取れなかつた雲龍から発せられているとは信じ難かつた。

隣を見ると神通が臨戦態勢に入っている。

神通のいつも以上に気を張った顔は、今回の件がいかに凄まじいものであるのかを表していた。

私も身構える。これは戦闘になると確信したから。

もちろん、機装を展開しての砲撃戦ということはないだろう。となると残されているのは近接格闘戦。

どうなる？

那珂が朝潮のことを抑えてくれている。

ということは、私と神通で雲龍と吹雪を抑えることになるだろう。

吹雪は大丈夫だろう。だけど………。

雲龍……。正直、未知数な相手だ。

神通がいるから負けることはないはずだけど……。

私は雲龍の放つプレッシャー、そして神通の緊迫した表情から一抹の不安を覚えた。

だけど、私は退けない。

だって、私を温かく受け入れてくれたんだ…アイツは。

私は神通を見ると彼女は小さく頷いた。

川内「いくよっ!!」

私の叫びを合図に戦闘の火蓋が切られた。

## 戦闘

何が起きている？

暗く閉じられた袋の中。目から入る情報は皆無。それ故、耳から入ってくる情報は平素より鮮烈なわけだが、どうやら川内たちと雲龍たちが揉めているらしい。

川内たちがなぜここに？と思ったが、これはチャンスだ。

僕の十八番、悲鳴を出そうと息を深く吸い込んだ瞬間、おそらく雲龍だろうか…彼女の一言が僕の耳から体の髓にまで染み渡るように浸透してきた。

「茶番は終わりよ」

その一言が僕の呼吸を一時的に止めるのはあまりに容易だった。

重圧に身も心も押し潰されそうになる感覚が襲う。

「……ッ」

お得意の悲鳴など出せるはずもなく、時間がゆっくりと流れているような気がする。

場が膠着したのだろうか、静けさが辺りを支配していた。

もちろんその静寂は心地よいものではない。

そんな静寂に凜とした声がこだまする。そして聞こえるいくつかの駆け出す足音。

まもなく激しい息づかい、怒声、呻き声、そして部屋全体が揺れているのではないかと錯覚に陥るほどの騒音が僕の耳に一気になだれ込んできた。

川内たちが戦っている……。

彼女たちの戦う理由は分からない。

いや、この状況においてそれはあまりに無責任だろう。本当は分かっているはずだ。雲龍の一言に怖じ気づいて、また大切なことを忘れるところだった。

川内たちは僕を守ろうと戦っているんだ。

そう思うと僕はいてもたつてもいられなかった。

やっと、やっと友だちになれたんだ……!!!

大きく息を吸い込む。

「川内!!僕も戦うぞ!!!」

私の声を合図に私たちは雲龍と吹雪に突っ込んだ。

疾風のごとく神通は吹雪の懐に入り、当て身を食らわせる。そのまま吹雪は伸びてしまったようだ、仰向けに倒れそうになるのを神通が抱え、そっと床に寝かせた。

先手は取れた……。これで二対一になったわけだが、何故かちつとも不安は晴れない。

そんな不安に一瞬でも駆られた私は雲龍にとって隙だらけだったのだろう：私の腹部を雲龍の痛烈な一撃が襲う。

「うぐっ!!」

私はそのままえずく。内蔵が体の中でひっくり返ったといっても過言ではないくらいの痛み。

もちろん相手は手を緩めてくれるはずもない。次々と私の腹部や顔を狙って雲龍の激しい攻撃が繰り返される。

私は痛みを堪えながら、なんとかカウンター出来ないものかと考えていたが、防戦一方であった。

神通「姉さん！」

いつのまにか雲龍の背後をとっていた神通が雲龍の横腹を蹴りつける。そのまま雲

龍は壁に叩きつけられ、床に伏した。

川内「ありがとう……危なかったよ……」

神通の強さはやはり目を見張るものがある。

もちろん砲雷撃戦でもその強さは健在だ。だが、なんといつても彼女の力は近接格闘で真価を發揮する。

部隊が追い込まれても、旗艦であった神通の白兵戦で何度その状況が覆されてきたか、姉の私が一番知っている。

神通「大丈夫でしたか？ 姉さん？」

川内「うん、少しお腹をやられたくらいだよ……」

神通「くっ！ よくも姉さんを!!」

川内「大丈夫だつてば！ これくらい……!?」

私がチラリと雲龍の方を見ると、なんと雲龍が立ち上がっているではないか。まるで痛みを感じていないのではと思わせるような表情をこちらに向けている。

神通「まだ……終わらないみたいですね」

川内「うん、かなり手強いね」

雲龍……この娘は相当の実力者だ。

神通の一撃を受けて立ち上がった、こんなことは未だかつてなかった。このことが意

味すること、それはこれから今までにない激しい戦いが待っているということを目指す。私と神通は覚悟を決め、お互いに顔を見合わせる。呼吸を合わせ、再び雲龍に攻撃を仕掛ける。

はずだった……。

「川内!!僕も戦うぞ!!!」

その声が聞こえるまでは。

## 戦闘2

この鎮守府に人間はいらない……それが私の信念。

ここの艦娘は戦えと言われれば戦い、体を差し出せと言われれば差し出し、死ねと言われれば死んだ。逆らうことは出来なかったのかって？

決まって人間は呪文の様に私たちに言う。

「お前が逆らうなら、お前の姉妹、友だちをやるまでだ」

……仲間が暴力を振るわれる。犯される。

みんな自分を捨て、なんとか守ろうとした、自分より大切なものを。

「ぎゃあああああああ!!」

叫び声。

耳を覆いたくなるような悲痛なそれは、時間を問わず、この異臭立ち込める薄暗い空間の至るところで聞かれる。

地下牢。

前提督が艦娘を蹂躪するためだけに設けた、私にとって忌々しい場所。いや、私だけ

ではない。この鎮守府全ての艦娘が忌避するであろう場所だ。

私がこの地下牢に初めて連れてこられたのは、私の目付きや態度をあの人間が気に入らなかつたから。

鎖で手足を拘束されては何度も何度も殴られた。ただ顔は殴られなかつた。

それもそのはず、これから犯すのに顔が血だらけでは興醒めなのだろう。

顔以外を真っ赤に腫れ上がるまで殴り続けた人間は、殴るのに飽きると私の衣服を引きちぎる。そして私の体を辱しめるのだが、私はその間ずっと闇のように暗い天井をただ静かに見ていた。

そして散々弄び、最後の仕上げといった感じで私の顔面を思う存分踏みつけると、ようやく人間は満足したような顔をする。

大体、このようなことが月に何度かあつた。

私には尊敬する艦娘がいた。

潮風に翠色の髪をなびかせ、弓を引く姿には同性ながら何度もときめいたものだ。

ある時、私はその艦娘と共に出撃することになり、私は嬉しさのあまり、気分が舞い

上がってしまった。

そして、その浮き足立っていたところをすくわれ、その作戦は失敗に終わった。

執務室に呼ばれてからは罵詈雑言の嵐。出撃メンバーは全員、地下牢へ連れていかれた。各々の牢に隔離されて入れられた私たちだったが、何故か私はその艦娘と同じ牢に入れられた。

……どうやらあの人間は、鎮守府にいた憲兵を誘って一緒に懲罰を行っているらしい。複数の場所から泣き叫ぶ声が聞こえてきた。

私たちはじつと牢の隅に身を寄せ合いながら縮こまる。

辺りから聞こえていた泣き叫ぶ声が啜り泣く声に変わった頃、私たちの牢に複数の人間がぞろぞろと入ってきた。

「私が全ての責任を負うわ！せめて雲龍は助けて!!」

私は恐怖に腰を抜かして立てなくなっている反面、その艦娘は颯爽と立ち上がって、人間の前に立ち塞がる。

その後のことはよく覚えていない。

思い出せるのは、私はその艦娘以外の娘を連れて地下牢から上がろうと階段を上っていて、その時に人間たちの品のない笑い声と微かに断末魔が聞こえたこと位だ。

だが、その断末魔は今も私の耳から無くなることはない。ずっと聞こえ続けているのだ。

雲龍「一緒に戦う？人間が？」

そう言うと雲龍が腹を抱えて笑い出す。

あまりのことに私も神通も身動きをとれなかったが、麻袋はもぞもぞと動き出していた。

雲龍「下らないことぬかさないでくれる!？」

神通「!!」

川内「や、やめて!」

一瞬だった。雲龍の振り上げた足が麻袋に凄まじい勢いで振り下ろされる。

鈍い音。そして、麻袋の中に居るであろう人物の絶叫。

気づくと私は雲龍の懐に飛びかかっていた。

## 戦闘3

川内「よくもおおおおおお!!!」

私の発した怒号が室内の隅から隅まで響き渡る中、私は雲龍を押し倒していた。

雲龍の顔を見ると、軽蔑したような表情を浮かべていて、直ぐに私から離れようと痛烈な打撃を私の腹部や顔めがけてお見舞いしてきた。

だが、私はそんな痛みを忘れてしまうほど、アイツを傷つけられたことに怒り狂ってしまっていた。

川内「よくも！よくも!!おおおおおお!!!」

私の全身に力が込められる…それは先程まで私の心に巣食っていた不安をなぎ払い、目の前の雲龍を絶対に許してはならないと体の底から溢れ出てきているようだった。

雲龍も先までの私と違うと感じたのだろうか、初めて雲龍の顔に焦りが見られた。

神通「姉さん!!!」

神通が雲龍の両腕を床に押さえつけ、私への攻撃は止んだのだが、私は依然として力を抜くことが出来なかった。このままだと私は雲龍のことを……………。

「川内ツ…、どこだ!?今、行くからな!」

私はその声を聞いた時、ハツと我に帰る。

そして、ようやくそこで私は両手を雲龍の首にかける寸前のところまでいつていたことに気付き、直ぐに手を引いた。

川内「神通！雲龍のこと一人で抑えられる？」

神通「はい、お任せください」

川内「お願い！アイツを早く出してあげないと……」

私はそう言つて、神通に雲龍のことを任せ、麻袋の方へ駆け寄る。もちろん、雲龍からは目を離せない。チラチラと様子を見ながら、私は麻袋を開けた。

「ツ!!眩しい!!誰だ!?!」

川内「私だよ！大丈夫？さつき踏まれたところ痛くない!?!」

「せ、川内か!?!大丈夫!!こっちは平気だ！川内こそ、大丈夫か!?!」

川内「私も平気!!」

私はそこで急に力が抜けてしまい、その場にへたり込んでしまった。でも、よかつた……。無事で……。

でも油断は大敵なわけで。

神通「きやあ!?!」

しまったと思った。安心のあまり、雲龍から目を離しすぎてしまった。

直ぐに立ち上がろうとするも、足に力が入らない。神通の方を見ると、形成逆転とまではいかないものの、雲龍が立ち上がり神通を押しさえ込もうとしていた。

川内「神通!!!」

私は床を這いつくばって、なんとか雲龍の足にしがみつく。雲龍は振り払おうとしてくるが必死で食らい付いた。

雲龍「さっきまでの馬鹿力はどうしたのかしら?」

少しずつ、少しずつではあるが雲龍は神通のことを押し退けようとしている。つまり、神通が力負けしているのだ。

神通「くっ!強いッ!!」

川内「うううう!」

雲龍「なぜ人間に加担しているのかしら!?そこまでする理由は何!?弱味を握られた?洗脳された?フツ、どちらにせよ、貴方たちは私には勝てない!!!人間に簡単に手懐けられるような臆病者に私が負けるはずない!!!」

神通「姉さんは臆病者なんかじゃない!!!」

必死の形相で叫ぶ神通。

雲龍「いいえ!貴方たちは臆病者よ!!!人間に尻尾を振って喜ぶ雌犬よ!!!どうせ、また体でも差し出すんでしょ、川内?そうしないと生き残れない弱者が!!!」

神通「お、お前ええええええええええええ!!!!」

神通の咆哮。私はそんな中でなぜ私がアイツに迫ったのかを雲龍が知っているのか疑問に思った。

雲龍「いつも出撃後に執務室に残っては、提督に体を差し出していたわよね!?私もある人間に犯されてはいるけど、決して自分から差し出すような愚かな真似はしていない!!!川内、何を見返りに求めたのかしら?あの人間の愛人にでもしてもらおうと思ったの?」

雲龍が嘲笑うかのように言う。

なるほど、前任のことを言っているのか…そう言われると私は妙に納得してしまった。確かに私は自ら体を差し出したんだ。汚れた存在…。

神通「姉さんを悪く言うな!!何も知らないくせに!」

雲龍「ええ、知らないわよ!?!こんな足にまとわりつくことしか出来ない無様な存在!知るに値しない!!!」

うん、そうだ。私は気付いていた。私は他の艦娘からしたら汚れている。自分から差し出したのか、そうでないのかで大きくその印象は分かれるだろう。

私はみんなと同じ立場にないんだ…。みんなと肩を並べられるわけないんだ…。

そう思うとどんどん力が抜けていく。

雲龍「フフツ、貴方も汚いものだから人間とお似合いよね!? すぐそこで棒立ちしてるゴミと一緒にこの鎮守府から捨ててあげるわ……………ツ!?」

雲龍が言い終える前に雲龍の足が大きくバランスを崩す。足にしがみついていた私は一瞬何が起きたのか分からなかったが、どうやら雲龍は再び床に倒れたらしい。

神通…? そう思つて神通を見ると、どうやら神通も驚いているようだ。だが、答えは直ぐに分かった。

「友だちのことを悪く言うなああああああ!!」

アイツが雲龍に思いつきり体当たりしたのだろうか、彼は雲龍に覆い被さるようにして、そのまま雲龍の腕をがっちり抑えこんでいた。

雲龍「何をする!? 離せ!!!」

雲龍は激しく抵抗する。だが……………。

「三人に勝てるわけないだろう!!?」

雲龍「くっ!!」

「雲龍!! 僕のことを憎いんだろ!? なら僕だけ馬鹿にすればいい!!! 同じ艦娘同士でいがみ合つてどうする!?!」

雲龍「黙れ!!!」

「雲龍!! 僕をこの鎮守府から排除したいんだよな!?! なら、そうすればいい!! だけど、その

前に川内にちゃんと謝れ!!!」

雲龍 「うるさい!! 黙れ黙れ!!!」

「川内のことなんも知らないくせに知ったような口を聞くなっ!!!」

もういい…。

雲龍 「お前のような人間に何がわかる!!!」

もういい…。もう…。

「川内は友だちなんだ!! 分かるに決まってる!!」

川内 「もうやめて!!!」

私の叫びが室内に響く。

川内 「雲龍、あなたの言いたいことは分かった。私は汚いよ、自分でも分かってる  
……………」

雲龍 「ふーん、それなら…。」

「汚いはずないだろう!! 全部、前任のせいだ!! 川内は何も悪くない!」

雲龍 「騒ぐしか出来ないの?」

「アンタもだろう!?!」

川内 「聞いて!!!」

私の声に辺りが静まり返ったところで、私は口を開く。

川内「二つ提案があるの!!」

## 初仕事

「て、提案？」

川内「うん」

雲龍「この期に及んで提案も何もないわ、早く離してちょうだい」

「なら川内に謝れ！」

雲龍「うるさいわね：耳元で大声出さなくてくれるかしら？」

まずい：雲龍はともかくアイツは頭に血が上っているのか興奮していて、冷静さを欠いている。これじゃまともに話が出来ない……。

那珂「おーい、大丈夫くく!？」

するとドアの方から那珂と朝潮が心配そうに顔を覗かせていた。これは助かった。

朝潮「物凄い音や怒鳴り声が聞こえました……」

川内「那珂、朝潮！ちよつと手伝つて!!」

私たちのこの状況を見て、那珂も朝潮も怪訝な顔をしているが、私の元へと近づいてくる。そこで私はこの部屋にいる皆に聞こえるように話した。

川内「まずは私の話をしっかり聞いて欲しいの！だけど、お互いにこんな状態じゃ、ろ

くに話も出来ない…。だから、ここからは一旦休戦にしない？」

雲龍をアイツと神通、それに私が床に組伏せている状態で何言ってるんだという感じだが、正直このままでは状況は泥沼化するだけだ。それに今は那珂と朝潮がいる。

まだ頭が熱くなっていない二人にこの場を諫められるかと言われれば、無理かもしれないけど、もうこれしかなかった。

那珂「な、なんだかよく分かんないけど、とりあえず雲龍ちゃんから離れよう？」

朝潮「そ、そうですね！」

川内「よしっ！じゃあ、もう戦いはこれでおしまい！離れるね？」

その一言を待ってましたとばかりに私は雲龍の足から離れた。すると、神通も状況を把握してくれたようで、そつと雲龍から距離を取る。

「……」

雲龍「：貴方も退いたら？」

「まだ、謝ってない……」

……一人だけ雲龍に覆い被さったまま動かないみたいだけど。雲龍はもう冷静さを取り戻しているようで、先程の怒りを露にしていたのが嘘のようだった。

ただ、呆れたような顔をアイツに向けているが。

川内「それじゃ話出来ないでしょ！」

私はアイツの服の襟を掴んで、無理やり離れた。

こうして一触即発の状態から少し落ち着いたところまできたわけだけど……。

神通「姉さん、提案とは？」

川内「うん、雲龍……それと朝潮にも聞いて欲しいの……。二人にとって悪い話じゃないと思うからさ」

雲龍「聞きたくないわね、あなたの話なんて」

「ツ!!またそういうことを!!!」

川内「落ち着いて? 雲龍の言うことも分かるからさ」

雲龍「そ、じゃあ私はこの人間を捨てに行つていいかしら?」

「やれるもんならやってみろ!!」

川内「二人とも! それじゃ意味がないでしょ!? 休戦したんだから、一旦そういういがみ合いは無し!!!」

神通「……もし雲龍が聞きたくないのなら、朝潮ちゃんにその内容を話して後で雲龍に伝えてもらうというのではどうでしょうか?」

朝潮「わ、私ですか!?!」

いきなりの指名に驚きを隠せない朝潮。

雲龍「……私に話を聞かないという拒否権は無いのね」

川内「……ごめん、聞いてもらえないと次に進めないからさ」

雲龍「・・・」

暫しの沈黙。

雲龍「…分かったわ。話だけ聞いてあげる。ただそれだけよ。その後は私たちの勝手にさせてもらうわ」

川内「あ、ありがとう!!」

雲龍「どうせ聞くなら、今聞いとくわ。朝潮にも悪いしね」

川内「じゃあ、改めて私の提案について話すね？」

## 初仕事 2

皆の視線が私に集まる中、私は一呼吸置いてから話始める。

川内「まずは：雲龍、朝潮。ごめんなさい！」

そう言つて私は二人に頭を下げた。そのまま続ける。

川内「ちゃんと話せればよかつたけど、私：頭に血が上つちやつて……本当にごめん  
!!」

神通「姉さん一人が悪いわけではありません！私も吹雪ちゃんには酷いことをしてしましました」

神通も頭を下げる。

那珂「おろろ、那珂ちゃんも空気読んで謝つた方がいいのかな!？」

朝潮「うーん、どうなのでしょうか……？」

雲龍「……気にしてないわ。それなら私も一緒だし：おあいこよ」

川内「ありがどう！それで私の提案なんだけど……。まずはこの人の話を聞いて？」

そう言つて私はアイツの顔を見る。

「ぼ、僕か!？」

川内「そう！前に私たちに話してくれたみたいにも、貴方のことを雲龍たちにも話してあげて？」

「あ、ああ。分かったよ」

アイツはそのまま雲龍たちに彼が提督ではなくどういいう存在なのか、これからどうするのかなど丁寧に話していた。

「……ということなんだ。川内、こんな感じでいいかい？」

川内「うん！ありがとう！」

雲龍も朝潮も黙って聞いていたが、雲龍がそつと呟いた。

雲龍「無茶な話ね。夢物語だわ」

「そ、それについてはあまり強くは言えない……」

雲龍「現に私や朝潮、吹雪にはバレているわけだし……破綻しているわ。無謀なことは止めて、早く出ていくべきだと思うけど？」

川内「それはちよつと待って！この人は前任と違っていいやつなんだよ！！私も……神通も那珂もこの人のことを信頼してるし！」

神通と那珂は少し目が泳いでいた。それはそうか、まだ紹介すらろくに出来てないし……でもここは私の話に合わせてもらおう。

雲龍「ふーん、そう……。で、今のこの人間の話は貴方の提案に関係あるから話したの

よね？」

川内「そ、そう！私の提案はこの人の目的に関係あるの！」

川内「ずばり、この人と友だちになってみない??」

雲龍「却下よ」

川内「ええ!!」

雲龍「何を言い出すかと思えば……時間の無駄だったようね。朝潮、吹雪を連れて部屋に戻るわよ？」

朝潮「……は、はい！」

神通「姉さん……」

那珂「川内ちゃん……」

神通と那珂が心配そうに私を見ている。確かに無理があるとは思ったが……むう、さすがにこの提案は安直過ぎたのか……?どうしよう。

すると、万策尽きた私の耳にアイツの優しい声かふと聞こえた。

「川内……ありがとう」

「待った！雲龍に朝潮！」

雲龍 「行くわよ、朝潮」

朝潮 「は、はい！」

「地下牢はどこにあるんだ？」

その一言に今立ち去ろうとしていた雲龍の足は止まり、そしてアイツの顔を無表情で見ている。いや、少し殺気を感じさせる目付きで睨んでいる様にも見えなくはない。

雲龍 「……何のことかしら？」

「聞こえていたんだ、地下牢に連れてくって話！それはどこにある？」

雲龍 「聞いてどうするのかしら？」

その答えを聞いて、アイツはすうと息を吸い込み、はつきりとした口調で言い放った。

「その地下牢をこの鎮守府から消してやる！」

雲龍は表情を変えず、微動だにせずアイツの言葉を聞いていた。

だがやがて、アイツに背を向けると吹雪を抱えて、朝潮と部屋から出ていった。

それからしばらくして私はアイツに話し掛ける。

川内 「地下牢って？」

「川内は知らないのか……。まあ知らない方がいいんだらうけどさ……」

アイツはふうと息をつくくと、私の顔を見て、直ぐ様頭を下げた。

「川内…それに神通と那珂。今回は助けてくれてありがとう！本当に助かった」

川内「な、助けたなんて大袈裟だよ!!」

神通「私は姉さんを守ろうとしただけですし…」

那珂「神通ちゃん、素直じゃないな〜!!」

三者三様、違った態度を見せる私たちを優しく見るアイツの顔。それは、その、なんというか、素敵だった／＼。

「そこで、さらに頼み事をするように、申し訳ないんだけど、二つ頼まれてくれないか？」

川内「ん？な、なに？」

その優しい顔に見とれてたなんて言えない…。

「その、恥ずかしい話なんですけど昨日から何も食べてなくて…お腹が減っててさ、食べ物を持ってきてくれないか？それと、もう一つは朝潮という艦娘を今日の夕方にここか執務室に連れてきて欲しい！朝潮が拒絶するなら無理に連れてくる必要はない、だけど地下牢について何か聞いたら聞いてくれないか？助けてもらった上で厚かましいだろうけど、頼みます!!」

川内「わ、分かった」

「ありがとう!」

そう言つてとびきりの笑顔を私に向ける。ずるい…／＼／

川内「じ、神通と那珂はここでこの人のこと守ってて！私のご飯持ってくるから／＼」  
私はそう言うと、自分の赤くなつた顔を見られないように素早く部屋を出て食堂へと向かった。

## 初仕事3

「ご苦労さんー！」

執務室のソファアに深く腰を掛けていた僕は、任務のためにドアから出ていこうとする人物に向け、労いの言葉を掛ける。

川内「これくらいお安いご用だよ！それより……」

川内の表情が暗くなり、どこか心配そうな顔で僕の顔を見つめる。

川内「本当に一人で大丈夫？」

「大丈夫さ、気にせず頑張っておいで！」

川内「うう、分かったよ……。くれぐれも気を付けてね」

そう言うのと川内は僕に背を向け足早に執務室から出ていった。

「ふう、さて……」

僕は川内が出ていった後、目線をドアの方からある艦娘の方へと向ける。その艦娘は緊張したような、不安でいっぱいなような表情を浮かべている様だった。

「とりあえず、楽にして？そこにある椅子に腰を掛けてよー」

僕は相手の表情をいくらか和らげようと、気さくな態度で接しようと努めた。ただ椅

子を勧められ、礼を言うその艦娘の声は震えており、僕に対して相当の怯えを感じているようだった。

「今日はありがとう、朝潮。無理に来てもらって悪かったね？」

朝潮「い、いえいえ…そんなことは、あ、ありません」

今にも泣いてしまいそうな顔をしながら、上ずった声で懸命に話す朝潮。

むー、こんな娘に地下牢の場所を聞くのは酷だ。だが、長門も陸奥も川内たちも地下牢を知らないとなると残されるのは雲龍たちなわけで……そんな中で一番話せそうなのが朝潮なんだよな…。

やり方は汚いが、すまない朝潮！

僕は心の中で朝潮に謝罪しながら、地下牢について率直に聞くことにした。

「それで朝潮、地下牢についてただけど…」

と僕が言い掛けた時、朝潮の瞳から大粒の涙が零れ落ち始め、痛々しい表情で僕に訴えかけてきた。

朝潮「この度は、大変申し訳ございませんでした！どうか、どうか妹たちだけは……妹たちだけは助けてください!!私が全て罰を受ける所存ですので、どうか……どうか!!」

あまりに鬼気迫る朝潮の表情。

僕はこの顔に見覚えがあった。それはつい先程この部屋を出ていった川内が初めて僕に迫った時に見せたものにそっくりであった。

「朝潮」

僕は朝潮を落ち着かせるため、穏やかな口調で話し掛ける。

「朝潮、前にも言ったけど僕は提督ではないんだ。だから、君や君の妹たちを罰することもしないし、もちろん雲龍たちのことだって罰しないさ！」

朝潮「……」

「それに今から聞く地下牢のことだって、答えにくければ無理に答える必要はないし、もし僕が怖いなら陸奥や長門だつてこの部屋にいるんだ、二人に助けを求めたつていい！」

そう言つて僕は長門たちのことを見ると、長門も陸奥も朝潮の悲痛な叫びを聞いて、心配そうにこちらの様子を伺つていようだった。そして僕と目が合うと慌てて視線を逸らしている。

「だから朝潮、もし大丈夫なのであれば地下牢の場所を教えてもらえないかい？」

再び朝潮の方へ視線を遣り、朝潮の答えを待つ。

朝潮「……」

朝潮は俯いたまま何も答えない。きつといろいろ思うところがあるのだろうか……。

今日は無理かもしれないと思い、朝潮を部屋に帰そうと声を掛けようとしたその時、朝潮が重い口を開く。

朝潮「一つ…約束願えますか？」

「なんだい？」

朝潮「私が地下牢の場所を教えます…その代わり…」

目を閉じ、心を落ち着けようとしているのか静かに息を吐く朝潮。

朝潮「もう二度と誰かを傷つけないと約束してください！」

真つ直ぐと僕の顔を見つめる朝潮は、やはり以前の川内の様に凜としていた。

いや、というよりもこの艦娘たちは人間から自己と他人のどちらを犠牲にするのか何度も天秤にかけられてきたのだ。究極の選択を何度も何度も突きつけられ、哀れながら彼女たちは自分を犠牲にして仲間を守ろうとした。それは川内や朝潮、そして報告書の記述を見れば嫌と言うほど分かる。

「そりや凜々しいと感じるよな…」

僕はそつと呟く。そして、朝潮が今の呟きを聞いていないかと焦った。幸いにも朝潮は気づいていなかった様だが。

今の何気ない呟き…ただ、それは僕にとつてだけかもしれない。

人間が彼女たちに強いたこと、それを彼女たちのことを分かった振りをして、他人事

のように語ることは許されないのだ。

「朝潮、約束するよ。僕は絶対に君たちを傷つけない」

朝潮は僕がそう言うのと、小さく頷き、大きく息を吐いた。

朝潮「この鎮守府の見取図はありますか？」

「あ、ああ！」

僕は直ぐに長門からもらったこの鎮守府の案内図を手に取り、広げる。

朝潮「地下牢は……この部屋の床から通じる階段を降りたところにあります」

朝潮が指をさした場所。そこにすぐにペンで丸をつける。

「ありがとう！朝潮！」

朝潮「……私がお教えできるのは地下牢の場所だけです」

「いいさ！後は自分の目で確かめるよ！本当にありがとう」

それを聞いて朝潮は僕にお辞儀をすると、静かに部屋から出ていった。

「よーし！」

僕は両膝をパチンと叩くと、地下牢へ行くため準備に取りかかった。

## 地下牢

闇夜に乗じて、鎮守府の廊下を物音立てぬよう静かに歩く。夜間哨戒で出撃している艦娘以外はもう自室にいるはずだ（長門曰く）

「今が地下牢へ行く絶好の時だ……」

誰もいない廊下を黙々と進む。

本音を言えば、あんなことがあったばかりだ。しかも行く場所のことを考慮すると、誰かに付いてきてもらいたかった。だが、長門や陸奥に頼むのは気が引ける。となると、頼みやすいのは川内たちが候補に上がるのだが、川内は出撃任務があつたらしい。彼女は長門に掛け合ってくれようとしていたが、さすがに僕の我が儘で振り回すわけにもいかず断つた。川内に聞いたところ、神通も那珂もそれぞれ用があるとのこと。

川内「神通は三銃士の集まりがあるみたいで、那珂は次のリサイタルの準備があるつて……」

頬を赤くして、妹たちと喧嘩したのだろうか、ぶつきらぼうにそう呟く彼女。まあ正直、神通と那珂は川内ほど僕に気を許してくれてるわけではないだろう。この前の神通の発言……姉の為というのを那珂が照れ隠しだと言っていたが、実際姉の為というのが

彼女たちの本音と考えるのが妥当か。川内が居てこそ僕の味方になってくれるであろう二人、まあ少しずつ信頼深めていけばいいや。

その後僕は、無理にでも付いて来そうな（有り難いのだが…）川内をなんとか宥め、やっと彼女も心配そうな表情を浮かべながら執務室を後にしたのだ。

「……」か……

朝潮に教えてもらった部屋のドア前に辿り着く。入るのに少し躊躇してしまつたが、何しにここまで来たんだと思ひ直し、意を決してドアを開く。

川内から借りた懐中電灯（持参したやつは初日に紛失した）で部屋の隅々を照らす。何も置いていない殺風景な部屋だつた。しかし、よく目を凝らして床を見てみると部屋の隅の方に、一見すると床下収納かと思われるような小さな扉がついていた。扉を開けると錆び付いているのだろうか…鈍い金属音が鳴り響く。

「……」

中を照らしてみると、辛うじて階段のようなものが見えるが、正に一寸先は闇という感じで、慎重に足元を照らしながら降りなければ階段からの転落もあり得ない話ではない。

そして、鼻をつく異臭。古びた本から香る埃っぽい匂い、それだけなら全く気にはならないのだろうが、それに加えて気味の悪い生暖かさを感じるような血生臭さが地下牢

から漂ってくる。まだ地下牢へ続く階段にさえ足を踏み入れていないのに……だ。  
「行くか……」

慎重に慎重に。足を踏み外さないように階段を降りる。

漆黒の闇の中に、懐中電灯の明かりだけが揺れ動いている。だが、不思議なことには  
ばらく歩を進めると、ぼんやりとしたオレンジ色の灯りがポツポツと見え始めた。  
暖色と言えば文字通り暖かさを感じ、安心するような色合いなはずなのだが、そのオレ  
ンジの照明は怪しく、不安を煽るように光を放っている。僕が階段を降りきる頃にはそ  
の灯りが辺り一面を照らし、懐中電灯を使う必要がなくなった。だが、この鎮守府は確  
かまだ節電をしていたはずだ……。僕の着任（仮）により上層部からの援助もあるのだ  
ろうが、今のところは節電を敢行しているようだったのに……なんでこんなに灯りが？

「不安はあるけど……」

詳しいことはわからないが、この地下牢の全貌をこの目で確かめるべく、僕は震える  
足を動かした。

## 地下牢 2

思った以上に広い、それがこの地下牢を探索して最初に感じたことだ。ただ、その広さに圧倒されるだけで終わればよかった。

あまりにも直視し難い非道さ。この地下牢は、いかにこの鎮守府の艦娘たちが劣悪な環境に立たされていたかを僕に容赦なく突きつけてくる。

ぼんやりと橙色の光が灯る中、各牢を見回ったが、言葉が出てこなかった。

牢の数はざっと確認しただけでも数十あり、広さこそ違いはあれど、どれも入るのを躊躇わせる禍々しさを放っていた。

勇気を振り絞り、牢の中へ。もはや点かないであろう割れた電球が天井からぶら下がっている。それだけなら問題はない、普通だ。だが……それは別に縄が幾つもぶら下がっているのだ……そう簡単に断ち切れなさそうな太い縄。縄の先には輪っかが作られ、それが何に使われたのかは容易に想像がたった。

吐き気を催しつつも、次の牢へ向かう。気が進まない、もう帰るべきだ……そう考えて止まない頭を横に何度か振って、無理やり足を動かす。

「……の艦娘たちが受けた傷はもつと重い」

誰もいない牢で、静かに、自分に言い聞かせるように呟く。この牢には……壁に無数の鎖が打ち付けられていた。おそらく手枷、足枷だろう。錆び付いた鎖は捕らえた者が何があつてもこの牢から逃がさず、拘束された艦娘を地獄の底へ誘つたのだろうか……。よく壁を凝らして見れば爪で引つ搔いたであろう傷が幾つも刻み込まれている。さらにどす黒い「しね」という文字が呪詛の様に羅列されていて、僕の体中から気持ちの悪い汗が噴き出す。

この牢には、病院でお目にかかるような手術台が置かれているのだが、ひどく変色した拘束器具が病院のそれとは全く別物であることを表していた。古びた柵には怪しげな薬品が並べられ、床には注射器の様なものが散乱している。だが、僕の目を釘付けにしたのは、牢の隅にあつた小さな木製の机に山積みになっている幾つもの透明の瓶だ。その中には切り取られたであろう毛髪、しかもその色は実に様々で、黒色から赤、青、白……銀髪もあつた。

何の為に？理由は分からないが、その場から足早に立ち去るには十分なものだった。数多の牢を巡る内に僕は何も感じなくなつてしまつた。何も感じない。心が感じることを拒んでいるかのよう。早い話、疲れてしまつたんだ僕は。あまりの凄惨さ、残酷さ、無惨さ。もはや作業として足を動かさし、目で見るとその繰り返し。ロボットの様に感情を無くして、僕は地獄を巡つた。

少し牢とは雰囲気の違い場所を見つめる。テーブルと椅子があり、テレビがある。それだけならごく普通の居間だと思っただかもしれない。何本もの酒瓶が無造作に散らばり、壁一面に艦娘たちのあられもない姿を捉えた写真が貼られていなければ。

ここにきて久々に一つの感情が沸き起こる。憎い。前任が憎い。激しい憎悪が僕の心に溢れ、気がつくときい込んだ爪により掌から血が滴る。

この場所で、悲痛な顔をしている艦娘の裸体を写した写真を見ながら酒を飲んでいたのでろうか：下品な笑い声が幻聴だろうか、部屋中に響いている気がした。

「・・・」

自分のくたびれた革靴が左右で前後に入れ替わる様子を見ながら、僕は完全に沈黙を貫いていた。

故に気が付かなかった。

僕の伏した目が小さな頭を捉えた次の瞬間、僕の腹部に小さな衝撃が走り、僕は思わず尻餅をついた。

「???」  
「はわわわわわっ!?! なんなのですか!!?」

ぶつかった相手も尻餅をついたようだった。

「す、すまない! 余所見をしていた」

僕はその人物に駆け寄り、すぐに手を差し出した。

??? 「あ、ありがとうなのです！」

おそらく、艦娘だろうか……。白い制服を纏い、ニコツと笑うその娘は、パンパンと手でお尻を払うところらを見つめてきた。

??? 「こんなところに……びっくりしたのです！」

それはこちらも一緒だと言おうとした時、その娘の周りに紙が散らばっているのに気が付いた。

「これは君の?」

??? 「はわあああああつ!!? 大変なのです!?! 大事なもののに、やってしまったのですううう!!」

血相を変えてぶちまけた紙を集めるその娘。僕もとりあえず紙と一緒に集めることにした。

そして一通り集めた紙をその娘に渡す。

??? 「ありがとうなのです!! 助かったのです!!」

年端のいかない、いたいけな少女がする敬礼は少々不自然にも感じるが、僕は笑顔をかぼした。

「おつと……(´▽´)にもまだ一枚……」

僕はしゃがんでその紙を掴むと、再びその娘に渡そうと立ち上がる。

その娘の姿はどこにもなかった。

一瞬、ほんの一瞬目を離しただけなのに……彼女は足音無く姿を消した。夢ではないのかと自分の頬をつねる。

いや、つねるも何もその手には一枚の紙が握られているではないか。紙を見てみると、所々かすれているが文字が書かれていた。

『深海……と艦……の……体。まさに……叡知を……たこ……世紀の一……限りだ。艦娘の……と深海棲艦の獰猛……合わされ……に史上最強……兵器が出る。第一実験……薬を投与……娘たちも確かに強靱な装甲……凄まじい火力……誇ったが、その比ではない……。今や……副作用で錯乱する物体と化した奴らより、こいつらの方が何倍も活躍が見込める。』

破壊の神が……。正にその表現が適切だ。試しに薬を……。艦娘たちと深海……複合体を戦闘させたら、見事なまでに薬……。たちを海の藻屑に変えて……。ないか。しかも命乞いをする……。顔をなんの迷いも……。吹き飛ばす残忍さ。最強だ。

もはや不要……。薬漬けのゴミ共には、複合体のいい練習相手……。もらった。最後まで情けない叫び声をあげて沈んでいくゴミ共を恍惚の表情を浮かべ見ている複

合体たち。こいつらのみで………を組めば、神憑った力が……の手に入る』

訳のわからない文を目で追い、頭が痛くなった。

とりあえず、部屋に戻ろう。ここでは何も考えられない。

この文を読んでいる間、ずっと後ろから視線を感じていたが、もう正直どうでもいい。僕は紙を折ると、ポケットにしまいこみ、自室へ向かい歩きだした。

## 地下牢3

もう見慣れたこの空き部屋……今では僕の自室として使用しているその質素な部屋は、僕の疲れた体を優しく出迎え、そして僕はそのまま煎餅布団に倒れ込んだ。

疲れた。僕は瞳を閉じる。おそらくそのまま目を閉じていれば朝まで泥の様に眠っただろう。

コンコン。

時刻は大分遅いはず……。しかも僕がこの部屋に帰って間もなくしてのこの訪問、おそらく訪問者は僕の帰りを待っていたのだろうか。いや、もしくはわどこからかつけられていた？

どちらにせよ、このドアの向こうにいる者は得たいが知れず不気味。その一言に尽きた。

コンコン。再びノック音がこだまする。

僕は無線機を手に取り、ゆっくりとドアの方へ近づく。

深く息を吸い、ゆっくりと吐きだすと幾分か心が落ち着いていた。

「はい、どちら様ですか？」

「……」

返答はない。これはつまり訪問者が川内や陸奥たちではないことを裏付ける。心臓が激しく鼓動し始め、呼吸が早くなつたのが自分でも分かつた。

正体不明の何者かがたつた一枚のドアを隔ててそこにいる。

部屋の明かりを点け、無線機で助けを呼ぼうとする。だが、少し遅かつた。

「とおーう!!」

「とつつけいきい!!!」

二人の見知らぬ艦娘が部屋に飛び込んできたのだ。

「フッフッフ! やつと会えた!」

「よっ! 阿武隈! 握手して一!!!」

「もおく、おだてないでよ、鬼怒!!」

……阿武隈と鬼怒と言うらしい。

かなり面食らつたが、先程より不安は和らいでいた、というのも地下牢の圧倒的な絶望感に対してこの娘たちの感じは正反対のものであつたからだ。

「こんばんは、阿武隈に鬼怒。はじめましてだね?」

一度安心すると、再び眠気が僕を襲うがなんとか話す。

阿武隈「なっ!? なんて名前知ってるの??」

鬼怒「人間！どこで鬼怒たちのことを知った!？」

驚いた顔をして僕の顔を見つめる二人。

「いや、今自分達で呼びあつてたよね？」

阿武隈「んなつ!？」

鬼怒「なああああ!？」

「あの、それで何かようかい？」

正直、こんな風に艦娘の方から来てくれるのは嬉しいことだが、何しろあの地下牢に行ってきたばかりだ、しかも物凄く眠い。出来れば、早々に用件を済ませたかった。

阿武隈「むむむ…やるわね！」

鬼怒「くやしー」

「……」

阿武隈「……」

鬼怒「……」

「……」

阿武隈「……」

鬼怒「……」

「……えつーと」

阿武隈「人間かあ」

鬼怒「はあ」

先程のテンションとは違う二人に異様さを感じた僕は、次の言葉を紡ごとく口を開こうとする。すると、阿武隈は衣服を捲り胸部から腹部を晒す。鬼怒は鬼怒で衣服を脱ぐと背中を晒した。

「なっ!!?」

既視感の拭えないこの光景。咄嗟に目を瞑ろうとするが、ひどく冷たい声が発せられた。

阿武隈「ちゃんと見て？」

鬼怒「目を背けないでよ？」

その声の主たちの顔を見ると、目は怒りに満ち溢れており、僕が気圧されるのには十分すぎるものだった。

## 地下牢4

カーテンに遮られながらも、弱い光が部屋の中へ差し込まれる。そんな中、煎餅布団に大の字で寝ている人物は、眠い眼を擦りながら、大あくびをして上体を起こした。

「はあ」

起きて早々のため息。十分な睡眠は取れなかったようで、部屋の隅をしばらくボツと見つめているその姿は廃人の様であった。

トラウマになりそうな地下牢の全貌を目の当たりにし、そしてあの訪問。精神が崩壊しそうであった。

訪問者は言う、「私たちの姿を見ろ」と…。「人間が作り出した痛々しい姿」を見ろと…。

阿武隈「どう、この傷？ かつこいい？」

鬼怒「いいなく！ それに比べて鬼怒は…背中の傷は戦士の恥ってね!!」

「…」

絶句。彼女たちに言われるがまま、その晒け出された姿を見れば言葉など出てくるはずもなかった。

阿武隈の上半身には、胸部から腹部にかけて、大きな傷痕が幾つも刻み込まれていた。一方、鬼怒の場合は、火傷痕だろうか、その背中はひどく爛れている。

阿武隈「おっーと!?沈黙ですかあゝ!!」

鬼怒「あちゃー、鬼怒たち嫌われちゃった!」

口調こそ、ざつくばらんなもの、目は一切笑っておらず、僕の体を貫く鋭い視線が注がれている。

「…そ、その傷は…?」

絞り出すように口を開くが、もう端からその答えが分かっているような問いを投げ掛けてしまったことを後悔した。特に、その問いが人間からであれば、彼女たちは……。

阿武隈「ムフフゝ!?知りたいゝ??」

鬼怒「どうしよっかなゝ!!」

「……」

阿武隈「じゃあ特別に教えてあげるう!!この傷はね、あたしがどんなに被弾しても、無理やり出撃し続けた結果残ってしまったものでえーす!!」

鬼怒「おお!!さっすがゝ!よっ!阿武隈!!」

阿武隈「フフフ!そう言う鬼怒はゝ??」

鬼怒「えっへん!この爛れは砲撃を食らって、炎上した時に出来たものでえーす!!も

ちろん提督に言ったら、ぶん殴られましたあ!!マジパナイ!!」

「……」

ああ、もう前任：お前は人間じゃない。化物だ。

なぜ：なぜここまででの仕打ちが出来る…。正気の沙汰ではない。

「すまない……」

消え入るような声で謝る。

阿武隈「うへえ、謝らないでくださいよお!この傷は直そうと思えば直せるんです

からあく!!?ねえ、鬼怒?」

鬼怒「もつちろん!!」

「……」

阿武隈「……」

鬼怒「……」

沈黙。二人は僕の返答を待っているようだった。きっとその返事は地雷になる、しかしその応えを僕の口から言わなければ、この二人はずっと無言のまま僕を殺意に溢れた目で睨み続けるのだろう。故に言わなければならぬ。どんな結果になろうとも。

「……」

「……なんで、なんで直さないんだ?」

その応え待っていましたがとばかりに二人は僕に近づいてくる。そして、僕の目の前に立つと目を見開きながら僕に言い放った。

阿武隈&鬼怒「人間がしたことを忘れないため」

なんとか立ち上がる。今は本当にこの殺風景な部屋が僕の拠り所だ。

「とりあえず……やることはやらないとな」

僕は執務室から拝借したノートパソコンに電源を入れる。そして通販サイトにアクセスし、目当ての商品を購入した。

「費用は……鎮守府建て直しに必要と上層部に伝えるとして……。まずは……掃除からかな……」

巨大な十字架が僕の背中にくっついていいるのでは……と思うほど体が重い、まずは行動あるのみだ。

コンコン。ドアをノックする音。

思わず身構えてしまったが、その声を聞いて、体の緊張が解かれる。

川内「おはよう！昨日は大丈夫だった!？」

元氣よく入ってきたその姿。どれほど僕の心を救っただろうか。

「ああ！おはよう!!大丈夫さ!!」

僕は自分を鼓舞するように精一杯の声で川内に挨拶を返した。

## 地下牢5

川内「とりあえずお腹すいてるでしょ？どーぞ！」

そう言つて川内は、二つの塩むすびを僕に差し出す。

「ああ、ありがとう」

トイレに行つて顔を洗い幾分か目が覚めた僕は、受けとるや否やすぐにそれを頬張る。少し病んだ精神に川内が持つてきてくれたおにぎりの味が優しく染み渡つた気がした。

「ふうー、ありがとう川内！元氣出たよ」

川内「そ、それならよかつた／＼／＼」

「あ、そうだ、川内」

僕は顔を伏している川内に問い掛ける。

「掃除用具と工具を探しているんだけど、どこに行けば手に入れられるかな？」

川内「うーん、掃除用具なら私の部屋のやつを貸せるけど……工具かあ……」

川内は目を瞑り、必死で考えてくれているようだった。

川内「あ、工廠にならあるかも♪」

川内が閃いたという感じで微笑む。かわいい。

「ありがとう、それで申し訳ないんだが……その」

川内「わかってるよ！私を持つてくるから、ここで待ってて？」

そう言うが早いか川内は走って行ってしまった。

川内「おまたせ！」

川内は掃除用具と工具箱を持って、再びこの部屋に帰って来た。

「ありがとう、本当に助かるよ」

川内「もー、気にしないで？私、なんだって力になるよ？」

川内……。君ってやつは……。僕は嬉しさが込み上げてくる。

「感謝してもしきれないよ」

再びこの鎮守府が闇夜に包まれた時、僕は地下牢へと続く階段の前に佇んでいた。

装備は万端。無線機を首からぶら下げ、手にはそれぞれ掃除用具と工具箱を持つている。両手が塞がってしまったので、工具箱に入っていたガムテープで懐中電灯を肩に頑丈に貼り付けておいた。まるでどこかの捕食者の様だが気にしない。

「よしー」

自分を奮い立たせる様にそう呟くと、僕は階段をゆつくりと下り始める。

「・・・」

「・・・」

階段を下る足音がよく響く中、僕は違和感を感じ始めていた。

あれ？オレンジの照明は…？

昨夜、あれほど怪しく光っていた橙色は今夜に關しては一向に見られない。

もう大分下ったような気がするけど……。

そしてそのまま僕はそれを拝むことなく地下牢へと辿り着いてしまった。

「おかしいな…昨日はあんなに…」

僕は掃除用具と工具箱を置いて、肩に取り付けた懐中電灯を取り外す。そして、辺りを照らすと、どうやら照明自体が消えてしまったという事実に気が付いた。

昨夜の不気味な発光体は全て消失し、今ある光はこの懐中電灯の頼りない光だけである。あまりの変貌ぶりに僕は驚きを隠せなかった。

そして、薄暗い。とにかく薄暗く、闇に包まれているこの地下牢は昨夜とはまた違った意味で恐ろしさを孕んでいる。

「これじゃあ、作業が出来ない……」

本来、今夜はこの地下牢から拘束器具や例の写真などを処分するつもりだった。

：実を言うと、今日は川内たちが地下牢の掃除を手伝うと言ってくれていたのだが、さすがに「じゃあお願い」とは言えなかった。

仲間の裸体を撮った写真を川内が見たらどう思うだろう？ 仲間を縛り付けた拘束器具を神通と那珂が見たらどう思うだろう？

数多の艦娘を虐げてきた証拠品が溢れる場所に、川内たちを易々と連れてこられるだろうか？ そんなのあまりに無慈悲だ。

だから、手伝ってもらうにしても、幾らかは前もって僕だけで処分する必要があるのだ。

「あー、もうこうなったらヤケだ！」

僕はとりあえず片っ端から牢を掃除することにした。

天井からぶら下がる縄を切り取り、写真を外し、散乱した注射器や酒瓶を集めるなど、とにかく各牢をしらみ潰しに掃除していった。

牢の半分近くを掃除し終わる頃には、今まで夜だけ作業していたのを、川内から朝食

をもらつたらすぐに地下牢へと足を運び、片付けに入るといふ風に変え、一日でも早くこの地下牢を綺麗にしようとなつめた。

そして、ようやく。

僕は川内たちを地下牢へと案内出来るくらい地下牢から前任の遺物を消し去ることが出来たのだ。

## 地下牢6

崩れかかったと言っても過言ではない鎮守府の門の前。

そこに腕を組んだ一人の男が、まだかまだかと言わんばかりに何かを待ち受けていた。

そしてしばらく待っていると、待望のものがエンジン音を轟かせながら、門の前にやって来た。

「いやー、お待たせしました！司令官殿」

「全然！朝早くからご苦勞様！」

僕は以前ネット通販で購入したものが送られてくるこの日を待ち望んでいた。

と言っても、通販会社がそのままこの鎮守府にまで届けてくれるわけではない、いや普通の家庭なら届けてくれるのだけれど：場所が場所ということもあって、必ず軍の検閲が入る。

そして、軍の検閲所に送られ、特に問題がないと判断されれば、軍の配送機関が鎮守府に届けるという仕組みになっているのだ。

「まさか、司令官殿が直々に受け取りに来てくださるとは：驚いております」

「いや、うん、まあその重要なものだからね…」

僕も本当だったら頼みたいですよ、ええ。

「とりあえず、お荷物をおろしますね」

「ああ、手伝うよ」

そう言つて配送トラックから荷物をおろし始める。結構買ひ込んだからな…何回かに分けて部屋まで運ぶか。その間に艦娘にバレなきやいいけど。

ふと配送トラックを見ると、荷台の光輝くパネルのところPMTと書かれている。

PMT…軍の配送機関のことだが、とにかく謎が多い。というのは、元々あつた配送機関を潰して新設されまだ間もないからなのだが…。しかし、軍の創設以来ずっと一緒によつてきた前配送機関を一新してしまつたのもよく分からない。まあ上の考えることは理解出来るわけないか。

「これで全部ですね…こちらにサインをお願いします」

「……はいっどー！」

「ありがとうございます。それにしても……こちらのお荷物全てお一人で運ぶのですか？」

本当に僕一人で運ぶとは思つていなかったようで、不安そうな顔でこちらを見ている配送のお兄さん。

……ッ！なんかそのつぶらな瞳にときめきそうになってしまった!? おい!? 僕はホモじゃないぞ!?

「う、うん。とりあえず、一人で運ぶ予定だよ。あ、でもこんな時の為に台車を買つたんだ」

そう言つて台車を探す。ええつと…。

「こちらではありませんか?」

「ああ、それそれ!」

「用意がいいんですね」

クスリと笑うお兄さん。惚れてまうやろー!!! いやだから僕はホモじゃないや

というかこのお兄さんが美男子過ぎるんだろ、端整すぎるその顔立ち…羨ましいなあ。うん、可愛いです、ごめんなさい。

男の娘つてこんな感じなんだろうかと思つていると、声を掛けられる。

「もしよろしければ一緒にお運びしますよ?」

「いや、本当にありがとう」

「いえ、お役に立てたのならなによりです！」

結局、部屋まで運んでもらったのだけど、お陰で早く終わった。

今は鎮守府の門まで彼を送り届けているところだ。

「…静かですね」

「あー、まだ寝てるんだよ、多分」

「フフ、司令官殿は面白い方ですね」

「そ、そう？アハハハハハ」

僕の不自然な笑い。それに対して完璧と言える彼の笑み。

ちよつと自室でアイステイーでもご馳走しようかと思っただけど、僕の理性が最後のと

ころで踏ん張った。

「それじゃ、ありがとう」

「はい！またよろしくお願ひします！」

僕は配送トラックが見えなくなるまで、門の前に立っていた。

## 地下牢 7

川内 「なんか辛気臭いね…」

「ああ、本当にそう思うよ」

深夜、鎮守府の地下でうごめく二つの淡い影…僕と川内はお互いに懐中電灯を携え、地下牢へやってきた。

僕はもうこの地下牢も見慣れたものだが、川内は初めてここに来たのだ、驚いたような、嫌なものでも見るかのような顔をしている。

地下牢は相変わらず薄暗い。とは言え、大分掃除したお陰で川内たちを呼ぶことも可能になった、これからやる作業はどうしても人手がいる。だから、これは大きく前進したと考えていいだろう。

それに、この薄暗さの対策もちゃんと考えてきたのだ。

「川内、これ」

僕は川内に電球を差し出す。渡された本人は？な顔をしているので、僕は近くの牢へ入り、彼女を手招きした。

「川内、ここを照らしといてくれ。……これをこうやって…と、出来た！」

電球を付けるや否や、ピカツと眩い光が牢を明るく照らす。ふう、とりあえず点いてよかつた。

初めてここに来た時に見た例の発光体は消失してしまつた……だけど、各牢の中には大体一つ裸電球が吊るされていて、それを点けられないかと思つてたんだ。

作業中に付けられもつと早く掃除が終つたかもしれないんだけど、思つたより軍の検閲に時間が掛かつてしまつた。

川内「おおく!!!」

川内が目を細目ながら感心した様な声をあげる。

「とりあえず、手分けして電球をつけて回ろう……はい、これ川内の」

僕は川内に幾つか電球を渡す。川内はそれを受け取るとニカツと笑つて走つていつてしまつた。

……夜になると川内は元気になるらしい。

「おお！見違えるな〜!!!」

川内「うん！牢を明るくしていくの、なんだかゲームみたいで楽しかつた！」

可愛いらしい笑みを浮かべている川内。とりあえず、川内たち艦娘のトラウマを引き

起こしそうな物は大方排除したからな……とは言え、慎重にいかないと!

だが、やはり明るくするというのはいいことだな。心なしか、辛気臭さが抜けたような気がする。まあ匂いはまだするかな? とりあえず、据え置き型の芳香剤を各牢に置いた。

「さて、次は…」

ふと川内を見ると、まるで遠足前の子供のような顔をしている。あの、楽しんでます?

「コホン、次はこのマットを牢に敷き詰めていこうか」

僕は正方形のマットを取り出す。所謂、タイルカーペットだ。色は肌色というかクリムム色というか、なんとなく落ち着けそうという理由で購入した。手触りはまあまあ柔らかいという感じで、裸足でこの上を歩けば、気持ちが良いんだよね?」

川内「えつーと、牢の隅から敷き詰めていけばいいんだよね?」  
「そつー! 牢の数も多いから骨が折れると思うけど…」

川内「よーし! じゃあ、どっちが多くマットを敷けるか勝負ね!!!」

僕の言葉を遮るように、川内の嬉々とした声が地下牢に響き渡る。そして言うが早いか川内は再び走って行ってしまふ。元氣よすぎじゃね? まあなによりだけどさ…。

結局、ほとんどの牢は川内がやってくれた。いやはや、艦娘恐るべし。

川内「へっへーん！私の勝ちだね♪」

勝ち誇ったような顔をしているけど、僕的にはあんまり疲労しなくて大分楽させてもらったんだけどさ。

「おうおう…川内は強いな〜」

頭をなでなでしてみる。「ひやつ〜」と小さく悲鳴をあげたけど、まさか痴漢で訴えられないよな…。ちよつと、怖くなったので、すぐに手を引く。

俯いてしまったままの川内。どうしよう…。

「そ、そうだ…これ要る？」

苦し紛れに取り出したのは、飴玉。リンゴ、バナナ、桃、メロン、それとハツカ味。疲労を癒そうと購入したのだが、ポケットに入っていたので少し生暖かい（もちろん包装されてはいるが）

川内「むー」

少し顔をあげ、僕の掌にある飴玉を見定めているようだ。

川内「じゃあ、これ！」

川内はそう言うと、リンゴ味の飴玉を手を取った。そしてすぐに口に入れる。

川内「おいしー♪♪」

機嫌を直してくれたかな？

川内「次は何するのー?」

「次は壁紙を貼ろうと思ってるんだけど…今日はもう遅いからまた明日」

川内「えー!!?夜はまだこれからだよー!」

むくれる川内。やっぱ楽しくなってきたのね…。

「明日も手伝ってくれる?」

川内「もっちろん!」

笑顔で快諾する川内に心が洗われた気がした。

………その後しばらく川内は今敷き詰めたばかりのマットの上で寝転がって遊んでいた。

翌日。

本日は川内が非番ということもあって、朝から作業をすることにした。今回は神通と那珂も一緒だ。

うーん、昨日の夜と違って川内が眠そうだ…。うつらうつらとしている。

「川内、昨日は遅くまで頑張ってくれたし今日はいいよ?」

川内「う~~~~!!大丈夫う~」

眠い目を擦りながら、これまた眠そうな声で返事をする川内。

「川内。ちよつと床にゴロンとして?」

川内「ええ〜、なんでえ〜」

「ちよつと、これからの作業に必要なことなんだ。頼むよ」

川内「別にいいけどさ…」

そう言つて床に横になる川内。神通と那珂は何事かを見守つていたが、すぐにその意図が分かつたようだった。

川内「ZZZ…」

床に転がつて、数秒。川内は夢の中へ旅立つてしまった。

とりあえず、上着を川内に掛ける。

さてと……………、神通と那珂を見ると、やっぱりまだ警戒心が抜けたわけではないうで、じつと僕の顔を見ている。

「えつと、来てくれてありがとう。とりあえず、川内は昨日も手伝つてくれたから寝てもらうとして、二人には壁紙を貼つて欲しいんだ!頼みます!」

そう言つて頭を下げる。

神通 「まあ、手伝うと姉さんに約束しましたから…」

那珂 「アイドルに手伝ってもらうなんてこの幸せ者め〜!」

反応に差はあれど、どうやら手伝ってくれるらしい。

「ありがとう!」

神通 「そこ!しっかり持つてください!!那珂ちゃんは下の方!剥がれてますよ!!」

那珂 「うへえ〜」

「オオン、アオン」

うん、壁紙貼りも順調だ。すごい激を飛ばされながらだけど。

神通 「ちゃんと手で伸ばさないと!!シワが出来てます!!」

「あ、あの〜。とりあえず、貼ればいいかな〜と…」

神通 「何言ってるんですか!!?やるからにはしっかりやらないと!!」

那珂 「那珂ちゃん疲れた〜!休憩〜!!」

神通「後もう少しです！これだけやって、小休止しましょう!!!」

神通「……鬼教官かな？」

神通「手が止まっていますよ!!しっかりと伸ばして!」

「は、はい〜!!」

僕と那珂はこうして神通の鬼指導の元、壁紙貼りをやり続けることとなった。

熱が入ってしまったようで、神通は一つ終わらせると僕たちを鼓舞し、結局最後の牢の壁を貼り終わるまで休ませてはくれなかった。

神通「頑張りましたね!」

「……」

那珂「……」

一人、清々しい顔で言う神通。僕と那珂は沈黙。そして、スヤスヤと寝息を立てている川内。

多分、今だけは那珂といい酒が飲めそうな気がする。那珂飲めるかしらんけど。

だがとりあえず、地下牢の雰囲気は十分変わった。

仕上げに各電球にスイッチ付きの傘を付けといたのだが、その暖かい光に照らされ

る、お洒落な壁紙、そして柔らかな床マット。

後はちよつとしたインテリアを置いたりすればより良くなるかな？

まあ、なにはともあれ。ひとまず、ここまで地下牢を変えられたのは、川内たちの協力の賜物だ。

川内は寝ているので、神通と那珂に改めて礼を言う。

神通「いえ、姉さんのためですし…」

那珂「ふうふう疲れたあ〜」

神通は伏し目がちに、那珂はそもそも僕の声が聞こえていないくらい疲れていたように、違った態度を見せている。

川内「ZZZ…」

そろそろ起こすか…。

川内「いやー、ごめんね？ぐっすり寝ちやったよ!!」

神通「姉さん…」

那珂「川内ちゃんが言い出しつべでしょー!!」

「いや、川内は昨日遅くまで頑張ってくれたしき……神通と那珂も本当にご苦労様！」  
とりあえず、労を労うには心許ないけど、ジューズを三人にご馳走する。美味しそうに飲んでくれたのが幸いか。

そして、地下牢の今後の運用について考える。まあ、まずは長門と陸奥に相談だな。僕の手には余るし。

地下牢を後にした僕たち。川内たちはこの後風呂に入るようだ。僕も入りたいたのだが、今のこの時間だと入るのは無理だろう……。いつも真夜中にこそこそと入っているんだから……。

ひとまず、川内たちと別れ、僕は執務室へと行くことにした。

## ヘル・アンカーズの尖兵

吹雪「はあ、あの地下牢をここまで変えるとは…やるじゃないですか？」

朝潮「・・・」

「あ、ありがとう…」

僕は川内たちと別れた後、すぐに執務室を訪ねた。そして長門と陸奥に地下牢のことを話したのだが、意外にも興味が無いようで、僕の隠れ家にでもしたらどうかと冗談を言われるくらいだった。

ちよつとガツクリした僕を見て、長門と陸奥が今度見に行くときを遣つてくれた様で、少し救われたが。

それで、地下牢にどんなインテリアを置こうか考えるために、再び戻ってきたわけだけど…。

何故か地下牢へ降りると、吹雪が仁王立ちし、朝潮がその後ろに隠れるようにして待ち構えていた。

吹雪「へええ、この電球、可愛らしいじゃないですか。薄暗さも解消されましたし…凄いいよね、朝潮ちゃん？」

朝潮「そ、そうですね…」

吹雪「いや、人間もやれば出来るんですねー！あー、どうです？ここで仲直りの握手でもしませんか？」

少々、吹雪の嫌味な言い方が鼻についたが、仲直りできるのなら…と思い、吹雪に近づく。

そして、手を差し出し、「よろしく」と言おうとした瞬間、腹部を強烈な痛みが襲った。「うぐっ！」

腹を押さえ、呻く事しか出来ない。そしてつい、しやがみこんでしまったのだが、その時に吹雪に髪を掴まれ横に引き倒されてしまった。そこからはただ吹雪の足に踏みつけられ続けるのみ…成す術などなかった。

ふと吹雪を見ると、顔は紅潮し、満面の笑みを浮かべている。そして、「死ぬ人間！」と繰り返し叫ぶその姿は、以前の雲龍や阿武隈、鬼怒とはまた違った恐怖を僕に呼び起こした。

「や、やめてくれ…」

僕は吹雪に懇願するが、彼女は完全にハイになっているようだ。彼女の加虐心は今、最高潮なのだろう。時折、ヒステリックに笑う吹雪はなんとも形容し難い不気味さを放っていた。

朝潮「ふ、吹雪ちゃん…も、もうやめましよう?」

朝潮の救いの声。だがその声はあまりに弱々しく、か細いもので吹雪の耳に届くはずもなかった。

アカン、このままじゃ死ぬ…。

そう思った僕は、懸命に吹雪の猛攻に耐えながら頭をフル回転させる。と言つても、痛みが先行して妙案は浮かばないのだが、とにかく考えられ得る最善策を必死で模索した。

吹雪「あはっ!!無様ですね〜!!人間!!私たちを散々こけにした罰です!!」

吹雪「早く死んでくださいよお!!」

「いっ!!いだっ!!?痛いって、やめろ!!」

クツソ〜!どうしたらいい?どうしたら助かる??

考えても考えても打開策は見つからない。

…それにしても、ここまで痛め付けられると、さすがにムカついてきた!いくらなんでも、これは酷い。

もちろん、吹雪がこうなったのは人間のせいだ、それは人間である僕が責任を持つしかない…、ただだからって暴力を看過していいわけではないはずだ…!

目には目を、歯には歯を…だ!

「おい、コラー！吹雪！」

自分のイメージでは結構凄んで言ったつもりだったのだが、実際に口に出すとあまりに迫力に欠けていた。

だが、吹雪は人間に楯突かれたのがよっぽど腹立たしかった様で、さらに力を込め僕を踏みつける。

やっぱ力が強い人を怒らせちゃダメですね。

吹雪「人間ごときが私の名前を気安く呼ぶな！本当に不愉快！不愉快です!!!」

吹雪「あー！なんでこの鎮守府にいるんですか!!? さっさと消えてくださいよお??」

朝潮「・・・」

最早、朝潮は沈黙。ただただ立ち尽くすのみとなってしまう。

いよいよヤバイ…と思った時、僕に一つだけ考えが浮かんだ。あ、これ…いけるんじゃない?

とりあえず、やれるだけやってみるか…どちらにせよこのままじゃ無事では済まないし…。

僕は大きな声で叫んだ。

「川内ー！いいところに来てくれた！助けてくれ!!」

その声を聞いた吹雪、朝潮は地下牢の階段付近を驚いたように見る。その瞬間、その

時にあの吹雪の猛攻が一瞬止んだのだ。これがチャンスと言わずしてなんと言う？

僕の叫びがハツタリと気付いた吹雪がこちらを見る。

そして、今まで以上にその顔は赤くなり、まるでマグマのようだ…だが、それは怒りや興奮によるものではない。

吹雪「なっ！なっ…!!？」

赤面し、ブルブルと震える吹雪。

「黒パンか…」

僕はそんな吹雪をよそに冷静に呟いてしまった。まだまだ幼い感じだと思つてたけど、彼女が着用しているそれを見る限り、意外とおませさんなのね…というのが僕の感想だ。

今の状況はというと、僕のハツタリで隙が生まれ、そこで僕は足で吹雪のスカートを捲るという大変申し訳ないことをしたのだが、これは仕方がない、作戦の内だ（言い訳）だがきつと、何が起きたかを吹雪が理解したら、おそらく僕から離れようとするはずだ…！下手したらさらに逆上して本当に殺されかねないけど…もうこれは賭けだ。

しかし、幸運の女神は僕に微笑んだ。狙い通り、吹雪が僕から距離を取り、スカートを押さえている。だが、やはり艦娘だ。戦場を駆け抜ける軍人ゆえ、すぐに僕から離れたことがマズイことだと悟つたらしい…物凄いスピードで僕に突っ込んでくる。

だが、その吹雪が離れたほんの一瞬間は、僕が立ち上がるのには十分だった。

ここでもし一回でも床に伏せられたら、それこそ僕の命運は尽きるだろう。つまり、僕は文字通り倒されてはいけないのだ。痛みを堪え、僕も全力で吹雪の方へ走る。

鈍い音……激しく肉と肉がぶつかる音が聞こえる。

確かに、僕は武闘派ではないし、相手は深海棲艦を駆逐出来るほどの軍人だ。だが、体格差で言えば、まだ僕の方が上回っている。

全力疾走の体当たり勝負で、その体格差は僕に有利に働いた。

吹雪「うわっ！」

吹雪が尻餅をつく。一方、僕もよろめくがなんとか持ち直し、階段の方へ走る。今だ！今しか逃げるチャンスはない！

なんとか階段のところへ辿り着く。後はここを登れば……！

吹雪「……」

ふいに襟を掴まれ、振り向くと、そこには無言でこちらを睨み付ける吹雪がいた。いや、追い付くの早ッ！

さすがに脚力は負けたか……じゃなくてっ！

なんとか吹雪を振り払おうと、暴れるがなかなか脱け出せない。

相変わらず、無言の吹雪。正直、さつきよりも威圧感を感じる。

「は、離してくれ!!」

声が上がする。あまりの緊迫さに口の中が乾いて喋りにくい。

吹雪の襟を掴む手に力がこもる。ヤバイ：倒されたら一貫の終わりだ。ヒエー。

クツソ！こうなったら！僕は上着のボタンを手早く外す。そしてそのまま脱皮するようにそれを脱ぎ去った。

ふいに拮抗していた力（吹雪の方へとジリジリ引つ張られてはいたが）が解かれ、吹雪は僕の上着をその手に握りながら、後方へよろめく。

反対に僕は前方へと駆け出し、とにかく階段を死ぬ気で登った。  
そして…。

小さな扉を勢いよく開けると、すぐに自室へ向かう

…はずだった。

目の前に隻眼の女の子がいなければ。

## ヘル・アンカーズの尖兵2

吹雪「まあ万が一にもないと思いますが、もし人間がこの扉を開けて逃げようとしたら止めてくださいね？まあ絶対ないと思いますけどね！」

??? 「んー、わかったよ…」

朝潮「本当にやるんですか？阿武隈さん達に聞いてからの方が…」

吹雪「わざわざ阿武隈さん達に報告しなくてもいいよ！むしろ人間をとっちめるんだから、褒められるんじゃないかな？」

朝潮「・・・」

吹雪「朝潮ちゃんはなにもしなくていいよ？私が人間なんかコテンパンにしちゃうからさ」

??? 「なんでもいいから、早く終わらせてきてね…」

吹雪「はい！じゃあ行こっか、朝潮ちゃん！」

朝潮「はい…」

??? 「あー、眠いなあ〜」

目の前にいる艦娘は、静かに目を閉じ、ドア横の壁に寄り掛かるようにして立っている。まるで誰もこの部屋から出さないとでも言わんばかりに。

前門の虎、後門の狼。

：名前は分からないが、おそらく吹雪たちの協力者だろう。焦る気持ちを押さえ、なんとかこの場から上手く逃げだせないものかと頭を捻るが、時間はあまり無いのが事実だ。

今にも吹雪が階段を上って、僕を始末しに来る。かと言って目の前の艦娘は僕を易々と通してくれるだろうか？

伸びた前髪が片方の目を隠し、凜とした表情を浮かべながら佇む姿はまさに熟練の兵士。全く隙を見せていなかった。

しかしもう覚悟を決めないといけないらしい。地下から物凄い勢いで追ってくる狼に食われるよりは、目の前の虎の尾を踏む方がまだいいだろうか？ 隻眼が吹雪より狂暴だったら、もう終わりだが：まあもう一か八かだ。

先手必勝。僕は全力疾走でドアを開け、走り去ることに全てを賭けた。

息を整え、いざ突撃！

元々なかった隻眼との距離、それはほんの一瞬で詰まり、正にその横を駆け抜けようとした、その時だった。

??? 「ZZZ…」

は？

吹雪 「あれ!? 人間は!? どこいったんですか!？」

??? 「ZZZ…」

吹雪 「加古さん!!!」

加古 「んっくく!! ふわあ、よく寝た…」

吹雪 「人間は!? 人間はどうしたんですか!？」

加古 「？」

朝潮 「・・・」

私は吹雪ちゃんの人間に対する執着が少し怖いと思った。

もちろん人間を擁護するわけではない。だけど、力で屈服させるやり方はどうにも腑

に落ちないところがまだ私の中にある。

ヘル・アンカーズは阿武隈さん、鬼怒さん、そして雲龍さんを祖に誕生した謂わばレジスタンスの様なもので、そこに私を含めた有志のメンバーが加わって現在に至るわけだけど、実を言うと本格的にヘル・アンカーズが動き始めたのはごく最近なのだ。前司令官はヘル・アンカーズが結成されてからまもなくして姿を消してしまったので、手を下すことは叶わなかった。

そして、あの人がこの鎮守府にいと知って、私たちは彼を鎮守府から追い払おうとした。

……ただあの人が私を優しく見つめながら話してくれたこと、そして吹雪ちゃんが実際にあの人を暴行しているのを見て、私は何かとんでもない過ちを犯しているのではないかと思いはじめていた。

しかし、私は無力だ。吹雪ちゃんを制止することも出来ず、ただあの人がやられる姿を傍観していたのだから。

吹雪「朝潮ちゃん！早く探しに行こう！？まだ遠くへは行ってないだろうし」

朝潮「えっ?! あっ…はい」

加古「あたしも探すよ」

吹雪「お願いします！」

私は大きな罪悪感を感じながらも、吹雪ちゃんに急かされるままあの人の捜索を開始した。

## ヘル・アンカーズの尖兵3

朝潮「満潮!?霞!?どうしたのその傷!!?」

私が妹たちに問い掛けると、妹たちはいつも決まってぶつきらぼうに「大丈夫」とだけ言う。無論、大丈夫なはずはない。頬が赤く腫れ、瞳にうつすらと涙を浮かべながらも私の前で気丈に振る舞う健気な妹たち。そんな姿を見て、何と声を掛けたらよいか分からず、私はただその場に立ち尽くした。

朝潮「少しは何か食べないと元気が出ませんよ?」

任務から帰投して直ぐに部屋に戻ってきたのだろうか、見るに耐えない生傷を体の至るところにつくった霰が自室の布団に横になっていた。何か欲しいものはないかと問うが、「要らない…」と小さなで返事をする。霰は眠ってしまった。貧相な布団に体を横たえ、息をとる私の大切な妹。体が冷えぬように布団を掛けてやるが、残酷なものでまた直ぐに出撃命令が掛かる。「いつてきます…」とだけ言うと、霰はその小さな体を再び戦場へさらした。

朝潮「大潮！荒潮！止めなさい！！」

私が部屋に戻ると、大潮と荒潮が掴み合っていた。なんとか間に割って入るが、両者とも引く気がないようでお互いに激しく罵りあっている。その後、二人を他の妹たちと協力して引き離し、揉めた理由を聞いてみたが、どちらも「姉さんには関係ない！」としか答えず、埒があかなかつた。

大潮や荒潮に限った話ではない。ほぼ毎日妹たちの怒号が昼夜を問わず、部屋に響く。顔を合わせれば、口から飛び出る刺のある言葉：仲睦まじい姉妹関係など既に破綻していた。

きつと度重なる出撃、振るわれる暴力に妹たちは限界だったのだろう。

「お前の妹共は使えないやつばかりだな」

そう言われて、なにも言い返せずただ頭を下げる無能で頼りない姉。

私ももう限界だった。

朝潮「・・・」

私は吹雪ちゃんや加古さんと手分けして、あの人を探している。

・・・あの方はなぜここまで出来たのだろうか。

私は疑問に思った。なぜ敵視されることはあれど、歓迎されることのない相手にここまで向き合い、行動出来るのかと。なぜそんな意味のないことを…。

だが、それは誤りだった。

長門さんや陸奥さん、そして川内さんたちの変わり様、それこそが正にあの人が出した結果だろう。

地下牢へ初めて行ったが、噂に聞いていた雰囲気とは全然違う印象を受けた。それはあの方が作ったものだと言雪ちゃんは言う。そして、「こんな紛い物！」と彼女は言うが、私は凄いと思ってしまうていた。

私とは大違いだ。何も出来ず、ただいるだけの私とは…。

朝潮「はあ、戻ってきてしまいました…」

私は再び地下牢へ降り立つ。

ここならあの人と会うことはないだろう…とりあえず今日だけは。

朝潮「私って何の為にいるんでしょうか？」

気付くと私は涙を溢していた。そして、止めようにも頬を伝う涙は次から次へと流れ出てくる。

終いには声をあげて泣いてしまった。

ここなら聞こえないだろう。愚かな私の声なんて。

だから、せめて今だけ…。

地下牢に惜しげなく泣く声が響き渡った。

## ヘル・アンカーズの尖兵4

灯台もと暗し…という言葉があるが、まさか追跡者は逃亡者が一度逃げた場所に舞い戻ってくるとは夢にも思わないだろう。

僕は吹雪たちが部屋から出るのを見計らって、再び地下牢へ降り立った。まず自室や執務室は絶対に吹雪たちが来るだろうし、かと言って鎮守府を逃げ回り続ければ、別の艦娘に見られてしまう可能性がある。

「本格的に僕の隠れ家にでもするか…」

長門たちの言葉を思い出し、少し笑みがこぼれる。だが、吹雪が今にも僕を捕らえようと躍起になっている姿を想像すれば、すぐにその笑みが消えたのは言うまでもない。

廊下の陰から彼女たちが部屋を出るのを待っていたが、もはや吹雪は筆舌し難いほどの殺意を僕に抱いたのは間違いないだろう。逃げるためとは言え、火に油を注ぐようなことをしたのだから。

そして、あの隻眼。あれはもうよく分からない。いつかの川内の様に眠気眼を擦りながら歩いていったが…果たして彼女は何なのだろうか。

朝潮は…、これまたよく分からない表情を浮かべていたな。敵意がある感じでもない

し……。うーん。

そんなことを考えながら、とりあえず階段から少し離れた牢へ移動し、ポケットに入っていた飴玉をなめる。

疲れた体に甘味が染み渡る。

さて、今考えるべきはどうやって川内たちと合流するかだな。今はきつと風呂に入っているだろう。

川内がお風呂……。か。

なんだか体が熱くなってきた。いや！いかんいかん！あんなに尽くしてくれた川内を、その……。うん。

首を左右に乱暴に振る。そしてもう一度、どうこの窮地を抜け出そうか考え始めた時、不意に誰かの声が聞こえてきた。

息を殺す。

まさか来ないだろうという読みは見事に外れたわけだが、ここで見つかるわけにはいかない。細心の注意を払いながら、牢から少し顔を出して、声のする方を注視する。

だが、どうやら様子がおかしい。声と言っても泣き声のようだ。しかも、その声はどんどん大きくなっていく、号泣と言ってもいい。

怪しい、罠かもしれない。それが率直に思ったことだ。

でも……泣く必要あるのか？泣いて僕をおびき寄せているのか？だとしたら僕がここにいると分かっている？いや、それならわざわざそんな回りくどいやり方しない？

次々に浮かぶ疑心を振り払うかのように僕は声のする方へ歩み寄る。

本当なら無視してやり過ぎるのがベストなのだろうが、仮に誰かが傷付いて泣いているのであれば一大事だ。

慎重に慎重に近づいていく。

そして、泣いている人物の姿を目に捉えた時、しまったと思つた。

何故なら泣いていたのは朝潮だったからだ。やっぱり罫か？そう思い、辺りを見回すが、吹雪や隻眼がいるような気配はない。

もう一度朝潮を見る。大きな泣き声をあげて、溢れてくる涙を懸命に拭っている様だったが、それでもポタポタと床に涙が落ちてしている様だった。

さすがに演技には見えない。

かと言って、怪我をしているようでも、どこかが痛い様子でもない。一体朝潮は何故泣いているのだろうか？

声は……掛けられなかった。

なんと言葉が掛けられよいか、僕には分からなかったのが最大の理由だ。また泣いている原因も分からない上、朝潮が教えてくれる可能性も低い。無理に話し掛けるのは

愚策だと思った。

本当は声を：一言「大丈夫？」とだけでも掛けられればいいのだろうけど：僕にそこまでの度胸はなかった。

それからしばらく朝潮が泣き喚く様子を無力感に苛まれながら見ていたが、一頻り泣いたのだろうか、赤く腫れた目を擦り、階段の方へ歩いて行った。

……。

一体あれからどれ程時間が経っただろうか。結局、吹雪や隻眼が地下牢に戻ってくることはなかったが、朝潮のことが気掛かりで落ち着かない。

そこで自室に戻って、朝潮に関する報告を見たいのだが、まだ油断ならず地下牢から出られないのが現状だ。

非常に歯がゆい。こんな時に無線機があれば：とどれ程思ったか。

すると誰かが階段を降りてくる音がした、しかも会話をしているようで一人ではない様だ。川内たち？いや、吹雪たちか？階段から少し離れた牢へ身を潜め、様子を伺う。

「ほお、こんなに広がったとはな：」

「そうね：あら、この壁紙かわいい」

「あんまりはしやぐなよ？陸奥」

陸奥「そういう長門だって、本当はこの壁紙かわいいと思ってるんでしょ？」

長門 「フフ、まあな」

どうやら助かつたらしい。

「長門！陸奥！」

僕が大きな声で名前を呼びながら駆け寄ったので、長門も陸奥も一瞬身構えた様だったが、僕と分かるのと優しい笑顔を見せてくれた。

陸奥 「凄いわね、驚いたわ」

「ありがとう！」

長門 「まだ何かしていたのか？」

「あー、まあそうね……」

陸奥 「あまり根を詰めすぎると体に毒よ？」

長門 「そうだな……ちゃんと休んでいるのか？」

「もちろん！川内たちも手伝ってくれているしね。大丈夫さ。それよりも……」

陸奥 「それよりも？」

「執務室に誰か来なかった？」

僕は恐る恐る尋ねる。

長門 「誰も来ていなかったと思うが……」

陸奥 「もう！長門は海図ばっか見ているから気づかないだけよ！えーつと、確か帰投

の報告に何人か来ていたわね」

「そ、そうか……。あの……なんか誰かを探している様子の娘は来ていなかった？」

陸奥「んー、そうね……。特には……。あ、そう言えば」

思い当たる娘がいたらしい。

陸奥「吹雪が執務室を少し見たいと言ってウロウロしていたわね」

あの黒パンめ……

「ありがとう！」

陸奥「……あなた、まさか駆逐艦の娘に手を出したわけじゃないわよね？」

ちよつと目付きが怖いですよ、陸奥さん。まあ、ここは正直に話しとくか、味方は多い方がいい。

僕は雲龍や吹雪に襲われたこと、阿武隈たちの訪問を二人に話すことにした。

長門も陸奥も真剣に僕の話聞いてくれていた。

長門「そうか……。それで貴方はどうするんだ？」

陸奥「……」

「もちろん、仲良くなれるなら仲良くする！どんなに時間がかかってもね！」

長門も陸奥も少々驚いた顔をしていたが、お互いに顔を見合わせると少し笑って、再び穏やかな顔つきで僕の顔を見る。

長門「そこまでして提督になりたいのか…それともただのお人好しなのか…」  
「まあどつちもだよ」

僕も少しおどけて言ってみる。

陸奥「ここまでお人好しだと、さすがに愚かに思えてくるわ」

口ではそう言う陸奥も口角をあげ、小さく笑っている。

陸奥「…まあ、貴方が変なことをしない限りは私も手を出さないわ」

ああ、これ吹雪のパンツのことも言つとくか…。

陸奥「…」

長門「…」

無言で睨む二人。以前の敵意は感じられないが、ちよつと軽蔑されたかも、やめてよー。

陸奥「気を付けなさいよ、駆逐艦は繊細な娘が多いんだから」

長門「吹雪は黒いのかあ…」

なんか長門から場に似合わない言葉が発せられたような…。あ、陸奥が長門の足を踏みつけた。

というか、そろそろ本題に入らないと！

「それでさ、せつかく二人に来てもらったばかりで悪いんだけど、ちよつと、そのボ

ディーガードを頼めないかな…その、川内たちの部屋まで…」

川内と違つて、この二人に頼むのは少し緊張する。

陸奥「いいわ。私だけでもいいでしょ？長門には地下牢を見物してもらいたいし…。

そうだ！この際、長門も言っちゃいなさいよ？」

長門「そうだな…。いやなに、また会った時にでも言おうかと思つていたのだが、やはりこの地下牢を少し使わせてもらおうかと思つてな」

「おお！それは全然構わないよ！むしろ助かる！」

長門「そう言つてもらえるとこちらも助かる。たまに邪魔するかもしれないがよろしく頼む」

「でも、一体何に使うんだ？」

長門「あー、それはだな…その」

珍しく歯切れの悪い長門。なんか聞いたのはまずかつたか？

陸奥「多分、長門の趣味よ」

長門「む、陸奥!!」

長門が陸奥のことをじつと睨んだ様だったが、陸奥はどこ吹く風という感じだ。

陸奥「さあ、川内の部屋までよかつたわね？行きましよう？」

陸奥が僕の背中をそつと押し、階段の方へ誘導する。長門の顔がほんのり赤みを帯び

ていた様な気もするが、陸奥に押されるままその場を後にしたので、真相は分からなかった。

陸奥「ここまででいいかしら？」

「うん！ありがとう！」

陸奥「それじゃあ、私は地下牢へ戻るわね」

僕に背を向け、歩き出す陸奥。

「よかったら、陸奥も地下牢使つてよ？」

陸奥「考えとくわ」

そのまま陸奥は行ってしまった。

久々に川内の部屋まで来たなと思いつながら、ノックする。もし、風呂から帰つてなかつたらどうしようと今更ながら思う。陸奥は…もういない。

「はい」

中から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

川内「あれ!? どうしたの？」

ああ、さつき会ったはがりなのに、なんだがすごい久しぶりに会った気がする。

神通「誰ですか、姉さん？」

那珂「ZZZ…」

川内の後ろから神通が覗き込む。那珂は…寝ていた。

川内からほんのりシャンプーの香りだろうか、いい匂いにする。

「すまないね、こんな時に…それで、あのさポディーガード頼める？」

いきなりのことに川内も神通もポカンとしていたが、どうやら僕の話聞いてくれるように、部屋に招いてくれた。

川内「全く！吹雪のやつく!!」

「元々は人間が悪いんだから仕方ないさ…でも吹雪たちともその内仲良くなればな…」

川内「むー」

神通「先程、隻眼と言っていました…どんな風貌だったか覚えていますか？眼帯を

していませんか？」

「あー、確か前髪が片目を隠していたけど、眼帯だったかどうかは分からないな……」

それを聞くと神通の顔がペアと明るくなる。

神通「そうですね！それなら……」

それならの後が聞こえなかったが、僕の返答に安堵している様子だった。

川内「とにかく、部屋に戻るんでしょ？もちろん私たちも同行するよ！」

「頼むよ」

それで自室に戻ってきたわけだけど……。

何故か僕の煎餅布団がふつくら隆起し、微かに寝息のようなものも聞こえている。

僕は川内、神通と顔を見合わせ、そーっと掛け布団を捲るとあの隻眼が気持ち良さそ

うに目を閉じて横たわっていた。

## ヘル・アンカーズの尖兵5

「・・・」

川内「・・・」

神通「・・・」

目の前の状況に頭が追い付いていないからだろうか、誰も言葉を発つしない。  
??? 「グーグー」

うん、これだけは分かる。この隻眼は常に眠いらしい。

川内「どうする?」

川内がそつと僕に耳打ちする。声を抑えているのは川内なりの配慮だろうか。

「うーん、とりあえずそつとしようか・・・」

なんかこの隻眼なら直ぐ仲良くなれそうな気がする。恐らくだけど・・・。

川内と神通に隻眼を見張らせ、僕は報告書に目を通す。

結局、前回は川内たちについての記述くらいしか読めなかつたんだよな・・・あまりの前任が残した悪行の多さに伴って分量も半端ないし・・・。

それで、朝潮は・・・あ、これかな?

内容は大方の予想通り、酷いものだった。朝潮は特に性的被害には遭っていないようだが、相当暴力を振るわれたらしい。また彼女の妹たちも激しい暴行を受けていたようで、何人かはあの地下牢に入れられているようだった。

朝潮とは、この前一度話したけど、あの様子だとまた怯えられて終わる気もするな…。謝罪はしたいが…さて、どうしたものか。

??? 「グオーZZZZ」

「・・・」

この隻眼についても調べてみるか…。

重巡洋艦、加古。それがこの隻眼の名前だった。

そして彼女の報告についても読んでみたが…ただ一言、解体申請中と赤字で書かれているだけだった。

ここで言う解体は僕たちにとっての死刑と同義だ。この加古というのが解体を申し出たというよりは、前任が解体しようとしたのだろうけど、それは実際加古に聞いてみないと分からない。

うーん、朝潮に加古。彼女たちとも仲良くなりたいたいが…。多分、僕だけじゃ怖がらせるかボコボコにされるだけだろうし……。

考える。なんとか彼女たちと打ち解ける方法はないかと無い頭を捻る。だけど、そういう名案は浮かぶもんじやない。ただ時間だけが過ぎ去っていった。

また川内たちには頼ることになるのは絶対だよな…。

ここ最近ずっと彼女たちを頼りっぱなしなのでそろそろ愛想を尽かされないかと内心ヒヤヒヤしているのだが…あ。川内で思い出した！

「川内！」

川内「うえ!? な、急に大きな声出さないでよ!!?」

「ご、ごめん…。というか、川内に聞きたいことがあるんだけど」

川内「なに?」

「那珂ってアイドルなの?」

川内「ブツ!! な、那珂がアイドル? あー、まあ一応というか…: なんとというか…:」

神通「那珂ちゃんが自称しているだけだと思いますよ」

「あー、そうか…:」

川内「突然どうしたの? 那珂がアイドルかどうかだなって?」

「いや…: それ、朝潮や加古と仲良くなる為に活用できないかなと思っただけ!」

川内「えー？いくらなんでもそれは…」

神通「……ツク」

僕の提案があまりに突拍子もなく、また可笑しかった様で神通はプルプルと体を小刻みに震わせながら笑いを堪えているようだった。

おい、傷つくぞ。でも悪くはないと思うんだよなこのアイデア。だが、事態は急速に変化する。

???「その話…乗ったあ!!!」

突然ドアが開かれ、そこには話題の渦中にいる張本人、那珂が立っていた。目には見えなないけどバーンっていう効果音が背景に付いてそうだ。

川内「な、那珂!？」

那珂「フッフ、起きたらみんな居ないからさ…探したんだよ!大体、居る場所なんて限られてるし!それで案の定ここにいたわけだけど!!那珂ちゃん、すっごいイイ話聞いちゃったあ!!!」

えつーと、那珂がすごいキラキラした目でこちらを見てくるのですが…。いや、これは好機か!?!渡りに船!?!

僕は無言で那珂に近づく。そして、彼女の目の前に立つと、笑顔で手を差し出した。

示し合わせたように那珂も手を出し、握手。固い握手が交わされる。

那珂、やはり君とはいい酒が飲めそうだ。

川内と神通は完全に蚊帳の外だった様だが、「おお…」と引き気味に拍手をしてくれている。

那珂「朝潮ちゃんと加古ちゃんと仲良くなる…その為に那珂ちゃん、いや艦隊のアイドルが全力を尽くしちゃうよ☆」

「那珂…ありがとう!!」

那珂「…で、具体的に何をすればいいの??」

「ふふふ、それはね…」

後日、川内が執務室のプリンターで大量の紙を刷っている様子を長門たちが目撃していた。

そして印刷が終わった頃合いに陸奥が川内に訳を聞くと、「これ見てくださいね」と

言つて一枚の紙を差し出し、どこかへ行つてしまった。  
紙にはこう書かれていた。

『艦隊のスーパーアイドル！怒濤の二時間ライブ開催しちやいます☆  
く届け！那珂  
ちゃんの想い〜』

長門「……」

陸奥「……」

他には開催場所、日時、出演メンバーが書かれていた。

陸奥「食堂でやるつもりなの……」

長門「……」

そして出演メンバーのところを見て二人は閉口した。

そこには

スーパーアイドル：那珂ちゃん

バックダンサー：朝潮、加古

その他：何でも屋、川内、神通、長門、陸奥

## スーパーライブ

朝潮「む、無理です！」

「そこをなんとか頼みます!!」

現在、僕は自室にて目の前の娘に深々と頭を下げている。理由は簡単。那珂のライブにバックダンサーとして出演してもらうためだ。

朝潮「出来ませんよ…無理、無理です！」  
「頼みます！」

こんなやり取りがもうかれこれ一時間程続いている。交渉は難航すると覚悟していたが、やはり厳しい様だ。

川内「そもそもバックダンサーって…朝潮は踊ったことあるの？」

朝潮「無いですよ!!」

川内「ねえ、いくらなんでも酷じやない？」

川内が心配そうな顔をして、僕の顔を見る。

「…だけどさ、どうしてもライブに出て欲しくて…。それとも朝潮は踊るより歌う方がいい？」

朝潮「嫌です!!!」

そういう問題じゃねえとでも言わんばかりに朝潮は声を張り上げた。あの朝潮が……。これは相当嫌らしい。

朝潮「大体、私は川内さんが話があるということとここに来たんですよ……。それなのに、こゝ、こんなのつて……。騙し討ちじゃないですか……」

川内の方をちらりと見ると、ばつの悪そうな顔をしていた。だが、確かに僕が話があるからと言つても朝潮はここまで来なかつただろう。朝潮には悪いが……。川内、ナイスだ。

「騙すような真似をしたのはすまない、謝るよ。だけど、どうしても朝潮と話がしたかつたんだ!」

朝潮「……」

「朝潮、もう一度頼む。バックダンサー、引き受けてくれ!」

朝潮「嫌です!!!」

……埒があかない。助け船を求めて那珂を見る。すると那珂は察してくれたようで、朝潮の方へ近づくと朝潮の肩に手を乗せ、優しく諭すように語りかける。

那珂「朝潮ちゃん、どうして無理なのかな?」

朝潮「だ、だって私、踊ったこと無いですし……」

那珂「大丈夫！ダンスで大切なのは技術とかじゃない…心だよ？上手い下手よりも自分が楽しんで出来たら、それはもうすごい幸せなことなんだから！百点満点なんだよ？」

朝潮「で、でも…」

那珂「不安なら那珂ちゃんが全力でダンスを教えるよ！それに朝潮ちゃんがこんな風に踊りたいっていうのがあれば全然言ってくれていいし！」

朝潮「…」

那珂「だからさ、お願い！那珂ちゃんと一緒にライブに出よう！」

朝潮「…どうして」

那珂「？」

朝潮「どうして私なんですか？」

那珂「えっ」と、それは…」

「…朝潮。前にも話したと思うけど、僕はここの鎮守府の娘たちと仲良くなりたいと思ってる…」

朝潮「…知っています。でも、それは司令官になる為ですよ？」

「いや、確かにゆくゆくはそうなりたいと思ってるけど…それはメインじゃないよ？あくまでここの皆と仲良くなること、それと自分を変えたいというのが目的であって…」

朝潮「仮に…」

「？」

朝潮「仮に貴方が皆と仲良くなつて、司令官として認められたらとしましょう。そして、貴方自身の願望も叶つた…。そしたら、貴方は私たちを蔑ろにしませんか？自分の欲求さえ通れば、後は私たちなんかどうでもよくなつたりしませんか？」

「もちろん、そんなことはない！」

朝潮「どうしてそんなこと言い切れるんですか!!？」

怒り。はつきりとした怒りが朝潮の顔から読み取れる。

「……」

「…今は信じてくれ、としか言えない。すまない…」

ちやんと証明が出来ればどれだけよかつただろう。でも今の僕にはそんな大義名分は無い。それ故、朝潮からしたら僕の言葉など、薄っぺらい言葉にしか聞こえないのだろう。

朝潮「……」

「でも、僕は絶対に君たちを傷つけない！約束する！」

朝潮「……私は」

朝潮「私は、役立たずで…妹たちのこともちやんと守れなかつた…それに、私は貴方

を傷つけようとしたんですよ!? 吹雪ちゃんのことだって止められなかった! 私は、私は……!!」

「…朝潮」

朝潮「…偉そうなことを言ってしまったが、結局私は何も出来なかったんです。実を言うと…：貴方が私と仲良くしようとしてくれること、何か思惑があるのかもしれないが、ちよつと嬉しいって思っちゃいました、こんな私でも必要としてくれてるんだって。でも、私は協力は出来ません…。だって、私がいても何の役にも立たないんですから」

どこか寂しそうに彼女は笑う。

「…」

朝潮「ご期待に添えず申し訳ございません。失礼します」

朝潮は丁寧にお辞儀をすると、部屋から出ていこうとする。ここまで言われてしまえば、もうこちらとしても無理強いは出来ない。

朝潮をバックダンサーに起用するのはもう誰の目に見ても不可能、そんな諦めの空気が流れていた。

でも、僕は…。

「ま、待つ…」

往生際が悪いのは重々分かっているが、僕はしぶとく声を掛けようとする。だがそれ以上は言葉が出てこない。

そして、朝潮がドアノブに手を掛け、もう行ってしまふ…そんな時だった。

「へえ、面白そうじゃん」

聞き覚えのない声が室内に響く。そして、その声の主が誰かと分かると、その場にいた全員が驚いた様な顔をした。

加古「あたしも混ぜてよ」

隻眼が笑いながら、上体を起こし、軽く伸びをしてこちらを見つめている。それはあまりに突然だったので、僕は動揺を隠せなかった。

「…え？」

加古「あ、初めまして。人間さん」

「あ、ど、どうも」

加古「それでさっきの話だけど…」

彼女はそこまで言い掛けると、立ち上がり、悠然とこちらに近づいてきた。僕はその様子を緊張した面持ちで眺めていたが、川内に至っては何か怪しいと感じたのだろうか、僕の前に立つと身構えている。

加古「なんだよ、あたしはあんたの後ろの人間さんに用があんの！」

川内 「…何するつもり？」

加古 「ライブ！やるんでしょ？あたしも混ぜてつてこと！」

川内 「・・・」

加古 「なんだよ。あたし全然歓迎されてないじゃん！」

大袈裟に困ったような顔をして僕の方を一瞥する隻眼。

「あの、加古」

僕は勇気を振り絞り、隻眼の目を見据えながら話しかける。

「ライブに参加してくれるってのは本当かい？」

加古 「ああ！面白そうだし!!」

これは…。

「…分かった！よろしく頼むよ、加古」

川内 「ちよっ!？」

川内 「いいの？なんか怪しくない？」

川内が僕の耳に手をあて小声でそう言う。まあ確かに今までの感じから言うとなかなか新鮮だ。その分、怪しさも募る。特に、彼女は吹雪とも繋がりがあつたみたいだし…何か企んでいる可能性も捨てきれないけど。

ただどちらにせよライブに誘うつもりだったのだから、手間が省けたと考えると、後は

問題が起きたときに解決すればいいか。こういう時は考えるよりも動け…だ。

そんな旨を川内に伝えると、あまり納得のいつていない顔をしていたが、徐々に了解してくれたようだった。

加古「おーい、話は済んだのー？」

「ああ。それとライブにはバックダンサーとして出てもらうけど問題ないかい？」

加古「別にー。あたしは構わないよ」

すると、僕たちのやり取りを黙って見ていた朝潮が加古に駆け寄り、慌てた表情で話しかける。

朝潮「い、いいんですか!? 加古さん！」

加古「えー、何が？」

朝潮「な、何をつて…阿武隈さんに確認もとらずに…こんな…」

加古「…んー、別に平気じゃない？あ、もしかして阿武隈達のことを気にしてライブに参加できないの？それならあたしが阿武隈に言つといてあげるよ！」

朝潮「そ、そんな…私は…」

加古「よーし、決まり！じゃあ、人間さん！あたしと朝潮はバックダンサーとしてライブに出るからよろしく！詳しいことは後で話そうや！」

そう言うのと、加古はまだ何か言い掛けていた朝潮を無理やり押して、部屋から出て

いった。隻眼が起きて、ほんの数分の出来事だった。

事態があまりに急展開を迎えたので、しばらく何が起きたか頭で理解するのに時間が掛かった。

だが、どうやら朝潮と加古はライブに参加（朝潮に至っては半ば強制的だが）してくれるらしい。

そうと決まれば……。僕は呆然と立っている三姉妹に声を掛ける。

「二応、役者は揃ったみたいだ……。それで、川内と神通に聞きたいんだけど……。二人も協力してくれるのかい？」

僕がそう問うと、二人は顔を見合せ、再びこちらを見てニコツと笑いながら首を縦に振ってくれた。

「ありがとうーじゃあ、さっそく……」

こうしてライブ開催に向け、僕たちは動き出した。

## スーパーライブ2

僕は今、ライブに必要な物品を購入しようと、いつもの通販サイトを物色している。

「うーん、これも欲しいな……」

ふと思う……果たして、これらの物品を購入した際に、上層部は資金援助をしてくれるのだろうか？この前の壁紙やタイルカーペットもそうだが、明らかに僕が購入しているのは普通に考えれば鎮守府に必要な無いものだ。

一応、鎮守府建て直しの為という名目があるのだが、上層部に指摘されるのは時間の問題だろう。

そんな不安を覚えながらも、通販サイト特有のあの買い物かごをクリックする手は止まらなかった。

川内「とりあえず、那珂に頼まれた内容でチラシ作つといたよ！見て見て！」

「おおー！チラシなんて早いね、どれ…見せてもらおうね」

もうチラシの構想まで出来ていたとは…那珂も川内も仕事が早い。僕は、若干はしやぎ気味の川内からチラシを受け取り、目を通す。

…え、二時間ライブ？随分長いんだな…。僕のイメージでは三十分くらいかと思込んでただけ…。

…まあいいか、朝潮と加古は大変だろうけど。というか、長門と陸奥も出演するのか…何卒で？大道具とか？

正直、長門と陸奥が舞台のセッティングをする姿が思い浮かばない…どちらかと言うと彼女たちは主役っぽい感じだし。

若干不安はあるものの、チラシ自体の出来はとても良い。これを何日か前から配布すれば、ライブ当日は大盛り上がりなはずだ。

「とても良いと思うよ…じゃあ、これを百枚くらい刷るのを頼んでもいい？」

川内「りょーかい♪」

さて、川内が印刷に行っている間に、僕は那珂といろいろ打ち合わせをしないとな。それにそろそろ那珂も…おっ！来た来た！

丁度川内と入れ替わる様にして入室してきたのは、スーパーアイドル(チラシ参照)那珂だ。何故かデッキプレイヤーを携えている。

「いやー、チラシなんて…すごいね」

那珂「ふっふーん、ありがと♪那珂ちゃん、今最高に張り切ってるからさ！」

そう言うのと、クルクルと華麗にターンを決める那珂。さすがスーパーアイドルだ。

「よし！じゃあ気合いを入れて、打ち合わせといきますか！」

那珂「おー!!」

「そういえば、長門と陸奥も参加するみたいだけど、どんな感じなの？その他って書いてあるけど…」

僕は先程受け取ったチラシの出演メンバーのところを指差しながら尋ねてみた。

那珂「あつ、それ!?長門さんと陸奥さんには司会とか進行役をお願いしようと思ってるんだく!!!」

「へえ、それならなんか納得がいくよ」

さすがに大道具とか裏方はないよな…と思い、苦笑する。そんな僕を那珂は不思議そうに見ていたが、何かを思い出したように話始める。

那珂「あ、そうそう!!ライブで歌う曲、一回聞いとく!!?」

「お、いいの?」

僕がそう答えるや否や、那珂は待つてましたと言わんばかりにマイクを取り出す。どこから出てきた…。



今度はデツキからテンポの良い曲が颯爽と流れ、那珂も体を激しく動かしている。その内、頭をブンブンと上下左右に乱暴に振り出した。ちよつと恐い。

そしてポーズを決めると、大きな声で歌い始めた。

お、おう…。

那珂「ふおおおおおおおう!!!さいつこおおお!!!」

「……」

那珂「ありがとう!ありがとう!!みんな、大好きだよおおお!!!」

「あ、あの…那」

那珂「それでは皆のアンコールにお応えして…」

「ちよつ!?!ちよつと待った!!!」

那珂「こおーら!!いくら那珂ちゃんが素敵なアイドルだからってライブに乱入はダメ

だぞおく!!!」

「いや、そうじゃなくてさ!もう大丈夫ってこと!ほら、打ち合わせもしないとだからさ!?!」

那珂「むう、そつかそつか!ま、那珂ちゃんの持ち歌は全部聞いてもらったし、いい

よー!!!」

大変ご満悦な表情の那珂さん。よかった…このまま永遠に歌われるかと思った…。

さて、気を取り直して打ち合わせを……………。

あれ?ちよつと待てよ!?

「えっ、な、那珂!!」

那珂「なーに?」

「持ち歌って、二曲しかないの!」

那珂「うん、そうだけど?」

ぴやあああああああああああ!!!

「え、えっ?えええええええええ!!!」

那珂「わあ、どうしたの?」

「だって二時間やるってここに!!」

僕はチラシを那珂に突き付ける。

那珂「うん!最高のパフォーマンズをするには最低でも二時間欲しかったからね!!那

珂ちゃん頑張っちゃうよ!!」

「いや、どうやって間を持たせるのよ!」

どちらも五分くらいしかなかったぞ!!?

那珂「もつちろん!!ちゃんと考えてるよ!!」

得意気な那珂。そ、そうか…トークで場を持たせるつもりなんだな…那珂はコミュニ

ケーション能力高そうだし…。安心し…。

那珂「アンコールに応えてまた歌えばいいんだからさ!!!」

へ？

「あ、あんこーる？と、ということは…さっきのにきよくがくりかえされるといふことですか？」

那珂「そつ！まあ、皆が何度でも聞きたくなるような名曲だし、二時間なんてあつという間なんだろうな〜！」

「…」

川内「おー、那珂も来てたんだ！あ、とりあえず印刷終わったよー！」

衝撃の事実を知り、愕然としている僕に印刷を終えた川内が声を掛ける。

那珂「おー！川内ちゃん！ご苦労ご苦労♪」

残念ですが、その印刷物は訂正しないといけないみたいですよ…。

仕方ない、資源が勿体ないけど、ライブ時間を訂正したものをもう一度作り直すか？  
…いや、手間がかかるけどライブ時間のところだけをペンで書き直せばいいのか!?  
それなら紙の無駄にはならない！大丈夫、まだ慌てる時間じゃない！そうと分かれば…。

「ありがとう、川内！早速で悪いんだけど刷ったチラシを見せてくれ！」

すると、川内は自信たっぷりな顔をして言った。

川内「えへへ、ちゃーんと配ってきたよ!! どう? やるでしょ!」

ニカツと歯を見せ笑う川内。さあ、褒める!と言わんばかりの顔をしている。かわいい、かわいいんだけど、これだけは言わせてくれ。

ぴやああああああああああ!!! (本日二度目)

川内「渡す娘、みーんな楽しみにしてるって言ってたよ! 二時間も楽しめるなんてって! 頑張んなきゃね!」

那珂「よおーし!! やる気満タンだあ!!!」

「・・・」

川内「・・・」

「・・・」

那珂「……きやは☆」

川内「ちよつと神通呼んでくるね…」

那珂「ちよつ!?! 川内ちゃん、顔が怖いよ!?!」

「もし可能であれば、朝潮と加古、長門に陸奥も呼んできてくれないか？」

川内「うん……」

那珂「お、おお勢揃いだね！」

川内「……」

「……」

那珂「うへえ〜」

かくして部屋に神通、朝潮、加古、陸奥がやつて来たわけだけど……加古を除いて皆一様に不安そうな顔をしていた。そう言う僕もだけど……。

「えっと、集まってくれてありがとう……。もしかしたら、もう川内が事情を話してくれているのかもしれないけど、今回来てもらったのは知恵を貸して欲しいからだ」

陸奥「……待って。川内から話を聞く云々の前に私と長門がライブに参加してる事、さらに言えばライブを開催する意図も私たちは聞いてないわ……。どういふことか説明してくれる？」

あー、那珂。二人に了解とらずに進行役に設定してたのか。僕もライブの事、報告していなかったし、それは那珂だけのせいには出来ないけどさ。

「あ、ああじゃあ大まかに説明するね……」

僕はとりあえず朝潮、加古と仲良くなるきっかけとしてライブをしたい事、チラシを

作り配布したが内容に無理があつて今困っている事を簡潔に伝えた。

陸奥は頭を抱えている。そして、大きなため息を一つつくと、呆れたような顔でこう言った。

陸奥「…それで、知恵を貸して欲しいというのは？」

「うん…。正直、いろいろ迷っているところはあるけど、今回のライブはそのまま二時間、やり遂げようと思う。だけど、那珂の歌はアンコール含めて三十分が限度だと思うのね。だからその…裏方だけじゃなくて、あの…皆にもライブに参加してもらいたいというか…なんというか…」

陸奥「要は…私たちにどうして欲しいわけ？」

陸奥が厳しい口調で言う。まあ怒りますよね、そりゃ。

ああ、もうダメだよな！萎縮しちゃ！ここに来てくれただけ、ありがたいんだから、ちゃんと伝えないと！

僕は息を吸い、はつきりとやってやった。

「みんな、特技披露しよう!!!」

## スーパージェット3

川内「正義を貫き、悪を滅ぼす！暗夜忍者、川内参上！」

川内「私の刃の錆となれ！とうっ！」

ポコッ！

「うわあ、やーらーれーたー」

川内「いや、声は出しちゃ不味いでしょ。人間はいないことになってるんじゃないの？」

「あ、ごめん」

時刻は真夜中。

そんな中、僕は頭から黒いシーツを被り、床に伏している。一方川内は、新聞紙を丸めて作った刀を腰に差し、頭巾を被って、僕を見下ろすように立っている。

川内「はあ、どう考えても十分くらいしか待たないよ、この茶番……」

「それだけやれば上等よ」

川内「……うーん、もう少しセリフ増やそうかな……」

何をしているのかだって？劇の練習です。

あの時、ライブの出演メンバーを初めて召集した時。

突拍子のない一言に、川内までもが白い目を僕に向けていた。僕は背中に冷や水を浴びたような、そんな感覚に襲われ、本当に嫌な時間だった。

陸奥は怒ってしまった様で、黙って部屋を出て行ってしまった。朝潮と加古は、そもそもダンスをどうするかについていうことで那珂を連れて行ってしまおうし、神通も「考えておきます」とだけ言い残して、部屋を後にした。

川内が憐れんだ目で僕を見ながら、「一緒に考えよう」と言ってくれた時は、泣きそうだった。

あの日から既に三日は経っている。十日後には、ライブが開催されるというのに、まだメンバーからの音沙汰はないし、下手をしたら早めに切り上げることになるのだけだ……。

川内にそれとなく艦娘たちの様子を探ってきたけど、鎮守府の至るところでライブの話題が持ちきりで、さらに駆逐艦に至っては満面の笑みを浮かべ、ライブの開催を指折りで待っているらしいのだ。以前長門から駆逐艦たちの様子を聞いている身としては、ガツカリさせるわけにはいかない。そうになると、やはり時間の短縮は出来れば避けたい。

川内「私たちの劇が約十分、那珂たちので約三十分費やすと考えて……後八十分どうし

ようか」

「ああ、そうだね…あ」

「劇の後に川内と僕で踊ろうか？」

川内「は？」

翌日。

神通「考えてきたのですが…特技披露であれば何でもいいのでしょうか？」

「おおー考えてきてくれたのかい!?ありがとうございます！」

もう正直何でもいいというのが本音だ。焦っていることもそうだけど、自分から言っ  
といてなんだが、もはや僕と川内のやる劇など特技披露の「と」の字もないんだから…。

神通「では、私は居合術をお見せしたいと思います」

「い、居合? あー、刀を使うのね…うん、いいよ…」

この際もう何も言うまい。

神通「では、よろしくお願いします」

「あー、居合はどれくらい時間稼げそう？」

神通「そうですね…恐らく一分くらいでしょうか」

「神通」

神通 「はい」

「ちよつと僕が演出加えてもいい？」

神通 「何をなさるんですか？」

「それは後日伝えるよ……」

とりあえず、神通には十分くらい稼いでもらうとして……。後、七十分かあ、先が思いやられるなあ。

するとドアがノックされる。那珂か？

陸奥 「ちよつといいかしら？」

「陸奥か……」

陸奥 「……私で悪かったわね？」

陸奥が鋭い目で僕を射抜く。す、すみません。

陸奥 「これ、貴方に渡しておくわね？」

そう言つて陸奥は一枚の紙を僕に渡す。ん……これは!?

陸奥 「私たちは交互に出るわ。二人で何かするよりも時間が稼げるでしょ？」

「陸奥……ありがとう！」

紙には長門と陸奥がするであろう演目の内容が簡潔に書かれていた。なんだかんだ言つて、助けてくれる二人。じんわり頬が熱くなるのを感じながら、早速、内容を確認

させてもらう。

ふむふむ、陸奥は………演舞『火炎』？えつと、これは……。ちらりと陸奥を見ると自信に満ち溢れた顔で僕の顔を見ている。

再び紙に目線に戻す。…神通の居合も許容しているんだし、演舞『火炎』も大丈夫だろう（白目）。

で、長門は…に、人形劇？これまた、その…似合わないな。まあ実は出し物の中で一番まともかも。

「確認した。よろしく頼むよー」

陸奥「ふふ、感謝しなさいよ？」

そう笑って言うのと、陸奥は部屋を出ていった。

案外、乗り気の様で何よりだ。

そしてあれよあれよと時間は経過し、ライブ前日の日になった。

## スーパーライブ4

朝潮「ちよつと加古さん！ どういうつもりですか!？」

私を背後から押してくる艦娘、加古さんに私はそう聞かずにはいられなかった。

加古「んー？ だから、さっき言ったでしょ。あたしと朝潮でライブに出る…」

朝潮「ですから！ なんで私まで!!」

私は分かっていた。

もちろん、ヘル・アンカーズの一員として、阿武隈さんたちに何も聞かずに、あの人…人間に手を貸すなんて気が引けたということも間違いではない。それは加古さんの言う通りだ。

でも、やっぱり一番なのは、私が足を引つ張つてしまうことが明らかだから。あの日、怯える私の目を優しく見据えながら、穏やかな口調で諭すように話してくれた彼。私の話をしっかりと聞いてくれた彼。そして、こんな役立たずの私を、ライブに誘ってくれた…必要としてくれた。それが本当に嬉しかったのだ。

前司令官から無能と言われ続けた私にとって、彼のような存在は新鮮で、温かく、そして毒の様な存在なのかもしれない。あの人に見られると、胸が締め付けられる様に痛

むのだ。胸の鼓動が高まり、破裂してしまわないかと心配するほどに。

加古「えー、せっかく誘われたんだし：一緒にやるつてのが礼儀じゃない？ま、もう参加決定だけどね〜」

朝潮「なっ!?わ、私は：」

加古「：いつまで囚われてんの？」

朝潮「え？」

ふと加古の声のトーンが下がり、冷たく発せられたような気がして、彼女の顔を凝視する。

だが、その時の加古は普段と変わらないような涼しげな顔をしているだけだった。そして、ニコツと笑うと「よろしく！」とだけ言って、行ってしまった。

残された私は：どうすればいいか分からず、ただ彼女の背中が見えなくなるまで見ていることしか出来なかった。

翌日。

私は近海の哨戒から帰投し、執務室にいる長門さんに報告を終えると、自分の部屋に戻ろうと鎮守府の廊下を歩いていた。

もう加古さんは阿武隈さんたちにライブ参加の件を伝えてしまったのだらうか……。もし、伝えていたのなら、阿武隈さんたちとは会いづらい。私は、早く部屋に戻ろうと、歩く早さを少しあげた。

……とりあえず、ヘル・アンカーズのメンバーと会うことなく自室の前に来ることが出来た。ほっ、と一息、安堵する。

そして、部屋のドアを開けると……なぜか妹たちが部屋の中央に集まっていた。

そして、私が帰って来たことに気が付いたようだ。妹たちに一斉に顔を見られ、思わず私は後退りしてしまった。

朝潮「ど、どうしたの？」

意を決して声を掛ける。

すると、霞がやって来て、私の手を取ると、そのまま部屋の中央まで連れていかれた。そこには、一枚の紙があった。

私はそれを手に取り、そして目が点になる。それは、ライブ開催のチラシであった。そして、出演メンバーのところにバックダンサーとして私の名がはつきりと載っていた。

紙を持つ私の手は震え、呼吸が早くなる。

紙から目が離せない、いや目を離したくない。もしこのまま目線を上げ、妹たちの顔

を見たら、私は…。

不意に、霞の声が聞こえてきた。

霞「朝潮姉…」

私はその声を聞き、居ても立ってもいられなくなつた。

早くこの場から逃げ出したい。

気が付くと、私は部屋を飛び出していた。

「みんな、特技披露しよう!!!」

部屋を飛び出し、途方に暮れていた私は、川内さんに声を掛けられ、あの人の部屋へ赴くことになった。

出来れば今は会いたくない。

今や私は完全に妹たちに見限られてしまっただろう。

前司令官が姿を消してから、徐々に鎮守府の雰囲気も良いものへと変わってきていた。だが、それで傷跡が完全に消えたわけではない。今でも妹たちは夜中に急に泣き出したり、震えが止まらず、うずくまってしまったりしてしまうことがある。妹たちは現

在進行形で苦しんでいるのだ。

それなのに、姉の私がライブに出て楽しんでいたら？

あの時、妹たちの顔を見れなかった理由はそこにある。

霞はあの後何と言おうとしていたのだろうか？

それを想像するのも恐い。

：とそうこう考えているうちに、私はあの人がいる部屋まで来てしまった。

そして、あの言葉を言われたわけだが：

特技披露なんて、そんなもの私には無いッ！

私は内心そんなことを思いながら、あの人を見つめる。

顔面蒼白とまでは言わないが、彼の顔からは不安が読み取れた。どこかで見たことのあるようなその顔。

力になってあげたい。

そんな想いがふと頭をよぎるが、そんなこと出来るわけがない、余計に事態を悪化させてしまうのが関の山だ。

：陸奥さんが、黙って部屋を出ていってしまった。

私は何か彼に声を掛けるべきかと迷ったが、何を言うというのか。

結局、私は那珂さん、加古さんに連れられるままその場を後にした。

那珂「全く！那珂ちゃんが歌ってれば素敵な二時間が過ごせるのになく!!!」

加古「あははは！さすがに二時間も同じ曲を聞き続けたら、頭おかしくなるよ!!」

那珂「さりげなくデイスってる!?!加古ちゃん!!」

私たちは今、中庭の方へ出てきている。どうやら、ここでダンスの練習をするらしい。

那珂「じゃあ、とりあえず振り付けから教えるよー!!」

那珂さんはそう言うと、一から懇切丁寧に教えてくれた。

偶発的にライブに参加することになったとは言え、ここまで親身になって教えてくれる那珂さんに失礼な態度をとってはいけない。

私は懸命に四肢を動かした。

那珂「・・・」

朝潮「…すみません」

誰が見ても分かる。私のダンスは壊滅的だった。

あれから時間を見つけては、那珂さん、加古さんと共に練習を重ねてきたわけだが、一

向に私の動きはぎこちなく、下手つぴのままだった。

ああ、自分が嫌になる。こんなに手取り足取り教えてもらったというのに、私は…。

那珂「朝潮ちゃん、ちよつといい？」

朝潮「はい…」

いつになく真剣な那珂さんの表情を見て、遂に呆れられてしまったかと覚悟したが、次に聞こえてきたのは意外な言葉だった。

那珂「朝潮ちゃんは どうして踊っているの？」

朝潮「え？」

一体どういうことだろうか？ そんなのライブに参加する為に決まっている…。

私の困った顔を見て、那珂さんは少し表情を緩めると、優しく言う。

那珂「前にも言ったけど、ダンスで重要なのは心だよ？もしかしたら、ダンスが上手く出来ていないと朝潮ちゃんは思っているかもしれないけど、那珂ちゃんはその事を気にしているわけじゃないんだ！那珂ちゃんが気になってるのは…」

そこで一呼吸置く那珂さん。私はその後に関く言葉待っている。

那珂「朝潮ちゃんは誰の為にダンスを踊っているの？」

朝潮「…」

誰の為…。そんなの、ダンスを教えてくださいている那珂さんの為……………本当にそれだけ

?

あの人の足を引つ張りたくない。あの人にも見捨てられたくない。

朝潮「わ、私は……」

那珂「那珂ちゃんは誰かの為に踊るっていうのも素敵だと思うよ？それだけその人のことを想っているってことの証拠だろうし。……だけど、そう思うあまり自分を追い込んで、ダンスを楽しめなくなったら意味ないと思うんだ。自分が楽しめていなかったら、きつとその想いさえも意味がなくなっちゃうと思うし！」

そこで那珂さんはニカツと笑うと、私を抱き締めてくれた。

那珂「朝潮ちゃんは頑張ってるよ。那珂ちゃんが保証する」

あれ？あんなに地下牢で泣いたのに……また溢れ出てくるものがある。どうしよう。

朝潮「う、あああああ!!」

私が泣いている間、ずっと那珂さんは寄り添ってくれていた。

私の中で、何かが変わろうとしていた。

## スーパーライブ5

ライブ当日まであと一日となった頃、早朝から僕は目が覚めてしまった。

落ち着かない……。明日には泣いても笑ってもライブが行われるのだから当然と言え  
ば当然だが。

昨日考えたライブの流れを思い返す。

- 一、川内と僕の劇
  - 二、神通の居合術
  - 三、那珂、加古、朝潮のスーパーアイドルタイム
  - 四、トークタイム
  - 五、陸奥の演舞『火炎』
  - 六、長門の人形劇
  - 七、朝潮の歌
  - 八、加古の壁ドン
- ……カオスだなあ。というか、ライブ要素あまりないね。どちらかと言えば、お遊戯に近い。まあ急場でよくここまで持ってこれたよ、うん。

さて、今日は最後の打ち合わせ及び初めての通しをしないとイケない。やることは多いのだ。

「えーっと、僕が言えた義理じゃないんだけど、今日はありがとう。いよいよ明日はライブ当日だ。そこで今日はやるのが沢山あるわけで…そのスケジュールを伝えようと思う」

現在、ライブの出演メンバーが僕の自室に集結している。…と言っても長門と陸奥を除いてだけだ。

「はいー！」

皆からはつきりとした返事が返ってきたが、心なしか不安そうな顔をしている。那珂や加古は落ち着いているみたいだけだ…。

「まずは、舞台の飾り付けなんだけど、僕は立ち会えない。その代わりと言ってはなんだけど…」

そう言つて、僕は部屋の隅に置かれた大きな段ボール箱を引っ張ってくる。その中には風船やらリボンなど思い付く限りの装飾品が入っていた。

「おおー！」

「これを皆で飾ってきてもらいたい。頼みますー！」

そうやって僕は頭を下げる。

皆はそれを快諾し、段ボール箱を食堂まで運んでいった。

そして部屋には僕一人だけが残されたわけだけど、やはりいつもこの歯痒さが残る。ここぞと言う時に僕は動けないのだから。

すると、なぜか朝潮が戻ってきた。あ、もしかして？

朝潮「あの、これありがとうございます！」

そう言う朝潮は僕にノートパソコンを差し出す。

「お役に立てたなら何よりだよ。あ、それと僕も…」

今度は僕が以前朝潮に頼まれたものを手渡す。どうやら、ライブで使うらしい……あまり朝潮には似つかわしくないものだったけど。どこでこの曲を知ったのだろうか？

だが、嬉しそうに受けとる朝潮を見たら、そんなことがどうでも良くなったのは言うまでもない。

朝潮「ありがとうございます！では、行って参ります！」

そのまま朝潮は行ってしまおうのかと思ったが、ドアの前で立ち止まり、僕の方へ向き直る。

朝潮「私の…」

「?」

朝潮「私の特技披露、楽しみにしてくださいね!!」

叫ぶようにそう言うと、足早に去って行ってしまった。

すごい自信だ…。やはり朝潮の演目を最後の方に設定して正解だった。

そして、まさかの舞台セッティングで大揉めし、通しが一度も出来ずに本番を迎えるという事があったのは、ライブ参加メンバーだけの秘密だ。

## スーパーライブ6

川内「やっばいよ…心臓止まりそう」

加古「意外とあんた、小心者なんだね…」

川内「足ガクガクしてるあんたに言われたくない！」

「やめてくれよ…。もうライブ始まるぞ」

那珂「また昨日みたいに揉めるのは嫌だからね…とにかく楽しんでやろー!!」

神通「那珂ちゃんって、意外に頼りになりますよね」

那珂「今更あ!？」

現在、僕たちは食堂に設けた特設スペースの舞台裏に潜み、ライブ開催時刻を息を呑んで待っている。

毎度のことながら人の前に出るといのは緊張するもので、さつきから喉が渴いてしかたない。

そして、意外や意外。川内や加古が緊張した面持ちでいるので、余計に僕の心臓は早く鼓動する。

神通も顔は凜としているものの、スカートの裾を震えた手で握っていた。朝潮は…目

を閉じ、体育座りをしている。え…気絶してるわけじゃないよね？

唯一、那珂だけが皆を鼓舞するように、いつも通り明るく振る舞っている。今思えば、これに大分救われたのだろう。

舞台裏からでも分かるのだが、観客は大にぎわいだ。嬉々とした声があちらこちらから聞こえてくる。

恐らく、前任の頃にはこんな催しは話に出ることさえ有り得なかつただろう。それが今、目の前で行われようとしている。

吐きそう…。

そして、いよいよライブ開催まで一分前を切った時。

那珂が小声でメンバーに呼び掛ける。

那珂「よーし！円陣組むぞー!!!」

その呼び掛けに、照れたように笑う者もいれば、奮起する為に進んでしようとする者もいたりと反応は様々だったが、いざ円陣を組むと皆真剣な顔つきになった。

那珂「それじゃ、スーパーライブ…楽しむぞー！エイ、エイ、オー!!!」

長門「本日のライブへの参加、誠に感謝している。…思えば、皆が日頃から海の平静を保つため尽力してくれていること…」

陸奥「もう！そう言う堅苦しいのは今日は抜きって言ったでしょ？」

長門「あ、ああ。すまないな。それでは只今よりスーパーライブを開催する。皆、心ゆくまで楽しんでいってくれ！」

陸奥「もー、皆！背筋を張らなくていいのよ？もつとゆったり見てね？」

長門と陸奥が壇上で司会をしてくれている。

いよいよかあ。

僕が川内を見ると、目が合った。よーし！やってやるぜ！

川内「と、とうっ！悪を貫き、正義を滅ぼす、暗夜忍者、川内、た、只今参上！」

川内「わ、わたすの刀の錆となれえ！」

大分、川内は緊張していた様で所々言い間違えたり、噛みまくったりしている。そう

いう僕はセリフがない分、気楽なものだ。

黒いシーツを被ってはいるが、ちようど目のところに二ヶ所、穴を開けているので、川内の表情や観客の様子も見られるのだが、やはり知らない顔ばかりだ。まあ当たり前か。でも、最前列に座っている子どももっぽい娘たちは息を呑んで見てくれているようである。安心した。

…時折、観客席の後方から「大丈夫かー？夜戦バカー」という声が複数聞こえてきたが、どうやら盛り上がってはいるようだ。

…というか今、劇のクライマックスで、後は新聞の刀で僕を切って終わりなんだけど、一向に叩かれない。

気になって川内を見る。あ、腰に差していないやん。

すっかり僕たちは新聞の刀を忘れてきてしまっていた。

川内の顔が青い。ここは…。

僕は体をクネクネ動かす。それに伴い、シーツも揺れ動く。すると、前列の方からキヤツキヤ、キヤツキヤ笑う声が聞こえ始めた。

「うわっ、キモッ！」という声が聞こえた気もするけど、気にするものか…絶対。

川内を見ると、クスツと笑い、すぐ意を決した様な顔になった。フツ、持ちつ持たれつ…だな、と心の中でかっこつける僕。その頭に川内の手刀が結構な勢いで落ちてくる

とも知らずに……。

川内「フハハハハハハ！悪は滅んだ！いぎ、サラバサラバ！」

軽快な音と共に劇は閉幕、僕は頭に大きなたんこぶを作って舞台袖へと退散することとなった。

神通「……」

神通の前には藁の束が三本鎮座している。そして、神通は目を閉じ、ただ静かにその時を待っていた。

さすがに一分で終わられてしまうと、こちらも困るので、演出を加えさせてもらった。神通にその事を伝えると、むしろそれなら……と快く引き受けてくれた。

僕が加えたのは、約九分間、静かに目を閉じ瞑想してもらうことだ。正直、これはまづいかと思ったが、神通の佇まいと申し訳程度のスピーカーから流れる和を感じさせる音が功を奏した様だった。

そして：カツと神通が目を見開いたかと思えば、まさに神業と言つていいほどの早さで、たちまち藁の束を斬つてしまった。

轟音と言えるまでの拍手喝采。「さすが三銃士ー!!」という声まで聞こえてきた。そう言えば、三銃士つて？

神通もさすがに照れたのか、頬を赤くして俯いていた。

那珂「みんなー!!盛り上がってるかあー!!?」

先程の拍手喝采に負けないくらいの声が、那珂の呼び掛けに返ってくる。

那珂「那珂ちゃんのスーパードライブへようこそ!!今日はみんなが倒れるほどの美声をお届けしちゃうよ!!そ・し・て!バックダンサーとして二人のパートナーを紹介しまーす!!朝潮ちゃん!加古ちゃん!ステージ!オン!」

すると、朝潮と加古が颯爽と舞台袖から現れ、はにかみながらも前を向いている。キヤーキヤーと歓声が上がリ、場のボルテージは最高潮だ。まあ、元々の目玉はこれだ

しね。

那珂「さあ、いくよ……」

那珂「那珂ちゃんの歌を聞けええええええ!!」

その後の三十分は狂喜乱舞と言ってよかった。

那珂の歌声に聞き惚れる者、加古の流れるようなダンスに目を奪われる者、朝潮の懸命な姿に心を打たれる者。

その感動を心に押し止めておくことが出来ず、それは那珂、加古、朝潮の名を呼ぶエールとなつて食堂にこだました。

ほほ、大成功と言える。テンションMAXになつた那珂が観客席にダイブしたこと以外は。

トークタイムでは、『最近のお気に入り』とか『私の宝物』みたいな話題を幾つか設け、長門と陸奥が壇上から指名した娘に答えてもらう方式で時間を費やした。

実はこのトークタイムが一番長かったりする。

長門「ほお、睦月はそれが大切な物なのか、なるほど」

長門「潮は曙と仲が良いのだな、ふむ…なるほど」

長門「満潮には髪にそんなこだわりが…そうか…」

なんか、長門は心なしか小さな娘ばかりを指名している気がするけど、気のせいだな？

長門「フフ、素晴らしい時間だ。もっと長くてもいいかもしれんな…」

陸奥「次は私の演目よ!!」

陸奥に連れられる形で長門は退場した。

スピーカーからは民族音楽だろうか…遠い異国の地を思い起こさせるような、そんな音楽が流れている。

陸奥の演舞『火炎』。

陸奥はゆつくりと舞台の中央まで来ると、静かに目を閉じる。そして、手に持った扇子を開くと、優雅に舞い始めた。陸奥の一挙一動は何故だが背徳感を感じるほど、甘美且つ妖艶だった。皆が固唾を呑んで、その華麗なる舞いを見つめている。

どうやら、前列の娘たちには刺激が強すぎたようで、皆一様に口を開け、まさに呆気に取られていた。

十分という短い時間の中で、先程までの熱気が嘘かと思えるほど、辺りは静まり返っていた。

舞い終わった陸奥の表情は艶かしく、そして妖しい。

「お姉さま……」そんな呟きがポツポツと聞こえてくる気がした。

長門「そこへやって来たのはウサギさん。一緒に遊ぼうよとタヌキさんに言う」

長門「うん、遊ぼう！そしてそこには沢山の動物さんたちが集まってきて、楽しく遊び始めたのでした」

……誰だ、この人？

舞台上に置かれた机の上で、まるで生きているかのように動く人形たち。

そして、とても可愛らしいそれらを手で操っているのは、紛れもない長門だ。

長門「えーん、えーん。クマさんは泣いてしまいました。そこにやって来たゾウさんは……」

この日一番と言っていていくらい、前列の娘たちは食いついていた。

いや、もう名前とか艦種分かんないけど、恐らく前方に居るのは大方駆逐艦だろう……。それこそ戦艦クラスの人が子どもを追いやってまで前に来てたらドン引き……。なんか巫女服を来たエセ外国人みたいなのが前の方で盛り上がってるけど……。あれも駆逐艦なのか？結構、大きい娘もいるんだな……。

何はともあれ、陸奥がある意味やらかしてくれた（青少年健全育成的な意味で）のだが、長門の人形劇はそれを浄化する役割を果たしてくれたと思う。

そして、本来は次に朝潮の番なのだが、少し準備がしたいということで、加古に先んやってもらうことになった。

加古「セリフは何がいい？」

「な、なんでもいいです……／＼／＼」

壇上には、加古、そして挙手した後に指名され、意気揚々とやって来た艦娘がいる。

そして、何故か一枚のパネルが用意されている。

加古「ふーん、そう……じゃあ」

バンツ！

加古「今夜は寝かさないうぜ？」

なんだ、このイケメン!?

大歓声とはいかないまでも、至るところからキヤーキヤーという黄色い声が聞こえてくる。

壁ドンねえ……。あーあ、壁ドンされた娘、両手で顔を隠して悶えてるよ。ふん、羨ましくはなんてない……。パネドンじゃねえか。うう……。

その後も何人もの艦娘が加古の壁ドンならぬパネドンに沈められていった。

……というか、せつかく長門が空気を戻してくれたのに、また変な方向に戻っちゃったぞ!?

まあ、次の朝潮はそんな感じなことはしないだろうし、大丈夫だろうけど…。

朝潮「私がこのライブの最後を飾らせてもらえること、光栄に思います！そして、私  
がする演目…それは…」

すると朝潮は先程加古が使っていたパネルに一枚の大きな紙を張り付けた。そして  
その紙には何人かの艦娘だろうか、大きく拡大された顔写真が張られている。

朝潮「ここに写っているのは、私の大切な妹たちです！私の、かわいいかわいい大事  
な妹たち」

そうか、これが朝潮の…。

朝潮「でも、私はダメな姉です。妹たちのピンチにちゃんと守ってあげられなかった、  
助けてあげられなかった」

重苦しい空気が流れる。

朝潮「せっかくのライブなのに、空気を台無しにしてごめんなさい…。私はこんな感

じで、誰かの足しか引つ張れないんです…無能だから…」

辺りがざわつき始めている。僕たちも一体どうしたと動揺を隠せない。

朝潮「この前、私は妹たちの前から逃げてしまいました。かけがえのない妹たちから目を逸らしたんです。…理由は簡単です。…私は失望されるのが恐かった、それが確定してしまおうのが!」

朝潮「おかしいですよ、自分ではダメな姉って分かっているのに、妹たちに失望されるとは認めたくない…認めたくないんです!」

観客席のざわつきはいつの間にか消えていた。だが、とある箇所からすすり泣く声が聞こえている。

朝潮「だって大好きなんですもん!妹たちのことが!私の大事な大事な妹たちなんですもん!!…部屋を飛び出したのに、何度部屋の前まで戻ったと思っっているんですか!?私のはあの娘たちと離れたくない!離れたくないんです!!」

朝潮「私はわがままでいいです!お願いですから、側にいさせてください!!また一緒にいさせてください!!ダメな姉でも許してください!!」

堰を切ったように話す朝潮。隣にいる川内の呼吸が聞こえるほど、食堂内は静まり返っている。

だが、先程のすすり泣く声は次第に大きくなり、泣き声の様になっていた。

複数の泣き声……その主たちはきつと……

朝潮「……私に特技なんてありません。……もし、唯一あるとすれば、それは妹たち……ただそれだけです」

そうか……朝潮。君が見せたかった、伝えたかったのは、これだったのか……。僕は思わず目頭が熱くなっていた。

朝潮、君の妹たちへの想い……きつと間違いない……

朝潮「それでは聞いてください!!!」

へ？

すると、軽快な音楽が大音量でスピーカーから流れ始める。突然のことに再び食堂内はざわついている。

皆、驚きを隠せなかった……舞台に立つ彼女以外は。

……というか、今流れているこの音楽は、食堂内を支配していた重苦しい、シリアスな空気とは正反対のものだ。

なんでここで流した!?!そしてなぜマイクを持つ?

この曲は朝潮に頼まれて、僕が購入したものだ。

今や巷で大流行している曲で、ダサカッコいいというキャチコピーが付いているのだが、確かに雰囲気こそ昔っぽいのが、とにかくテンポが良くて、めちやくちやカッコいい

のである。

だが、これはボーカル抜きのインスタバージョンっていうやつだ。

ま、まさか!?

朝潮 『S—S—S. I. S.』

朝潮 『S—S—S. I. S.』

は？

朝潮 『S. I. S.』

朝潮 『頬をさすり泣く霞』

朝潮 『S. I. S.』

朝潮 『疲労困憊の霰』

朝潮 『S. I. S.』

朝潮 『泣き腫らした瞳』

朝潮 『S. I. S.』

朝潮 『本当は限界だった』

朝潮 『瞬く間に私たち だいぶ変化したようだ』

朝潮 『だけれど私はお姉さん』

朝潮 『貴方達の守り神』

朝潮『C, MON, SISTER O☆O☆SIO』  
 大潮「ふあっ!」

朝潮『素敵な帽子を WEARD』

朝潮『C, MON, SISTER A☆RA☆SIO』

荒潮「ひゃん!」

朝潮『大人ぶっている MAIDEN』

朝潮『C, MON, SISTER MI☆TI☆SIO』

満潮「にやっ!」

朝潮『頑張り過ぎて TIREDD』

朝潮『C, MON, SISTER A☆SA☆GU☆MO』

朝雲「ひいつ!」

朝潮『赤髪を素敵に BRUSHED』

・

・

・

朝潮「ありがとうございました!!」

朝潮は歌いきった。妹たちの事を曲にのせて歌った彼女は今、最高に清々しい顔をし

ている。

こうして、怒濤のライブは幕を閉じた。

## 吹雪インパクト

「信じられない…」

今や食堂は満員御礼。そして舞台上に立っている者達を誉め称える歓声と拍手の嵐。

吹雪「な、なんで…こんな…」

ありえない！ありえない！！

…阿武隈さんたちから聞いた。このライブはあの人間が画策したものだ、そして朝潮ちゃんと加古さんが…。

直ぐ様、私はライブの妨害及び朝潮ちゃん、加古さんの救出を提案した。でも、阿武隈さんたちは…。

阿武隈「まあいいんじゃないかな、ヘル・アンカーズは去る者追わず主義だからさ」

鬼怒「そうそう。でもアブが言う、負け惜しみに聞こえる!？」

阿武隈「な、なんですってえ〜!!？」

鬼怒「わ〜!!アブが怒ったあー!!」

理由は分からないが、阿武隈さんたちは私の提案には乗り気ではないようだ。

同様に雲龍さんにも私の提案は断られ、私は何も出来ずにこの日を迎えてしまった。

それでライブを見に来たわけだけど…。

会場に溢れる笑顔！溢れんばかりの笑顔!!!

しかも、それは観客の娘たちだけではない。

吹雪「ばかな…なんで…」

壇上で幸せそうに笑う朝潮ちゃん、加古さん。

見ている私が羨んでしまうくらいの笑顔。

私も見たことのないその笑顔をあの人間が作り出したと考えると、虫酸が走った。

潰してやる。

「えっーと、それでは…祝！ライブ成功ということ…乾杯！！」

僕の呼び掛けに追従するように「乾杯」という声上がる。

僕たちは今、地下牢にて宴会を開いている。ライブという大きな荷が降りたようで、皆一様に嬉しそうな顔をしながら好みのお菓子を頬張り、談笑に興じていた。

長門と陸奥は缶ジュースをそれぞれ一本ずつ手に取ると、執務室に戻ってしまったのでこの場にはいないが、楽しかったそうなので良かった。

宴会も終盤に差し掛かると、朝潮は「ようやく妹たちにちゃんと向き合えそうです」と言って、幾つかお菓子を抱えて行ってしまった。

その後しばらくして加古も地下牢を後にした。「今度一緒にあそぼ」と最後までクルルなイケメンだった加古。うーむ、PMTのお兄さんも可愛いけど、加古も…あるいは…。

川内「なーに考えてんの〜!？」

そんなことを考えていると、後ろから川内に抱きつかれる。へあっ!？」

「せ、川内…!?!ど、どうした!?!」

川内「え〜何が〜!？」

神通「姉さん!？」

那珂「おー!!川内ちゃん、積極的〜!!」

川内のいい匂いに包まれながら、背中に感じる川内の温もり。死ぬ。悶え死ぬ。

「ちよ、川内…」

神通「これ、お酒入ってませんか？」

ばかな!?!僕が買ってきたやつに酒など…あれ?

神通が手に持つて見せてくれた缶にはアルコールと書かれている。

これは…。

川内「やゝ々だゝ!!もつとここにいるのゝゝ!」

「ごめんね、神通、那珂…」

神通「いえいえ…それでは失礼します。…行きますよ!姉さん!!」

那珂「川内ちゃんがご迷惑おかけしました!!今日はありがとねゝ!!」ヒラヒラ  
ふう…。とりあえず、僕も戻るか。眠いし、後片付けは…後日で。

翌朝、僕はパンダになった。

## 余談

橙色に染まる海面。そこに幾つもの大きな水しぶきが上がる。辺りには、けたたましい警報音が轟き、悲鳴や怒号、爆音が鳴り止まない。

ここはとある南の鎮守府。

いつもならば、この時間帯になると沈みゆく夕陽が非常に美しく、その日の任務を終えた艦娘たちが鎮守府の展望席から楽しくお喋りをしながらその光景を眺めているのだが、今日は誰もそこに姿を見せない。

代わりに、鎮守府の母港には多くの艦娘が押し寄せ、次々に出撃し、母港を中心に近海の防衛にあたっている。

暗い。夕陽が沈んだのだろうか。

違う。

「あそこだー！」

誰かが空を指差す。そして、その声を合図に多くの艦娘が指のさされた方向を見上げ、戦慄した。

遠くの方に黒い飛翔体。それが近づいてくるにつれ、脳内に響くような、おぞましい

音が聞こえてくる。

目視できるものだけでも、その数は膨大で、まさに無数と言っても過言ではない。

「迎撃用意！」

対空砲火では間に合わない。だが、やらなければならない。多くの艦娘はここを死に場所と覚悟し、自分を奮い立たせる。

空母からは多くの艦載機が飛び立ち、もはや巨大な闇と化した敵飛翔体に突っ込んでいく。

美しい夕陽が海面に儚く沈んだ時、そこにあつたはずの鎮守府は消失し、瓦礫の山だけが残っていた。

??? 「どういふこと……？」

潮風に髪をなびかせながら、彼女は呟く。辺りには幾つもの煙が上がり、強烈な匂いが鼻をつく。

??? 「…間に合わなかったのね」

彼女の眩きに応える様に、その場に似つかわしくもない間延びした声が発せられる。

??? 「龍田…今の時刻は？」

龍田「え〜つと、一八〇〇ね。…援軍要請の連絡を受けてから一時間も経っていないわね〜」

??? 「…だったら、なんで!!なんで…こんな…」

龍田「叢雲ちゃん…」

叢雲「…クソツッ!これで何回目よ…」

龍田「…敵さんも相当強いみたいね〜。この鎮守府は所属する艦娘も多くて、南の砦と言われていたのに…」

叢雲「なにか六腫よ…! いざという時、まるつきり役立たずじゃない…!」

龍田「自分を責めちゃダメよ〜。それに…まだ」

そこで彼女は言葉を止め、手に持った薙刀を瓦礫と化した鎮守府に向ける。

龍田「私の勘違いかもしれないけど、あそこから視線を感じるのよね〜。…確か、あそこはこの鎮守府の母港だったはず…」

叢雲「生存者ってこと!？」

龍田「どちらかしらね〜。生存者、…あるいは」

叢雲「どっちにしても行くわよ!!もしかしたら、助けられる命があるかもしれない!!!」

そう言うと叢雲は海面を蹴りあげ、猛スピードで進む。龍田もそれを追いかける。

龍田の言っていたところは…ここだ。

叢雲「誰かいるー!?!返事をしてー!!」

辺りには叢雲の声が響くだけで、返事はない。

龍田「叢雲ちゃん、敵さんの可能性もあるのよ。もう少し慎重に…」

叢雲「分かっているけど!!もし、生存者だったら…」

焦る叢雲。

彼女と龍田はここ数日、数多の鎮守府から援軍要請を受け、現場に駆けつけるのだが、時既に遅し。

あるのはいつも煙が燻り、血にまみれた鎮守府の成れの果てだった。

「ZEUS」から召集を受け、六艘のメンバーである彼女らはここ最近の深海棲艦、そして黒い艦娘についての話を聞いた。私たち六艘が召集された…それが意味すること…現状況を物語るには十分だろう。

「ZEUS」の命を受け、私と龍田は南方を中心に、深海棲艦の動向及び黒い艦娘について情報収集を行っていた。

そして、南に展開する各鎮守府には、緊急時には六艘が援軍に駆けつけることが伝えられているのだが…。

叢雲「…また救えなかった」

そう言つて彼女は膝をつく。そんな彼女を支えるように寄り添う龍田。そして、叢雲をなだめようと言葉を掛けようとした時、龍田は感じとつたのだ、鋭い殺気を。

辺りを見回し、警戒する龍田。薙刀を握る手に力がこもる。叢雲もそんな龍田の様子を見て、辺りを警戒し始めた。

龍田「誰かしら？盗み聞きは感心しないわよ？」

叢雲「出てきなさい!!」

返事はない。吸い込まれる彼女たちの声。

静けさが辺りを支配する。

しかしその静寂はすぐに消え去った。

なんと、彼女たちを目掛けて禍々しい形をした巨大な錨が空中から幾つも落ちてきたのだ。激しい音を立て、辺りには砂ぼこりが舞う。視界が開けると、そこには錨が地面に突き刺さっていたが、叢雲も龍田も避けたようで、既に臨戦体勢に入っている。

叢雲「…敵のお出ましみたいね!!」

激しい怒りを目に宿し、叫ぶように言う叢雲。

龍田「すごいわね。じゃあ、私も」

そう言うが早いか龍田は錨に付いている鎖の大元となつているところを見つけ、颯爽

と接近すると、手にした薙刀を振り降ろした。

??? 「ひゅー、危ない危ない♪」

：どうやら敵は腕に巻き付けた錨で龍田の薙刀を受け止めたようだ。

龍田 「お喋りしている暇はありませんよ〜?」

龍田はそのまま振り降ろした薙刀を振り回し、謎の敵に追撃を加えようとする。錨と薙刀が激しくぶつかり合う音が断続的に聞こえる。

叢雲 「あんたがこの鎮守府をやったの!？」

龍田に遅れながら、叢雲は槍を敵に突き立て様と突っ込む。

??? 「あ〜〜! 二体一とかズルいよ!! ま、楽しんでそうだけどね♪」

不気味に笑う敵に怪訝さを覚えながらも、龍田と叢雲は互いの武器をふるう。

叢雲 「質問に答えなさい!! あんたがこの鎮守府を…」

そのまま言葉が続けようとした時、叢雲は背後に忍び寄る気配を感じた。そして、振り向き様に槍を突いたのだが、どうやら敵も相当の手練れな様で、刀で彼女の槍を横に流していた。

??? 「よく分かりましたね? 私のこと」

叢雲 「…!」

なんとか槍を振り回すが、敵は刀で軽く槍を流してしまうのだ。

叢雲「くっ！」

やはり槍は突きに限るのだが、相手もそれを知っているのか、なかなか隙を与えてくれない。

???「まさか私の妖刀『風舞』と渡り合えるのがあるなんてね。嬉しいな」

叢雲「ふざけないで!!」

大きく槍を振り回し、間合いを取る。どうやら龍田も敵から距離を取ったようだ。そして、叢雲と龍田は互いに背中を合わせる。

叢雲「…強いわね」

龍田「そうね、けどこれが黒い艦娘っていうやつなのね。少し情報が欲しいわ」

叢雲「…そうね。早く倒しましょう」

再び、敵に意識を集中させる。しかし、その対峙している敵は思いがけないことを口にした。

???「あーあ、そろそろ帰投しないと…」

???「むー、せっかく好敵手に会えたと思ったのだが、楽しい時間はすぐ過ぎるのだな

…」

叢雲「なっ!?待ちなさい!!」

龍田「…逃がすと思っっているの〜?」

二人は直ぐ様、追撃を加えようとしたが、どちらの敵も跡形もなく姿を消してしまった。まるで、霧のように。

叢雲「……わけが分からないわ」

龍田「ええ」

叢雲「……とりあえず一度、本部に戻りましょ？」

二人は再び静けさを取り戻したその場から撤退する。

しばらくして叢雲が振り返ると、守れなかつた鎮守府が恨めしそうにこちらを睨んでいる気がした。

静かに、大きな決戦への火蓋が切られたのをまだ僕は知らない。

## 吹雪インパクト2

静かな朝。

この部屋もだいぶ変わったなと思いつながら、身仕度をする為、おもむろに立ち上がる。部屋だけではない。ここに初めて来た時、僕は一人きりだった。それが今はどうだろう。

川内、神通、那珂。朝潮に加古、そして長門と陸奥も僕に朗らかな笑顔をを見せてくれるまでになった。

…自分でも無茶な話だと思っていた…見えない何でも屋なんて。

だけど、皆が協力してくれたおかげで、僕はここにいることが出来る。

さて、今日は何をしようか？そんな事を思っていると…。

コンコン

ドアをノックされる。

僕が返事をする、川内が少し青い顔をして入ってきた。

川内「おはよ〜」

「おはよう。…なんか顔色悪いけど大丈夫？あ…」

川内「うーん、頭が痛いけど、平気だよ…」

これは…。昨日の宴会にて、僕の用意した物の中に凶らずも酒の類いがあつたのだが、どうやら川内は二日酔いにあるらしい。

「ごめん、川内…」

川内「大丈夫だよ…それよりこれ」

「ありがとう、いつも悪いね」

こんな時でも、川内は朝食（塩むすび）を持ってきてくれるわけだが、さすがの川内も調子が悪いようで…。

川内「ごめん…少し横になってもいい？」

僕がそれを断る理由もなく、僕の返答を聞いて川内はすぐに横になり、寝息を立て始めた。

ふう。すまないな、川内。

…実を言うと、ライブ開催が決まった頃から見えない存在に無理を感じていたのは否めない。僕が言い出しついでに始まった事なのに、結局下準備などを全て川内たちに任せってしまったことが心苦しくてたまらないのだ。

…かと言って、僕の姿が露になれば、間違いなくその場が阿鼻叫喚に包まれるだろう。…皆がみんな川内や加古みたいにフレンドリーなわけではない。どうしたものか…。

ふと、川内を見る。

スースーと寝息を立て、眠っている顔はとてもかわいい。癒されるな…。

つついその頭を撫でたくなる衝動に襲われるのだが、イカンイカン。僕は頬をパチンと叩くと気合いをいれることにした。そして、とりあえずパソコンでも開こうとしていた時…。

…なんだ？

何やら騒がしい。こんな朝方に誰だ？

聞き耳を立てていると、どんどんその騒がしきは増すばかり。ついでに複数人が廊下を歩いてくる音がだんだんと大きくなり、この部屋に近付いて来ているのが分かる。

珍しいな…この廊下はあまり人通りがない。だからこそ今までばれなかったというのもあるのだろう。

それこそ、ここに来るのは川内や…あれ、なんか嫌な予感がしてきた。胸騒ぎがする。

もう一度聞き耳を立てる。それこそ耳に全神経を注ぐがの如く。

先程まで、誰が話しているのかも判別出来なかったが、近付いて来ていることもあり、辛うじて話の内容が聞き取れる。

吹雪「さあさあこちらですよ！皆さん、素敵なものをお見せしましょう!!」

「全く！まだ眠いんだからよー。見たらさっさと帰るからな？」

「私は楽しみネー！！ブッキー、一体何を見せてくれるんデスカ!!」

吹雪「フフフ、着いてからのお楽しみですよ…」

??? 「私も楽しみです」

吹雪「無理言つてすみません！朝は鍛練がお忙しいかと思つたのですが、ぜひ見ても  
らいたくて…」

??? 「大丈夫ですよ」

??? 「もおー、まだ着かないの!? 鈴谷まだ寝てたいんだけどなく!?」

吹雪「もうすぐですよ!…ほら、ここですよ!」

??? 「吹雪ちゃん、この部屋？」

吹雪「うん!」

おい！おいおいおい!!!

吹雪の野郎、やりやがった!!!

吹雪の連れてきた一行は、このドアを挟んだ直ぐのところにいる。

僕はパンダじゃねえ!!!

どうする、どうすればいい!!!?

吹雪「それじゃあ、開けますか！」

無慈悲な言葉が僕の耳に聞こえてきた。

## 吹雪インパクト3

??? 「あ、おい！待てよ！」

吹雪 「どうしたんですか、摩耶さん？」

摩耶 「…まさかドツキリとかじゃねえだろうな」

吹雪 「ち、違いますよ！」

金剛 「Ohー！摩耶は案外怖がりネー！」

摩耶 「なっ!?金剛テメー！違うわ!!」

??? 「二人とも落ち着いてください」

鈴谷 「ふああ…早く帰りたいな」

…どうやらドアの向こうでは吹雪たちが揉めている様だ。この間になんとか身を隠せる場所はないかと、部屋の中を見渡す。

だが、この部屋…多少の生活感は出てきたものの、未だに殺風景、つまり物があまりないのだ。

巨大な真つ青の鬼に追いかけられたら隠れる定番のクローゼットはおろか、机さえないのだ。こんな場所に身を隠せる場所なんて……………。

川内「ZZZ」

あ。

吹雪「大丈夫ですよ！ドッキリなわけないじゃないですか…」

摩耶「ほ、ほんとだな？信じるからな!？」

金剛「ハア〜。怖がりな帰つたらいいネ!!」

摩耶「…テメー」

???「…埒がききません。開けてください、吹雪さん」

吹雪「はい!」

そう言われ、勢いよくドアを開ける吹雪。

いるはずだ、ここにはあの人間が…。

吹雪の考えでは、ここにいるであろう人間を金剛たちに見せ、不審者としてゴコゴコにしてもらう作戦だった。

摩耶、鈴谷、翔鶴、金剛は度合いは違えど人間に憎しみや怒りを抱いている。そんな

彼女たちが人間を見つけたら、あの人間が何を言ったところで間違はなくやつつける事が出来るだろう。

吹雪は勝ち誇った顔を浮かべていた。だが、その表情は次第に曇り始め、焦りへと変わる。

吹雪「な、なんで…!？」

居ないのだ。ここにいるはずであろう人間が。

摩耶「なんだよ！川内が寝てるだけじゃねえか！」

鈴谷「川内のサボリ部屋を見つけたってことー!?!んー、なら鈴谷も今度ここでサボらせてもらおうかな…」

翔鶴「そんな事を言うものではありませんよ?…それに川内さんも別にサボっているわけではないでしょう」

金剛「そうダネー！今は出撃の時間じゃないし…ブツキーはこれを見せたかったんですか？」

吹雪「ち、ちがつ…」

摩耶「あーあ！なんだよ!!朝早く起こしやがって!!もう帰るからな!!」

鈴谷「鈴谷もー。早く帰って二度寝決め込もーつと」

吹雪「ま、待って…」

吹雪の呼び掛けもむなしく、摩耶と鈴谷は部屋を出て行ってしまった。翔鶴と金剛も残ってはくれているが、何故川内の寝ているところを見せられたのか不思議に思っているようだ。：吹雪の親友である睦月が心配そうな顔をして吹雪に声を掛ける。

睦月「：大丈夫？吹雪ちゃん？」

吹雪「・・・」

失態だ。先に自分一人で下見をしてから皆を呼びに行けばよかった。吹雪は自分の浅はかさを悔やむ。

しかし、あの人間はどこへ???

今、僕は布団の中に息を潜めている：それも生暖かい温もりを肌を感じながら。

もうここしかないのだ。僕は吹雪がドアを開ける前に、川内のいる布団の中へ滑り込む。しかし布団も大きいわけではないので、かなり川内に密着しないと体が見出

してしまいそうなのだ。

言い争っている声が聞こえ、誰かが部屋を出ていった様だが……まだ人の気配がする。

もう少しこのまま……と僕が思っていた時に川内が寝返りをうった。

川内「……ん！」

……………。

手の平に柔らかい感触。こ、これは……………。

しかも寝返りを打たれたせいで、先程より、その、なんと言うか……密着度が増したのですが。

川内「……ッ／＼／」

さつきから川内の体と僕の体が触れあう度に、川内が喘ぎご……色っぽい声を出すので、僕は自分の理性を保つのに必死になっていた。

金剛「……なんか、川内、変じゃないデスカ??」

翔鶴「具合が悪いのでしょうか?心なしか顔が赤いような……」

吹雪「川内さん……」

金剛「もし熱があったら大変ネ。様子を見てみた方がイイヨ!!」

翔鶴「そうですね……。体を冷やすといけませんから、しつかり布団も掛けてあげま

しょうか」

絶体絶命のピンチが今、まさに僕の目前に迫ってきていた。

## 吹雪インパクト4

目は口ほどに物を言うという言葉があるが、もちろん目だけに限った話ではない。要は、わざわざ口に出さずとも自分の感情を伝えることは概ね可能ということだ。

それこそ鈍感な者でなければ、目を見開き、歯を剥きだしにしている姿を見て、どんな感情を相手が抱いているかなど、容易に理解できるはずだ。

…最も、それをあまりに敏感に感じすぎると、どこかの誰かさんのように自分の伝えたいことを伝えられなくなったり…おっと話を元に戻そうか。

僕の眼前には、艦娘が四人いた。

一人はよく見知った顔だ。

…やつと見つけた獲物をようやく仕留められることに興奮を覚えながらも、それをなんとか隠そうと口到手を充てているが、やはりその高揚感を隠しきれないようで、溢れ出す笑みを堪えきれず、小刻みに震えている様だった。

そして顔見知りというわけではないが、ライブの際に見掛けた例の巫女服の艦娘は、カツと目を見開き、歯を剥き出して明らかに敵意を僕に向けている。

…長門の人形劇を子どものように楽しげに見ていた者と同一だとは思えないほどに。

そして、もう一人の艦娘は巫女服ほどではないが、嫌悪感を抱いていることは、まず間違いないだろう。

まるで汚物を見るかのような蔑んだ顔をし、その背には誰だろうか…その者を庇うかのように立っている白髪の艦娘。

川内「ZZZZ…」

川内「いいいいいい!!! たーすーけーて!!!」

金剛「…川内に何をしていたネ?」

鋭い目付きで睨まれる僕。

「…」

分かっているさ、こんな時に何を言っても無駄だということは…。沈黙は金な…。

金剛「答えるネ!!!」

「…えっと、あの、その」

前言撤回。あまりの迫力に押され、僕はしどろもどろになりながら何とか弁解しようと試みる。だが口が乾いて、上手く喋ることが出来ない。

吹雪「…不審者ですネ!! 捕縛して、痛めつけてやりましょう!!?」

もはや隠すのを止めたのだろうか、場に似つかわしくない爛々とした表情を浮かべる

吹雪。

翔鶴「…睦月ちゃん、とりあえずこの部屋から出ましよう？」

睦月「・・・」

…巫女服と吹雪の後方では、何やら白髪がその背に隠れる睦月？という艦娘に話をしている。

そして、ガクガクと肩を震わせながら、白髪の娘に支えられる形で睦月という艦娘が部屋を後にした。

一瞬見えたその顔は、恐怖に怯え、悲痛に満ちている様だった。

…やはり、これがこの鎮守府における駆逐艦の現状なのかもしれないな。吹雪や朝潮が例外だった感は否めない。あ、つてことはこの巫女服もそうなるのか…。

金剛「ブツキーの言う通りダヨ!!Hey!!オマエは何者ネ？」

「・・・」

…やばい。

ここ最近まで艦娘たちと仲良くしてきただけに、ここまで敵意を向けられると、なんだか虚しくなる。

…そして、怖い。

金剛「…まあイイヨ？これからじっくり聞かせてもらおうから!!!」

一向に無言を貫く僕に痺れを切らしたのか、そう言つて巫女服が僕の方へ突進してき  
た。

怖い！怖すぎる!!ヒエー!!!

「せ、せせ川内!!起きてくれ!!!」

川内「んんゝまだ眠いんだからあ……」

どこの隻眼だ貴様!!!

そんな悪態を心の中でついている合間に、巫女服は僕の懐に突っ込んで来たかと思え  
ば、思いっきり僕を押し倒し、馬乗りになる。

あれ、この光景、どこかで……。

金剛「さあ！吐くネ!!…もしかしてスパイかなんかデスカ!!!」

そう言つて胸ぐらを掴まれる僕。

頼みの川内は一向に起きる気配はない。巫女服の迫力に押され、叫ぶことも忘れてし  
まっていた。

そして不意に、足に痛烈な痛みを感じる。

吹雪「ハァゝ、愚かですね！本当に愚か!!!こんなところで虫けらの様にコソコソして  
恥ずかしくないんですか!？」

…巫女服のせいで足元が見えず、断言することは出来ないが、おそらく吹雪が僕の足

を蹴つたのだろう。

「う、ぐう……」

どうする!?! どうしたらいい!?!?

金剛「……一発、ぶん殴つた方がイイ? そしたら吐くカナ?」

おい! いくらなんでもやり過ぎだろ!!!

金剛「それが嫌なら早く喋るネ!?! オマエは誰で、何が目的ネ!?!」

吹雪「聞くだけ無駄ですよ!! 早くぶっ飛ばしちゃいましょう!?!」

おお、神よ……。願わくは川内を目覚めさせ給へ。

川内「ZZZ……」

ぴやあああああああああ……。

金剛「……覚悟するネ」

そう言つて、僕の胸ぐらを掴む手に力がこもる。

ま、待つてくれ、待つてください!!! ちよつと誰かー!!

コンコン

突然のノック音。今にも殴りかかりそうだった巫女服は、扉の方を凝視している。

そして、誰かが部屋に入ってきた様だが、例の如く巫女服が邪魔でそれが誰なのかは

分からない。

朝潮「おはようございます!!」

この部屋の空気に似合わない、元気な声がこだまする。そして、その声にどれだけ僕が安堵したのか。

吹雪「…朝潮ちゃん」

朝潮「…え!!ふ、吹雪…ちゃん!?!それに、金剛さんも…一体どうしたんですか…!!」

朝潮「何をしているんですか!?!金剛さん!!」

金剛「へ?朝潮?どうしたネ!?!」

朝潮はそう言つて、金剛を押し退ける。…と言うかこの巫女服は金剛と言うのね…。

朝潮「大丈夫ですか?」

朝潮は僕の手を取ると、心配そうな顔をしていたが、僕が大したことはない事を伝えると安堵した様だった。

だが、その穏やかな表情は厳しいものに変わり、金剛たちの方を見る。

朝潮「どういふことですか!金剛さん!吹雪ちゃん!」

吹雪「あ、朝潮ちゃん…」

吹雪が驚いたのは無理もない。今までに見たことのない朝潮の怒りに満ち溢れた顔。しかもそれがあの人間にでなく、吹雪に向けられているのだから。

金剛「ど、どうもこうもないヨ!!」

そう言つて金剛は朝潮に事の経緯を説明した。

そして、大雑把に説明し終わつた金剛はこれで朝潮も納得しただろうと思つた様で、勝ち誇つた顔をして、再び僕の方へ向き直る。

金剛「さあて、どうしてやろうカナ…」

朝潮「何を言っているんですか!!」

朝潮がこれでもかというくらいに顔を真っ赤にして言う。

金剛はビクリとし、朝潮の顔を怪訝な顔で見つめる。

そこには凜とした顔をする朝潮がいた。…ほんの一瞬、本当に一瞬だったが、寂しげな表情を浮かべていた様にも思えたのだが、気のせいだろうか…。

そして朝潮は言い放つたのだ。

朝潮 「この人は川内さんの恋人です!!!」

## 朝潮インパクト5

金剛「川内!! 恋人ってどういうことデスカ!!?」

川内「・・・」

…聞いた話によれば、昨夜、私は宴会でお酒を飲んでしまった様だ。なるほど、それなら確かに今朝から少し具合が悪かったのに合点がいく。それで、私はアイツにいつもの様に朝ごはんを届けて、少しここで休ませてもらうことにしたんだ…うん、ここまでは特に問題はない。

…で、起きたら何故か朝潮や吹雪、さらには金剛が居て、それを「なんで?」と疑問に思ったわけだけ…。

目を丸くした金剛が私の方へ詰め寄ってきて、金剛は神妙な顔で…その、と、とんでもないことを私に言ったのだ。

金剛「もう一度聞きマース!! 恋人ってどういうことデスカ!!?」

川内「・・・」

私が聞きたい…。

吹雪「…川内さん、そこまで落ちぶれましたか」

へ?なんでそんな冷たい顔を私に向けるの?

朝潮「・・・」

「・・・」

私起きてから一言も発しない二人。しかも、私が目を合わせようとすると朝潮は目を伏せてしまい、アイツは黙って一礼してきた。

状況が読めない。いや、吹雪がいるから何かあったと考えるべきか…?

金剛「:黙っているのは、なぜ?ま、まさか…:本当なのデスカ!?アンビリーバボー!!!」

:一人で興奮している金剛。そんな彼女を尻目に、私はとりあえず、何があったのかを聞こうと口を開こうとした。まさにその時だった。

朝潮「川内さんは…:この人のことどう思っているんですか!?!」

川内「うえ!?!」

思わず変な声が出てしまう。朝潮が顔を真っ赤にして、アイツのことを指差しながら、叫ぶように言う。

:指差された当の本人は、何かを悟ったような顔をしている。

川内「な、ど、どうって…:そんな、私は…」

おかしいな、上手く喋れない。

少し深呼吸でもすれば落ち着くだろうか…。

でも朝潮はそんな暇を与えてくれず、更なる爆弾を投下してくる。

朝潮「川内さんは好きなんですよね!?…分かります!分かりますよ!分かりますとも!!!」

朝潮は目を閉じ、胸に手を充てながら、まるで朝潮本人が自分を納得させる為かのように繰り返す。

朝潮「…自分の気持ちにちゃんと向き合って下さい!」

あれー、朝潮ってこんな感じだっけ?

「. . .」

おかしい!おかしいぞ!!!なんか展開がおかしい!

朝潮が金剛を押し退け、僕を窮地から救ってくれた。

これは非常に助かった。九死に一生を得た。

…で、どうしてそうなった!? 朝潮。

朝潮のトンでもない爆弾発言により、その場が時間が止まったように凍りついたのは言うまでもない。

川内が起きていなかったのは、幸いか…?

な、なんで? どうしてそんな嘘を…ハッ!?

いや! これは朝潮の策略か!? …そうか! そうに違いない!

ふう、朝潮…: 君は見かけによらず策士だな。

おそらく、これは朝潮のはつたりだ。大分、川内が被弾することになるけど、それは尊い犠牲ということだ…。

…少なくとも、この発言によつて僕が川内にいかがわしいことをしていた不届き者というレッテルは剥がれたはずだ。

まあ一時しのぎにしかならないけど、それをどうにかするのは僕のやるべきことだし…。

ありがとう、朝潮!!! ここからは任せてくれ!!!

…って思ってたんだけど、なんか思っていたより、朝潮に熱が入っているんだよな。  
それこそ、リアルに川内が僕と付き合っていると朝潮が思っているのではと疑うほど  
………え？

ま、まさか、本当に僕と川内が恋人同士だと思っているわけじゃないよね!?

朝潮「私はあれ以降思ってたんです!!ちゃんと気持ちを伝えなきゃって!!!ちゃんと向き合おうって!!!」

それはそれは饒舌に語る朝潮。ええ…。

川内は硬直しているし、あの吹雪や金剛でさえも朝潮に圧倒されている様だった。  
あの、朝潮…君、そんな感じだったっけ？

朝潮「やりましょう！やるしかないんです！！出来るかな？じゃない！やるんだ!!!」  
もはや朝潮の独壇場。

あー、朝潮が暴走しているよ。誰か止めて…。

すると、不意に手を握られる。へ？

朝潮「やりましょう！」

そこには目をキラキラと輝かせている朝潮がいた。

手は…すごい力で握られている。

ごめん、途中から何を言っていたのか分からなくなっていたけど、何を？

朝潮「懇談会、やりましょう!!!」

あ…ありのまま、今起こった事を話すぜ!

「僕は、朝潮が川内に自分の気持ちに素直になれと説いていたと思っただら、いつのまにか懇談会を開くことになってしまっていた」

な…何を言っているのかわからねーと思うが、僕も何が起きたのか、わからなかった  
…頭がおかしくなりそうだった…川内の忍術だとか吹雪の謀略だとか、そんなチャチな  
もんじやあ断じてない。もっと恐ろしいものの、片鱗を r y

## 朝潮マジック

川内「だから！私とコイツは…その、そういう関係じゃないから！」

「アツハイ」

金剛「Oh…そうデシタか…ツマラナイネ」

朝潮「・・・」

一人部屋を飛び出していく者もいたが、僕たちは概ね懇談会を近日中に開催するとうことで話を着け、それでは閉廷！解散！となるはずだったのだが、金剛がそこに待ったをかける。

そして、再び蒸し返される川内と僕の恋人疑惑。

川内がものすごい勢いでそれを否定するので、若干傷心気味なのは僕だけの秘密だ。

…それにしても、いくら起死回生の一手とは言え、僕と川内を恋人同士に仕立てあげるとは…。僕はその理由を朝潮に聞かずにはいられなかつた。

「助けてくれてありがとう、朝潮。感謝してるよ。だけど…なんでまたそんなことを？」

朝潮「…ごめんなさい」

僕が目を合わせようとすると、朝潮は目線を下に落としてしまった。

…可哀想なことをした感は否めない。

朝潮「でも…聞いてみたかったです！だから、ついあんなことを…」

急に顔をあげたかと思えば、そんなことを言う朝潮。

そしてすぐ、顔を真っ赤にして俯いてしまう。

そりゃ善かれと思つてやつたことを問い詰められたら、嫌だよな、うん、配慮が足りなかつた。

きつと朝潮は自分のやつたことを恥じてしまつているのだろうか…これではまた朝潮が自分を追い込んでしまうかもしれない。

命の恩人に対して、僕は何をやっているのだろうか。

ここが男の見せ所よオ!!!

「僕は川内のこと大好きだよ」

川内「ブツ!!」

朝潮「…!」

金剛「Wow!!」

「さらに言えば、朝潮のことも大好きだ。…神通に那珂、長門、陸奥、加古も！みんな大好きさー!」

嘘は言っていない、恋人っていう意味ではないけど…。

これで、この話は「なんだよそれー！」的な感じで流れてくれるはずだ。そうすれば後腐れなく終われる！

…あれ？

川内「…バーカ」

朝潮「…」

金剛「What the fuck!?!」

各々の反応は異なったが、川内と朝潮は無言で部屋を出て行ってしまった。川内はなんか言ってたような気もするけど…。あれ!?何か間違えたかな!?

金剛「…とんでもないヤツだネー!まさか、川内以外にもそんなに恋人が居たとは…  
ビククリネ!!」

は？

いや、違うわ!

金剛「まあ、長門たちが信用しているのなら大丈夫なのカナ?とりあえず、よろしくネ!ワタシは金剛デース!」

そう言つて、手を差し出す金剛。これは…つまりそういうことだよな。

…握り潰されないよね?

おずおずと手を差し出すとしっかり握られる僕の手。

そして、ニヤニヤしながら金剛が僕の恋愛事情について、いろいろ質問してきたのは、ある意味必然だった。

## 運命の日

その日は……その日の朝は本当に静かだった。

「悪いね、川内、朝潮！今日の懇談会に必要なものがまさか当日に届くとは思わなかったよ……」

川内「……軍の検閲があるんでしょ？しようがないんじゃないの？」

朝潮「はい！それに今から準備すれば全然間に合うと思いますし！」  
「ありがとう……おつ、来た来た！あれかな」

まだ多くの艦娘は眠っているであろうこの時間帯に僕と川内そして朝潮は、今日の懇談会に必要な物品を受け取る為、鎮守府の門のところまでまだかまだかとその到着を待っていた。

川内「……にしても、本当に集まるのかな？一応、神通と那珂は来てくれるみたいだけれど……」

朝潮「うーん、どうなのでしょう？私もいろいろと声を掛けてみたのですが……あ、ちなみに震が来たいということだったので、とりあえず、三人は確保出来たという感じでしょうか？」

「え?!大丈夫なの?!朝潮の妹ってことは駆逐艦だよね!」  
以前見た睦月という駆逐艦の怯え様。

…駆逐艦の多くは人間に相当の恐れを持っているみたいだし、朝潮が以前話してくれたことや彼女の妹たちに対する想いを考慮すれば、彼女の妹たちは来ないだろうと踏んでいたのだけれど…。

そんな僕の考えを察してか、朝潮が付け足す。

朝潮「…もちろん、私としては妹たちを参加させるつもりはありませんでした。私が言い出しつぺの懇談会ですが、もし無理に妹たちを参加させて発狂でもさせたら…と思うと…」

「…朝潮」

朝潮「でも、霞が私の変わりようを不思議に思っていたようで…今までのこと、ついつい話しちゃったんです。…そしたら、会ってみたいということだったので…ごめんなきゃ」

「いやいや!ありがとう!…僕も慎重に接してみるよ」

朝潮「…はい!」

川内「つと!オーライ!オーライ!」

僕と朝潮が話をしている間に、お待ちかねのものは僕たちの目と鼻の先と言える程の

距離まで接近していた様で川内がトラックをしつかりと停車出来るように先導をして  
くれている。

さて、それじゃあ荷物を受け取って、早く懇談会の準備に取り掛かるとしますか！ま  
ずは会場のセッティングと、後は……。

だがそう思っていた矢先、突如としてその車輛はアクセルを吹かしたかと思えば、鎮  
守府の門へと突っ込んで来るではないか。

川内「避けて！」

川内の叫び声にハッと我に帰るが、猛突進してくる銀の塊を前に僕の足は完全にすく  
んでしまっていた。

朝潮「こつちです!!!」

静かな朝に響き渡る大きな衝突音。

元々崩れかかっていた鎮守府の門は、最早見る影もないほどに破壊され、辺りには煉  
瓦が散乱している。

僕はすんでのところで朝潮に腕を引っ張られ、辛うじて轢死することはなかったが、  
後少しでもタイムイングがずれていたらと思うとゾツとした。

川内「だ、大丈夫!？」

川内が血相を変えて駆け寄って来る。

「大丈夫だ！朝潮が助けてくれた!!」

川内が差し出す手を取り、起き上がる僕と朝潮。

「助かったよ、朝潮！」

朝潮「いえ、無事でよかったです……」

その場に居る全員が、お互いに無事であったことにホッと胸を撫で下ろす。

だが、これは一体!?

「……そうだ！トラックは!？」

……見ればトラックは、門を突き破って進んだあげくに鎮守府の一角に突っ込むという形で停車している。

事故か!?

僕は急いでトラックの潰れた運転席の方へ向かうと、必死で声を掛ける。

「大丈夫ですかー!？」

返事はない。

川内「どういふこと!?!事故!？」

朝潮「……とりあえず私、長門さんたちに知らせてきます!」

そう言つて、朝潮は駆け出す。

僕と川内は共にその場に残り、生存は絶望的とも思える運転手に呼び掛け続けるが、

反応はやはりない。

返事をしてくれ!

そんな思いから叫び続ける僕だったが、依然として沈黙を貫く運転席。

だが突然、そんな必死な僕たちを嘲笑うかの様な笑い声が、ペしやんこになった運転席側からではなく、荷台のコンテナ付近から発せられる。

僕も川内も何事かとコンテナのところを凝視するが、次の瞬間、大きな音をあげ、その銀に輝く扉が乱暴に開かれる。

かと思えば、見知らぬ者達が満面の笑みを浮かべながらコンテナから降りてくるではないか。

「な、なっ……」

言葉が出てこない。目の前で何が起きているのか把握することが出来ない。

直立不動、機能停止となってしまう僕に対し、川内は緊迫した表情を浮かべ、その者達を睨み付けている。

??? 「あー! やつと出られたっばい!! この中は暗いし、臭いし……もう二度と入らないんだから!!」

??? 「……ふふ。同感♪でも夕立! 見てよ! 壊し甲斐のある鎮守府だよー!? それに! いきなり戦える相手が目の前にいるじゃない♪♪村雨頑張っちゃうぞー!!」

夕立「あーダメダメ!!! アイツは夕立がやるっぽい!! 村雨はあその人間をやるっぽい!!!」

村雨「だゝめ!」

夕立「ズルいゝゝ!!!」

お、女の子…? な、なんで…?

川内「…ツテ」

そんな訳の分からない二人の訳の分からないやり取りを呆然と眺めている僕に川内が何か言っている。

だが、何と言っているのかを聞き逃してしまったので、聞き返そうとしたその時。

川内「走って!!!」

気付いた時には、川内…:川内が普段見る姿とは異なる姿に変身し、その得体の知れぬ者達に突っ込んでいたのだ。

…おそらく、これが彼女を含め、艦娘が深海棲艦と戦う時に見せる姿なのだろう。

だが、その交戦している敵は昔テレビで見た深海棲艦なのだろうか。

…むしろ、その姿形からして人間もしくはわ艦娘と瓜二つと言っても過言ではない様に思える。

「せ、川内!!!」

僕は震える声でその名を呼んだが、もちろん返事は返ってこない。

代わりに聞こえてくるのは、普段聞いたことのない川内の怒声。それを嘲り笑う者達の気味の悪い笑い声。そして、激しくも鈍い、金属と金属がぶつかりあう音だけだった。

今すべきことは……この事を誰かに知らせることだった。

あの時……雲龍に川内が組伏せられていた時とは比べられない程の状況。

あの時の様に、僕が加勢すれば、おそらく待っているのは二人の死だけだろう。

僕は走り出していた。

朝潮「長門さん！陸奥さん!!大変です!!!」

私は執務室に転がるようにして駆け込む。息をするのも一苦労だが、そんなことを気にしている場合ではない。

すると今まさに、この執務室を出ようとしていたのだろうか：緊迫した顔の長門さんと陸奥さんがいて、もう少しのところまで衝突しそうだった。

長門「どうした!? 一体あの音は!?!」

陸奥「敵襲!?!」

朝潮「：いえ!とら：つ、トラックが鎮守府の門を破つて、それから：と、とにかく来てください!!!」

私は長門さんと陸奥さんを無理やり引つ張る様にして、あの場へと急ぐ。

長門さんと陸奥さんが居れば、あるいは：。

そして、私は驚いた。

二人をあの場合へと急かす私は、執務室を出たすぐの廊下の角で危うく誰かとぶつかりそうになった。

私達も急いでいたが、相手も相当急いでいた様で、肩で息をしている。

そして、その人物は私達を見るなり、こう叫んだのだ。

「敵襲だ!!!」

川内「くっ……!!」

夕立「あーあ！つまらないっぼい！全然、相手にならないよ」

村雨「そう？村雨は少しづつ痛めていくの好きだなく♪ま、もう飽きちゃったけどね  
！」

強い…強すぎる!!

アイツを逃がすだけじゃなく、敵を鎮圧することが出来たら…というのは私の甘え  
だったようだ。

敵の懐に痛烈な打撃を何度打ち込んだことか…私の格闘術は全く通用しなかった。

とりあえず、間合いを取る為に、敵の服を掴んで、勢いに任せて背負い投げを試み

る。

敵は投げ飛ばされ、地面に叩きつけられるが、すぐに立ち上がり、ニコリと微笑んでくるので、私が戦慄したのは言うまでもない。

今まで戦ってきた深海棲艦が可愛いと思える程に相手は強かった。

そして分かるのだ。悔しいけど相手は…手を抜いている。

最早、近接格闘でどうにかなる相手ではなかった。

それなら…もうこれしか!!

私は敵に砲門を向け、構える。

ここで砲火することの意味。それはこの鎮守府を戦場に変えるということだ。

ここはいつもの大海原ではないのだから…。

でも、それをしなければいけない状況なのだろう…。

川内「いつけえええええええ!!!」

私は叫びながら、相手に砲弾を撃ち込む。

爆発音。大きな大きな耳をつんざく様な爆音が辺りにこだまする。

砂埃が舞い散り、まるで煙幕の様だ。

私は一時的に視界不良になるが、その砂埃が次第に落ち着き、その目に映ったのは…。

夕立「…本当につまらないっほい！」

村雨「ふう…そろそろおしまいにしてあげるね♪」

多少艤装が剥がれた程度、これだけの至近距離で砲弾を受け、痛がる様子も見せず、その者達は立っていた。

ここまでくると、笑いが込み上げてくる。

その一人が、一体どこから出したのだろうか…錨の様なものを携え、私を狙っているのが分かった。

私は大きく息を吐くと、静かに目を閉じる。

頭に浮かぶのは、神通に那珂、そしてアイツの顔。

川内「ごめん…ここまでみたい」

静かに呟くと、生を諦めるという考えが私の中に溢れだした。

そんな私の耳に聞こえてきたのは、敵の笑い声…ではなく…。

『敵襲！敵襲！！総員、戦闘用意！！繰り返す…』

鎮守府内にけたたましいサイレンの音と長門さんの必死の呼び掛けがこだまする。

村雨「お！いいね！待ってましたあ！！」

夕立「やった！やったあ！！遊べるっばい！！」

ああ、アイツが朝潮が長門さん達に伝えてくれたんだな…。

そつと目を開けると、敵が先程よりさらに嬉しそうな顔をして、ハイタッチをしたり

と喜んでいる様子が目に飛び込んでくる。

村雨「じゃ♪村雨と夕立どっちが多く破壊できるか勝負ねー！ここは夕立に譲ってあげるー！！」

夕立「ふん！負けないんだから！」

そう言つて、村雨という奴が鎮守府の正面玄関のところから堂々と入つて行こうとする。…なめるな！！

…ここで逃がしたら、皆が殺されてしまうかもしれない。なら、私のやることは……！！！！

川内「行かせるかあああああああ！！！！」

私は最後の突撃を仕掛ける。体がどうなろうと構わない、ただせめて少しでも時間が稼げれば……。

川内「うおおおおおおお！！！！」

夕立「貴方の相手は夕立っぼい！」

川内「ぐあっ?!」

私は横から強い衝撃を受け、鎮守府の壁に叩きつけられた。

きつと夕立に蹴られたのだろう…脚を蹴りあげたまま笑っている夕立をかすれる目で見る。

蹴られただけでここまで飛ばされる、普通!?

…衝撃のあまり口からは血が出てくるし、全身が痛い。

うづくまる私を笑顔で見つめる夕立。諦めて、このままうづくまっていたい。でも…  
私は立ち上がる。

たとえここで死んでも…私は!!!

陸奥「川内から離れなさい!!!」

朝潮「大丈夫ですか!?!川内さん!!!」

そこへ聞き慣れた声が聞こえてくる。

声が出た方を向くと、霞んだ目ではぼんやりとしか見えないのだが、何人か私の方へ駆け寄ってくる姿が見えた。

そして、私もその方向へ歩みだそうとすると、体が言うことを聞かず、倒れ込みそうなる。

「大丈夫か!?!」

私は誰かにそっと抱き抱えられた様だ。でも、もう目が霞んでその姿を見ることは叶わない。そして、瞼が重くて、目を開け続けることが出来ないのだ。

「もう大丈夫だ」

そんな声を聞いたところで、私の意識は途絶えた。

陸奥「貴方は川内を連れて、入渠施設へ行きなさい！」

朝潮「…行つて下さい！」

「…頼む！」

僕は川内を背負うと、そのまま入渠施設へと走る。

ここに辿り着くまでに、朝潮からざつと入渠の意味と入渠施設の場所は教えてもらった…入渠、それは傷ついた艦娘を治療することらしい。

情けないことに、僕はその存在を今日初めて知ることになったのだが、とにかく走らずにはいられなかった。

とにかく一刻も早く川内をそこへ連れていかなければ！

陸奥「…なかなか手強そうね」

朝潮「陸奥さん…」

陸奥「…大丈夫よ、朝潮。貴方は私が戦っている間に逃げなさい」

朝潮「なっ!?!…だ、大丈夫です！私だつてこの鎮守府の一員なんですから！ちゃんと戦います!!!」

陸奥「何を言っているの!?!川内がやられたのよ!?!早く逃げなさい!」

朝潮「嫌です!!!」

夕立「あー！ごちゃごちゃうるさいっばい！行くっばい!!!」

そんな陸奥と朝潮のやり取りに痺れを切らしたのだろうか：夕立はその緋色の目を爛々と輝かせ、二人の居るところへ凄まじい勢いで突っ込んでくる。口角を少しあげ、これから始まる戦いを楽しみにしているのだろうか…。

陸奥「：食らいなさい!!!」

陸奥は自身の艤装を展開すると、直ぐ様そんな夕立に砲門を向け、一斉に砲弾を撃ち込む。

かなり早急に撃つたので、標準はでたらめだが、威嚇くらいにはなったはずだ。

轟音が響き渡り、辺りにはもうもうと黒煙が舞う。

陸奥「これくらいでは：倒されないわよね？」

陸奥の読み通り、立ち込める黒煙の中から勢いよく飛び出してくる夕立。

その目は見開き、笑っている口からは犬歯が剥き出しになっている。

陸奥「化け物ね…!」

朝潮「：っ！それなら!」

標準はでたらめで直撃はしていないとは言え、戦艦の砲撃を受けながらも、よろめくことなく突進してくるその姿は正に化け物だった。

そこで威力は劣るものの、しっかりと標準を夕立に合わせた朝潮が追撃を加えるべく

砲撃を行おうとする。

夕立「…無駄だよ？」

ほんの一瞬。

おかしい、今の今まで捉えていたはずの夕立の姿はどこにもない。辺りを見回す陸奥と朝潮。

そして再びその姿を目に捉えた時には、朝潮は目を見張った。

なんと夕立はもう朝潮に触れられる位の距離にまで接近していたのだから。

朝潮「こ、このっ!!」

夕立「遅いっばい♪」

夕立の両手にはいつの間にか、黒い鉤爪の様なもの装着されている。

そして、その鉤爪が漆黒の靄の様なものによって作り出されていると気付いたのは、朝潮の体に夕立の鉤爪が食い込んだ瞬間でもあった。

朝潮「ああっ!!!」

ブスリ。

肉に食い込む、耳を塞ぎたくなるような音。

既に朝潮の艀装はズタズタに引き裂かれ、特に腹部からは血が溢れ出していた。

陸奥「朝潮!!」

陸奥はそんな朝潮から夕立を遠ざけようと、夕立に掴みかかろうとする。だが、不敵に笑う夕立。

陸奥「朝潮から離れなさつ……!?」

夕立「こつちっぽい！」

腹部を抑え、うづくまる朝潮の側に夕立の姿は既がない。

そして、背後から声が出たかと思えば、振り向く間もなく陸奥はその背中に大きな爪跡を残すことになった。

「ハハハかー」

走り続けて数十分。ようやく僕は朝潮の言っていた入渠施設と呼ばれる場所に辿り着く。

重い扉を開けると、そこには所謂、浴槽の様なものぐズラリと並んでいた。各々の浴槽には緑の液体が満杯と言つていいほどに入っていて、ほんのりと湯気がたっている。

この様な緊迫した状況で、その場所の雰囲気には拍子抜けしそうになるが、とりあえずここに川内を入れればいいのか？

「川内！頑張ってくれよ!!」

考える時間が勿体ない！僕は川内をそのまま一番手前の浴槽に浸ける。

川内「うう…」

苦しうに呻き声をあげる川内をただ見ることしか出来ないのは本当に心苦しい。

苦悶の表情を浮かべ、「痛い…」と呻く彼女。

それを見て、僕は決意した。

やっつてやる！

僕は入渠施設を飛び出した。

村雨「ほらほら〜!!逃げないと死んじやうよ〜!!」  
辺りには悲鳴、悲痛な叫び声がこだましている。

その理由は明らかだ。村雨が幾つもの禍々しい形をした漆黒に輝く錨を投げつけ、その目に入る者を蹂躪しているのだから。

「なんなのよ!?こいつ!!…うわあああ!」

「嫌!嫌嫌嫌!!まだ死にたくない!!!…ガッ!」

村雨「張り合いがないな〜!…それ!」

「くそ!もうこうなったら撃つしかない!!」

「…バカな!?!ここで撃つたら…!?!」

「どつちにせよこのままじゃ殺されるだけだ!!」

「……うう。クソおおおー!!!撃てー!!!」

その場にいた多くの艦娘が一斉に村雨に向かって砲火する。…もちろんそんな無茶にこの鎮守府が耐えられるはずもなく、間もなくしてその艦娘たちがいたところは大きく崩れてしまった。

「うあああああああ!!!」

沢山の絶叫が聞こえ、そして一瞬にしてその場に静寂が戻る。…鎮守府の東側は完全に崩壊してしまった。

だが……。

村雨「あーあ！勝手に居なくならないでよ！」

もちろん村雨もその崩落に巻き込まれたはずだ。

だが、当の本人はピンピンしているのだから、恐ろしい。

そして、村雨は見つけたのだ。瓦礫の陰に隠れ、怯えきっている駆逐艦たちの姿を。

村雨「…いるじゃない♪見ーつけた!!」

「ひびく!!」

不意に現れた村雨を見て、目に涙を浮かべる駆逐艦たち。中には震えながら、その砲門を村雨に向ける者もいるが、多くの者は戦意喪失し、泣き叫んでいる。

村雨「よーし！これなら夕立に負けなさそうね!!」

そう言つて村雨は掌を空に掲げる。

すると、先程よりもさらに巨大な錨が突如として空中に現れたではないか。

村雨「さーて、一気にやつちやうね！」

駆逐艦たちは、空に浮かぶ自分達の命を刈り取るその錨をただ見つめるだけで、逃げることも叶わない。

そして、村雨がその掲げた手を駆逐艦たちに向けようと振り下ろそうとした時、村雨の背中が激しい爆発音と共に破裂し、村雨は吹き飛んだのだ。

駆逐艦たちは何が起きたのか分からなかったが、これはチャンスとばかりに震える足を懸命に動かし、その場から撤退し始める。

村雨「イタタ〜！もう！誰え!？」

背中から黒煙をあげ、瓦礫の山から這い出る村雨。

そんな村雨に、艀装を取り出した二人の艦娘が各々の砲門を向ける。

阿武隈「…なんだか騒がしいと思つたら、とんでもないことになっているのね！」

鬼怒「今のアブ、最高に輝いてるよー!!」

阿武隈「…フフフ！決まったわね！」

鬼怒「よっ!!阿武隈！世界一!!」

村雨「……なにになに〜！混ぜて混ぜて〜!!」

鬼怒「ややつ!!あの攻撃を受けてまだ立てるのか!」

阿武隈「いやー、マジパナイわね…」

鬼怒「それ鬼怒のセリフだよー!取らないでえ!!」

村雨「ああ!!村雨のこと無視してるー!!」

長門「・・・」

執務室にて、長門は冷静に情報の収集を行い、負傷した艦娘の救護そして敵の迎撃の指示を事細かに無線を通じて出していた。

とは言え、事態があまりに急だったこともあり、今のところ後手後手に回ってしまっ

ているのが現状だ。

そこへ弓を携えた一人の艦娘が颯爽と現れる。

??? 「…長門さん、この状況は一体!?!」

長門 「赤城か…。敵襲だ。しかも、敵はかなりの手練れな様だ」

赤城 「…陸奥さんは？」

長門 「陸奥は今、川内救出に向けて正面玄関の方へ出向いている。…陸奥なら大丈夫だと思うが」

そう言う長門だったが、その顔には不安や焦りが感じられる。赤城もそれを見て、事態の深刻さを改めて感じた。

「…報告します…長門さん！」

そんな時、執務室に傷ついた艦娘が一人、転がるように入ってきた。

長門 「…戦況は？」

「正体不明の敵が確認出来るだけで三人！そして、一人は正面玄関にて陸奥さん、朝潮ちゃんと交戦中。増援部隊が早急に向かっているとのこと！それと、東側でもう一人の敵の目撃情報有りですが、東側が崩落してしまつた為、その後の敵の足取りは不明！もう一人は鎮守府の母港にて破壊活動を行っている所を三銃士のお三方が発見し、只今交戦中とのこと！」

長門「…分かった。引き続き、情報の収集を頼む」  
「はー！」

そう言つてその艦娘は足早に執務室を後にする。

赤城「…私はどこへ向かった方がいいかしら？」

長門「赤城は他の空母たちを連れ、近海の哨戒にあたつてくれ。…もしかしたら、今回の敵は尖兵の可能性もあるからな」

赤城「分かりました」

鎮守府防衛戦が今、始まった。

## 鎮守府防衛戦

夕立「あー、呆気なかつたっぼい！」

そんな一言を咄くと、夕立は呑気に欠伸をしながら、天高く手を上げ、伸びをする。そんな夕立の両手に装着された漆黒の鉤爪からは血がポタポタと流れ落ち、その滴っている血も色鮮やかで、光っている様にも見える。

そして彼女の目の前には、呻き声をあげながら地面に倒れ伏している二人の艦娘。

一人は苦しうに目を閉じて、大量の血がドクドクと流れ出ている腹部を懸命に手で押さえている。額には尋常ではないくらい汗をかき、呼吸も荒い。

もう一人の方は、艤装が剥ぎ取られ露になった背中から血が噴き出すことを厭わず、何度も立ち上がろうとしては、もう一步のところまでその体を地に叩きつける。

立ち上がろうとする度に強烈な痛みが足を襲い、陸奥はうつ伏せの状態から起き上がることが出来なくなっていた。辛うじて匍匐前進の様な動きはとれるものの、こんな状態では戦うことなど夢のまた夢である。

だがそんな状況でも、なんとか朝潮を逃そうと頭を巡らせるところは長門と共にこの鎮守府を今まで守り抜いてきた戦艦陸奥の強さの由縁なのだろうか。

夕立「さーて、次はどこで遊ぼうかな〜!!」

：もしここが血生臭い匂いに溢れず、辺りに瓦礫が散乱していなければ、好奇心旺盛な可愛らしい少女が未知の体験に胸を踊らせている様にも見えただろう。

夕立の緋色の目は次の獲物を捉えんと言わんばかりに光輝き、時折見え隠れする犬歯がその獠猛さを物語っていた。

だが、これは陸奥や朝潮にとっては好機だった。

夕立が側には下手に動くことは出来ない。

だが、隣の朝潮の容態を見た限りでは、早急に入渠施設へ搬送しなければいけないことは明らかだった。

しかし、夕立がこの場を離れてくれれば、隙を見て、朝潮を入渠施設まで連れていくことが出来るかもしれないのだ。

確かに足を動かすことは難しいのは変わらないが……最悪、朝潮をその背に乗せ、匍匐前進で入渠施設へ行つてもいいと陸奥は考える。

悔しいけど……ここは一旦体勢を立て直す意味でも、このまま倒れているのが最善ね。そう陸奥が思っていた時。

夕立「お！誰か来るっばい!!!」

誰に言う訳でもなくそう呟いた夕立。

その紅い瞳が捉えたのは、こちらに駆け寄ってくる複数の艦娘たちだった。

「いた！陸奥さん達だ!!」

「敵も居るわ。用心して!!」

陸奥は驚いた。増援をこちらに寄越してくれるというのも予期していなかったわけではない、むしろこの状況だ、援軍には喜ぶべきなのだろう。

…だが陸奥は喜ぶことが出来なかった。

なぜなら、その増援部隊には駆逐艦しかいなかったのだから。

この鎮守府も所属する艦娘が少ないわけではない、むしろそこそこの規模があると  
言っているはずだ。

…とは言え、戦艦や空母がゴロゴロいるわけではない。

その大半を占めるのは駆逐艦たちだった。

敵は複数いるとのこと…であれば、ここに回せる援軍も限られてくるわけだが。

皆殺しにされてしまう…。

陸奥「逃げなさい!!早く!!」

満身創痍の陸奥がこれでもかという位の大声で増援部隊に逃亡を促す。

言われた本人達は困惑した顔をしているが、すぐに意を決した顔をして、その砲を夕立に向けた。

陸奥「止めなさい！貴方たちでは勝てないわ!!」

陸奥の必死の叫び。

その一方で、砲を向けられた夕立はまた戦えることに喜びを感じているのだろうか：小躍りをしていた。

そして、急にそれを止めたかと思えば、ニカツと笑う。

夕立「一気に仕留めるっばい!!」

突如として、夕立の背後に先端が尖った筒状の物体が複数現れる。それらはどういう原理か不明だが、宙に浮いているのだ。

そして、黒光りしたその禍々しい物体が、有り得ないと頭では思いながらも魚雷だと陸奥が認識した時には、既にそれは増援部隊の方に向けられており、次の瞬間にはその末端部分からは火が噴射して、発射されていた。

陸奥「ま、待っ……」

目を開けることさえ憚れる程の爆風に陸奥の言葉は遮られる。

地面に這いつくばり、凄まじい熱気と風圧に必死で耐える陸奥。

そしてそれが止み、ようやく目を開けられた陸奥の目に飛び込んできたのは、呻き声をあげながら地面に横たわる駆逐艦たちの姿だった。

…唯一幸運だと言えるのは、目視で確認出来る範囲では皆、辛うじて体を動かしたり、

立ち上がろうと試みていたり、と即死した者は居ないことだろう。

夕立「うーん、やつぱり一回では壊せないか……。よし、もう一回行くつばい!!!」

そんな淡い幸運でさえ、ほくそ笑んだ夕立は捻り潰そうと、再びその背後に漆黒の鉄塊を複数携える。

……きつと、次はない。

想像もしたくないが、その魚雷の末端が再び点火し、ただでさえ瀕死のあの娘達に当たつたら……。

やつと……やつと解放されたのに!!!

前任の元、その尊厳をこれでもかという程に踏みにじられてきた娘達だ……それがこんな最期とはあまりに惨いだろう!

陸奥は最後の力を振り絞り、その体を引き摺って、駆逐艦達の元へと進む。

《死んでも、この娘達は守る》

陸奥「私をつ! 私を狙いなさいつ!!!」

鬼気迫る表情で、叫ぶ陸奥。

至高と言える程の彼女の勇敢さに夕立も興味を示したのだろうか……駆逐艦たちの前でその身を挺す陸奥に容赦なく、その鉄塊を向ける。

夕立「じゃあ♪お望み通り、狙ってあげるつばい!」

長門……ごめんなさい。私は……。

夕立がギリギリと瞳を輝かせ、意気揚々とそれを発射しようとした……その時。はつきりとした声が陸奥達はおるか夕立の耳に届いた。

「……させません。絶対に……!!」

なんと夕立の後方には、息も絶え絶えになりながらも必死で歯を食い縛って夕立を睨み付ける朝潮がいたのだ。

夕立「ほい？」

夕立の初回の爆撃で、朝潮は爆風に煽られ、吹き飛ばされていたのだが、それが丁度夕立の後方にあたるどころだった様だ。

相変わらず血が溢れだす腹部を片手で押さえながら、震えるもう片方の手でしっかりと夕立を狙っている朝潮。

夕立「……まだ生きてたっほい？今いいところだから、邪魔しないで欲しいっほい!! 貴方は後で……!!?」

やれやれといった顔をして、興味なさげに朝潮を見る夕立だったが、その発した言葉は途中で遮られる。

その視線の先には、全力でこちらに突っ込んでくる朝潮の姿があった。

夕立「……先にやってあげる!!!」



《きつと大丈夫。きつと……。だから、私も……》

少女の呼吸が次第に小さくなり、先程まで激痛だったはずの腹部の痛みも今はひいて  
いる。

《……妹たちのこと、お願いします》

少女はゆつくりと目を閉じた。

夕立「……うぐっ、い、痛いっぼい……」

黒煙が海風に運ばれ、視界が開けてきた時に陸奥が見たもの。それは、自分と同じ様に地面を這いつくばる夕立の姿だった。

その背中は大きく焼け爛れ、体の至るところから血が噴き出ている。

朝潮は……？

陸奥は必死で朝潮の姿を探したが、その姿はどこにもない。

夕立「…ま、まだ夕立は戦えるっばい…だ、だから…捨てないで…提督さん…」  
夕立があれほど輝かせていた緋色の瞳。

その瞳は、まるで色を失った様に虚ろであり、夕立は繰り返す様に何かボソボソと口  
にしている。

夕立「か、還りたい…提督さんのところへ…また一緒に夕陽が見たいっばい…  
提督さん、村雨」

謔言の様にボソボソと言いながら立ち上がる夕立。

立ち上がった瞬間、大量の血反吐を吐く夕立だったが、フラフラとした足取りでゆっ  
くりと陸奥の方へ近づいてくる。

そして、その手に着けた鉤爪も爆発に巻き込まれたせい、歪な形になってしまつて  
いるが、これを陸奥に突き立てようと言うのか。

陸奥は覚悟した、もう全てを…。

陸奥「つあああああああ!!!」

激痛の走る足を自分の手で殴打し、震えながらも必死で立ち上がる陸奥。もはやその  
立っている姿は奇跡の産物以外の何物でもなかった。

《…この夕立を行かせては行けない…》

煙が燻るポロポロの砲口を夕立に向け、霞んだ瞳を精一杯見開く。

《絶対に！絶対に外すものかッ！！》

夕立も瀕死の状態で立ち上がった陸奥を見て、血反吐を吐きながらも、その鉤爪に力を込め、猛スピードで陸奥の元へ突撃する。

両者共に、譲れないものの為、その命を削る。

陸奥「つはああああああああ」

夕立「おおおおおおお」

！！！！！！！！！！

《長門……後は頼んだわよ？》

鎮守府の正面玄関を眩い閃光が包み込んだ。

## 鎮守府防衛戦2

村雨「村雨は！無視されるの嫌なのっ!!!」

鐵の大小異なる錨が地面に突き刺さる度に、辺りには耳障りな鈍い音が轟き、おそろく出鱈目に放たれているであろうそれらを軽い身のこなしで避ける二人の艦娘。

そして、避けながらも各々の砲門をしつかりと村雨に向けている。

阿武隈「それっ！」

鬼怒「よっと！」

息がピツタリとはこのことを言うのだろうか。

ほぼ同時に放った二人の砲弾は村雨に真正面から直撃し、轟音と共に爆発した。

村雨「もー！ちよこまかと鬱陶しいんだからあ!!」

吹き飛ばされることもなく、村雨は頬を膨らませ、わざとらしく怒った様な顔をしているが、今の攻撃はほぼ効果が無かった様子でピンピンしている。

そして、村雨が両手を上に挙げたかと思えば、そこに黒い靄が沢山集まり始め、次第にそれは形を成し、遂には先程よりも一際大きい錨になったではないか。

不気味さを放ちながら宙に浮かんでいるそれは、闇を思い起こさせる様な色合いをし

ている。

そして村雨が手を振り下ろした瞬間、一直線に阿武隈に向かってそれが突っ込んできた。た。

その巨大さに似合わぬスピードで落下してきた為、阿武隈もギリギリのところまでそれを回避する。

村雨「さすがに村雨もこれをやると疲れるんだ！だから！早く壊れてよ!!!」

そう言つて再び複数の錨を放ち続ける村雨。

しかし、その発言とは裏腹に村雨はこの戦いを苦だと思つているわけではなく、むしろ楽しんでる様だ。

まるで、いつ当たるか分からない錨当てに胸を踊らせている…という感じか。

だが、阿武隈も鬼怒もそんな嗜好に付き合うつもりは毛頭ない。

涼しい顔をしながらも、二人は村雨の動きを冷静に分析し、大きな損傷を与えられないかと思考を巡らす。

そして先程の砲撃で何かを確信した阿武隈は、鬼怒の方をチラリと見ると、鬼怒もそれを察して小さく頷く。

阿武隈「やーい！こつこだよお!!当ててみなー!」

急に立ち止まったかと思えば、阿武隈は村雨を挑発する様な仕草を見せる。

村雨「ムカツ！村雨、馬鹿にされるのも嫌！」

村雨も本気で嫌悪しているという感じではない様だが、挑発にのつたところかどうかというのだという慢心があつた様で、無数の錨を阿武隈の居るところへ落としまくつた。

村雨「えっへん！どう？村雨の錨は？」

鬼怒「甘いね〜！鬼怒のこと忘れてた？」

勝ち誇つた笑みを見せる村雨。

そんな彼女の背後から聞こえてきたのは、鬼怒の声だった。

：鬼怒は村雨が阿武隈に気をとられていた間に、村雨の背後を狙い撃てる場所へ移動、そして、村雨が攻撃を終え、隙を見せる時を虎視眈々と待っていたのだ。

鬼怒「そーれ！一丁あがり！」

何故、阿武隈達が背後を狙つたのか。

それは単に背後は隙を生み易く、こちらの被害を最小限もしくは無傷で、攻撃を加えられるから：というだけではない。

：背中のみがダメージを与えられる唯一の箇所である。

阿武隈達は、のっけの攻撃からその仮説を立て、その村雨の背中に強烈な一撃を加えようとずつと狙っていたのだから、すごいものである。

砲弾は村雨の背後で爆ぜ、阿武隈も鬼怒もやつとこれで戦闘狂との戦いを終えられた

と確信する。

そして、阿武隈が鬼怒の元へ歩みよると、「これで少し痩せるんじゃない？」という鬼怒の言葉。

阿武隈は顔を赤くして、「だから、太ってないもん！」と反論する。

二人のいつものやり取りに、鎮守府の日常が帰ってきた様にも思えるが、そんな二人の期待を裏切る様に、煙が晴れた時、そこには余裕の笑みを浮かべ、立っている村雨の姿があつた。

村雨「村雨達の弱点が背中だつて見破つたこと、褒めてあげるう!!けどー、それを知つてても対策しないのはおバカさんにも程があるでしょ!?ちやーんと、村雨は対策してるんだから!!!」

阿武隈「…ふう、ホントに厄介ね!」

鬼怒「あちやー、あのまま終われば鬼怒達、めちゃくちゃかっこよかったのになー!」  
ふざけた口調で村雨を見る二人だったが、その顔には先程までなかったものが見てとれる。

焦りだ。

二人の視線の先には、その背中にピッタリと合わさる様にくっ付いている白色の錨があつた。

：今までの黒い錨とは違った雰囲気を醸し出すそれ。  
 ご丁寧に村雨はそれについて言及する。

村雨「フフ！この白妙の錨はね、強靱さで言えば最高なんだよ!!村雨だけの最強の矛でもあり、盾でもあるの!『純潔の錘』って名付けてくれたのは……おつと!ちよつと喋り過ぎちやつたあ!!」

阿武隈「凄い自分語りだわ!!」

鬼怒「鬼怒もビツクリの自由人だよ!!」

村雨「(＊、ω、＊)」

村雨は渾身の自分語りを侮蔑されたことに怒りを覚えた……わけがあるはずはない。

ただ、なんとなく目の前の二人が親しげに話し合っているのを見て、心からどす黒いものが溢れてくる気がしていた。

鬼怒「ふう……アブ」

鬼怒は深く息を吸うと、静かに吐き出し、阿武隈に声を掛ける。その目はいつになく真剣で、阿武隈の表情もその目に呼応するように厳しいものになる。

阿武隈「……なに？」

鬼怒「多分、この相手は本気でやらないとダメだよ」

阿武隈「……そうね」

二人は村雨に向き直る。

すると、村雨は背中への錨を手にし、満面の笑みを見せ、こう言った。

村雨「この『純潔の錘』が最強の矛たる理由、身をもって知ってね？」

次の瞬間、村雨は白い錨を振り上げながら、大きく跳躍する。

阿武隈と村雨の間合いは充分あつたはずだったが、阿武隈が気付いた時には、もうその錨は阿武隈の頭を目掛けて凄まじい勢いで振り下ろされようとしている。

咄嗟に手に着けた砲で頭を守ろうと防御の構えをとつたが、その衝撃たるや戦艦の砲撃を思わせる程の威力があつた。

阿武隈「……つぐ!!!」

錨が直撃した方の腕はどうやら使い物にならなくなつてしまつた様だ。

ダランと力なく垂れ下がる阿武隈の腕。

もちろん、激痛が走っているのだが、果敢にも阿武隈はすぐに立ち上がる。

鬼怒「……落ちろっ!」

鬼怒がそんな重い一振りをした村雨のガラ空きになつた背中を狙つて砲撃する。

村雨「させないよ!!!」

もちろん、村雨は分かっている。

この『純潔の錘』を矛として使用すれば、弱点をさらけ出すことになることくらい。

だからこそ背後の気配には細心の注意を払うし、最悪砲撃されてもこの錨を盾にすればどうということはない。

村雨「今度はこっちの番だよ!!!」

村雨はそう言うと、自身の体から鎖が付いた小型の錨を複数、空中に待機させると一斉に阿武隈目掛けて解き放つ。

阿武隈もまだ撃てる砲で迎撃を図るが、その砲撃を掻い潜り、二つの錨が阿武隈の足を捕らえる。

阿武隈「……っうわあ!!」

そして、すごい力で村雨の方へ手繰り寄せられていく阿武隈。

鬼怒が援護射撃を行うが、背中以外に砲弾を撃ち込んでも、村雨は意に介さないし、かと言って弱点である背中に撃ち込もうとすれば、巨大な錨が霰のように降り注ぐことになる。

阿武隈「……く、くう!!!」

必死で抵抗を試みる阿武隈だったが、白い錨を阿武隈の体に無慈悲にも振り下ろそうとほくそ笑む村雨の方へとどんどん手繰り寄せられていく。

鬼怒「アブ!!!」

村雨「さあ!!これで終わりだよ!!!」

今、その白い錨が阿武隈の血で赤色に染まろうとした瞬間。

大地を揺れ動かす程の爆発が遠くで起こる。

村雨「：おっとつと!!」

その場にいた三人は地震かと思われる程の揺れにバランスを崩すが、その一瞬の隙を鬼怒は見逃さなかった。

鬼怒「おりゃあ!!」

阿武隈と村雨を繋ぐ鎖に鬼怒はありつただけの弾を撃ち込んだ。そして、バキツと音をたて、鎖は断ち切られる。

阿武隈「：よし！」

阿武隈はその瞬間に体勢を立て直すと、一旦村雨から間合いを取ろうとした……が。

村雨「この一撃で沈めえ!!!」

阿武隈の眼前には巨大な純白の錨が迫ってきている。

村雨の俊敏さを侮ったな……と静かに悟る阿武隈。

彼女は目を閉じ、静かに死を待った。

グシャツ!!!

肉と金属が潰される様な音が辺りにこだまする。

：彼女は疑問に感じていた。なぜ、痛みがないのだろうか。もしかして、痛みを感じ

る間もなく死んでしまったのだらうか。だが、自分が目を開けることが出来ると分かった時、彼女はすぐに目を開け、理解したのだ。

鬼怒があたしを庇った…。

鬼怒「…っ、うああ」

崩れ落ちる鬼怒の姿、それがしつかりと彼女の目に焼き付けられる。

阿武隈「あ、ああ…」

言葉にならない。言葉が出てこない。

村雨「…フフフ、まずは一人ね！さて、お次は…」

村雨は潰れた肉塊から『純潔の錘』を引き抜くと、その血に濡れた錨を阿武隈に振り下ろそうと構える。

村雨「じゃあねー♪なかなか楽しかったよ！」

そんな台詞を吐き、いざ阿武隈を潰そうとした時。

今度はさつきよりさらに強い揺れと、眩い閃光が先程夕立と別れた場所辺りから襲ってきた。爆発だらうか。

村雨「…うう！」

思わず目を瞑る村雨。

だが、しばらくするとその爆発の余波も収まり、村雨も目を開ける。

村雨「…全く！夕立ったら、派手にやってるのね！こつちも負けてられない…！！」  
阿武隈の姿がない。

バカな!?なんで!!?...ま、まさか!?

村雨は振り向く………ことが出来なかった。

阿武隈「…敵に気付かれない様にするの、あたしの十八番なんだ」

そう呟いたかと思えば、阿武隈はまだ生きている砲でありつたけの砲弾を村雨の背中に撃ち込む。

村雨「つあああああああああああ!!!」

断末魔…まさにその表現が正しいだろう。

絶叫しながら倒れ込む村雨に、阿武隈はその砲弾が尽きるまで砲火を止めなかった。そんな容赦ない阿武隈の頬を涙が伝う。

村雨「……て、提督う、村雨…頑張ったよ?だから、褒めてよお……」

絶叫をあげ続けた村雨が最期に残した言葉はそれだった。

阿武隈はそんな村雨に自身の服を被せてやると鬼怒の元へ。

そこには、普段と変わらぬいつもの鬼怒の姿があった。

…阿武隈はそれを見て、優しい笑みを浮かべ、鬼怒のことを抱き抱える。

阿武隈「…鬼怒、あかし達って英雄かな？」

鬼怒「…うん」

阿武隈「そっか…。じゃあ、もうあかし達はこの鎮守府最強ってことよね!!」

鬼怒「…うん」

阿武隈「あ、そうだ!!あの人間もとつちめなきや!!吹雪の話も聞かないとだし!!!」

鬼怒「……………うん」

阿武隈「…ヘル・アンカーズも新たにメンバー募集しなきやね?…鬼怒の言うとおり、

あたしの強がりだったみたい」

鬼怒「……………」

阿武隈「……………」

深い眠りに落ちているのだろうか、鬼怒は静かに目を閉じていた。

…そうだね、あかし達、ここまで頑張ってやって来たんだから、報われたっていい

よね?

鬼怒はとても穏やかな顔をしている。

《鬼怒…おやすみなさい》

阿武隈はずつとその赤髪を優しく撫でていた。

## 鎮守府防衛戦3

…鎮守府全体が大きく揺れたかと思えば、今度は小刻みに揺れ動いている様にも感じる。

一つ言えることは絶え間なく、この鎮守府が揺れているということだ。

だが、それが地震によるものではないのは、この場にいる全ての者が理解をしていた。そんな中、とある一人の人間は揺れにも屈せず、その背中に少女を抱え、入浴施設ならぬ入渠施設へと駆け込む。

そこは阿鼻叫喚とまではいかないが、苦しそうな呻き声で溢れ返り、浴槽に力なく浸かる艦娘達の姿があった。

…その人間は、一番手前の浴槽に入っている艦娘の姿を何とも言えない表情で一瞥すると、まだ誰も浸かっていない浴槽のところへ走り、背負っていた少女をゆつくりとその中に浸す。

そして、それを終えるや否や、再び入渠施設を飛び出していった。

酷い有り様だ…。

僕はそんなことを思いながら、鎮守府を縦横無尽に必死で走り回る。

あれほどコソコソと過ごしてきて、いつかは堂々と鎮守府を出歩きたいと切望していたが、まさかそれが、従来僕が思っていた『この皆に認められる形』ではなく、この様な『鎮守府襲撃』によって叶ってしまうとは……あまりに酷い。

だが、そんな不満を抱えている暇がないのは百も承知。

とにかく、僕が今出来ること。それは艦娘達の救護しかなかった。

「うう……痛いよ……」

全身に生傷が絶えないこの娘も、本当であれば僕を拒絶もしくは排除しようとするのだろうか。

だが、それがどうしたというのか!?

その背中に傷だらけの少女を背負うと、僕は再び入渠施設を目指して走る。

この娘が死んでしまったら、それこそもう意味がない。

本末転倒も甚だしい。

仲良くなる前に、お別れなんて絶対に御免だ!

……それが僕の独り善がりのとんでもない我が儘だったとしても、僕はそれを自分の矜持として貫こう。

「大丈夫だ!・頑張れ!!」

苦しそうな声をあげる背中の艦娘に、気休めにしかならない声援を送る。ただ、送られずいられるか！

救つてみせる！ここに居る皆を!!!

「う……あ……」

…あれほど沢山あつた浴槽もそろそろ数が足りなくなつてきた。

とりあえずこの娘を入れたら、入渠出来る場所は無くなつてしまう。

…いや、浴槽に一人しか入れてはいけないうんて言う決まりはないはずだ！

少し強引だけど、無理やり押し込めるしかない！

よし！それならまだ治療が出来るはずだ！

「…頑張れよ!!!」

僕が背負つていた娘を最後の浴槽に浸けると、その娘は大きく息を吐いた。

僕はそれを見ると、少し安堵感を覚える。

そして、思いついたのだ。

台車を使えば、もっと効率的に救護出来る。

善は急げだ、僕は自室へ急いで向かうことにした。

そんな僕の背中に向かつて、「ありがとう」と消え入る様な小さな声で、その娘が感謝

を述べていたことに僕が気付くことはもちろんなかった。

「……………んう」

「…あ、つあう」

鎮守府の廊下を台車が物凄いスピードで駆け巡る。

ケチらずに特大の台車を購入しておいたのは、まさに正解だったなと思いつつ、僕は廊下に倒れている艦娘を見つけ、既に乗っていた二人に寄り添わせる形でその娘を台車に乗せる。

「どンドン行くぞ!!!」

相変わらず揺れが続いているが、少しでも早く入渠させる為には止まるわけにはいかないのだ。

台車を押す手に力がこもる。

すると、一番最後に台車に乗つけた娘が揺れのせいかな、目を覚ました。

「…よくよく見れば、この娘はあまり外傷を負っていない様だが……………あれ?この娘は、確か……………」

「んう……………は、は、は……………」

その艦娘は今しがた開けた目をキョロキョロとさせている。気絶でもしていたのだろうか、今自分がどの様な状態にあるのか、その艦娘は分かっている様だったが、僕と目が合うと、急に口をパクパクし出す。

ま、まさか!?!息が出来なくなつたのか!?!

もし呼吸困難に陥つたのであれば一大事だ。

僕は足を止め、その艦娘の肩を掴むと、「大丈夫か!?!息が出来ないのか!?!」と叫ぶ。

その艦娘：睦月は、その顔を真っ青にし、先程より激しく口をパクパクさせている。

ど、どうする!?!呼吸困難は入渠で治るのか!?!

だが睦月はビクビクする様な大声で悲鳴をあげたかと思えば、台車から転がる様に降り、僕に砲口を向ける。

その時の睦月の顔は、前回同様に人間を恐れて、強張っているが、同時に以前は見られなかった感情も見てとれた。

怒り。

そう、睦月は怒っていた。震える体を奮い立たせ、涙を浮かべた目で必死に僕を睨み付けている。

睦月自身は気付いていないのだろうが、唇を噛み締めるあまりツーツと口から血が滲み出ている。

睦月「あ、貴方が…貴方が今回の襲撃の犯人ですわね！」

あ、やばい……。これは、相当マズイ誤解を生んでいるようだ。

だけど、確かに事情を知らない娘からしたら僕が今回の襲撃を引き起こした敵の一派だと思うのも無理はないよな…。

……。だ。

僕は睦月から視線を外すと、再び台車を押し始める。

睦月「ま、待ちなさ…」

「睦月…確かに君が怪しいと思うのも無理もない！だけど、今それを確認し合う時間はないと思うんだ!!今も一刻でも早く救護に奔走しなきゃいけないと僕は思ってる!!!  
…もし、僕を信用出来ないのなら、その砲を向けたまま僕を監視していればいい!!」

僕はそう言うと、走り出す。

ここで話し合っているのは救える者も救えない。

僕は賭けたのだ。

人間への恐れを抱きながらも、鎮守府の為にその砲を懸命に向けたその勇ましい艦娘、睦月に。

睦月「……」

睦月は僕の話した内容に困惑している様だったが、台車に乗った負傷した仲間を見

て、何かを悟った様だ。

とりあえず、睦月の誤解は解けたか…と思った矢先。

睦月「二人をどうするつもりですか!?!…か、返して!」

そう言つて睦月が僕にタツクルしてきたではないか。

砲弾じゃなくて良かった…じゃなくて!!!

「む、睦月!状況を考えてくれ!!!」

睦月「なんで睦月の名前を知ってるんですか!?!と、とにかく二人を解放してください!!!」

睦月は丁度吹雪くらいと同じ背格好なのだが、自分より大きな僕に必死に食らい付いてくる。

きつと仲間想いの娘なのだろう…だけど、これは大幅な時間ロスだ。

「む、睦月!僕は二人を入渠…」

睦月「う、嘘をつくなツ!!早く二人を離して!」

いや、台車に乗せているだけで、拘束はしてないぞ!?

「ちよ!?!だ、誰か…!この娘を引き離してくれ!!」

睦月「…!?!まだ仲間がいるにゃしい!?!」

さつきまで怯えていた子猫の様だったのに、今は食らいついたら離さない肉食獣の様

だ。

おい！猫被つてたのか！？

こんなことしてる場合じゃないのに！！

僕と睦月が不毛に揉み合っている間にも、消え逝く命があるかもしれない…こうなつたら多少強引にでも…。

そんな時に、不意に後ろから声を掛けられる僕と睦月。

そして二人は同時に振り返り、不思議なことに二人ともホツとしたような顔になる。

「…こんな時に、何をしているのかしら？」

「雲龍（さん）！！」

雲龍「また艦娘をたぶらかしているの？相変わらず、熱心なこと…」

軽蔑したような顔をしている雲龍。

ちよ！？雲龍には僕が怪しいやつじゃないと証言してもらおうと思つてたのに！？

あ、睦月の目がやばくなつてる…。

「…雲龍！今の状況で誤解を生むようなことを言わないでくれ！ただでさえ、この娘に無実の罪で疑われているんだから！！」

睦月「雲龍さん！この人が今回の襲撃の犯人です！一緒に捕まえて下さい！！」

…決して、イチヤイチャじゃれあっているのではない。

だからそんな目で見るな、雲龍!!

雲龍は、台車に乗つけられた生傷の絶えない艦娘の姿を一瞥すると、ふうと息を一つ吐き、落ち着いた様子で睦月を僕から引き離す。

睦月「う、雲龍さん!?何をしているにや!?逃げられちゃう!?」

雲龍「…行きなさい」

「ありがとう!雲龍!」

雲龍「…礼を言われる筋合いはないわ。ただ、仲間を救いたい…それだけよ」

僕は雲龍に頭を下げると、急いで入渠施設へ向かった。

睦月「雲龍さん!!どうして逃がしたんですか!!!」

雲龍「…睦月」

食って掛かる睦月をその名を呼ぶだけで、静かにさせてしまう雲龍の強さよ…。

雲龍「…一応、言っておくわ。あの人間は敵ではない」

睦月「へ!?!」

目を丸くしている睦月。

雲龍「…だけど味方でもない。とりあえず、この後は貴方の好きにするといいわ。私

は母港の方へ行かないとだし…。それじゃあ、お互いに頑張りましょう?」

雲龍はそう言い残し、行ってしまう。

そして、取り残された睦月は呆然とその姿を見ていた。

入渠施設へ入ると、先程までなかったもの…複数の視線を感じた。

だが、もう気にしている余裕など僕になかったのは言うまでもないだろう。

急ぎ、台車の二人を一番手前の浴槽に無理やり詰め込む。

川内「…うーん」

川内の顔色が心なしかほんのり良くなってきた感じがする。

ちよっと窮屈かもしれないけど、我慢してくれ。

そして、また台車を押し、救護に向かおうとした時。

???「…待ちなさい」

うわー、今日はよく呼び止められるな…。

声のした方を見ると、銀色の髪を後ろで一本に縛った小柄な娘がキツとした目付きで僕を睨み付けている。

というか、この娘も見覚えが…。

あ。

???「アンタが朝潮姉の言ってた、人間ね……。とりあえず、助けてくれてありがとう。ここに  
いる娘達を代表して私が礼を言うわ！」

朝潮の大事な妹の一人……霞がそこにいた。

## 鎮守府防衛戦4

??? 「オラオラ! どうした!! お前の力はそんなもんか!？」

松風 「ク、クククツ…やるじゃないか…」

??? 「…遅い」

松風 「…グツ!？」

鎮守府の後方に広がる大海。

穏やかな海風が潮の匂いを運んでくる。

深みのある青色が心底美しいこの海に、日々艦娘たちは白い水しぶきを描きながら出撃していくわけだが、今日はまだ誰もこの海へと出ていこうとはしない。

何故かって？

…それは鎮守府の艦娘達の心の拠り所が紅蓮の炎に焼かれ、不気味な黒煙があちらこちらから上がっているからだ。

鎮守府の母港…そこは海へ出た艦娘達が『今日も無事に帰って来れた』と実感出来る場所である。

前任の元、無理に出撃し、何人が海の底へ沈んで逝ったことか…。

もちろん現在は長門の指揮により、轟沈する者は居なくなつたものの、この海に出ていく限り、死が彼女達を付きまとうのは必定だつた。

だから、ホツとするのだ。

いつもの景色。いつもの匂い。いつもの空気。

まさに字のごとくだが、戦いで傷付き、疲労困憊の彼女達を優しく出迎える母の様な存在……それがこの母港だつた。

だからこそ……この場所から出撃し、この場所に帰つて来る彼女達にとつて、そこを破壊されるというのがどれ程のものかと問われれば、想像に困らないだろう。

??? 「オラオラオラア！天龍さまのこの攻撃が避けられるかあ!!」

眼帯をした艦娘……天龍が大剣を振り回し、松風を壁の方へ追いやる。

松風はその手に砲門……ではなく拳銃の様なものを持つており、それを撃つて迎撃を図るが、巨大な剣を持つているにも関わらず、天龍はそれを易々と回避する。

松風「……ツチイ！」

天龍「そんなチンケな物で俺を止められると思つてんのかあ!!」

挑発するように松風を睨む天龍。

そんな天龍の後方から黒いマントを羽織つた別の艦娘が颯爽と現れる。そしてもう一人、天龍の後ろに居るようだが……。

??? 「…天龍、少し遊びすぎだ。そろそろ仕留めるぞ」

天龍 「ああ!?俺に指図すんじゃないやねえ!!」

神通 「…落ち着いて下さい。天龍さん、木曾さん」

戦いの最中であるのにも関わらず、味方である艦娘に掴みかかろうとする天龍を冷めた目で見る艦娘…木曾。

そして、そんな二人（主に天龍だが…）を冷静に落ち着かせようとする神通。白兵戦になれば、この鎮守府最強と謳われる剣客部隊…それが三銃士である。

その活躍は目を見張るものがあり、彼女達が一度戦場に現れば、どんなに劣勢な状況でもひっくり返ってきたと言われる。

今日は久々に三銃士同士で剣の稽古でもしようかと、母港に集まってきたわけだが、そんな中で松風が破壊活動な勤しんでいたところを発見したわけだ。

松風 「…ツやれやれ！僕も舐められたものだね!!」

壁に追い込まれたのにも関わらず、追撃されることなく、下らない喧嘩を見せられる松風。

苛立ちを覚えながらも、松風はその手に持った銃を天龍、木曾、神通に向け、弾丸を撃ちまくった。

だが、三人はそれを身軽に避けると、再び喧嘩を始めたではないか（神通は、天龍と

木曾を諫め様と必死)。

松風「…この銃を只の銃だと思わないことだね！ほら！ご覧よ!!」

そう松風が言うのと、その手に持っていた銃から黒い靄が溢れだす。次第に靄は銃を包み込み、そして松風の手を飲み込む様に広がり始めた。

黒い靄が消える頃には、先程の拳銃とは全く形状が異なる長い筒状の物が、鈍い音を響かせながら現れる。

…どうやら松風の手と完全に同化している様で、松風はそれを天龍に向けると、ニコリと笑った。

松風「ククク…死ねよ？」

そう呟いたかと思えば、目を奪われる様な黒い光線が天龍の居るところへ一直線に放たれる。

凄まじい轟音、そして黒煙。

松風「フン！この程度か…。舐めてるからそうなるのさ！」

以前に北の鎮守府を攻めた時に、この光線を撃ちまくった時は、一瞬の内にそこは崩壊してしまった。

なので、今回の主目的である『たくさん遊ぶ』には適していない武器ではあるのだが、天龍達の態度に少々ムカついていた松風はついついこの武器を取り出してしまった

様だ。

黒煙が晴れると、天龍達の姿はそこに無く、地形も先程と比べ大きく変わり、辺りにコンクリート片が大量に散らばっている。

松風は勝ち誇った様にそれを見ると、再び破壊活動をする為、その場を後にしようと踵を返そうとした。

だが、一瞬でもそこから目を反らし、後ろを向いたのが松風の運命を決めた。

神通「油断しましたね? : : :これで終わりです」

そんな声が聞こえたかと思えば、激しい痛みが松風の背中を走る。

松風「 : : : なあっ!!? 」

血が口から溢れ出すが、それでも後ろを向く松風。

: : : なぜ生きている!?

いいや、まずは!

どうやってあの光線を避けたかは理解出来ないが、まずはこの艦娘を消し飛ばすことが先だ。

松風は黒光りする『手』だった物を神通の方に向ける。

: : : が。

天龍「 : : : 近距離戦でそんな物、何の役に立つんだ!?! 」

気付いた時には、天龍がその大剣を漆黒の筒に振り下ろしていた。

松風「ツうあああああああつ!!!」

松風の腕からはおびただしい量の血が噴き出し、地面にはさつきまで自分の体の一部だったはずのものが転がっている。

痛み之余り、松風はその場にうずくまる。

地面に頭をつけ、苦悶の表情を浮かべる松風の頭上から誰かの声がした。

木曾「…留めだ」

木曾の背筋が凍る様な一声。

今、木曾の持つ刀が松風の首を狙って振り下ろされようとした…その時。

松風「…な、舐めるなああああつ!!!」

松風は残された方の手に黒い靄を纏い、鉤爪を出すと、なんとか木曾の一閃をすんでのところで受け止める。

そして、背中から先端の尖った黒い筒状の物体を幾つか取り出し、浮遊させたかと思えば、それを三人に向け、発射する。

お尻の部分から火を噴き出し、迫る鉄塊。

だが、標的がこれだけ近距離にいるのだ…着弾するのも早いし、撃った本人も爆発に巻き込まれるわけだが…松風はそんなことはどうでも良かった。

爆音と共に、黒煙が辺りを包み込む。

天龍「…オラア！」

大剣の一振りで、黒い煙を晴らす天龍。

その額からは血が出ているが、まだまだ戦える様で、鬪志を剥き出しにしている。

同様に木曾や神通も多少の怪我はあるものの、立ち上がって、松風に最期の一太刀を浴びせようとしている。

しかし、その松風の姿はそこにはない。

天龍「…死んだのか？」

木曾「分かん。だが、油断は出来ないからな。…どうやら鎮守府の方も攻撃を受けている様だ。あちらの援護にも回った方がいい。ここは俺に任せて、お前達は行け」

木曾が目をやった方向からは、煙が上がり、爆音が鳴り響いている。

神通「…お願いしますね」

天龍「…ったあーく！どこのどいつだあ!? かつて『雷霆』と言われたこの鎮守府を襲撃したバカ野郎は!？」

霞 「…ほら！こつち！」

「…ああ！」

僕は今、霞と共に鎮守府内を駆け回っている。

…入渠施設で霞に呼び止められた時、僕は事情を話す時間も惜しいと思われ、その場を急いで立ち去ろうとしたのだが、「だ か ら！待ちなさいったら！話が聞けないの？」と言われ、腰のベルトを捕まれてしまった。

え？

本当にこの娘、駆逐艦？人間恐れてるんじゃないの？

てか朝潮の妹にしては…なんか、その、粗暴な気が…。

霞「アンタが急いでる理由くらい容易く想像がつくわ！ほら、何ボサつとしてるの？走りながら話すわよ！」

「いや、今…」

今、僕を無理やり呼び止めたのは君だろ…と言いかけたが、確かに止まってる時間はないのは事実だ。

僕は霞を追うようにして入渠施設を飛び出す。

そして、今に至るわけだが、霞のおかげで救護の効率が上がっているのは確かだ。単純に人数が増えたのもあるが、鎮守府の内部構造に詳しい者がいると、僕が気付けなかった場所まで救護に回れる。

そして霞が居るといふことで、先程の睦月の様な誤解を招く心配もなくなった。

霞「大丈夫？立てる？」

「…うあ」

霞「…立てないみたいね。この娘は台車に乗せるとして…。ほら！アンタも!!!」

「あ、ああ！」

あれ以降、「ああ！」としか喋ってない気がする。

まあ、霞が大分指揮を執ってくれてるからなだけどさ。

睦月「…むむむ」

あ、そう言えば睦月もいたわね…。

ちようど霞と救護活動をしている時、後ろから背中を叩かれ、誰かと振り向いたら睦月がいて…「変なことしたらさすがにやつつけますからね！」と言われたんだよなあ…。

で、そんな睦月に霞が「手伝いなさい！」と一喝して、「にやしい!？」と叫んだかと思えば、今は一緒に救護活動をしてきている。

相変わらず不信感たっぷりの目を向けてくるけど、仲間を助けようとする気持ちは皆一緒だった。

そんな時。

「…うう…この僕が…この僕とあろう者があッ！」

苦痛に溢れた声が聞こえ、僕は声のした方を目を凝らす。

すると、何者かが地面を這いつくばっているのが分かった。

僕は急いで駆けつける。そして驚いた。

なんと、あの配送のお兄さんが、血だらけの体を引き摺りながら、必死にもがいていたのだ。

…お兄さんの周りには血だまりが出来ており、鎮守府の廊下には引き摺られた血の跡が痛々しく残っている。

「大丈夫ですか!？」

急いで助けなければ!

でも、この血の量…素人目に見てもマズイということが分かる。

松風「…ああ!?!なんだお前は……!」

声を掛けた時はキツと睨みつけられたが、僕の顔を見るや否や表情を歪めるお兄さん。

相当痛いのだろう。早く救急車を呼びねば…!

松風「…お願い!助けて!」

「もちろん!助けます!今、救急車を呼びますので…!」

松風「…いい!そんなものは必要ない!!!」

「!？」

急に怒鳴ったお兄さんに目を丸くする僕。

松風「あ…ち、違うんだ!僕は人間じゃないんだ!艦娘なんだよ!だから、入渠させ

てくれ」

……。

確かに、これだけ血が出て死なないのは凄いと思ったけどさ…じゃなくて!

えっと、いろいろな意味でパニックなのだけど、まずはこのお兄さ…この娘を助けな

いと!

「と、とりあえず入渠させればいいんだよね!? 任せてよ!」

松風「…ありがとう」

## 鎮守府防衛戦5

「先端恐怖症」…とまではいなくても、尖ったものを突き付けられたら誰だってビクツとなるものだ。

まあ、僕に至っては先端が尖っていいようがいまいが何か向けられた時点でビビってしまうが…。

ん？なんでそんなことを冒頭で話しているかだつて？

向けられているんだもん、今まさに。

黒光りした数多の『モノ』が僕の方にね！

…正確には、僕が台車に乗せていた人物に向けられていると言った方がいいか。

僕は霞、睦月と共に救護活動に奔走していた。

それで満身創痍の艦娘（お兄さん）と遭遇したわけで…とりあえず一旦、霞と睦月とは離れ、この娘を入渠させる為に僕だけ施設へ戻って来た。

うん、ここまでは大丈夫だよな。

で、施設に入ると相変わらず視線は感じたけど、それは特に問題なかった気がする。

それで僕がお兄さ…じゃなくて、この娘を入渠させようとしたら、「待ちなさいよ！」

と怒鳴り声とも取れる様な声が聞こえて……それで間髪入れずに砲を向けられたと……

え？

なんで？

??? 「…誰よアンタ!？」

「あ、僕は…」

??? 「アンタじゃなくて、そっちのよ!!!」

赤色とも橙色とも言える様な色の髪をした艦娘が捲し立てる様に言う。

凄じい剣幕だ。

しかも、その後ろには桃色の髪をした艦娘と黒髪の艦娘がいて、めちやくちや睨んでくるのですが…。

え？

ほんとになんて？

松風「・・・」

渦中の艦娘は俯いたまま無言だし…うーん。

だが、一刻を争う事態なのには変わりなくて…とりあえず入れちやうか!

??? 「待ちなさいったら!!こんなヤツ、見たことないんだけど!!」

「おお、そうなんだ。じゃあ今、はじめましてだね。よっこらせつとー!」

事態は一刻を争うので、入れちやry

??? 「耳が無いのかしら!?! アンタは知り合いなのかもしれないけど、私を含めて不知火も黒潮も…ここにいる全員がソイツを知らない! それで違和感を感じて、『こういう状況』になつてるんじゃないの!?! 違う?」

なんだ、このツインテール!?

「ちよつ!?! ちよつと!?! 今はそんなことどうでもよくないか!?!」

思わず叫ぶ僕。これだけ重傷なんだ…この際、この鎮守府に居ようが居まいが関係なく助けるべきだろう?

「この娘は配送の…」

とりあえず身元をはっきりさせればいいのかと思つた僕は、この艦娘が軍の検閲及び配送を担う機関の者だと証言しようとする。

しかし…。

??? 「アンタ…バカなの? この鎮守府は襲撃を受けたのよ? それで見知らぬ者を信じろという方が無理な話だわ!…てかアンタも誰なのよ!?! 私達を入渠させたつてことは敵ではない…のよね?」

あ、あれ? なんか雲行きが怪しくなつて参りましたよ!

すると、髪が桃色の艦娘がツインテより一步前へと歩み出る。

???「：陽炎。とりあえずここは不知火が押さえておきますから、長門さんに報告を…。黒潮も手伝つてくれますか？」

黒潮「：もちろんや！ここはウチらに任せて、陽炎は報告に行きや！」

そして桃色と黒髪が砲をこちらに向けながら、ジリジリと僕たちの方へ寄つてくるではないか。

ツインテは「分かったわ」と言いつつ、施設を出ずに、こちらの様子を注意深く伺っている様だった。

：いや、こつちの話を聞けよ!?

僕は目の前の艦娘を抱き締める様にして、叫んだ。

松風「!？」

「人を助けるのに：人を助けるのに理由があるのか!? 違う! 違うだろ!! たとえ：たとえ敵であろうと傷付いた人がいたら救う、それが人が人たる所以なんじゃないか!？」

そんなの：当たり前のことじゃないか!

僕はそつと目の前の艦娘を抱き締める手を離し、勢いよく立ち上がった。

「これが僕の…」

不知火「黙ってください」ポコツ

「ぐえ…!?」

…鳩尾に強い衝撃を受ける。そして暗転。

情けないことに、僕の意識はそこで途絶えた。

黒潮「なんや、えらそーなことばかり言うて、こんなもんかいな!」

不知火「…所詮、人間ですから。それに…」

不知火「殺すか、殺されるかという状況でこの人間の言っていることは戯言に過ぎません」

不知火は正体不明の艦娘と気絶した人間を恐ろしい程の眼光で睨みつけながら、吐き捨てるように言う。

黒潮「そのとおーりや! そんなこと言うてたら、命がいくつ有っても足らん! …そういう訳やから、おまえもお縄についてや…!?」

黒潮は驚いた。いや、黒潮だけではない。

不知火、陽炎、この場にいた艦娘全員が驚いた。

目の前の名も知らぬ艦娘が涙を流していたのだ。

だが、その涙の理由は悲しみによるものなのか、痛みによるものなのか、はたまたそれ以外のことなのか、判別はつかなかった。

無表情なまま、目から大粒の涙が溢れだしている。

それは何とも『異様』な光景だった。

それで誰かがその涙の理由を聞こうとしたのだろう。

だが、結局その答えを聞くことは叶わなかった。

??? 「見つけたのです♪」

突如、入渠施設に現れた小さな娘。

そして、「誰?」という疑問が頭を掠めたその一瞬の内に、その娘は目の前の傷だらけの艦娘を連れ、消えてしまった。

陽炎「何よ…今の巨大な手は……」

陽炎がそつと呟いた。

僕が目を覚ました時、そこは闇の中だった。

…胸のところは痛みを覚えながらも、なんとか立ち上がる。そして甦ってくる記憶。  
…今までの夢？

そう思うのは無理もない。

あれほど、揺れていた鎮守府は今は微塵の震動も感じない。そして、何も音が聞こえないのだ。静寂。

「川内…」

僕は不意にそう呟く。

とりあえず、ここはどこだ？

電気が消えている様で手探りで探索をするしかないのだが…。

すると急に光が目飛び込んでくる。

そして気が付いた。ここは僕の自室だ。

そして光の先には、部屋に入ってきたであろう人物がいたのだが、それは先程僕が呟いた名の者だった。

その艦娘は暗闇の部屋に光を灯す。

…しばらくは目が眩しさに慣れず、その表情は見えなかったが、次第に目が慣れてくると、その顔をしっかりと見ることが出来た。

目を赤く腫らしたその顔。

ただ事ではない：そう感じた僕は彼女に声を掛けようとするが、彼女は一枚の紙を僕に差し出した。

それを静かに受け取る僕。

受け取った紙には、何名かの艦娘だろうか：その名前が書かれている。中には見知った艦娘の名前が幾つかあった。そして、そこに名を記された者たちがどういった意味でこの紙面に名を連ねているのか僕は知る。

僕は『戦争』の残酷さを噛み締めることになった。

## 栄枯盛衰

静かな、本当に静かな夜明け。

…あの日の朝もちょうど今くらいの静けさだった。

もうしばらくこの部屋から外に出ていない気がする、それこそトイレに行くぐらいか…。

鉛のように重くなった体をおもむろに起こすと、僕は部屋の扉を開ける。

…どうやら今日も『それ』は扉の真横に置いてあるようだった。

僕はそれを手に取ると、直ぐさま部屋の中へ戻る。

そして、それを貪るように口に運んだ。

…律儀にも彼女はこんな自堕落な僕に朝食を持ってきてくれている。

そんな優しさを噛み締めていると、僕の頬を何かが伝っている気がした。

まるで死人のように床に横たわる毎日。

あの日から一体どれだけの時間が経っただろう。

…いや、実は時間などそれほど経っていないのかもしれない。それとも、もうかなり長い時間が過ぎてしまったのだろうか。

：どうでもいいか、そんなことは。

だが、今日はこの部屋で過ごすわけにはいかない。

なぜなら昨晚、ある艦娘が僕の部屋を訪ねてきたのだ。

それは突然の来訪だったが、その艦娘は部屋に入つてこようとはしない。

随分と気を遣わせているらしい。

そしてドアの向こうから聞こえる穏やかな声。

その声からして、長門だったと思われる。

長門「：しばらく振りだな。体の調子は大丈夫か？」

「・・・」

長門「返答はなし：か。まあ返事がし辛いなら無理にする必要もないが：たまには川内たちにも姿を見せてやってくれ。心配しているようだぞ？」

「・・・」

長門「：さて、私がここを訪ねてきた理由だが、なにもこれだけを言いに来たのではない。：明日、この鎮守府に海軍本部からお偉いさんが来るようなのだ。：以前、貴方はこう言っていたな？上層部には『自分が提督として着任した』と報告してくれ：と」

「・・・」

長門「…気が進まないのは分かるが、貴方に是非とも会いたいそうなのだ。…明日の朝、執務室で待っている。必ず来て欲しい」

「・・・」

長門「…私からは以上だ。それと、明日必要になるであろう書類を扉の前に置いておく。私も貴方達の話し合いの場に同席するが、念のために目を通しておいてくれ」

…結局、僕はそれに肯定も否定もしなかつたわけだが、とりあえず自分が言ったことだ、責任をもたなくてはならない。

僕は昨日一読した書類を手に取ると、執務室へと向かった。

先日、とある鎮守府が『黒い艦娘』に襲撃された。

確認された敵の数は四で、その内の二機を撃破し、残り二機は行方知れず。

その鎮守府から送付された報告書を見る限り、今回の襲撃で多数の死傷者が出ており、鎮守府の東館は完全に崩落しているらしい。

現在、復旧作業を行っている……と。

最近『黒い艦娘』の進撃が顕著なのは、海軍本部も六艘も把握していたが、今回の襲撃で特異なのは、陸から攻め込んでいるという点だ。

それまでの『黒い艦娘』の奇襲攻撃にはパターンがあった。

今までの調査結果から、崩壊した各鎮守府の近海には、多数の航空機の残骸が漂流していたことが分かっている。

そしてその残骸を解析したところ、その多くが深海棲艦の発艦する飛翔体とデータが一致したと報告があった。

…まず敵空母から発艦した無数の航空機が総攻撃を仕掛け、鎮守府の戦力を大幅に削り取る。

そして鎮守府の機能がほぼ停止したと思われる頃に追い討ちをかけるようにして、海から少数の部隊が上陸し、攻め込むというのが『黒い艦娘』の常勝戦法と考えられるのではないか。

龍田さんや叢雲さんが会敵したのはまさに残党狩りを行っていた部隊と考えるのが妥当だろう。

要は空を制されたら終わり…ということか。

…もちろん、今は亡き数多の鎮守府にも空母や対空砲火の出来る艦娘がいたのだが、それを圧倒的に凌駕する程の航空戦力が『黒い艦娘』にはあると考えられる。

それこそ誰も生き残ることが出来ない程に…。

そういった意味で、その『特異』はこちらの初勝利に貢献することになったのかもしれない。

報告書を見るに、敵航空機はその姿さえ見ることはなかったようだ。

今回の襲撃の流れを要約すれば、早朝に一台の車輛が鎮守府の門を突き破って、その敷地内に侵入。

その車輛の荷台部分から『黒い艦娘』が二機現れ、鎮守府の正面玄関と東館をそれぞれ攻撃し、残りの一機は鎮守府の母港を奇襲。

ちなみに、この母港で破壊活動を行っていた『黒い艦娘』は、『PROMETHEUS』の所属であったことから、現在同機関を調査中である。

そして、正面玄関・東館・母港の各所にて鎮守府の艦娘と『黒い艦娘』が交戦。

正面玄関と東館の『黒い艦娘』は撃破され、母港で敗走した『黒い艦娘』は鎮守府の

入渠施設で目撃された後、行方不明となっている。

：気になるのは、入渠施設で行方不明となった者とそれを手助けしたもう一人の『黒い艦娘』だ。

この四人目の『黒い艦娘』は特に破壊活動を行うわけでもなく、鎮守府の戦力である戦艦や空母、重巡を悉く気絶させていたとのこと。

：戦力を削ぎたいのであれば、なぜ殺さなかったのか？

これも、襲撃すれば全滅させるのが常だった『黒い艦娘』の今までの戦闘パターンと比べれば、違和感を感じる。

ふむ、これに関してはまだまだ調査が必要だな。

とは言え、今回の襲撃を乗り切ったこの鎮守府には本当に頭が上がらない。

『黒い艦娘』の遺体。

それを回収することで分かったこともあったのだから。

遺体は損傷が激しかったものの、解析の結果、白露型の村雨と夕立ということが判明した。

確かにそう言われて見れば…と思ったが、どうにも自分の知る村雨、夕立とは程遠い異質な存在にしか見えないというのが感想だ。

容姿こそ、村雨と夕立そのものだが、その身に纏う艦装は筆舌し難い不穏な雰囲気

醸し出し、その闇のように黒い装備で一体どれだけの命を奪ったのだろう。

もちろん、本部の技術班がその解析を行ったのだが、どうやら村雨と夕立には外部から手が加えられたような跡が見つかったらしい。改造と言ったらいだろうか。

そこで、現存している全艦娘のありとあらゆる情報を包括している『ZEUS』のデータベースと照合すると、基本ベースは村雨と夕立であることは間違いなかった。

そして同時に遺体からは、村雨と夕立以外のデータが抽出されたのだ。

正確に言えば…艦娘は戦う時に内部に格納した艦装を展開して戦うのだが、それに対して『黒い艦娘』は、その内部に別の艦装を格納しているようで、それが具現化した所謂『武器』から、海軍が大戦の黎明期に鹵獲した深海棲艦と同一のデータが高い数値で検出されたようだ。

謎が謎を呼ぶとはこのことか。

まあ、これに関しては自分の専門ではないので技術班に一任することになるのだが…。

自分も六鐘のメンバーの一人として、情報収集に赴かなければ。

どうやら近々、その鎮守府を阿野さんが直々に訪れるようなので自分も同行させてもらおう。

…なんの因果かその鎮守府は、自分が目をつけていた鎮守府なのでもあるのだから。

かつて最強と謳われ、現在はその見る影もない鎮守府を実際にこの目で確認しなければ。

## 番外編：目覚まし時計

ジリリリリリリ

うるさいなあ…。

そう思って、目覚ましの音を止める。

まだまだ夕立さんは眠いのだ。

ジリリリリリリ

…！

どうやらうまく止まらなかったらしい。

先程より力を込めて、目覚ましを止める。

ガツン

ふう、これでまた眠れるっぽい。

目が覚めると、そこは異世界……ではなかった。  
いつもの私の部屋。

「うう、最近は何冷えるっぽい……」

私はまだまだ眠い目を擦りながら、トイレに行こうと布団から這い出て、ヨロヨロと歩き出す。

全く！どうしてこう冬は寒いのか……

そんなどうしようもないことにイライラする夕立だった……

イタツ！

……どうやら私は何かを踏んづけたようだ。

その痛みあまり私の眠気は一気に吹き飛んだ。

「イタタタ……」

足の裏を押さえながら、一体何を踏んだのかと目を凝らす。

へ？

そこにはたくさんの金属片が散乱していたのだ。

おまけにカチツカチツと規則的な音まで聞こえる。

あ、やばいっばい…。

血の気が引いていく。寝起きは血圧が下がるものだが、決してそういう意味で言っているのではない。

夕立の目の前には無惨な姿の目覚まし時計があつた。

しかもこの目覚まし時計、買い直せばいいじゃん！と一重には言えないのである。

夕立の回想

「ああ、最近では寒くてなかなか起きれないっばい！」

「そうですね！私もなかなか起きれなくて…」

「朝潮もっばい!?意外〜！」

今、私は公園のベンチに座つて親友の朝潮と楽しくお喋りをしている。

で、『最近話題のドラマ』だとか『気になる人』はいるのだとかそんな他愛のない話をしていたのだ。

そしてそんな中、ふとした拍子に話は『朝起きれない』という話題になった。

「目覚まし時計とかはないのですか？」

「うーん、ウチ目覚まし無いつばい！」

「え…じゃあ、今までどうやって起きていたのですか!？」

「勘！」

「…す、すごいですね」

「えへへ…」

なんか朝潮が目を細めて私のことを見つめてきたけど、そんなに尊敬しないでほしいっぼい！

…そんなことを思っていると、朝潮は何かを思い付いたような顔になる。

「あ！もし良かったら、私の目覚まし時計をあげましょうか？」

「へ？」

「使い古した物なのですが、ちゃんと動きますし、もし夕立ちちゃんが貰ってくれるなら…の話ですが」

「それはもちろん欲しいっぼい！あ、だけど朝潮のが無くなっちゃう…」

「フフ、心配ご無用です！私はもう一台目覚まし時計を持っていますし…ですから貰ってくれるなら私も嬉しいです！」

「それならすぐにも貰うっぼーい！」

うわああああああああん！

ど、どうしよー!!

なんでこうなったっばい!?

夕立は何もしてないのにー!!!

その時、ピンポンとインターホンが鳴る音が部屋の中に響き渡る。

「ゆーうだーちちやーん! あーそーぼー!!!」

あ、朝潮オオオオオオ!!!

なんでこんなタイミングで家に来たっばい!!!

あ、今日遊ぶ約束してたっばい…。

コンコン、コンコン

ドアをノックする音がこだまする。

アレエ、ユウダチチャンイナイノカナー…。

ま、まずいっばい! 早くこの目覚まし時計を片付けるっばい!

私はとにかくこの『目覚まし時計だったもの』を見られるわけにはいかないと、急いで箒と塵取りで金属片を集め、ビニール袋の中に入れてみると、押し入れの中に放り投げる。

そして、寝間着姿のまま玄関へと走る。

「お、おおまたせっばい！」

「あ！夕立ちちゃん！お早うございます！」

「おはようっばい！」

「…寝てたのですか？」

「え、いやあ、その…」

しどろもどろになる私。

それをジッと見つめる朝潮。

「…メザマシドケイ」

「へ？」

「使わなかったんですか？」

ぼ、ぼいいいいいいっ!!!

朝潮の目が怖いっばい!!!なんて冷たい目！

「も、もちろん、っ、使ったっばい！」

「それは良かったです！」

「ぼ、ぼい〜」

「じゃあ、なんでパジャマを着ているんですか？」

「そ、それは…夕立は朝は朝はパジャマで過ごしてるっばい！」

「そうでしたか」

「と、とりあえず上がるっぽい」

「はい！お邪魔します！」

「着替えてくるから、そこに座ってて！」

夕立ちちゃんはそう言って、隣の部屋に行ってしまった。

どうやらこの部屋は夕立ちちゃんの寝室らしい。

私は夕立ちちゃんが寝ていたであろう布団の上に座り、部屋の中を見渡す。

水玉模様が素敵な壁紙に、可愛らしい家具。

うん、夕立ちちゃんらしい部屋だ。

でも…なんで…。

メザマシドケイガナインダロウ？

「おまたせっばい！オレンジジュースでいいっばい？」

私はオレンジジュースを手にとって、朝潮の待つ部屋に入る。

「……………」

「あ、あれ？」

朝潮が目を伏せ、ジーつと部屋の隅を見ているっばい。  
ど、どうしたのかな？

「あ、あさし…」

「夕立ちちゃん」

「な、何？」

「目覚まし時計はどうしたんですか？」

「え…目覚まし時計？そ、それは……………ッヒイ！」

朝潮が今までに見たことのない濁った目で私を見る。

やめて！

朝潮のハイライトのない瞳で、「目覚まし時計はどこですか？」なんて言われたら、怯えきった夕立の目が泳ぎまくってついつい押し入れの方を見つめちゃう！

お願い、死なないで夕立！夕立が今ここでべられたら、村雨や春雨との約束はどうなっちゃうの？

『ブツ』まだは見つかっていない。ここでシラを切り続ければ、朝潮を騙せるんだから！  
次回、「夕立死す」。デュ〇ルスタンバイ！

## 栄枯盛衰2

「……」

「……」

「……」

「……」

「……えっと、この度は……その、わざわざ遠いところからお越し頂き……」

「堅苦しい挨拶はいい。……君はこの鎮守府の長なのだろう？ そう緊張しないでくれ」

「は、はい」

ああ、どうしてこうなった！

僕は今、執務室で海軍のお偉いさんを相手に、必死にその対応をしている。

……長門は早々にこのお偉いさんが連れてきた艦娘と部屋を出ていつてしまおうし、目の前のお偉いさんは、筋肉モリモリマツチョな大男で、まさにTHE・軍人という感じだ。

普段長門が海図を睨んでいる机を間に挟み、向かい合うようにして座る僕たち。

対峙しているだけで、かなりの威圧感を感じる。

「……まず、艦娘たちを的確に指揮し、今回の事態を切り抜けたこと……本当に見事であった

！」

そんなことを僕が思っているとも知らず、目の前の男は厳格な表情を崩さずにそう切り出した。

「今回の勝利には我々海軍本部も驚いているのだ。もつと誇りに思ってくれていいのだぞ?。」

「は、はあ…。」

ついつい生返事をしてしまう僕。

実感がない。

そりやそうだ、僕がやったことなんて…。

「…だが、今回の偉業を成し遂げるにあたって、この鎮守府も多大な犠牲を払ったようだな。…その尊い犠牲に我ら海軍は最高位の敬意を払おう」

…そんなこと僕に言わないでくれ、僕は…。

「君はまだ士官学校を出て間もないというのに、よくここまで健闘した。…我らも最大限の支援を君の鎮守府にしよう」

「だから、僕は…。」

「」

その後の会話はよく覚えていない。

ただ領いていただけな気もする。

最後にその男は、僕に茶封筒を一通渡すと、いつの間にか執務室に戻ってきていた連れの艦娘と共にこの鎮守府を去っていった。

長門が僕の肩にそつと手を置き、「ご苦労様」と労いの言葉をかけてくれたことで、どうやら今回の訪問が終わったということが分かった。

「…青葉」

青葉「はい！なんでしょうか？」

ガタガタと揺れる車内にて、六艙から『阿野さん』と慕われる男が隣に座る艦娘…青

葉に話し掛ける。

「この道はきちんと舗装がされていなくて、乗り物酔いを催しそうな揺れがずっと続いているのだが、このような揺れがもうしばらく続くと思うと、嫌気が差す。」

「男は気を紛らわせるために、他愛のない話でもしようと自分に話しかけたのだろうか」と青葉は考える。

だが、それは違ったようだ。

「彼は、一体あそこで何をしているのだろうか?」

青葉「え?」

意図が分からない質問に困惑する青葉。

だが、構わず男は続ける。

「おそらく…彼は艦娘の指揮などしていかないのだろうか」

青葉「…なぜ、そう思えるのですか?」

「…軍人の勘、とでも言うのかな」

そう言つて青葉の質問を濁す男。

その目は流れるように変化する車外の景色に向けられていた。

「…学校を出たばかりの彼に『黒い艦娘』の襲撃を打破する指揮が執れたとは到底考えられない。…それにあそこの鎮守府の艦娘たちは、かなり曲があつて、ついこの間まで、ほ

ぼ艦娘だけで運営されていたと言っても過言ではなかったのだ」

青葉「そうなのですか…でも」

「そう、彼らは乗り越えたのだ、絶体絶命の窮地を。それに対してケチをつける気は毛頭ない。海軍としても、『黒い艦娘』の実態把握に大きく貢献してくれたこの鎮守府に頭が上がないくらいだ」

そして男は一息つくと、青葉の顔を真剣な顔つきで見つめる。

「あの鎮守府がかつて『雷霆』と言われていたのを青葉は知っているか？」

青葉「はい、一応は」

「そうか…。あの鎮守府はな、今でこそ廃墟と言われても仕方ないくらいの有り様だが、あの鎮守府が建造された当初は、それこそ海軍一の強さを誇った鎮守府だったのだ」

まるで昔を思い出すかのように、哀愁のある顔で語る男性。

「もう随分と昔の話になるな…。所属する艦娘も強ければ、指揮する者も才能に溢れる男で、まさに我ら人類にとってはそれまでの絶望感を光照らす眩い雷光であり、深海棲艦にとってはその身を焼き払う雷撃となったわけだ」

そこまで男は言うと、一瞬顔を曇らせる。

まるで、何かを話すことを憚っているような、そんな顔だ。

「…なぜ後任にあのような下賤な者を選んでしまったのだろうか…当時の上層部は」

男のどこか悔しそうな顔を見て、青葉も話始める。

青葉「…青葉もあの鎮守府は気になっていました。それこそ、世の中にはブラック鎮守府は腐るほどありますが、そんな中でも単機出撃による轟沈が断トツで多いんですよ、あそこは」

「…単機出撃による轟沈？」

青葉「はい！そして驚くことに、なんの因果か分かりませんが、あそこの鎮守府は村雨と夕立を単機出撃で轟沈させているんです！」

「…つまり、どういうことだ？確か、村雨に夕立と言えば、今回の襲撃を行った者たちと同一の艦だったと記憶しているが…。それに…単機出撃による轟沈とそれがどういう関係があると言うのだ？」

青葉「…まだ断言することは出来ませんが、あくまで青葉の仮説として話すのであれば……………」

執務室で手に持った紙を静かに見つめる艦娘：長門。

この執務室はこんなにも広かったのだろうか……という疑問も最近は当たり前前になつてしまい、気に留めることもなくなった。

その紙には『鎮守府襲撃による被害実態』と大きく赤字で記されており、その下には戦没者の欄、行方不明者の欄と書かれたところがあった。

戦没者

鬼怒・朝潮

行方不明者

陸奥・古鷹・吹雪

何度見ても、その羅列された文字が変わることはない。

事態が終息した時、まず長門は正面玄関へと足早に向かったが、そこには見知らぬ艦娘の遺体と砕け散った陸奥の艦装の一部が落ちていただけだった。

それからしばらくして、さらにそこから大分離れた草の生い茂るところに、朝潮が静かに横たわっているのを鎮守府の艦娘が発見した。

そういえば、先程渡されたこの茶封筒。

…あの人が私に押し付けるようにして渡したそれを迷ったが、開けてみることにした。

そこには複数の紙が入っていたのだが、その多くがこの鎮守府に支援をする旨が書かれているようだ。

そんな中でも長門の目を惹いたのは、軍備増強と題し、上層部から何名かの艦娘を着任させるといふ旨が書かれた書類だ。

…これは送られてくる艦娘の写真とその情報だろうか、こんな倒壊しかけている鎮守府に着任するなど、この艦娘たちは気の毒だなと自嘲気味に笑う長門。

だが、すぐその笑みは消え、厳しい顔つきになる。

長門「陸奥…」

静かに呟く彼女の声に応えてくれる艦娘はもういない。

## 川内の想い

今が朝だろうと昼だろうと夜だろうと関係ない。

流れ行く毎日をこの部屋で特に何をするでもなく、ふいに過ごすこの僕にそんなことは関係ない。

それに最近、ちゃんと眠れない…。

目を瞑ると、暗い暗い闇の中に僕は居て…ちよつと先のところに光が照らされているから、そこへ向かうんだけど、見知らぬ…いや、本当は『知っている』娘たちが僕に背を向けてそこに居るんだ。

声を掛けようとする、フウと霧のように消えてしまうその後ろ姿に、何度も冷や汗をかきながら目を覚ます。

「仲良くなりたいたいっていう気持ち…」

誰に言うまでもなく、一人呟く。

いつからかドアの向こうから呼び掛ける声もなくなつた。それでも、扉を開ければそこには大体食べ物が置かれている。

うん、僕は変わるんだつたよな…。

……。  
簡単なことだ、変わるなんて。

あの最悪な一日を境に、アイツは部屋に籠って、出てこなくなってしまった。  
毎日毎日アイツの部屋を訪れては、声を掛ける。

でも最近は何んて声を掛けたらいいのか分からなくて、ただご飯を置きに来るだけに  
なってしまった。

でも、扉の前に空になった食器が置いてあるのを見ると私は安心するのだ。  
ああ、アイツはまだ生きててくれる。

そう思えるのだから。

もちろん、変わってしまったのはアイツだけではない。

私を含めて、この鎮守府は大きく変わってしまった。

先日、鎮守府の近海に多くの艦娘が赴いた。

長門さんは鎮守府を離れるわけにはいかなかったので、代わりに赤城さんがその場で集まった私たちに静かに言う。

赤城「ここで朝潮さんと鬼怒さんを見送りましょう」

黒い棺に入れられた私の仲間。

二つある内の小さい方の棺に、霞や大潮たちが大声で泣きながらすがりついているのを、私たちはただ見守ることしか出来ない。

そして、那珂が泣くのを私は初めて見た気がする。

涙と鼻水で顔をグシャグシャにして泣く妹。

頭では分かっていたけど、こんな、こんなことって…。

一方で、もう一つの棺には静かに目を閉じた阿武隈が手を置いている。その顔は何故か笑みを浮かべていて、この場に相応しくないと私は思った。

そして赤城さんの令の下、私たちはその棺を海に浮かべる。すると、ゆっくりとゆっくりとその棺は海の中へと消えていった。

そしてそれからしばらく経った頃、上からとある命令がこの鎮守府に下ったのだが、それには多くの艦娘が反発した。

元々、この鎮守府はアイツが来るまでは…というかアイツが来てからも、長門さんの指揮の下、私たちは動いてきたのだ。

ただ、アイツが以前話してくれた内容を顧みれば、上はアイツがここの鎮守府の提督として着任したと思っっているようで、このような内容の命令を易々と下せたのかもしれない。

そういった意味では、艦娘だけで運営していたあの頃の方が勝手に良かったと思う。

『引き続き、海の平定に益々努めよ』

必要最低限の設備を残し、ほぼ機能が停止しているこの鎮守府で、引き続き海の平定に努めるということ、それは上が私たちをどう見ているかをありのままに表していた。

「私たちに無駄死にしろというのか！」

「一時的にでも、他の鎮守府へ移籍させろ！」

「せめて、傷が癒えるまでは休ませてくれ！」

そんな意見が毎日のように長門さんの元へ寄せられたそうだ。それを長門さんは静かに頷くばかり。

皆もあんなことがあつた直後だったから、『死』に過敏になつていたようだった。

そしてそんな思ひは、燃え盛る火のようにどんどん大きくなつて、遂には「上からの命令など無視しろ」という艦娘たちの集まりが出来てしまった。

長門さんはそれに何を言うまでもなく、ただ静かに日々の執務を行っているようだった。

そして、今日。

中庭に集められた私たちに、改めてこの鎮守府で引き続き海の平定に努める旨が長門さんから伝えられた。

それを聞いて、複数の艦娘がその場を立ち去つてしまった。

バラバラだ、みんな。

それで、私は遅くなつた朝食をアイツの部屋に届けに来ただけど、なんと部屋の扉が開いているではないか。

恐る恐る部屋の中を覗くと、アイツが私の姿を見て、笑顔で挨拶をしてきたのだ。

私は久々に聞くアイツの声に、つい涙を流してしまったのだが、アイツはそんな私を黙つて抱き締めてくれた。

それからしばらく抱き締められていた私だったが、「もう、心配させないでよ！」と捨て台詞を吐いて部屋を後にした。

アイツの体はとつても温かくて、それでとても安心したのだ。

私はきつと赤くなっているであろう頬をアイツにバレないようにするのに必死だったんだ。

だから、気付けなかったのかもしれない。

アイツが不自然な笑みを浮かべながら、とある決意を固めていたということに。

## 鎮魂祭

川内「……ごめん、今回ばかりは協力出来そうにない」

「ああ、分かっているよ。気にしないで？」

川内「……ごめん。本当にごめん」

時折目元を拭いながら、本当に申し訳なさそうな顔をして謝罪の言葉を述べる川内。彼女にこんな悲しそうな表情を浮かべさせ、苦渋の決断を強いたであろう自分が情けない。

なんとか平素を装うと努める僕だったが、その痛々しい姿に胸が詰まる思いがした。そして沈黙が流れる。

この気まずい空気を打開しようと、僕は口を開こうとするが、それは目を伏せ、足早にこの場を立ち去る川内の行動によってついに開くことはなかった。

「……すまない、川内」

誰も居なくなつた執務室に僕の声が空しくこだました。

あの日はちょうど昼時だった。

瓦解した鎮守府の復旧作業に追われる艦娘達の耳に鎮守府のスピーカーから放送が入る。

あの襲撃以来、スピーカーでの全体放送などあまり無かったので何事かと彼女達は耳を澄ます。

そして聞こえてきたのは……。

「あー、初めまして。僕はこの鎮守府に居座らしてもらっている者です。…きっと僕の存在を知っている娘もいると思うけど」

…まるで時間が止まったの如し。その一瞬、誰もが驚きのあまり、息をすることさえ忘れていた。

そして、その驚きが次第に別の感情へと変化する。

怒り、憎しみ、恐れ、悲しみ。

怒鳴り声をあげる者や過呼吸になって別の艦娘に支えられる者もいた。

だが、スピーカーから流れ出る声は止まらない。

「…グダグダ言うのもなんだから、単刀直入に言おうと思う。あんなことがあつたばかりだけど……いや、あんなことがあつたからこそ！鎮魂の意を込めて、祭をやらなければ」

僕は全艦娘に祭を行う旨を伝え、異論がある者は執務室に来る様に告げると放送を切る。

長門はその一部始終をなんとも言えぬ表情で眺めていたが、僕が放送を切ったところ

でその口を開いた。

長門「……貴方は、一体何を考えているのだ？」

「長門……ごめんね？これが僕の意志なんだよ」

長門「……」

彼女はそれ以降黙ってしまった。

……そもそも全体への放送さえ長門は渋っていたのだが、それを僕は無理やり押し退ける形で強行した。

彼女からの視線を気にしない様に振る舞いながら、僕はソファアに腰を下ろす。

……どうやら長門は海図の方へ視線を戻したらしい。

そんな彼女の様子を横目で確認していると突然、執務室のドアが乱暴に開かれ、憎悪を一切隠さぬ表情を浮かべた艦娘たちがぞろぞろと部屋になだれ込んで来た。

「そりやそうなるよな……」

僕は誰に言うまでもなくそう呟くと、その来訪者たちへと向き直った。

「仲間が死んだのに祭だなんて……私たちをバカにしないで!!!」

こんな言葉を何度聞いただろう……。

全身に複数の殺意に溢れた視線を浴びながらも、手が出されないのは長門がこの部屋に居るからか、はたまた艦娘たちの良心からか……。

これほどまでに罵詈雑言が執務室を飛び交うということが今までかつてあったのだろうか？

…そして、その言葉を向けられた者が断固として祭は執り行うという姿勢を崩さないことに、艦娘達はさらに激昂する。

「お前なんか出ていけ!!!」

「お前が死ねばよかったんだ!!!」

そんな言葉を吐き捨てながら、艦娘たちは執務室を出ていく。

だが、息をつく暇などない。

なぜなら、ある艦娘が執務室を出て行ったかと思えば、すぐにまた別の艦娘がやって来て、恨みがましい目を向けながら、激しい感情をぶつけてくるのだから。

僕の気持ちは折れそうだった。

しかも、その次々と押し寄せてくる顔触れの中に見知った者を見つけたら、それは尚のことだ。

例えば、霞。

：おそらく朝潮の妹と思われる他の艦娘を二人ほど引き連れ、執務室の扉を勢いよく開けたかと思えば、凄まじい速さで僕の方へ突っ込んでくる。

そして、涙でいっぱい目の見開き、僕の胸ぐらを掴むと捲し立てるように罵声を浴びせてきた。

例えば、神通、那珂。

彼女たちは特に罵声を浴びせてきたという訳ではなかったが、彼女たちの答えはシンブルだった。

「私たちに関わらないで下さい」

感情など微塵も感じさせない冷たい一言が神通の口から発せられる。そして、彼女はそれだけ告げると僕が言葉を掛ける間もなく、静かにその場から立ち去る。

「…見損なつたよ」

溢れる涙を拭うことなく、ただ僕の顔を真つ直ぐ見つめる那珂。

：そこに少し前まで僕に見せてくれていた笑顔はもうない。

これでもかという程の敵意をその瞳が映していると僕が理解した時には、那珂の平手によつて僕の頬は叩かれていた。

その後も見知つた者、そうでない者を問わず、僕は艦娘たちの激情を受け止め続けることになった。

：いつの間にか長門は執務室から姿を消している。

そして、かなりの時間が経つて身も心も疲弊し切つた頃に、出来れば会いたくなかつた艦娘が僕の元を訪れたのだ。

そして冒頭でのやり取りを経て、僕はしばらく力なくソファ―に腰を掛けていたのだが、再び執務室のドアが開けられる。

今度は一体誰だろうかと思つて、訪問者に視線を向けるとそれは知つた顔だった。

阿武隈「：ふふ、久しぶりね！」

「・・・」

阿武隈 「反応無しなのお!？」

…阿武隈か。そういえば彼女も……。

阿武隈 「なんだかすごいことを企んでいるみたいね!」

「…(めん)」

何とか口をついたのは謝罪の弁だった。

そうだ。それしかない。それ以外に何が出る？

今までの艦娘たちの態度を見れば、阿武隈がこの部屋に何をしに来たのかくらい容易く想像出来た。

…阿武隈を含め、他の艦娘にとって僕の謝罪など何の意味も持たないだろう。

でも、無力な僕にはそれしか出来なかった。

阿武隈 「……」

僕の謝罪を聞き、無言になる阿武隈。

僕はじつと、きつとこの後に来るであろう罵声を静かに待ち受ける。

だけど、阿武隈の口から発せられたのは実に意外な言葉だった。

阿武隈 「お祭り、楽しそうね!!!」

## 鎮魂祭 2

阿武隈 「まずはお祭りを実行出来るだけの人員確保が優先ね！」

「お、おお」

阿武隈 「…それにしても全体に放送を入れるなんて、正気の沙汰じゃないわ！ 限りなく少ないとは言え、あなたを慕う娘もいたのに…アホね！」

「…(めん)」

朝早くから部屋の中がギャーギャー騒がしい。

しかし、その喧しさも今の僕にとっては頼もしい限りである。

…昨晚、阿武隈が執務室を訪れ、僕に言ったことには本当に度肝を抜かれた。

阿武隈 「お祭り、やるんでしょ？ あたしも手伝うわ！」

衝撃的な言葉。

…もしかしたら、川内からその言葉を聞けないかと期待していた僕だったが、まさか阿武隈から聞くことになるとは…。一瞬何を言われたのか理解できず、硬直する僕。

阿武隈はそれを見て、「本当に反応がないのね！」と言うが、その顔に悪意は感じられなかった。

でも、阿武隈。君だつて大事な人を……。

そんなことを考えていたのが顔に出ていたのだろうか、阿武隈は目を閉じ、大きく息を吐くと、じつと僕の瞳を見つめてきた。それはあの日：阿武隈と鬼怒が初めて僕の前に姿を現した時と同じようで違っていた。

殺意は感じられないが、親しげなわけでもない。

だが、阿武隈の目が真剣なことだけは何となく分かった気がした。

阿武隈「ま、詳しいことは明日でも話しましょう？」

そう言つて阿武隈は部屋を出ていったが……どうやら本当にこんな朝早くから来てくれたところを見るに、僕もしつかりと阿武隈に向き合う必要があるようだ。

一人で喋り続ける阿武隈：僕は意を決して彼女の名を呼ぶ。

「…阿武隈」

阿武隈「それからあたしとしては…」

「阿武隈!!」

阿武隈「わ！何よ！急に大きな声を出して!？」

話を途中で遮られ、少し不機嫌そうな阿武隈。でも、僕は構わず続ける。

「…なんで阿武隈は僕に協力してくれるんだ？君は人間が嫌いなんだろ？」

阿武隈「うん、嫌いよ」

…即答。目の前に人間がいるのに惜しげなく…いや、いるからこそその即答か…  
「じゃあ、なんで…」

阿武隈「お祭りが楽しそうだったからじゃ、ダメかしら？」

阿武隈は笑みを浮かべながら、しかしどこか憂いを感じさせる様な表情で僕の顔を見つめている。うーむ、阿武隈の真意が読めないな…。阿武隈はそんな僕をよそに言葉を続ける。

阿武隈「まー、本音を言えばヘル・アンカーズのメンバーを増やす為の宣伝も兼ねていると言えるかしらね」

「……」

阿武隈「もー、疑り深いわね！そんなだと、ここぞという時にチャンスを逃すわよ？」

阿武隈の言葉に頭にガツンと衝撃を受ける。

…なんだかんだ疑心暗鬼になってたけど、確かに…と思った。いや、思い知らされた。それはそうだ、もし阿武隈が祭を手伝うと言ってくれなかったら、僕は昨日の内に鎮守府を出ていくことになったかもしれない。

はつきり言つて、僕に疑念を抱いている余裕はない。

…危うく最大のチャンスをみすみす自分から潰すところだった。

阿武隈は何かを企んでいるかもしれない、けどそれがどうしたというのだ。もう後がない状況なんだ！やれるだけやって成功したら丸儲け、失敗したらバイバイ、ただそれだけだ！

僕は覚悟を決め、阿武隈の瞳をしつかりと見据える。

「…分かったよ、阿武隈。お祭、絶対成功させよう！」

阿武隈「フフン、熱い展開じゃない!!」

阿武隈「……で、さっきも言ったけど人員確保が先決よ！そここで！提案なんだけど……」

阿武隈の自信に満ち溢れた顔が輝かしい。

人員確保と言われ、全く希望のない僕にとっては彼女の提案が頼みの綱だ。

阿武隈「…まず、何人かの艦娘が数日後、この鎮守府に着任するという噂が流れてい  
るのを知ってるかしら？」

「いや、全く」

へ？そんなの？そんなこと全然知らないんだけど…。

阿武隈「ホントにダメダメね！艦娘たちの噂に耳を傾ける余裕もないのに人心掌握な  
んで夢のまた夢ね！」

…結構手厳しい。そんな僕にやれやれと言わんばかりに首を横に振る阿武隈。

阿武隈「…その艦娘たちをこちら側に引き入れるの！着任したてなら、特に警戒され  
ずにイけるはずよ!!!」

お、おお……。なんか、イケ…そうかな……。？

いや、どの口がいつてるんだ！阿武隈の意見に従うしかないだろ、今の僕は……。

「…分かった」

阿武隈「…ただ、それだけじゃ不完全よ！もつと数が欲しいわね！…だ　か　ら！あ  
なたのやることは、それにプラスして何人か協力者を見つけること！出来るかしら？」

「…ああ、任せてくれ」

正直、無理ゲーに近いけど、初心に帰って頑張るしかないな…。

阿武隈「フフ、それなら早速取りかかるわよ！」

…で、チラシ作りから始まったわけだ。

だけど、執務室のプリンターは使えない（長門に顔を合わせられないっていうのが大きい）。

なので、前のライブで使ったチラシをひっくり返して、裏面に手書きで文言を書く作業をしているわけだけど…阿武隈は「こんなのさっさとやっちゃいましょう！」と行って、すごいスピードで筆をふるっている。

書かれた言葉は実にシンプルだ。

「祭 協力者募集 阿武隈まで」という達筆な文字。

…いや、大雑把すぎじゃない？

阿武隈「間違いないわ！これでヘル・アンカーズも安泰ね！」

ま、阿武隈先生がそう言うならそうなんだろうね。  
それにしても…。

まずは、チラシを作るところからか…。なんだかライブを思い出すな……。

あの頃に帰りたいな。

## 鎮魂祭3

??? 「駆逐艦、島風です！スピードなら誰にも負けません!!よろしくお願いします!!!」  
黒いウサミミが可愛らしい艦娘：島風が緊張した面持ちで僕の目の前に立っている。

その初々しい姿は、殺風景な自室に花が咲いたようだ。

コホン、冗談はさておき：チラシを鎮守府内に貼り出してから間もなくして、彼女は阿武隈の元を訪れ、祭に協力したいと申し出てくれたらしい。

嬉しい限りだ。それで僕が改めて礼を言おうとすると。

島風 「あの…あの時は助けてくれてありがとうございました!」

彼女はそんなことを言っただけで頭を下げる。

はて？彼女と会うのは初なはずだけ……。

「一体何のこと？」と彼女に尋ねると、彼女は少し驚いたような顔をして、「覚えていませんか？」とその訳について教えてくれた。

どうやら、鎮守府襲撃の際に負傷した彼女を僕が背負って入渠施設まで走ったらしいのだが……ちよつと覚えていないな。

そんな旨を彼女に伝えると、「オウツ!!」とまた驚いていたけど、祭を手伝う意志に変

わりはないようだ。

助かりますよ。

阿武隈 「…あ、それともう一人祭を手伝いたいっていう娘がいるわ!!」  
なんだって!?

…やるじゃん、阿武隈先生！（何様）。

阿武隈 「そろそろ来ると思うのだけれど……」

阿武隈がそう言い掛けた時、不意に部屋の扉がノックされる。お？来たのかな…。  
だけど、扉が開いてそこにいたのは……。

??? 「…拙者も参加するでござる」

……大切な人だった。

あまりの嬉しさに、思わず体が震えたほどだ。また一緒に『戦える』ことが本当に嬉しかった。

そして、それを言葉にしたかったのだが、どんな言葉がそれを表せるか分からず、結局口からは何も出てこない。

そして…しばらく経って、ようやく発することが出来たのは彼女の名前だけだった。

「川内…」

だけど、名を呼ばれた艦娘はそれを慌てた様子で否定する。

???「わ…私、いや拙者は川内などではない！拙者は闇に生きる忍者『DAISEN』だ！以後、宜しく頼む！」

頭巾を被って、口元を黒いマスクで隠し、慣れない口調の川内。

気にしなくていいのに。僕は一緒にいられるだけで…。

島風「こーんな艦娘初めて見た!!よろしくね！」

…純粋な娘なのね、島風って。

川内の周りをぐるぐると跳び跳ねながら興奮している島風。

それとは対照的に、阿武隈は目を細めて、川内のことを見つめていた。あれ、阿武隈先生？

阿武隈「むむッ！あたしのところに来た艦娘はこんなチンチクリンじゃなかったわ！」

へ？阿武隈も気付いてないのか？

「あ、阿武隈！君のところに来た参加希望者って川内なんだろう？」

…『DAISEN』（笑）は「拙者は川内ではない！」と全力で否定してたけど、阿武隈はそれに首を横に振る。

ん？川内じゃないのか…？

困惑する僕に阿武隈は「あたしが気付かないとでも思ったの？」と前置きして、何や

ら語り出した。

阿武隈 「こんなボロ頭巾が川内なのは分かってるわ！」 ダイタイ、ネーミングガダサ  
スギデシヨ!! サスガヤセンバカネ!!

頭巾 「んなツ!？」

阿武隈 「あたしのところに来たのは……………」

「H e y ! 遅れちゃって、ソーリー!! 寝坊しまシタ〜!!」

おやまあ、すんごいやつが助っ人に来てくれたな…。

阿武隈 「それじゃあ、今後の展望についてももう一度説明するわね!」

とりあえず、現段階で集まったメンバーを前に阿武隈先生が意気揚々と語り出す。  
今思ったけど、この娘…お喋りなんだな。本人に言ったら怒られそうだけど…。

阿武隈 「…まず、祭を開催するには圧倒的人が足りていないわ!」

その言葉に皆が頷く。うん、その通りだよな。

阿武隈「…どっかの誰かさんがもつと慎重にことを運べば、もつとこの場に人が居たかもしれないけど」ボソツ

グハツ!?

阿武隈「…まあ、それはいいわ！それで…このポンコツには言ったのだけど、近日新たな艦娘が着任するじゃない!？」

金剛「Oh、そうなのデスカー?」

大丈夫か…この巫女服?

…艦娘たちの間で流れている情報に耳を傾けて、初めて人心掌握が r y

頭巾「…私も初耳なんだけど」

ん? 先生? 阿武隈先生?

…というか川内、もう拙者って言う設定を忘れてるじゃないか。

阿武隈「…ダメダメね! 本当にダメ!」

やれやれと先生。

…本当に大丈夫なのかね、僕たち。

阿武隈「いい? その初々しい娘たちを速攻で勧誘するの! 何も知らない真っ白な娘たちよ? イケる! イケるわ!!」

頭巾「…なんか悪徳サークルみたいだね」

川内がそつと僕に耳打ちする。

うん、僕もそう思う。けど、それくらいいしないと祭は実行出来ないよな…。

うん、やろう！（闇堕ち）

島風「よおーし！島風がいつちばんに勧誘するよー！」

金剛「紅茶をネタに声を掛ければ一発ネー！」

かくして勧誘に動き出す僕たち。果たして、運命は如何に!?

## 鎮魂祭 4

金剛「待つて欲しいネ！紅茶の用意がマダヨー！」

島風「おっそーい！」

「・・・」

うーむ……ここ数日彼女たちと居て分かったことがある。

……この娘たち、大分キャラが濃い。

金剛「この紅茶が心を開くトリガーになるネ！……なんでも早ければイイワケ

ジャナイヨー！」

島風「うるさーい！島風が一番がいいのー！」

……会話が噛み合っていないですよ、お二人さん。

そんなアーダコーダ、ギヤーギヤー揉めている二人を尻目に、川内は静かに目を閉じ、壁に寄り掛かっている。……来たるべき時（勧誘の時）を冷静に待つているのだろうか。

こういう状況でクールな娘が一人でもいると、助かるというものだ。

……本日、阿武隈先生の情報では、約六人の艦娘が新たに着任するらしい。

それで、その内の一人は長門の補佐にあたるらしく、狙うとしたら残り五人が最適だ

と先生は言う。

それで、肝心の勧誘についてだけど、今まさに執務室では、新規着任組が長門から挨拶兼この鎮守府の現状について説明を受けているはずだ…。

そして、あと数分後には、執務室を出て、これから生活を送る部屋へ新参組は案内されるらしいのだが、そこで僕たちの登場というわけだ。

…予定では、「着任を祝して、紅茶パーティーでもいかが？」という謳い文句で、艦娘たちをこの部屋に連れてくる。そして、親しくなつたところで本題である祭りの勧誘と…。

…先生曰く完璧らしい。

あ、ちなみに阿武隈先生はこの日出撃らしく、この場には居ない。

「ヨツロシクウ！」と先生から有難いお言葉も頂いている。  
は？

まあ、なんとかなるか？ いや、なんとかしないと…。

なんでもかんでも、阿武隈達に頼りっぱなしという訳にはいかないもんな。

…幸いなのは、以前と違って、僕もコソコソせずにこの鎮守府を闊歩出来るようになったことだ。

それが鎮守府の娘たちにとって、良いことなのか、悪いことなのか…今のところ後者

だろうけど…それをひっくり返せる様に頑張るか…。

金剛「Oh、ノオオオオオオオ!! 島風が急かすから、紅茶を溢してしまったヨオオオオ  
！」

島風「島風のせいにしないでえええ!!!」

…掴みあっている二人。

うん! 大丈夫、川内がいる(白目)。

こんな時でも先程と変わらぬ様子で、その冷静な佇まいを崩さない。さすがだよ、川内。頼りになる!

それで、僕はこの後の流れを再度確認するため、彼女に近づいた。

川内「…ZZZZ」

寝てんじやねえか。

長門「：以上だ。とりあえず長旅で疲れただろう？こんな鎮守府だが、部屋を用意した。：まずは体を休めてくれ。：それとすまないが、大淀は残つてくれ。今後のことについて話がしたい」

長門の解散の号令を聞き、呼び止められた者を除いて執務室から出て行く艦娘達。その顔は緊張していたものから、一気に緩やかなものとなり、思わず軽い笑みが溢れる。

：だが、そんなおだやかな雰囲気も束の間。

後ろから彼女達に声を掛ける者が現れ、再び張りつめた空気が辺りを支配する。

摩耶「よう！お前達が新しく来た艦娘か？」

声のする方を振り向けば、そこには勝ち気な表情を浮かべた艦娘が一人。

：なんとなく粗暴な感じを察した彼女達は、自己紹介をして、頭を深々と下げる。

それを見た艦娘：摩耶は少し寂しそうな顔をしていた様だったが、すぐにその口角を上げ、はつきりとした口調で喋り出した。

摩耶「：おう！よろしくな！あたしは防空重巡洋艦、摩耶様だ！」

立てた親指を自分の方に向け、ニカツと笑う摩耶。

…それを見て、再び頭を深々と下げる新参者たち。

摩耶「そんな固くなるなよ!! 執務室から出てきたってことは、長門さんに挨拶はしたんだろ?」

??? 「はい!」

一人の艦娘が新規着任組の代表として、一步前に歩み出る。

摩耶「それならちようどいいや! 今からあたしの部屋に来いよ!」

??? 「は、はあ」

突拍子もない提案に思わず生返事をしてしまう彼女達。

摩耶「おっし! じゃあ、決まりだな! オラア! あたしが荷物は持つからちゃんと呼いてこいよ!」

まだ肯定したわけではないのだが、どうやら摩耶はさっきの生返事を承諾と捉えたようだ。

付いていかざる得ない状況に少し困惑した彼女達だったが、特にやることもないの  
で、黙ってその言葉に従う。

そして、それを廊下の隅から悔しそうに眺める三人の艦娘と一人の人間。

金剛「…なんでアイツが、あんな親しげに」

島風「もう! 金剛が呑気に紅茶なんか淹れてるから!」

金剛「Shut up!それをイマ蒸し返しますカー?!それに、紅茶が今回のキーポイントなんだヨー!最高のモノを用意するのが当たり前ネー!」

島風「うるさーい!!!」

またやつてるよ…。君たち本当は仲良いだろう?

川内「シィ!聞こえるよ!ここでバレたら全部パーでしょ?」

「…川内の言う通りだ。理由は分からないけど、摩耶がいる以上、下手には動くわけにはいかない」

島風「じゃあ、どうすんの!摩耶たち行っちゃうよ?」

…そうなんだよなあ。実は僕も冷静を装ってるけど、内心焦りまくっている。うん、どうしたものか。

頼りの川内も目を閉じて、唸っているし…。

そんな時、金剛が何かを閃いたのか、手をポンツと叩いた。かなりのオーバーリアクションだ。

金剛「…仕方ないネ!ワタシが起死回生の一手を見せてアゲルヨ!!」

かなり自信があるようで、一人でガッツポーズを取る金剛。うん、もう任せます。そして、僕たちは戦艦のパワープレイを目の当たりにすることになった(白目)。

## 鎮魂祭 5

摩耶「…まあ好きなところに座れよ！狭いところだけどさ」

「・・・」

案内されるがまま、歩いて数分。

…辿り着いた先は、こじんまりとした部屋だった。

私たちの荷物を部屋の隅へと運ぶ艦娘を尻目に、私は連れて来られたこの場所をまじまじと観察するように眺める。

床には乱雑に敷かれた座布団。

古びたちやぶ台には大小異なるワイングラスが置かれ、何とも似合わない。

とてもじゃないが、整理整頓が行き届いているとは思えなかった。

…やっぱり先程察した粗暴な感じは当たっていたな…と心の中で嗤う私だったが、ふと目線を上に上げると一枚の紙が壁に貼ってあるのが分かった。

書きなぐった様な汚くて非常に読みにくい文字。

…やれやれ、粗暴さが文字にも表れているとは…と再び嗤う私だったが、その文字が何と書かれているのか少々気になった私は目を凝らすことにした。

ふむふむ、辛うじて読める。

えーつと、なになに……。よ、う、こ、そ？

え？

マジックペンで書かれた「ようこそ」という拙い文字。

これは……もしかして…。

摩耶「…歓迎するぜ！」

ほんのりと頬を赤らめながら、ニカツと笑う摩耶。

??? 「摩耶さん…」

私はその名を呼ばずにはいられなかった。

…エリート部隊に所属していた私たちが突然の上からの命令。

こんないつ崩壊してもおかしくない鎮守府へ送られるとは心外だった。

だけど、決してそれを顔や態度には出したりしない。

…どんな状況でもポーカーフェイスで命令をこなす私たち…それがエリート部隊に所属していた私たちの矜持、気高き誇りなのだ。

それでここに着任して、長門さんからこの鎮守府の現状を聞いた。

やはり左遷だったか…と落胆しながらも、それを悟られないように、それはそれは真面目に話を聞く私たち。

…執務室を出た時、私は思わず自分たちの過去と現状を鑑みて、自嘲する様な笑みを浮かべてしまった。

気付けば、他の娘も私と同じ様な笑みを浮かべている。

…きつと皆、これから待ち受ける栄華も誇りも無い、ただ鎮守府の建て直しに汗水を垂らす下らない毎日を想像して、笑ってしまったんだろう。

そんなことを思っていると、不意に声を掛けられ、驚いたものだ。

はあ、なんだこの粗暴な艦娘は？

皆そう思っていた。

そして、仕方なくこの目の前の艦娘に付いてきたわけだけども…。

あ、あああああああゝツ!! (即堕ちニコマ)

隣にいる私の妹は感激したのだろうか…その目をウルウルさせているのが分かる。

他の者たちも摩耶の好意に胸を打たれているのがよく分かった。

摩耶「…ツ！オ、オラア！とつとと座れよ！そんなとこに棒立ちされてたらいつまで

も歓迎会出来ねえじゃねえか！」

照れ臭そうに頬を掻く摩耶…いや、摩耶さん…いいえ摩耶姐さん。

??? 「姐さんと呼ばせて下さい!!!」

…気付いたら私…秋月はそう叫んでいた。

摩耶「そんじやあ、長つたらしい挨拶は性に合わねえし、さつそく乾杯すつか！」  
姐さんの言葉を聞き、私たちはグラスを手にとつと、静かに合図を待つ。

摩耶「大変な時だけど、これからよろしくな！乾杯！」

「乾杯！」

グラスに注がれたブドウジュースを一気に飲み干す姐さんを見て、素敵と感じたのは私だけの秘密だ。

：涼月が頬を赤くして姐さんを見ているのが気になる。

わたし、気になります！

後々、妹とは雌雄を決しなければならぬ時が来るかもしれない…そんなことを思いながら、私も姐さんの真似をしてブドウジュースを一気に飲む。

摩耶「…まあ…ジュースだけじゃ物足りないだろ？そろそろ食いもんも来るからさ、待っててくれよ」

申し訳なさそうに言う姐さん。

ああ、憂いを見せる姐さんの横顔もまた素敵／＼／

…私は姐さんのそんな顔を見ただけでも眼福です！

秋月「こんな時に私たちを歓迎してくれる姐さんのご好意…それだけで私たちは十分です!!!」

摩耶「ね、姐さんって…。や、やめろよ／＼／」

先程から私たちが姐さんと呼ぶ度に姐さんは顔を赤くする。

ああ、素敵イ／＼／

涼月「…姐さんの他にも歓迎会を企画してくれた方がいるのですか？」

涼月が顔を赤らめながら、姐さんに質問する。

抜け駆けとは…さすが私の妹だ。

摩耶「お、おうよ！何もあたしだけでこの歓迎会を企画したわけじゃねえんだ！…今、食堂で簡単な食いもん作ってくれて…」バアアアアアン！（ドア崩壊）

涼月の問いに律儀に答える姐さん（女神）。

でもその答えは、勢いよく扉を開けて入って来た人物によつて遮られてしまった。

…一体、誰だ？

姐さんの言葉を遮るなんて。

そして、私はその人物を睨み付けようとドアの方へと目をやったのだが……。

??? 「北上さああああああん!!」

…へ？

な、なんだこの威圧感!?

わ、私が気圧されているツ!?

いや、私だけじゃない…涼月、他の娘までツ!!

摩耶「お、大井!？」

そんな内心慌てている私たちを尻目に、姐さんは突然の訪問者の名を呼ぶ。

い、勇ましい／＼／

大井「北上さんは!?!北上さんが着任したんでしょ?北上さんが着任したのよね!?!北上

さん?北上さあああああん!?!」

大井と呼ばれた艦娘は、私たちの顔を何度も何度も見渡している。

その眼は血走り、息も荒い。ちよつと怖い…。

いや、もつと怖いのは理由は分からないのだが、爛々とした顔がどんどん曇っていく

ことだ。

怖いよ……ね、姐さん…。

…すぐるように姐さんの顔を見ると、姐さんがハツとした表情を浮かべ、私たちと大井さん？の間に入ってくれた。

あ、あああああゝゝツ!! (即堕ちニコマ)

…そんな目がハートになっている私たちを置いてきぼりにして、大井さんが言葉を発する。

大井「……北上さんは？」

摩耶「北上？そんな奴、着任してねえけど？」

姐さんがはつきりとした口調で断言する。

そうなのだ…私たちの中に北上という名の艦娘は居ない。

だけど、そんな事実はこの大井さんという艦娘には相当衝撃だったようで……。

大井「……」

完全に沈黙してしまった。

そして急にワナワナと震え出す大井さん。

ええ…。

そして、「うあ…」と呻き声を上げたかと思ったら、今まで見開いていた目を閉じてしまった。

摩耶「…お、大井？」

姐さんが心配そうに大井さんの顔を覗き込んでいる。

…その対象が私でないのが、本当に本当に残念だが、まあそれは後々姐さんと親密になつていけばry

摩耶「…わ、悪いな。あたしも訳が分かんねえけど、気分悪くしてないか？」

困ったような顔をして私たちを見る姐さん。

こんなことに巻き込んでしまつて申し訳ないといった想いが姐さんから溢れ出てくる気がした。

秋月「…気にしてません！」

だから私はちゃんと伝えた。姐さんは何も悪くない、姐さんはちゃんと私たちを守ってくれた、姐さんは本当に素敵だ…そんなあらゆる想いを込めた一言を伝える。

摩耶「…悪い」

尚も申し訳なさそうに姐さんは言う。

はああ／／／

姐さん／／／

その顔は卑怯ですよお／／／

姐さんのちよつぴり泣きそうな顔、頂きました！

…本当はずっと見ていたという思いもあるが、私は姐さんにもう一度気にしていない旨を伝えようと口を開こうとする。コレデネエサンノココロハワタシノモノ。

でもその時、私の策略とは裏腹に大きな声がこの部屋にこだました。

「H e y ! ! お困りのようデスネ!!!」

金剛「作戦の概要はこうネ！」

自信満々の笑みを浮かべながら何故か小躍りしている巫女服。

胸騒ぎがするけど…川内いるし、大丈夫だよね？

島風「はやくくう!!!」

勿体振っている金剛に痺れを切らしたのか、島風が金剛を急かす。

それに対して、やれやれと首を振る金剛。

そしてようやく語り出した。

金剛「…摩耶が何を考えているかシラナイケド、部屋の中へ連れて行かれた以上、ワタシたちはもう手も足もデナイネ!!」

うん、確かにそうだ。

新規着任組を早々にこちらの部屋へ招くという緒戦から僕たちは敗北している。

…波風立てずにことを済ませるのは、ほぼ不可能だ。

…あ、何か金剛の作戦が読めた気がする。

そんな僕の考えを感じ取ったのか、金剛は勝ち誇ったような笑みを見せる。

金剛「…フフ、摩耶には悪いけど、力業でデストロイさせてもらうヨー!!」

…金剛の想像…

ニューフェイスもビックリの大作戦ダヨ!

メイビー、ニューカマーは摩耶の部屋で緊張しているハズね! あんなイカツイ摩耶の

顔を見たら尚更ダヨ!

…とは言え、摩耶もバカじゃないヨ!

なんの算段も無しに部屋に招くハズはナイネ!

摩耶の狙いは不明ダケド、ぜかましの言う通り、ボヤボヤしていたらダークサイドに墮とされちやうヨ!

そこ ーで!

根本からデストロイするネ!!

摩耶のデーモンハンドがニューカマーに伸びる前に、部屋の中で大パニックを起こせばイイね!

そうすれば、摩耶もパニック! ニューフェイスもパニック!! パニックだよ!!!

そして現れるネ!

このワタシが!!!

「…いかがなされた? 私の姫君たち」キリッ

王子様のコスプレは出来ないカラ、とりあえずこのまま行くけど、これで大勝利間違いないネ!

く金剛の想像終了く

金剛「…どうネ?」

「・・・」

川内「・・・」

……。

金剛、君は天災だ。

ここまでブツ飛んだ作戦を思い付くなんて……もう新規着任組は諦めた方がいいな（白目）。

島風「金剛、すつごーい!!!」

……。

いや、ダメだからね？そんなことしたら間違はなく終わる。全てが終わる。

川内も青い顔してるし……これはやった時点で負け確定だよ。

……だけど、せっかく金剛も考えてくれたんだ。

キツパリ否定せず、やんわりと別の作戦に出来る様に断らないと……。

「あー、金剛。ありがとう、いろいろ考えてくれて！なかなか奇抜な作戦でいいと思うよ？だけどさ、いろいろと設定がブツ……」

金剛「フオオオオウ!!!」

は？

金剛「そう言ってくれると思ったヨ!!さつそく作戦開始ネ!!!」

「ちよっ!」

人の話は最後まで……。

島風「じゃあさ、じゃあさ!!誰を乱入させる!?!」

ピヨーンピヨーンと跳ね回っているウサミミ。

この娘たち、どうなってるの!?

金剛「任せるネ!! 乱入させるのに適任なヤツをワタシ知ってるヨ!」

「ま、待つて……」

島風「よーし! やる気出て来た!! 私、先におやつとか勧誘の用意しとくねー!!」タツ  
タツタツタツタツ

川内「あ、待つて!!」

とてつもないスピードで駆けていく島風の後を川内が追う。

あ、おい!

ここで川内居なくなったら、誰がこの巫女服止めるんだよ!?

金剛「それじゃあ、行くネエエエ!!」

い、いやあああああああ  
!!!!

## 鎮魂祭 6

金剛「グエエエエエ」

潰れた蛙の様な声を出す巫女服をただ傍観している僕。

なんで、金剛がこんな声を出しているのかって？

その答えは簡単。金剛が首を絞められているのだ。

金剛は必死で自分の首を掴む手を引き剥がそうとしているけど、その手は吸い付いたかの様にしっかりと彼女の首を押さええている。

そして金剛が僕の方へ何やら目配せしているが、僕は彼女を助けることが出来ない。

…それは呆れた作戦を執行した金剛を見捨てた為ではない。とてつもない威圧感が僕を襲っていて、動けないのだ。摩耶の部屋には艦娘だらけ、衆人環視、四面楚歌。

そんな中、味方は……。

金剛「グエエエエエ」

なあにこれ？

…遡ること数分前。

金剛の後を追って向かったのは、摩耶の部屋…ではなくて見知らぬ艦娘の部屋。そつ

とドアに近付き耳を澄ませる金剛に従って僕も耳を澄ます。

??? 「…それじゃあ、お姉ちゃんたちはちよつと出掛けてくるクマ。大井、留守を頼むクマ」

??? 「よろしくニヤー」

この鎮守府には喋る熊と猫もいるのか…。

冗談はさておき、金剛に促され、ドアから離れると廊下の曲がり角に隠れる僕たち。すると、僕たちが身を潜めてすぐ、二人の艦娘が部屋から出てきたかと思えば、何やら喋りながらこちらに歩いてくる。

??? 「…全く、『反長門』なんてネーミングが悪すぎクマ！せめて『反人間』くらいならいいのにクマ」

??? 「名前を変えてもらえるか、聞いてみるニヤー」

そう言つて、僕らのすぐ側を通りすぎていく彼女たち。おい、なんかとんでもないこと聞いちやつたぞ。

金剛 「…よし、邪魔者は消えたネ。イクヨー」

誰も廊下に居ないことを確認すると、金剛はそのまま部屋に突撃していった。

え？僕？とりあえず、ここで様子見です。

…で、僕はそのまま廊下の角から様子を見守っていたのだが、急に悲鳴にも似た声が

金剛の突っ込んで行った部屋から聞こえて、見知らぬ艦娘がそれはそれはもの凄いスピードで飛び出して行った。

そして、その跡を追う様に出てきたのは、満面の笑みを浮かべ、グーサインをした巫女服だった。

それで、現在に至るわけだけど…。

「完璧ネー」と意気揚々と摩耶の部屋に入って行った金剛は入室早々首を思いつきり絞められている。

…ほんと、なあにこれ？

威圧感は主はその首を絞めている艦娘から放たれているのだけけど。

…金剛よ、一体何を吹き込んだ？

??? 「…北上さんは？北上さんはどこにいるの？」

金剛「グエエエエエ」

…うん、ある意味パニックだよ、これは。

摩耶「…お前らの仕業か？」

ギロリと鋭い目付きで僕を睨む摩耶。

…ああ、こんなに間近でこの娘と会うのは、鎮魂祭のことを全体に流した時以来か。

今にも殴りかかってくるんじゃないかと言うくらい勢いで、僕の胸ぐらを掴むと、

「祭なんて…ざけんな！」と怒鳴られたんだっけ…。

うう、怖いぞよ。

だけどさ、僕だつて踏み留まるわけにはいかないんだ！

「…やあ、あの時以来だね。摩耶」

摩耶「気安くアタシの名を呼ぶんじゃねえ！」

??「…姐さん、この人は？」

…睨み合う僕たちの間に入るようにして、これまた見知らぬ艦娘がそう言う。

…というか、この娘たちが新規着任組だよな？

ええ、姐さんつて…短時間でどんだけ親密になつてんのよ!?

摩耶「…後ろに下がつてろ、コイツはお前たちにとって百害あつて一利無しだ」  
相当な言われようだ。

…というか摩耶から溢れる主人公感。

そして新規着任組であろう艦娘たちはウツトリした顔で摩耶の顔を見つめている。

…手遅れですね、これは。

摩耶「…何考えてるか知らねえが、さつさとこの部屋から出ていけ！アタシも新しく来た仲間いきなり血を見せたくねえからな！」

そう言つて拳をポキポキと鳴らす摩耶。

なんか後ろから帰れコール出ているんですが…。

すごいなあ、摩耶は。姉御だなあ。

とりあえず…。

「…分かった。出ていくよ。でも、金剛を助けてやってくれ」

摩耶「…ああ!？」

すぐむ摩耶。

そりゃいきなりお邪魔したのはこつちだし、その態度もわかるんだけどさ…僕に金剛を絞殺しようとしている艦娘を退ける力はないんだ。

「…頼むよ」

頭を深々と下げ、懇願する。

こんな奴だけど…巫女服は大事な仲間なんだ。

金剛「グエエエエエ」

摩耶「・・・」

…しばらく、沈黙が続いた。

こりや、金剛を置いて逃げるか…と思った僕だったが、摩耶がその沈黙を破る。

摩耶「…つたく！何したんだよ、大井をこんなに怒らせやがって！…オラア!!大井！

離れろ!!」

…助けてくれるんだな、摩耶。さすが姐さん！

そして渦中の艦娘は大井というのか…、うんヤバイね！

とりあえず、大井を羽交い締めにして、なんとかしようとしている摩耶には本当に頭が上<sup>ぶ</sup>がらない。

「ありがとう」

摩耶「…頭下げてないで、こつちを手伝えつて!!」

…どうやら頭を下げている場合じゃない様だ。

おっし！やるかあ！

## 鎮魂祭 7

テコでも動かないとはこのことか：押しても引いても、うんともすんとも言わない不動の艦娘…大井。

金剛の顔がそろそろ青白くなってきたので、冗談を言ってる暇も無くなってきた。

おいおい！いくらなんでもやり過ぎだろ!?

摩耶「おい！ちゃんとひっぺがせて！」

「…やってるって!!」

摩耶がこう言うのも無理はない。

彼女が大井を羽交い締めにし、僕が大井の手を金剛の首から引き剥がそうしてもう数分。一向に事態は好転しない。

大井「・・・」

渦中の艦娘は完全に沈黙。

でも、その目は見開かれて充血しており、パツと見、般若の様だ。そしてとんでもなく力が強い。

??? 「姐さん、がんばれー!!」

外野は摩耶に声援を送るばかり。

…手伝えや。

摩耶「…悪い！お前たちも手伝ってくれ!!」

???「…キヤー！姐さんに頼られちゃったあ!!」

…摩耶の言うことをすんなり聞く新規着任組。

おそらく後々の話になるだろうが、仮に新規着任組をこちらに引き入れるのであれば、摩耶を攻略した方が早いかもしれないな…。

摩耶「…秋月はコイツと一緒に大井の手を引き剥がしてくれ！他の皆はアタシと一緒に大井を押しやるぞ！」

摩耶の指示を聞き、迅速に動く新着さんたち。

そして、息を合わせて大井を引き剥がそうとする。

「セーの!!!」

それでも、それでも大井は離れない。

ちよっ!?誰か川内呼んできてー!!

摩耶「…ッ！馬鹿力が!!」

摩耶も相当力を振り絞って羽交い締めにしてきている様で、顔が真っ赤だ。

クツソー！なんと少しでも引き離してやる!!

金剛「アア……ヴァルハラが見えるよ……」

……金剛がなんか眩いている。

喋れるならまだ余裕なんだな！金剛！

……あ。

そういえば、大井が言つてた単語『北上』つて……

もしかしたら、いや……いけるか!?

「……北上に会いたいのか？」

大井「……！」

たった一言。おそらく誰かの名であろうその一言に、あれほど頑なに金剛の首を絞めていた大井がその手を緩める。

そして、その隙にそのまま僕と秋月によつて金剛の首から手を引き剥がすことに成功。

金剛「……」

金剛はそのまま座り込んでしまった。

息も絶え絶え、肩でゼエゼエと息をしている。

大丈夫か!?

けど、僕には金剛を心配している余裕なんて無かった。

大井「北上さんはどこなの？」

おやく、標的がこちらに切り替わりましたか。

…蛇に睨まれた蛙の気持ちは今分かった気がする。

体が動かない。正直、生命の危機を感じる。

大井の目は黒く淀み、僕の憔悴した顔をただひたすらに覗き込む。そしてその手を僕の首にかけようと近付いて来ようとする。

…怖い。

摩耶「…何してんだ、早く逃げろ！」

へ？

だけど、そんな極限の状況下で、僕は思ってもみなかった言葉に耳を疑う。

そしてそれを言った人物に驚きを隠せなかった。

…摩耶？なんで？

摩耶「…まったくよお！大体分かったぜ！大井が何でこんなに怒り狂ってるのか！…アタシは北上なんて艦娘、よく知らねえが、大井にとつては大事な奴なんだろう？それを金剛のヤローがどういうわけか着任したってホラ吹きやがったんだ！…そりゃ、暴れたくなるよなあ!!」

「…」

…摩耶の言う通りだ。

金剛はパニツクを引き起こすトリガーに大井を選んだ。そして、その大井をここまで  
の状態にする為、彼女にとつてのパンドラの箱を開けたのだろう。

それが『北上』。

でも……。

金剛を救った上で尚、なぜ摩耶は大井を羽交い締めにしたままなのだろう。これ  
は、まるで……。

摩耶「…とつと行つちまえ！人間！！…金剛はバカだけど戦艦だ。パワーはある！だ  
けど、それでも大井を引き離せなかった！…つまり人間のお前が捕まったら、どうなる  
かなんてすぐ分かるだろ!？」

「摩耶……」

摩耶「…勘違いすんな、アタシは人間は嫌いだ。…ツ！オラア!!!早く行け!!アタシた  
ちもそろそろ限界なんだよ！」

「……めん、ありがとう!!」

必死で大井を抑える摩耶と新規着任組の皆。

僕は彼女たちに一言礼を言うと、そのまま駆け出した。

摩耶「……ッおい！正気に戻れ、大井!!!」



…だが、早い早い。

大井の走るスピードは僕の走る速度を余裕で上回っていた。あれほどあった距離はどんどん縮み、狂気を孕んだ大井の瞳をちやんと確認できる程の距離まで迫まれている。

…くそ、あと、あともう少しで！

自室まではもう少しだ。

頼む！奇跡よ、起きてくれ!!!

僕は死に物狂いで走る、走る、走る!!!

そして……。

自分の部屋へと転がり込んだ。

川内「…うわあ!?!ど、どうしたの!?!」

島風「オウツ!?!」

…これほど安心したのはいつ振りだろう。

川内だけでなく、ウサミミの顔を見ると僕は腰が抜けてしまった。

川内「…一体なにが?」

島風「見て見て〜!島風、こんなケーキを用意したよ」

心配そうに僕を見つめる川内とこの状況で何が起きたか気にせず、ケーキを差し出す

島風。

うん！通常運転だな！

とりあえず、そのいつもの感じが僕の心を救う。

「…と、とりあえず」

とりあえずドアを閉めてと僕は言うつもりだった。

でも、その後の言葉は続かない。

なぜなら、後ろに…。

大井「みーつけた」

大井が満面の笑みを浮かべ立っていたのだから。

「…あ、ああ」

言葉が出ない。

これ程まで狂気に満ち溢れた笑顔を誰が見たいと思うだろうか…。

川内と島風を見れば、困惑している様で、お互いに顔を見合わせている。

大井「…北上さんは？どこにいるんですか？」

…まるで機械のような冷たい、無機質な声。

ああ！なんとかか！なんとかか!!この状況を変えられないか！

必死で思考を巡らせる。

……。

……。

……。

……。

あ。

そこで、僕は思い出した。

とある言葉を。

「駆逐艦、島風です！スピードなら誰にも負けません!!よろしくお願いします!!!」

スピードなら誰にも負けない……。

スピード……。

……。

すまん、ウサミミ!

そこで僕は思いつきり大きな声で叫ぶ。

「大井！北上の居場所はこの島風が知っている!!」

大井「……!!!」

島風「……オウツ?!?!」

……これは賭けだ。

僕の言葉を大井が信じなければ、僕は終わる。

でも、これだけ盲目的な大井だ。

おそらく……。

ジリジリと大井が迫るのは…僕の方……ではなく島風の方。  
うん！やったね！

一方で島風はと言うと……。

島風「…えーと」

困惑するよな、そりゃあ。

だから言ってやるさ、存分に!!

「…おいかけっこだあ！島風!!」

## 役割分担

阿武隈「……」

「……」

きつと阿武隈は困惑している。

そんな中、僕は彼女が目を丸くして固まっているのを静観し、最終的な彼女の反応を伺っていた。しかし、当の本人は依然として反応を示さず、ただこちらを凝視するのみ。まるで物言わぬ木偶人形の様だ。

…そんな沈黙に耐えかねて、僕が口を開く。

「これが……僕たちの仲間だ」

その言葉に阿武隈がハツとした様な顔になり、何かを決心したのか凜とした…いや、凜とはしているがどこか優しさを秘めたような顔を僕に向け、近付いてくる。

そして手を差し出した。

その手をまるで予期していたかの如く、僕も手を差し出し、固い握手が交わされる。

先生…！やったよ、僕たち!!

そして、ようやく阿武隈は今まで固く閉ざっていた口を開き、劳いの言葉を………

言うはずがなかった。

阿武隈「どーいうことなの〜!!!」

先程の柔和な顔はどこに行つたのだろうか、凄まじく険しい顔で僕の顔を覗き込む阿武隈。

：手がガツチリ握られているので、僕はその迫力満点の顔を間近で見ることになったのだが、正直彼女のその様な反応も致し方ないと思つた。

出撃して事の顛末を知らない彼女にとって、新規着任組を見事に勧誘した僕たちあるいは勧誘に失敗した僕たちが出撃後の彼女を迎え入れる…その二択が彼女の想定内だつたと思われる。

しかし、蓋を開けてみれば……。

大井「ああ！早く北上さんに会いたいなあ！」

島風「わーい！かけっこだ、かけっこだあ！」

雪風「うわあ！早いです！」

時津風「待てえ〜！」

キヤツキヤウフフが溢れる部屋の中。

：カオスだね、こりゃあ。

僕がやれやれと首を振り、阿武隈を見る。

阿武隈 「なに悟った顔になってんのよー!!!」

「ぶるあああああああ!!!」

…急に肩を掴まれたかと思えば、激しく僕を揺する阿武隈先生。

僕だって、分からないよ！なんでこうなったのかなんてさ!!!

時は遡る。

川内 「…なんか付いてきたんだけど」

大井とのリアル鬼ごっこに出ていった島風がなかなか戻らないのを心配して、僕は川内に様子を見てくる様に伝えたのだが、川内が連れて帰ったのは島風……と見知らぬ艦娘二人だった。

へ？

島風 「…ううう、ケーキが」

そういえば、ケーキを持って行ってたもんね。

どこかでなくしちゃったのかな??

?? 「わ！誰ですか、このおじさん！」

??? 「キヤーー!!!」

は？

…おじさんだと!? ふざけんじゃねえよお前ら! お兄さんだろお!!

…と冗談はさておき(おじさん呼ばわりはかなりきついが)、僕は川内の連れ帰った二人の艦娘をそれぞれ一瞥すると、そつと川内に耳打ちする。

「…え? この娘たちは…?」

川内「うーん、それが私もよく分かんないんだよね。なんか島風と一緒に倒れてた」  
ええ…、どうということなんだ?

川内も戸惑っているし、これは……。

??? 「あ! 美味しそう!」

??? 「あー! 雪風ズルい!! 時津風も食べるー!」

…名前、分かったわ。

雪風と時津風…ねえ。いや、僕たちが用意したお菓子とか紅茶、勝手に飲み食いしないで。

と、とりあえず…。

おやつを勝手に摂っている二人に僕は声を掛けようと試みる。

しかし……。

金剛「ヘーイー…ワタシ殺されちゃうヨオ…」

大井「北上さんは？どこ？」

…唐突に部屋の扉が開き、そちらに目をやれば、そこには巫女服と巫女服の首を今にもへし折ろうとしている大井が立っていた。

あばばばばばばば…。

…結論から言えば、お祭りの協力者は増えた。

こんな混沌とした状況で川内は機転を効かせ、雪風と時津風にそつと耳打ちする。するとお菓子を頬張っていた彼女たちは先程お菓子を見つけた時よりも目をキラキラさせ、「わーい！」と手を挙げて喜んでいる。

そして「おくまつり！おくまつり!!」と言っているところを見るに…：…どうやら川内はとんでもない奴らを味方に率入れた様だ。

うん…：もうその娘たちの面倒は川内に任せます。

…で。

金剛「オ…タ…ス…ケ…!!!」

大井「北上さんは？」

徐々に手の平に力を込める大井に怯える巫女服。

…やるしかねえな。

意を決して、大井に話し掛けることにした。

「…あのお、大井」

大井「・・・」

「なんだ？」と言わんばかりの顔を僕に向ける大井だったが、こちらを向いたのはかなり大きい。

「北上については……この僕が保証しよう。僕は上層部と深い繋がりがあってね、僕が一言言えば北上なんてすぐここに着任させられるよ（大嘘）」

大井「本当ですか!？」

…やけっぱちの僕の一言に大井は飛び付いた。

巫女服はそのまま座り込む（本日二度目）。

大井「北上さんに……北上さんに会えるんですね!？」

「お、おお……」

大井「早く会わせてください!!!」

…息を荒くし、瞳を目一杯開けて喜ぶ大井。

あ、やめて。胸ぐら掴まないで……。

大井 「早く！早く北上さんを……」

「条件がある！」

大井 「条件……？」

「その条件さえ呑むなら、直ぐにでも北……」

大井 「呑みます!!!」

……フツ、終わったな。いろいろな意味で……。

「……以上だ！」

阿武隈 「意味分かんないわよ……!!!」

## 朝潮の意志を継ぐ者

空を見上げれば、青白い月。

月の光に照らされて、私たちは黒い海をただ突き進む。

…さつきまで隣にいたはずの私の姉は、暗闇の中へ泡沫と消えた。悲鳴も呻き声も上げず、ただ静かに闇に吸い込まれた。

…どこで選択を間違えたのだろうか。

私たちはあてもなくさ迷い続ける。もはや還るべき場所など無い。

いや…：正確にはある。だが、一体どんな顔で帰還すればいいというのだ。

無断で出撃し、そして無駄に沈んだ。無用な戦いに身を投じ、最愛の人たちを失った。

もし今帰還しようと舵をきければ、間違いなく私たちを闇夜に葬ろうとする者たちをそこへと誘ってしまふ。

還れない。還れるはずがない。

そんな思考が頭を支配する。でも、それはすぐ隣で起きた爆発により、掻き消された。

ああ…また、また姉が沈んでいった。

そして遂には私だけ。独りになってしまった。

不思議と笑みが溢れ落ちる。

…頭上には凄まじい轟音を響かせながら、おびただしい数の飛翔体が飛び交っている。

そして、私の側で次々と水柱があがり、その衝撃で私の体は大きくバランスを崩した。ああ…いいよか。これが最期の時か…。

それならば、私は叫ぼう。

それこそありつたけの力を振り絞って叫んでやろう。

おそらく最後になるであろう一呼吸に私は全身全霊で息を吸い込む。

そして、言ってやったんだ。

「…ちよつと宜しいですか？霞さん」

反長門派の集会を終え、自室に戻ろうとしていた私はこの会合の主たる人物に呼び止められた。

静かに笑みを浮かべるその顔は、どことなく憂いを含んでいるようにも見える。

「…何かしら？」

私は呼び止められたワケを尋ねるため、その声を掛けてきた人物…榛名に向き直つ

た。

他の艦娘が何事かと私たちを一瞥しながら部屋を後にする中、彼女はそつと微笑むと、「……ここではなんですから」と私を別の部屋へと誘う。

連れてこられた場所は、ぼんやりとオレンジ色の光が照っている、こじんまりとした部屋だった。

そして彼女に促されるまま私は古びた椅子に座る。それを確認すると、彼女は向かい合うように対に置かれた椅子に座り、私の目を見据えながら、静かに話始めた。

「今日はありがとうございます。霞さんたちも協力してくれるというのは、心強い限りです」

「……こちらこそ。……人間の指図を受けるなんて有り得ない話だし、ちようどいいわよ」私の言葉に耳を傾ける榛名を尻目に、何故か私が思い出したのは、あの人間だった。

朝潮姉はなんであんな奴に親身になっていたのだろう。私があの人間について問いただした時にも、朝潮姉はただ静かに笑いながら、「霞も会ってみますか?」と。

その笑顔の意味は当初……いや、今でも分からない。

結局、そのまま朝潮姉は……。

思い出したくもない現実に思わず首を振ると、目の前の榛名は心配そうな顔をして、私を見つめていた。

「心配しないで」と彼女に伝えるも、彼女は未だに不安そうな顔をしていたので、私は呼び止めた用件について彼女に尋ねることにした。

「…で、何か用かしら？」

「ああ、そうでしたね。すいません」

彼女は私に平謝りすると、急に今まで見せていた笑みを捨て、深刻そうな面持ちになると、ゆっくりと話し出した。

「…霞さん。急な話なのですが、本日出撃していただけませんか？」

「はあ？」

思ってもいない言葉に耳を疑い、そして疑念に満ちた目を彼女に向ける。…しかし、彼女はそれに動じず、開いた口を閉ざそうとしない。

「反長門と銘打っています、その真髄は結局のところ、私たちの命を軽視した上層部…人間に対する反逆。今日の会合に出席していた皆さんは、それ理解してくれたはず。…もちろん霞さん、あなたもです」

確かに。

陽炎が言っていたように、反長門とは言っても、長門さんに恨みがあるわけではないのだ。恨みがあるのは人間という存在。それは変わらない。

だが、出撃とは…あまりに突然ではないか。

それを口にしようとする、彼女は片手を挙げ、それを制す。

「…それが今日の出撃とどう関係しているのか、という顔をしていますね。その気持ち、榛名は痛いほど分かりますよ」

そこまで言う、彼女は急に笑い始めた。

高らかな笑い声。それは普通の彼女からは想像できない様なもので、私が更に欺瞞に満ちた目を向けるも、構わず笑い続ける。それはまるで、人間を心底侮蔑したような嘲笑いに私は思えた。

そして、一頻り笑ったところで、彼女は謝りながら、話の続きを私に聞かせてきた。

「…失礼しました。単刀直入に言えば本日、この鎮守府の近海を上層部の人間を複数乗せた船が航行します。それを霞さんには襲撃して頂きたいのです」

「なあ!？」

…襲撃？

それは…つまり……。

私はあまりに衝撃的な内容に思考が一時的に停止する。

「…誤解をされないように。襲撃と言っても、人間を殺してこいと言っているわけではありません。あくまで襲撃のフリをして頂ければいいのです。…つまりは演技ですね」

「…その意図は？」

なんとか口を出したのは至極真つ当な疑問。

榛名はそれにニコリといつもの笑みを浮かべ、答える。

「人間に知らしめるんです。私たちの存在を。ああ、ちゃんとお伝えしておきますね。霞さんが襲撃してしばらくしたら、朝潮型の誰かにその場で霞さんを撃退してもらいます。そして、その朝潮型の誰かはこの鎮守府の所属している……それ位なら、いくら愚かな人間たちでも分かると思いますから……もう分かりますよね？」

何故か勿体振る榛名。それをまるで試されているように感じた私は語気を強めて叫ぶ。

「……私が襲つて、それを朝潮型の誰かが防いでつて……全く意味が分からないわ！それが何だつて言うの!？」

「……鈍いですね、霞さん。この鎮守府の艦娘が絶体絶命の状況にある人間……しかも軍の高官たちの命を救つたとしたら、どうなりますか？それこそ話を聞かぬどころか、対等に話を聞くきつかけとなるかもしれせん」

目をこれでもかと思開きながら、強く語る榛名に若干恐怖を覚えながらも、負けじと私は疑問を呈す。

「……そんな都合よくことが進むかしら!?!それに何で私に襲わせて、朝潮型の誰かに助けさせるのよ!?!それこそ私とその誰かが共謀して、一芝居打つたと突け込まれたら終わり

じゃないかしら?! ハッ! いつもニコニコしているかと思つたら、とんでもないことを考えているのね!?! 悪いけど、そんな話には乗れないわ!!」

叫ぶようにそう言うと、私はその部屋から飛び出そうと立ち上がる。すると、榛名は特に慌てることもなく、大きく溜め息をつく、不快感を呼び起こすような笑みを浮かべながら静かに私に言う。

「……所詮、朝潮型ですか」

私の拳が榛名の顔目掛けて放たれたのは、そんな言葉を言われて間もなく経つた頃だ。

しかし、彼女は私の拳を受け止めると、そのまま私を壁の方へと追いやる。私は必死に抵抗するが、さすがに戦艦の力は強い。私は成す術もなく、ただ壁に押しやられた。

「……ッ!」

「…失礼しました。手荒な真似をしたこと、そして朝潮さんを霞さんを引き止める為とは言え、侮辱してしまつたこと。榛名、謝ります」

…さも申し訳なさそうに宣う彼女だが、決して私を押しさえ込む力が緩むことはない。むしろ、その力はどんどん強くなってきているように私は感じた。

「…ですが、榛名の話を最後まで聞いてください。霞さんを今回の出撃に抜擢したのは、何も気紛れで…というわけではないんですよ? 霞さんの人間に対する並々ならぬ怒り

や憎しみを、榛名は今日の会合で感じたんです。その気迫は間違いなく、演技とは言え、この襲撃に活かされると感じました。そして、なぜ別の朝潮型に襲撃を止めさせるかと言え、まずこの計画を知る存在は極力少なくなければなりません。ですから、同型の姉妹艦が相応しいと榛名は思うのです！さらに、人間が対等な話をしたいと申し出てきた時、朝潮型の意見は優遇されると思いますし、仮に変な嫌疑で霞さんの存在が危うくなった時に、姉妹艦であればフォローでも何でも柔軟にできると思いますから」

捲し立てるように彼女に言われ、私はひどく困惑した。

：先程の榛名の豹変振りもそうだが、どうもこの話はきな臭い。この様な逃げられない状況だが：私は断ろうと口を開く。

だが、結局。

断ることは出来なかった。口を噤んでしまった。

「：命を削つてこの鎮守府を守り抜いた朝潮さんの意志を無下にしてはいけません。そして、そんな場所を蔑ろにする人間たちを決して許してはなりません。これは朝潮さんの死が報われるかどうかの重大なものなのです。：霞さん、協力してくれますね？」  
そんな言葉に言い返す言葉は私の中に存在しなかったのだから。

…そのまま時間は過ぎ、彼女に言われるがまま、私は嘘の襲撃のため、母港へと赴いた。母港にはすでに任務から帰投したと思われる艦娘が何名かいたが、私はそれを気にも留めず、ただ出撃をした後の流れを頭の中で反芻する。榛名の話では、人間を乗せた船の護衛に付いている艦娘は榛名の古くからの知り合いらしく、それゆえ彼女はこんな大胆な計画を思い付いたらしいのだが、どうやら私が襲撃する前に、上手く人間たちから離れてくれるらしい。

一体朝潮型の誰が来るのかは分からないが、詳しいことは榛名に任せ、私は静かに目を閉じると覚悟を決めた。

「霞、抜錨する！」

夕焼けが水平線の向こうへと沈み行く中、榛名に教えてもらった襲撃ポイントにて待機する私だったが、まさか再びこの場所へ来ることになるうとは。

私は思わず息を呑む。そして、胸を締め付けられるような痛みを感じた。

鎮守府の近海を航行すると彼女は言っていたが、なにもここを通る必要はないじゃないか…そんな想いが私の中で激しく渦巻く。

その場所は…亡き姉を見送った場所だった。

あの時のことは鮮明に脳裏に焼き付いている。朝潮姉が死んだと聞いた時は、私……いや私たちは頭が真っ白になった。そして、後悔した。

朝潮姉には多大な迷惑を掛け、時には激しく罵ったことさえある。それでも、それでも朝潮姉はいつでも優しく私たちを見守ってくれていた。

ライブで私たちのことを歌にしていた時は、さすがに驚いたが、姉らしい一興にクスツと笑みを溢しながら涙を流したものだ。そして、その夜にたくさんお菓子を持ってきた朝潮姉と夜遅くまで私たちは語り合った。朝潮姉は今まで以上に私たちを見て、私たちの言葉を聞いて、私たちを受け入れてくれたと思う。

その時は、本当に時間が経つのが惜しいと思われる位に楽しかった。

それなのに……。やっと仲直り出来たと思ったのに……。

朝潮姉は居なくなってしまった。

まさか姉妹揃って笑い合ったのがあの日で最後になってしまふなんて……信じられなかった。

「……ッ！なんで、なんで朝潮姉が！」

頬を何かが伝う。

私はそれを拭うと、その時が来るのを静かに静かに待ち受けた。

…辺りが闇に包まれ、視界不良となった海。普段は美しい波のせせらぎも果てしない闇の中へ放り出された私にとっては、不安を煽るものでしかない。

一体、いつその船はやってくるのだろう。

襲撃のため、光を灯さずに静かに待ち受ける身としては早くことを成したいところなのだが、一向に目的の船舶は姿を現さない。

一度母港へ帰港すべきか？ いや、その間に来てしまったら…。

どうすべきか悩む私だったが、その時は突然訪れた。

幾つもの光がこちらへと向かってやって来る。

私は撃つつもりのない砲をそちらに向け、息を殺してその到達を待つ。だが、不意に聞こえたのは、近づく船のエンジン音ではなく、馴染み深い者たちの声だった。

「霞ー!!どこいったのー!!」

「出てきてよー!霞ー!!!」

私は思わず、襲撃のことなど忘れ、光を灯すと声のする方へと向かう。そして、大声で叫び続ける。

「霞!?!」

私とその者たちのところへたどり着いた時、私は胸部に強い衝撃を受けた。

「霞！心配させないで！！」

…見ると自分の胸に大潮が顔を埋めている。そして肩を小刻みに動かし、「よかった…本当によかった」と涙声で言う。周りを見れば、なんと朝潮型が全員揃っているではないか…そして皆一様に目に涙を浮かべている。

「…どういふこと？」

私が呟くと、「どうもこうもない！」と霞に頬を叩かれた。そして、霞が私を優しく抱き締める。

…聞けば、私が母港から思い詰めた表情で近海へと赴いたと榛名から知らされ、全員でその後を追ってきたとのこと。

「霞の向かった方角が朝潮姉を弔った方だったから…まさかと思つて…私ほんとうに」

荒潮が目元を拭いながら、そう語りかける。

…どういふことだ？

ますます意味が分からない。榛名は何を考えている？

そんな疑問が私の心を支配し、同時に胸騒ぎがした。

…なぜだろう。すごく嫌な予感がする。

「さあ！霞も見つかったし、帰ろ！」

「そうね！もう夜も遅いし♪お肌が荒れちゃうわ」

「全く！心配かけないでよね!!」

…違う。違う違う違う!!!

何かがおかしい!!!

私はそんな強い不安を笑顔を浮かべる彼女たちに吐露しようとした……その時だった。

爆音が聞こえたかと思えば、私たちのすぐ側で大きな水柱が上がる。私たちは何が起きたのかを理解できず、ただ呆然と立ち竦む。だが、それも一瞬。

悲痛な叫び声と、痛々しい呻き声に一気に呼吸が早くなる。

「朝雲姉！朝雲姉!!!ど、どうしよおおお」

見ると山雲が口から血を吹き出した朝雲を抱えるようにして膝まずいている。そして、朝雲は「……っあ」と呻きながら、目の焦点が合わず、体は痙攣しているのか、大きく震えている。

「何よ!!何が起こったの!!?」

「…敵襲!?!」

「敵は……どい!!?」

混乱する私たちを嘲笑うかのように、水柱が再び複数上がる。悲鳴に次ぐ悲鳴。そん

な中でも、大潮は冷静に状況を把握し、敵のいる方角及び鎮守府への帰還ルートを考えていたようで、鬼気迫る顔で私たちに叫ぶ。

「…敵の居場所が分からない以上、無用な交戦は避けよう！山雲及び朝雲を囲むように陣を組め！このまま撤退する!!」

その声にハツとした私たちはすぐさまその指示に従い、陣を組む。そして、その海域からの撤退を図るが…。

風を切る私たちの耳元に聞こえたのは、複数のエンジン音。そして、その音はどんどん大きくなり、それが空からだど気付いた時には、私の真上に今まさに爆弾を落とされた時であった。

あ……。

時間が止まったような。そんな感覚に襲われる。

落ちてくるその黒い鉄の塊が私の命を奪おうと、一直線に向かってくる。

私は、目を閉じた。

「霞！」

…私の側で、大きな爆発が起きる。

いや、側というより今の今まで私が居たであろう場所で大きく炎が上がる。そして、

その炎の中には……私を思いつきり突き飛ばした艦娘……大潮がいた。

「大潮!!!」

満潮や荒潮が何やら叫ぶ中、微かに挙げられた手は炎にまかれて、そして静かに海に沈んでいった。

「お、大潮……」

その名を呼んでも返事が返ってくることはない。

「……ツ!! 荒潮! 霞たちを連れて、鎮守府へ戻って!……ここは私が食い止めるツ!!!」

そう言うのと満潮は空に砲を向け、砲弾を撃ち込む。

無数に飛ぶ飛翔体に砲弾が当たると、暗闇に一瞬光が灯り、すぐに闇に包まれる。

「……任せたわ満潮。私が先陣を切る! 霞、霞! 山雲と朝雲を庇いながら、全速力で進むわよ!!!」

……とにかく必死で。必死に荒潮の後を追う。

ふと後ろを振り返れば、満潮が懸命に空を埋め尽くすような黒い影に砲弾を放つ姿が見えた。

満潮……。

私はギュツと目を瞑ると、前を向き、速力を上げる。

間もなくして、後方で大きな爆発が起こったが、もう私は振り返らなかつた。

……どれだけ進んでも。どれだけ進んでも、闇の中。

実感が湧かない。さつきまで泣いたり、笑ったりしていた姉たちは海の底へと散っていく……そんな現実、到底信じられるはずもない。

「ああ……朝雲姉……！沈んじゃだめ！嫌だよお!!」

山雲が叫ぶ。涙と鼻水でぐちゃぐちゃの顔を必死に朝雲の胸に埋め、その名を呼ぶが、徐々に徐々に朝雲の体は暗い海の底へと消えていく。それに必死で抗おうとする山雲は、懸命にその体を支えるが、海へと引き摺り込まれる朝雲を引き止めることは容易いことではない。

少しずつ私たちと山雲たちの間に距離が出始める。

だから、私は叫んだ。

「山雲……このままじゃ、あなたも……」

その後に続く言葉は口から出ることはない。きっとそれは惨い言葉だ。だけど、このままじゃ……。

そんな私の気持ちを察したのだろうか、荒潮が大声で山雲に声を掛ける。

「山雲……朝雲は……朝雲は残念だけど……置いていきなさいッ!!」

悲痛な叫び。心が張り裂けそうになる選択。

瞳から流れるのは、涙か血か。荒潮はそれを山雲へと突き付ける。

それに対して、山雲の答えは……。

「い、嫌だ!!朝雲姉を置いてなんかいけないよお!朝雲姉は…朝雲姉はまだ生きてる!生きてるんだからあああ!」

泣きわめきながら朝雲から離れようとしないう山雲を無理やり引き離そうとしたのだろうか、荒潮が反転し、山雲の元へと向かおうとしたその時……。

ズダダダダダつと激しい音が辺りに響き渡る。

山雲と朝雲のいる海面に銃弾の雨が降り注ぎ、二人は血飛沫を撒き散らしながら、姿を消した。

「クッ!退避!!」

荒潮が叫ぶ。私は霰と共に回避行動を取るが、霰は腹部に被弾してしまったようで、ポタポタと血を流す。

「大丈夫…」

霰は笑う。だが、そんなに血を流したら……。

荒潮も被弾してしまったようだが、再び私たちの前に躍り出ると、懸命に海を進む。

「絶対に!生きて帰るわよ!!」

荒潮の鼓舞する声に私たちは必死で応えた。

そして、荒潮も霰も居なくなつた今。

私は力なく、立ち竦む。

間近で上がった水柱によりバランスを崩した私。

その私に向かって、複数の飛翔体が突っ込んでくる。

ああ…これが私の最期か。

そして、私は息を吸い込むと大声で叫んだ。

「朝潮型に栄光あれ!!!」

直後、私は白い光に包まれ、何も感じなくなつた。

## 六鐘集結

これほどまでに筋骨隆々という言葉が似合う男はいるだろうか。その身に纏うのは下着のみ。鍛え上げられた逞しい筋肉を惜し気もなく露にして、その男……本名を阿野寧我あのねいがと言うが、静かに寝台に横たわっている。

しかし、その目は見開かれ、眠っているわけではないようだ。いや……正確に言えば、今の今まで眠っていたのだが、寝室の窓辺から射し込む朝の日差しに照らされて目を覚ました。

さて、この阿野という人物はまどろむ間もなく、覚醒したわけだが、実は彼は朝に滅法弱い。

……何度も眠気眼を擦り、渋々と寝台から降りるのが彼の日常風景である。しかも、昨夜は遅くまで黒い艦娘について青葉や技術班と議論を交わしていたのだ。

そして壁に掛かった時計を見れば、まだまだ早朝と言われる様な時間。  
……なぜ、本日に至ってははつきりと目が覚めたのか。

理由は簡単。

清々しい朝の目覚めには似合わない圧迫感、それが彼の体全体を襲っていたのだ。し

かも、それはひどく懐かしいものである。

彼は自分の体を感じる違和感の正体……体に覆い被さっている存在をチラリと一瞥すると、フウと息をつく。

そして、その重圧感を与えている者の髪を手で優しく撫でると、静かにその名を呟いた。

「起きろ、大和」

「……ほんつと！信じらんないツ!!!」

『Z E U S』に幾太もある会議室、その一つに一人の艦娘の怒声が響き渡る。その声にやれやれと耳を塞ぐ艦娘は、隣にいた青葉になぜこの様な状況になっていいのかワケを聞くことにした。

すると青葉も青葉で、困惑した様な表情で首をかしげ、苦笑すると、おそらく渦中の人物であろう人間……阿野を見つめ、その疑問を彼にぶつけるように促した。

阿野に直接聞くよう促された艦娘……北上は大きな溜め息をわざとらしくつくと、気だるげそうに阿野に声を掛ける。

「阿野つちさく、なんで叢雲はこんな怒ってんの？」

「知らん」

「いや…いくらなんでもそりやないでしょ」

あまりに素っ気ない返答に再び溜め息をつく北上。

そんな彼女の姿を一瞥すると、阿野も同じように溜め息をつき、「私も分からのだがな…」と前置きした上で渋々ところの様な状況に至った理由を語りだした。

「まず、なぜか目覚めた時に私の上に半裸のまま眠っている大和がいて…」

「ちよっ!?!」

…と思つたら、いきなりの彼の爆弾発言に、北上も青葉も驚きのあまり変な声を出してしまう。

皆のお茶を淹れていた鳳凰に至っては、普段の姿に似合わず、吹き出している有り様だ。

そして、叢雲はその発言にさらに顔を赤くし、思い付く限りの暴言を彼に浴びせる。

…なぜか龍田だけニヤニヤと笑っているのだが、阿野はそんな様々な反応を示す艦娘たちを尻目に話を続けた。

「それを起こしている最中に、叢雲が来た…というわけだ」

「破廉恥なのよ!!パーカ!!」

とんでもない事をかなり端的に話す阿野に呆れを隠せない北上と青葉だが、叢雲の顔を見る限り、このまま放つておくと、以前のように血で血を洗う事態に成りかねないと、北上は仕方なく仲裁に入った。

「…で、叢雲は何しに阿野つちのところへ行つたの？」

突然向けられた疑問に叢雲は小さく悲鳴をあげると、急にしどろもどろになり、口をパクパクとさせている。

「…わ、私は…その、またコイツが夜更かしてたから起きれないだろうと思つて…その……」

何故か顔を紅潮させ、口ごもる叢雲。

それを最早何度目かも分からない溜め息と共に、北上は静観する。そして、一向にその理由を語ろうとしない叢雲に代わつて、その答えを暴露した。

「つまり、阿野つちを起こそうとしたんだね」

「ち、ちちちちち違うわよ!!!」

ここにきてようやく叢雲らしさが戻つてきたが、彼女の想いを知る六幢の面子にとつては、その反応は想定内のことで、その様に差し向けた北上は、やれやれと首を振り、「大和もあんまし叢雲と阿野つちをいじめないの」と事の元凶である艦娘に声を掛ける。

するとただ一人、阿野の側で静かに目を閉じていた大和という艦娘は、目をほんの少

しだけ開け、叢雲を見る。

そして、その視線に気付いた叢雲は、「…何よ」とすぐむが、それを大和は鼻で笑うと、わざとらしく阿野の腕を掴み、ようやくその口を開いた。

「あら、私は阿野さんのことをお慕い申し上げますし、その溢れ出る想いを体で表現したまですよ。…それを運悪く、叢雲さんに見られてしまった、ただそれだけのことです」

あつけらかんと答える大和に、北上と青葉は頭を抱え、叢雲は再び怒りに震え、鳳翔と龍田は「青春ね〜」と談笑をし、阿野は「わけが分からない」と呟いていた。

そして、いよいよ大和と叢雲が各々艤装を取り出し始めた…といったところで、青葉が切り出した。

「そろそろ本題に移っていいですか？」

## 六艘集結2

「今日はお集まり頂き、ありがとうございます……先程波乱がありました、一旦それを忘れて、青葉の話を聞いて頂ければ……と思います」

顔を上げ、丁寧な口調で話す彼女に注目が集まる中、ふと目線を手元に移すと黒い艦娘と題された資料が一枚。

……どうやら、それは今日集まった者たち各々に一枚ずつ用意されているようだ。彼女は「お手元の資料をご覧下さい」と前置きした上で、その内容に触れ始めた。

「……まず皆さんもご存知の通り、黒い艦娘の進撃による鎮守府の崩壊が相次いで報告されています。津々浦々、東西南北の至るところに設置された鎮守府が瓦解し、今や海軍の戦力は今までにないほど落ちているのが現状です」

彼女の発言は、この場に居る者たちにとつては耳が痛いほどのものだ。なぜなら、六艘は黒い艦娘の情報を収集するのもそうだが、各鎮守府の緊急時には支援にあたる役目も背負っている。

しかし救援要請を受け、すぐにその場に駆けつけても、いつも目にするのは荒れに荒れた鎮守府と数多の亡骸だけ。死屍累々と化した鎮守府の成れの果てを己の無力さを

痛感しながら、それでも生存者はいないかと歩き続ける……それが現実。

「……ですが、海軍もやられっぱなしというわけではありません。ほんの少し前、とある鎮守府が黒い艦娘と交戦し、これを見事に撃退しています。さらに、この戦闘により、黒い艦娘の遺体を回収することに成功しました。……今までその実態を全く明かさなかった黒い艦娘という存在……これは大きな進歩です」

……聞いている。

阿野や青葉からその内容を直接聞いた者もいれば、ある鎮守府が崩壊しながらも、得体の知れぬ敵を打ち破ったと風の噂で聞いた者もいる。

どちらにせよ、敗戦続きの海軍にとつてはこれ以上にないくらいの朗報であったことは間違いないだろう。

「……そして、判明したことがあります。ややこしい内容ですので、順を追ってゆっくり話しますね？」

彼女はそこで一呼吸置くと、周りに目配せをして、ゆっくりと話始めた。

「……まず、回収された遺体についてですが、これは白露型の村雨と夕立であると結論付けられています。ただ、青葉の中ではまだどこか信じられないというか……不思議な感覚です。……抽出されたデータは、白露型のお二人のものでまず間違いないのですが、その姿形からして、あまりに違いすぎるといえるか……まさに黒いというのは言い得て妙……という

感じですね」

…資料に添付されている写真。

そこには、おそらく今彼女が話しているであろう艦娘の遺体が写っているのだが、確かに自分たちが知る白露型の彼女たちとは似ても似つかないほどに黒い。

…顔だけ見れば、可愛らしい村雨と夕立である。

だが、その体を覆う艦装と思われる部分は禍々しいほどに黒く輝き、本当に死んでいのかと疑わせるほどのものだ。

叢雲と龍田は顔をしかめ、その目線は村雨…と言つていいのか分からないが、静かに目を閉じた亡骸に注がれている。

その漆黒はまるで深淵に広がる底のない闇のようで、慈悲もなく浸食を繰り返した。

南の砦をはじめとする、南方に点在していた多くの鎮守府を飲み込んだ闇。

…その闇が静かに横たわる姿を一体どんな顔で見ればいいのか二人には分からなかった。

「…ただ重要なのはこの後です。抽出されたデータは村雨と夕立のもの…だけではなかったのです。なにか別のもの、異物とでもいうのでしょうか。…そして、その検出された異質なデータ…それをデータベースで照合したのですが…なぜか海軍が黎明期に鹵獲した深海棲艦のものと一致したのです。それに、この村雨と夕立には外部から手を

加えられた跡がありました：…つまりは

「ちよ、ちよつと?! 待ちなさいよ!!!」

ここで声を荒げたのは叢雲。

困惑を隠せないような表情を浮かべ、勢いよく立ち上がると青葉に迫る。

「…外部から手を加えられたって、改造つてこと?! しかも深海棲艦のデータとか…意味が分からないわ!」

「…その通りです。叢雲さんの仰ることは尤もです。…ですが、これが真実、現状なんですよ」

しつかりと叢雲の目を見据えて話す青葉。

その目は普段の青葉とは別人のようで、思わず叢雲はたじろいでしまった。しかし、叢雲も自分の中に渦巻く疑問を払拭出来ず、その場に留まってしまふ。

…しばらく、両者の睨み合いが続いた。

だが、そんな緊張の中、叢雲はふと自分の肩に優しく触れるものを感じ、振り向く。そこには……。

「…まだお話は始まったばかりよ? とりあえず、最後まで聞いてから、皆で考えましょ?」

相変わらずのんびりとした口調で話す龍田がいた。

しかし、その間延びした声は極度に高められた緊張感を解すのには十分なもので、頭が少し冷えたのか、叢雲は自分の席へと戻ると謝罪を口にした。

「……めんなさい、少し取り乱したわ」

「……青葉も上手く伝えられず、すみません。龍田さん、ありがとうございました！」  
場を収めてくれた功労者に感謝する青葉。

龍田は優しそうな笑みを浮かべ、そんな彼女を見つめている。

「さて、話を元に戻しますね？……先程、叢雲さんも仰っていましたがおそらく黒い艦娘は何者かの手によって改造を受けているのだと思われます。そして、その改造に使われたのは海軍とも深い関わりがある深海棲艦……」

「……なるほどね。敵は案外近くにいますわね」

北上が何かを察したように、深く溜め息をつく。

だが、彼女だけではない。他の六艘のメンバーも何かを悟ったようだ。

「……そうですね。海軍が二分されるような事態は極力避けたいところですが、最悪の場合『ZETSU』は崩壊するかもしれません。……それと阿野さんには既に話したのですが、村雨と夕立至つては何の因果か、今回の襲撃を退けた鎮守府に以前所属していたことが分かっています」

「……え？」

さすがの六艦も驚きを隠せないようで、わけが分からないというような顔をしている。

だが、青葉はそんな反応が帰ってくることを予期していたのか、気にせず続ける。

「……ここからはあくまで青葉の仮説です。確証はありません。：村雨と夕立は、今回襲撃した鎮守府の所属となっておりますが、正確には既にその存在は轟沈したものととなっております。それも単機出撃による轟沈。おかしいですよ、死者が蘇ったとでも言うのでしょうか」

「……単機出撃による轟沈」

鳳翔は以前、青葉から轟沈についての定義を聞かれたことがあったのを思い出した。鎮守府のレーダーの範囲内であれば、レーダーからの消失が轟沈を示す。そして、範囲外であれば、僚機による報告が轟沈の判断となるだろう。

しかし、単機出撃……。

仮に、レーダー外で轟沈したとしたら？

何をもって轟沈と判断出来る？

「……轟沈等していないんですよ、全部データラメです。あの鎮守府の司令官は虚偽の轟沈をでっち上げていた可能性が高いんです!!!」

「……それって、何の意味があるの?……あ」

「…もしかして、今回の鎮守府襲撃はヤラセだったってこと!？」

青葉の話に、北上と叢雲はヒートアップした。

まさか、その鎮守府の長は自分で改造した艦娘に自分の鎮守府を襲わせ、それを撃退するという八百長を行ったのだろうか。悲劇の英雄にでもなろうと思ったのだろうか。その為に、多くの犠牲を……。北上と叢雲は怒りに震えるが……そんな二人の反応に慌てて、青葉が訂正する。

「言葉が足りませんでしたね!お二人が思っているようなことは決してありませんからご安心を。その単機出撃を強いたのは、あくまでその鎮守府の前司令官です」

「…彼は士官学校を卒業したばかりの青年だ。そんなことが出来るような男にも見えなかった」

青葉に同調するように阿野が口を開く。

それを聞いて北上も叢雲も少々考えすぎたかと、顔も見たこともない青年を悪の親玉だと誤解したことを反省するが…。

「…ですが、考え方としては悪くありませんよね?わざわざ単機出撃をさせ…いや、その出撃でさえ怪しい。僚機がない以上、その人物はどのようになでも話を作ることが出来たではありませんか?そして、鎮守府の艦娘及び海軍の目を欺いてまで……言い換えれば、それほどのことをする必要があった…ということですよ?」

「その通りです、鳳翔さん。おそらく、あの鎮守府の前司令官は自軍の艦娘を改造し、一連の襲撃を引き起こした。目的は不明ですが、そう考えられませんか？」

事態の重大さに皆が複雑な顔を覗かせている。

…そうなると気になるのは、その人物の足取りだが、その答えを阿野が語る。

「あの鎮守府の前任は姿を眩ましている。…：…それこそ黒い艦娘が現れる前から海軍も総出で行方を追っているが、未だに成果はなしだ。…青葉、仮にその男が黒幕だとして、単機出撃させられた艦娘は何人いるんだ？」

「…本部に報告されただけでも約十機の艦娘が単機出撃させられています。今回の村雨と夕立を除けば、単純に考えて、残りの八機も黒い艦娘と化している可能性は十分に有り得ます。…さらに、松風のようにあの鎮守府と何ら関係のない者も黒い艦娘となっていますから、果たして敵の規模は…：…」

「…絶望的だね、こりやあ」

思わず北上は呟いてしまった。

…深海棲艦が可愛く見えるほどの圧倒的な火力を持つ奴等に対して、自分たちを含めた海軍はあまりに戦力が落ちている。それこそ、今こうして話している間にもこちらの戦力は削がれているかもしれない。

…勝てるのだろうか。本当に。

おそらく、そんな疑問は北上だけでなく、この場にいたすべての者の胸中に芽生えていただろう。

「…おそらく」

そんな中、一人。まるで、その考えを必死に払拭しようとも言うように、阿野は声を張った。

「近い内に我々はその存亡をかけて、大きな戦いに身を投じることになるだろう。…そして、その戦いの中心となるのは…あの鎮守府」

「…だから、秋月さんたちを配属させたのですね」

鳳翔は落ち着きを払いながらも、怒りに満ちた目を阿野へと向けた。

鳳翔は悟った。今までの話、そして阿野の発言から。その鎮守府が最終的にどのような役割を負うことになるのかということ。

ゆえに静かなる怒りを阿野へと表した。

「…私たちは戦いでその命を散らすことに何ら不満はありません。それが私たちの役目でもありますし、そういう時代なのですから。…ですが、それならきちんとそのことを秋月さんたちやその鎮守府の者たちに伝えるべきなのではないですか？スカイ・ガード隊空の要塞と謳われた精鋭部隊から何の説明も無しに、見知らぬ鎮守府へと送られた秋月さんたち。今起きている事態を全く把握する間もなく、決戦の地にされた鎮守府…あまりに惨いと思

「いませんか？」

鳳翔は自分が今、悟ったことを渦中の者たちに伝えるべきだと感じた。

それは、最終的に命をかけて戦う者たちへの最高の礼儀だと考えたからだ。だが……。

「…それが戦争なのでは？ 鳳翔さんも仰ったでしょう？ 戦いで身を散らすのが私たちの役目だと。ならば、わざわざ捨て石だということを言う必要もないはずです。いくら空の要塞が手塩にかけて育てた部隊だからと言って、変な情は無用ですよ、鳳翔さん」  
静かな怒気を孕んだ鳳翔の言葉に噛みついたのは大和。

鳳翔は「そんなことは…」と反論するが、大和は息を深くつく。そして黙って阿野を見つめると口を開いた。

「…阿野さんはあの鎮守府を決戦の地と睨んでいるのですよね？ それなら大和は阿野さんの判断に身を委ねます。そして、それはきつとこの場にいる者全員が思っていることです。ですから、阿野さん…貴方は貴方のしたいようにやればいいのです」

沈黙がその場に流れる。

それは大和の意見に同意してのものなのか、それとも…。

「…すまないな。大和、鳳翔。だが大和の言った通り、あの鎮守府は間違いない、再び黒い艦娘との戦闘の中心地となるだろう。…そして決戦となれば、おそらく敵も全力で来

る。だが、圧倒的な航空戦力に対抗するにはあまりにあの鎮守府は貧弱だ。…ゆえに秋月たちを配属させた。鳳翔には悪いが、空の要塞は後々全員がああスカイガレイドンの鎮守府へと配属されることになるだろう。…加賀には鳳翔から話しておいてくれ」

「…阿野つちはさ、何を根拠にそう言ってるの？」

ようやく口を開いた北上に阿野は少し笑って答えた。

「軍人の勘だ」

## 役割分担2

「……とりあえず理解したわ。仲間が増えたのはいいことよね……うん。……うん。  
……はあ」

阿武隈が彼女自身に言い聞かせるように呟く。

……すまないな、先生。当初の目的だった新規着任組の勧誘は上手くいかなかったよ……。

……その代わりに、雪風と時津風、そして大井をこちら側に率いれることが出来たんだけどさ。

うん、なんで素直に喜べないのかは大体察しがつくよ。

「人手も増えたし、そろそろ具体的に鎮魂祭で何をするのかを決めないとね」

阿武隈が絞り出すような声でそう言うと、それにすぐに反応したのはウサミミだった。

「はーい！かけっこ！かけっこやるぞー！」

「わー！やろう！やろう!!」

島風のトンチンカンな提案に雪風、時津風が同調する。

あー、部屋の中を走らないで…。

ただでさえ狭い部屋に鎮魂祭実行メンバーが勢揃いしてんだからさ…。あ、金剛にぶつかった。

…これだもんな。

まともな回答が返ってくるとは最初から期待していなかった阿武隈は「あー」と生返事をしている。

そしてジーツと僕の顔を見つめてきた。

まるでその目は「どうすんの？」と訴えかけてきているようだった。

「かけっこはいつでも出来るしき……。普段出来ないようは特別なことをやった方が祭は盛り上がると思うんだよね…。だから、かけっこはまた今度！」

「ええー!!!」

駆逐艦三隻から大ブーイングが起きているが仕方がない。

そのまま僕は続ける。

「例えば、盆踊りとか出店はこれやりたいとか…何でもいいんだけど……」

「「かけっこ!!!」」

うーん、この……。

…とは言え、僕の無謀とも言える挑戦に付き合ってくれているだけ感謝しないとだよ

な。せっかく意見も出してきているし、かけっこ……やるかあ！

「…分かった。さつきはダメって言ったけど、かけっこやっていいよ」

「ほんとー!? やったあああああ!」

ブーイングは歓喜の声へ。

阿武隈からは「正気か?」という視線を向けられたが、ものは考えようさ。

僕は今しがた思いついたことを口にする。

「かけっこと言つても、ただのかけっこじゃない。そうだな…例えばレースにするとかどうだい?」

「??」

僕の発言にみなが首を傾げている。

だが、その反応は尤もだ。

…かけっこもレースも大体同じ意味だし、何を今更。

でもさ、少し工夫をすれば……。

「…レースと言つてもただのレースじゃない。賭けるんだよ! 賭けレース!!!」

「…ブツ!」

…誰だいま吹き出したの?

こっちは本気だぞ! ああ、そうさ! 賭けるんだよ!

「島風たち……いや何も島風たちだけじゃない。祭の当日に走る参加者は募つてもいいかもしれないな。……それで走る前にさ、誰が一番になるか賭けるんだよ。それを見事に当てたら、賞品を贈呈……」

「……でもさ、それだと島風が一位になつちやうんじゃないの？それだと賭けが成り立たなくない？」

「オウツ！」

……確かに。川内の突つ込みは至極当然。

この鎮守府に居る者であれば、おそらく誰もがこのウサミミが速いことくらい知っているだろう。

すると、賭けが成り立たない。

うーん、そうか……。良いアイデアだったと思うんだけど……。

「……障害物とかを設置したらどうですか？その駆逐艦が一位になれないくらい……皆が平等に競い合えるくらい……のものを幾つかレース中に設置するんです」

「……おおう！」

思わぬ人物が助け船を出してくれた。

大井の意見に川内たちも疑問を払拭したようで、感嘆の声を挙げている。かくいう僕もその一人だ。

「…じゃあ、とりあえず賭けレースはやるということでもいいわね？」

阿武隈の呼び掛けに異議は挙がらなかった。

そして、大井が再びその口を開く。

「…よろしければ、障害物については私に任せてもらえませんか？」

すごいやる気だ。

「もちろんいいけど…大変じゃないかい？一人でやるのは？僕たちにも手伝…」

「あ、大丈夫です。こういうの得意な娘、知っているのです。ありがとうございます。…早速打ち合わせしてきますので、失礼します」

…。

あれ？怒ってる？

大井はそれだけ言うと行ってしまった。

僕は先程と全くキャラの異なる彼女に困惑を隠せなかった。感じたのは冷たさ…：追いかけられた時とは異なる冷たさを彼女から感じたのだ。

だけれど…。

「…大井さんっていつもあんな感じだから気にしなくていいと思うわ。そもそも、なんで祭に協力してくれるのか…あたしには理解できないし！あの人が心を開いているのは、姉妹艦くらいだと思っただけ…」

阿武隈がそう言う。

へえ、そうだったのか。どうやら僕の知らない彼女の側面があるらしい……。

…というか、珍しく阿武隈がさん付けで人の名を呼んだからビックリしてしまった。

「大井と仲良いの？」

「…はあ？」

率直な疑問を彼女にぶつけてみたが、軽くあしらわれてしまった。うーん……まあ、詮索するのも野暮だしな。

「出店はもちろん紅茶ネー！」

いつの間にか復活した巫女服。

さっきまでなんか元気ないなと思つてただけど…。

それにしても……。

「紅茶か…」

思わずため息をつく。

というか、思つただけど……。

「この中に料理出来る人いる？」

「……」

僕の問い掛けに返ってくる答えはない。

あー、これは……。

「とりあえず紅茶はいいとして……。川内！確かおにぎり上手だったよね？」

「……へ？」

急に名指しされた川内は目を丸くしている。

「……」  
 だけど、料理が出来るメンバーが誰もいないとなると金剛の紅茶、そして川内のおにぎりにするしかないんだよね。うん、これで出店は二つ確保出来たね（白目）。

「……じゃあ、川内と金剛！出店は任せるよ！」

「F o o !!腕がなるヨー!!!」

「……いや、おにぎりって?!?本気?!!」

金剛は乗り気だ。対して川内は……頭を抱えている。

「……」  
 というかこの場合、川内の反応の方がまともなのかもしれない。

普通の祭で出店が紅茶とおにぎりだけとか……僕も行きたくないし。そこら辺はもう少し詰める必要があるかもしれないな。でも、今は……。

「……頼むよ」

「…………うーん」

懇願。

何度、川内に頭を下げてきたのだろう。僕は再び頭を彼女に深々と下げる。

…思えば、僕は彼女に頼りつきりだ。

今もこうして…。なんでだろう。川内は……。

「分かった」

…彼女はいつもこう言ってくれる。

だから僕はこうして頭を下げるのだろうか。

「ちよつと間宮さん所へ行つてくる」

彼女が優しいから？ 彼女に頼めば何でも言うことを聞いてくれるから？

…そうこう考えている内に彼女は行ってしまった。

「あ、そう言えば！ 黒潮がお好み焼きとかたこ焼き作るの上手だよ！」

「時津風たちがカンユウしてきてあげる〜！」

「紅茶♪紅茶♪」

「よし、かけっこ頑張るぞー!!!」

「…はあ、やれやれね」

…気が付けば、部屋に残ったのは僕だけになってしまった。皆がやるべきことをやろ

うと部屋を後にしたのだ。

だから、僕もやるべきことをやるべきなんだろう。

…だけど、僕はその一步を踏み出せないでいた。

頭をかすめるのは川内の顔。

…川内。

…。

最近、川内は笑っていただろうか？

彼女の笑顔を僕は久しく見ていない気がした。

だが、それもそのはずだ。

…。

ああ、そうか…。

思わず自分の身勝手さに呆れてしまう。

よくよく考えれば…すぐに分かることじゃないか。

…。

川内は…、彼女は…。

知らぬ間に僕の頬を何かが伝う。

…同じだ。これじゃあ、何も変わってない。

僕は居ても立っても居られなくなり、すぐに彼女が向かったと思われる場所へと走っ

た。

彼女に伝えなければ…。

川内。

君は僕に協力しちやいけなかつたんだ。

## 川内の想い2

「なんで……なんでそんなこと言うの?」

不意にその時は訪れた。

間宮さんのところへと急いでいた私を呼び止める声。

後方から聞こえたその声はひどく緊張しているようにも思えた。そして、振り返るとそこには私が食堂へ急ぐ理由を作った張本人が立っているではないか。

きつとその人物は走ってきたのだろう。肩で息をしながら、青白い顔で私の顔を見ている。だが、私がいざ目を見ようとすると、彼はハツとした顔になって、俯いてしまった。

私はこの事態を上手く飲み込めないでいた。

だが、それはそうだ。

先程まであれほど自信ありげに祭の開催に向けて指示を出していた人物がまるで人が変わったような面持ち、佇まいでそこにいるのだから。

明らかにおかしい。

「どうしたの?」

：そう声を掛けずにはいられなかった。

彼からの返答はない。

だが、拳を握り締め、体を震わせながら彼はようやく私の顔を見たかと思えば、何かを言おうと口を動かすが、上手く言葉に出来ないようで、結局口を告ぐんでしまった。

ぎこちない、嫌な空気が辺りを支配する。

私はそんな彼にもう一度呼び掛けようとした。

だが、結局私の口から飛び出したのは彼を案じる優しい言葉ではない。

発せられたのは、私より先に彼が私に向けて言った言葉：それに対する疑問だった。

「もう僕に構わなくていい」

怒っているのか、泣いているのか。

声を震わせ、絞り出すように切り出されたそれは私の耳から全身へ、まるで電気が走ったように駆け巡る。

なんで？

そんな疑問が生まれるのは当然だろう。

ついさつきまで私は彼の側にいたはずだった。

でも、今は違う。遠く離れた場所へと私は追いやられてしまった。

「…どうして?おにぎりを作ってくれて…」

震える声。頬を伝う何か。締め付けられるような胸の痛み。

心を覆い尽くす暗雲は悲しみ?怒り?憎しみ?

…きつと全部だろう。それらの感情が複雑に入り交じって、止めどなく溢れそうになる。

そんないつぱいいつぱいの私にとどめを刺すように彼の言葉が耳を通して私の中へ入ってくる。

「…今までありがとう」

気持ちが悪い。胃の中から込み上げてくるものを必死で堪える。

私の顔一面にじわじわと熱が広がる。対して、背中を凍てつくような寒さが這い回る。

…すっかり霞んでしまった瞳ではもう彼の顔を見ることも叶わない。

でも、必死で顔を上げる。

きつと俯いてしまえば、溢れ落ちてしまいうだろう。

それにここで顔を伏せてしまったら、もう彼をしかと見ることは出来ないかもしれない。  
い。

そんな思いで、必死に顔を上げていた。

でも、残酷なもので。

彼はその言葉を最後に、踵を返して私の前から少しづつ離れていく。どんどん、どんどん距離が開き、遂には彼の姿が廊下の曲がり角に消えるかというところで私は大声で叫んだ。

「私は……私は貴方のことが……！」

届かぬ想い。言葉が続かない。

そうこうしている間に彼は私の前から消えて、とうとう見えなくなってしまった。

川内を呼び止める時、僕は初めて彼女に会った時のことを思い出していた。そして、溢れ出すように彼女との思い出が僕の中に込み上げてくる。

見る度に、聞く度に、話す度に力を貰っていた彼女の存在。それを今は見ることさえ憚られる。それはひとえに僕が心に抱くもののせいなのだろう。

「どうしたの?」

優しさに溢れた彼女の声。

ここへ来てからずっと僕を支え続けてくれたそれが今は胸へと深く突き刺さる。意を決して、彼女の顔を見ると相変わらず可愛らしいその顔で僕を心配そうに見つめている。

決意が簡単に揺らいだのは言うまでもない。それもそうだ。

今、僕が彼女を呼び止め、伝えようとしている言葉は今までの全てを水泡に帰すものなのだから。

だから躊躇した。戸惑った。言いたくなかった。それでも。それでも僕は言わなければならなかった。

「もう僕に構わなくていい」

…なんとか口から出たのは、なんと身勝手に無責任な言葉だっただろうか。むしろ僕が様々なことに彼女を巻き込んでいったという事実があるのにも関わらず、僕が頭を振り絞って出した言葉はそれだった。

しかし、彼女との決別にはこれくらいの言葉の方が結果的にはよかつたのかもしれない。

…そもそもなぜ僕は彼女と決別しようとしたのか。

それは僕が彼女を特別視するようになってしまったからだ。

いつからかは分からない。

だけれど、僕は気が付いたのだ。彼女を友人としてではなく、異性として意識するようになった自分に。それもつい先程、いつものように彼女を頼った時に気付くとは我ながら情けない。

ずつと、ずつと側にいた彼女という存在。

：思えば、彼女がここに来て初めて仲良くなった艦娘だったか。遠い記憶が甦る。

それから流れるような日々の中で、徐々に僕の中へ浸透していく彼女の存在は僕にはあまりに大きかった。

だから…だからこそ。

彼女に悲しい思いをさせてはいけないんだ。

思い出さなければならぬ、彼女と初めて話した時のことを。彼女にとって一番大切なもの。

それは当然僕ではないし、彼女自身でさえない。

彼女にとって一番大切なものは、彼女がその身を晒してでも守ろうとした存在…妹たちなのだ。

そこに僕が入る余地は絶対ない、ないはずだ。

話は遡るが、僕が祭を開催しようと放送を通じて知らせた時、彼女の妹たちから賛同

は得られなかった。

そして、最初は彼女も「今回ばかりは…」と言っていたのだ。つまり、この時は彼女たちは同じ方向を向いていたのだ。

それなのに。それなのに…。

彼女は僕と共に歩むと言ってくれた、示してくれた。

あの時ほどの嬉しさは今までも、そしてこれからもないのだろう。

彼女と再び同じ方を向けることが幸せだった。

でも、それは同時に彼女と彼女の妹たちが別の方向を向くことを意味していた。

僕はようやく一つになれた彼女たちを再びバラバラにさせてしまったのだ。

…川内。

君が那珂や神通に抱き締められ、涙を溢したあの日。

ようやく。ようやく君たちは幸せになれたんだ。

だから、僕は…。

彼女に決別の意を示してから、僕は彼女を見ているようで見ていなかった。聞いてい  
るようで、聞いていなかった。話しているようで、話していなかった。

僕は彼女にどう思われたか、考えたくもなかった。

考えれば、発狂してしまうだろう。

だから、思考を止めた。

そして、僕は足早にその場を去った。

一秒でも早くその場を立ち去りたかったのだ。

彼女に向き合うことはもう出来ない。

「…そう言えば、長門さん」

「…なんだ？大淀」

執務室にて。

書類の整理をしていた艦娘…大淀が最後の資料をファイルに綴じると、何かを思い出したように、隣で海図を覗む艦娘…長門に尋ねた。

「…この鎮守府の指揮は長門さん、貴方が執っていたのですね。私たちが聞いた話では提督がいるとのことでしたが…」

「…ああ。確かに私が艦隊の指揮を執ってはいるが…。提督もいるにはいるんだぞ？」

そんな長門の言葉に大淀は大層驚いた。

「えっ!?!し、しかし提督はおろか人の姿でさえも…」

「…いるのさ。一人、大馬鹿者が」

そう言って長門は苦笑する。

「その人は一体…?」

「私でも分からないやつだ。…だが、決して悪いやつではない。私はそう思っている」

大淀はますます意味が分からないというような表情を浮かべているが、そんな彼女の表情もあつてか長門は声を出して笑った。そして一頻り笑うと、彼女は穏やかな顔で大淀に言う。

「…ふう、鎮魂祭とはどんなものなのだろうな。…もし陸奥が生きていたら…:…文句を言いながらも彼を手伝ったかもしれないな」

「…長門さん」

大淀はどこか寂しそうな長門の顔を眺めていたが、突然執務室のドアがノックされ、ついついそちらに視線を向けた。次に長門の顔を見た時は、普段の凜とした鋭い顔付きだったので、先程の表情は幻かかと大淀は考える。

「…赤城か。どうした?」

執務室に入ってきたのは、空母赤城だった。

長門と同様、鋭い顔付きをしているが、大淀の顔を見ると柔和な顔を見せる。

「フフ、何やら楽しそうな笑い声が聞こえてますね。つい部屋を覗きたくなっちゃいました」

「…フツ。冗談はよせ」

互いに小さく笑う赤城と長門。

大淀一人だけは緊張した面持ちでいるが、そんな彼女の緊張を和らげようとしてもいいのか、赤城が優しく大淀に声を掛けた。

「大淀さんは長門さんと何を話していたのですか？私も交えてください」

「…へ!?!」

「…あまり大淀をからかうな。赤城もただそれだけの為にここへ来たわけではないのだから?」

思わぬ言葉に大淀は困惑を隠せず、変な声が出てしまった。それを見て赤城は悪戯っぽく笑っている。

そして、長門も笑みを浮かべているが、そこはこの鎮守府の主だ。真剣な顔になると、赤城に訪ねてきた目的を聞いている。

「…フフ、大淀さん、ごめんなさいね?…さて、おふざけはこの辺にしましょうか。…長門さんの言う通り、気になることがあってここへ来たのです」

軽く謝罪をすると、赤城も真剣な顔をして語り出す。

「単刀直入に言います。長門さん、貴方に反旗を翻そうとしている動きが確認されています。しかも、かなりの数で」

「……そうか」

先程とは全く異なる空気の変わりように、大淀は再び困惑したが、事態の深刻さにさすがに気を取り戻して、問題の把握をしようと耳を済ましているようだ。それに対し、それを告げた赤城も告げられた長門もどこか余裕を感じさせるような表情を浮かべているのは、さすがというべきか。

「…気を付けてくださいいね？何が起きるか分かりませんから」

「…ああ。肝に命じておく」

「…それと真意は測りかねますが、無断で出撃している駆逐艦がいるみたいです。後で、出頭させますね？」

「…ああ、お手柔らかにな」

…あつという間にそんなやり取りを終え、赤城は部屋を出ていった。

大淀だけがちんぷんかんぷんという表情で長門の顔を見つめているが、そんな彼女を長門は黙って、穏やかな顔で見つめ返していた。

「……さて、これはあの人たちの役に立つだろうか？」

呟くようにそう言ったのは長門。

大淀を執務室に残し、彼女は今、地下牢へ来ている。

そして幾太とある部屋の一隅に沢山積み上げられたのは可愛らしい人形。

……聞くものが聞けば驚くだろう。

これを作ったのは長門なのだ。手縫いで作られた動物のぬいぐるみをいとおしそうに彼女は手に取ると、持ってきた袋の中へと丁寧にしまっている。

一つ一つ丁寧に。彼女はしっかりと人形を見定めながらそれらを袋へ詰めていく。

長門の顔を見れば、まるで年端のいかぬ少女のようだ。

だが、その顔は突如として厳しいものになる。

「……こんなところにいたのですね。長門さん」

不意に背後から話しかけられた長門は、一瞬驚きながらも、悠然と振り返る。

そしてそんな長門が目にしたのは、怪しげに笑いながら立っている戦艦榛名だった。

「…榛名か。なぜここに?」

「それはこちらの台詞ですよ、長門さん」

榛名の視線は長門ではなく、長門が手に持つ人形に注がれているようだ。だが、不思議だ。滅多に艦娘が訪れないであろう、この地下牢。

トラウマを呼び起こさないようあの人がリフォームしていたが…最近は自分以外誰も、改築の功労者である者達でさえも寄り付いていないようだった。

「フツ…どうだ? いるか?」

そんな疑問を覚えつつ、長門は笑みを浮かべ、手に持った人形を差し出す。  
「いいえ、結構です」

榛名はそれを手で払うと、依然として不気味な笑みを浮かべている。

お互いに笑みを浮かべているのに、嫌な緊張感が張り詰めているこの状況。

長門は切り出した。

「榛名…お前は」

だが、その言葉が続くことはなかった。

可愛らしく並べられた色鮮やかな人形におびただしい赤色が付着する。

そして、一度消えたはずの血生臭さが再度この地下牢へと充満し始めた。

血飛沫を上げ、倒れる体。

その背後には刀を持った銀髪の艦娘が立っていた。

「野分さん、お見事です」

榛名が揚々とその銀髪に話しかける。

「…艤装を纏わぬ敵を斬っても、何も面白くはない」

対して野分と呼ばれたその艦娘は少し不服そうな顔をして榛名の呼び掛けに答えた。

だが、相変わらず榛名は笑顔を絶やさない。

そして、血の溢れ出ている体をじっと見つめながら言い放った。

「…さあ、舞台は整いました」

## 混乱の時

「もう僕に構わなくていい」

そんな言葉を吐き捨てるように言った。

ここまですつと支え続けてくれた人に……最愛の人に言ってしまった。

恩を仇で返すような行為。裏切者。

川内が僕のことをどう思ったのか……知りたいという思いと知りたくないという思いが交差する。

結局、昨日はそればかりが頭に浮かんで何も出来なかった。だから僕は部屋に帰るとすぐに床に横になり、目を閉じた。

……目覚めは最悪だ。

ただボーツと天井を見ている。なにもしたくない。

先日購入した壁時計を見れば、時刻は昼前。

一体何時間寝てるんだ、僕は。

何かしなければ……という思いが頭をかすめ、なんとか起き上がろうと体に力を込める。

だが結局、床に吸い付いた僕の体がそこを離れるのには大分時間を要することとなった。

おもむろに体を起こして、伸びをする。体のあちこちが鉛のように重い、僕はふと気が付いた。

…今日はやけに静かだな。

この部屋が位置する場所は人通りが少ない。

…とは言え、もう半日過ぎているこの状況で、一切の音が入ってこないというのも不可解な話だ。

静寂に包まれた鎮守府。

僕は様子を伺う為に部屋を後にした。

こんなに気分が晴れない目覚めはいつ振りだろう。

…そんなことを思いながら、ふと視線を天井から外し、自分の両隣を見る。

そこには静かに寝息を立て、目を閉じている私の妹たちがいた。

ああ、そっか…。

昨日のことを思い出す。

そして、赤く腫れた瞼から再び涙が溢れてくる。

…昨夜遅くに私が部屋に帰ると、神通と那珂は私の顔を見るなり、ひどく驚いた顔をしていた。

そして声を掛けられた。

…二人と言葉を交わすのは本当に久々だった。

でも、私は適当に返答すると、そのまま自分の布団にくるまり、目を瞑った。

我ながらひどい姉だと思う。

隣の二人を起こさぬよう、そっと立ち上がると机の上の時計を手取る。

時計の針はまだ早朝とも言われるような時刻を指していた。

「…どうしよっかな」

一人、呟く。

まるで進路の決まらない船のように。

私は目的を失つて、何をすべき分からなくなつていた。

……とりあえず、鎮守府の瓦礫撤去に精を出すか。

頭を捻り、導き出したのはそんな答えだ。

本来、瓦礫撤去は週毎の当番制だったが、これからは出撃の無い日は毎日でも顔が出せる。

まだブーツとした頭を起こす為、軽く頬を叩く。

私はそのまま目をグイッと乱暴に拭うと、早速被害のひどかった東館の方へと向かうとする。そして部屋の取っ手に手を掛けた、まさにその時だった。

ふとドアの下に一枚の紙が落ちているのに気が付いた。

思わずそれを手に取る。

「……何これ？」

『総員決起せよ』と題されたその紙には、今日の昼前、この鎮守府に所属する全ての艦娘が中庭に集まらなければならないという旨が書かれていた。しかも、この召集を無下にする者は厳罰に処すという文言付きで、ご丁寧にもその部分だけ赤字で書かれているところを見るに、この集会を呼び掛けた者は絶対参加を求めているようだ。

「……」

私は疑問で頭がいっぱいになりながらも、文の最後まで目を通す。そして、最後の一

文を目にして、思わず息をのんだ。

『艦娘に栄光を、人類に絶望を』

「…お集まり頂き、感謝致します」

中庭の一番目立つ場所。そこに設けられた壇上から感謝の念を言葉にするのは麗しい巫女服を纏った艦娘：榛名だ。彼女の眼前には多くの艦娘が犇めき合いながら、じつと彼女へと視線を向けている。

彼女の立つ壇上からは、多種多様な反応が丸見えだ。

彼女を崇めるような顔付きをしている者もいれば、訝しげな顔で彼女を見つめている者もいる。

だがその中でも特に顕著なのは、今回の召集に困惑を隠せない者たちの表情だ。

何が起きているのか、いや何が起きるのか……戸惑う者たちが大多数を占めていた。彼女はそれを一通り確認すると、普段の笑みを交えながら、ゆつくりと話始める。

……困惑気味の聴衆に、彼女の穏やかな口調が安心感を与えたの言うまでもない。だが、ホツとしたのも束の間。

彼女の口からとんでない事実が語られることとなった。

「……皆さん、どうか落ち着いて聞いてください……榛名が今から話すことを。……この鎮守府の指揮を執っていた誉れ高き艦娘……長門さんが亡くなりました」

どよめき。腹の底にドンとくるような響き。

驚きの声が至るところから上がり、辺りは一気に騒然となる。

「どうかお静かに……」

そこで榛名が叫んだ。

先程の穏やかな口調とは正反対のはっきりとした力強い声。それはまさに鶴の一声だった。

多少の声は聞こえるものの、静けさが完全に戻ってきた頃合いで、彼女は続ける。

「……皆さんが驚くのは無理ありません。ですが、まずは榛名の話を聞いてください。

……長門さんの為にも」

その言葉に多くの者が目を見開き、覚悟を決めたような顔付きになると、静かに榛名

の口から次に語られる言葉を待っている。

「…事態は深刻です。しかし皆さんであれば…いや、皆さんだからこそ…この状況を乗り越えられると榛名は思っています。…それでは、長門さんがなぜ亡くなったのかお伝えしましょう」

皆が固唾を飲んで、榛名の言葉に耳を傾ける。

そして、榛名の話を最後まで聞いた者たちの反応は…。

「…まさか、長門さんが上の人たちと繋がっていたんだなんて」

「でも、最後は私たちの為にその身を挺してくれたんでしょ？…やっぱり長門さんはすげえよ」

「…憎むべきは人間ね！許せないわ！」

「うう…：霞ちゃんたちまで手にかけるなんて…絶対に許さないんだから！」

「私たちの力を見くびるなよ!!!」

「倒せ、人間を倒せ！」

小さな呟き。

そんな一声が彼方此方から聞こえ始め、それは雑踏に消えることなく、波紋のように伝播する。そして、次第に大きな怒号となり、爆発的に憎悪の波が広がっていく。

「倒せ！倒せ!!人間を倒せ!!」

∴各地にある数多の鎮守府の一つがその役目を忘れ、人間に牙を向こうとしていた。

「∴長門が∴∴∴長門が死んだ？」

呆然とした。

そんな馬鹿な!?

な、なんで∴!? 一体どうして!?

鎮守府の陰からそつと身を乗り出して、耳を研ぎ澄ませる。∴見知らぬ艦娘が壇上に上がり、この鎮守府の艦娘全員にだろうか、呼び掛けているようだった。

そして、聞いた。

僕は聞いた。

∴そして今聞いたことを必死に頭で理解しようと、噛み砕こうとする。

あの艦娘が言うには、長門は地下牢で死んでいたらしい……しかも殺された……と。

そして、その理由は長門が上層部の人間たちと手を組んだ挙げ句、最後はお互いの主張が対立してしまい、殺された……と。

その艦娘は偶然その現場を目撃し、死の間際に長門から全てを聞いたと言う。涙を懸命に拭いながら、その艦娘は語る。

長門は後悔していた……と。人間を信頼し、人間と協力した己を後悔していた……と。人間をこの鎮守府へ手引きする為に霞たちを迎えに向かわせたが、結局彼女等の行方も分かっていないらしい。

「……皆さん。鎮守府の仲間にここまで惨い仕打ちをした人間を放っておきますか？」

答えは……否。

「示しましょう……私たちの力を」

その場に集まった艦娘たちから「人間を倒せ!」というコールがマグマのように湧き上がる。

僕は身がすくんだ。そして、後退り。

嫌な汗が全身から噴き出している。

そして……走り出す。

「まずはこの鎮守府にいる人間にそれを教えてあげましょう」

そんな言葉が後ろから聞こえてきた。

## 大逃亡

乱暴にドアを開け、床に転がつていた財布を手に取るとそのまま僕は転がるように部屋を飛び出した。

すぐにここから離れなければいけない。

そんな思いが恐怖で固くなった僕の体を必死で動かす。正直ここに来てからいろいろな出来事があったが、自分の身が案じられる場面は何度かあった。

だが今回は格が違う、桁違いに違う。

強張って鈍くなった足が何度も纏れ、転倒しながらも死に物狂いで進む。擦りむいて、血が出ようが構わない。

目指すは、正面玄関を抜けた門、そしてその先。

心臓の鼓動が早くなり、息も絶え絶えになる。

胸の辺りに激痛が走るが、足を止めてはならない。止まれば終わる。

そして目を見張った。

視線の先、正面玄関へと続く階段付近には既に何人かの艦娘が立っているではないか。

辺りが騒がしい。

さつきまでの静けさが嘘のように、嵐の前の静けさだったと言わんばかりに今は彼方此方から声が響いてくる。

がむしやらに走ったせいとか、はたまた別の要因か……呼吸が荒い。

しかしその激しい息遣いが聞こえないよう、必死で息を殺す。そして思考を巡らす。なんとかこの状況を打開出来ないか。

そんな時だ。

不意に肩を掴まれ、思わず小さく叫ぶ。

恐る恐る、振り返ればそこには……………。

「雲龍……」

僕を憐れむようにも見下すようにも見える視線を向けながら、一人の艦娘が静かに佇んでいた。

ここまでか……………。

一気に溢れ出す絶望感に僕は思わず目を閉じた。

そして震える体に懸命に力を込めようとすが、最早どうにでもなれという投げやりな気持ちも心に生まれ、僕は抵抗する気さえ失ってしまった。

そして待った。これから来るであろう審判の時を。

「…何をしているの？こっつちよ？」

…と思えば強引に手を引かれ、バランスを崩す体。

勢いで前のめりになった体が雲龍の体に触れてしまい、訝しげな顔を向けられたが、それはこちらとしても同じだった。

だが悠長にしている間は無いと言わんばかりに、そのまま彼女は僕を拘束もせずどこかへと誘う。

正直、手を振り払って逃げようかという思いも芽生えたが、結局は彼女にされるがままに。

そして、そうこうしている内に彼女は僕の考えを察したのか、僕の手を強く握る。あまりの力に手が痺れたほどだ。

そして、着いた先は…。

「…なんで、なんで助けてくれるんだ？」

外の世界へと繋がる鎮守府の門の前だった。

着任当初、提督になることを拒絶され、陸奥にここまで見送られたのを思い出す。

まさかこのタイミングでそんなことを思い出すとは…。

そして、理解出来ない雲龍の行為に僕は問い掛けられずにはいられなかった。

そんな僕の問いに彼女は不思議そうな顔をして一言。

「あら……死にたかつたの？」

「……」

しばらく僕は黙つて彼女の顔を眺めていたが、意を決して歩み出した。彼女は黙つて僕のことを見ている。

「……ありがとう」

彼女の横を通りすぎる際に、自分でも驚くような弱々しい声でそう伝えてみた。

雲龍はそれに特に返答することはない。

僕は興味無さげに自分を見ている彼女を横目で一瞥すると、そのまま鎮守府を後にした。

「……ふう」

次第に小さくなる人間の背中が完全に見えなくなるのを確認すると、雲龍は大きく息を吐いた。

そして独り……ポツリと呟く。

「……感謝することね。貴方が今までやってきたこと、そしてそれによつて成し得たものに」

そして彼女は小さく笑みを浮かべると、喧騒で溢れ返る鎮守府へと戻っていった。

鎮守府を渦巻く憎悪。

そしてそれに駆られ、大挙して押し寄せる艦娘たちは、まるで巨大な津波のようだ。憎しみに突き動かされた者たちで埋め尽くされた戦線。

だがそこを去り逝く人間は知らないのだろう。

必死でその憎悪から彼を守ろうと防波堤の役目を果たした存在が少なからず居たことに。

## 因果応報

「ばッ、化け物だああああ！」

「助けてくれええええええ!!!」

「は、早く…早く艦娘を呼べ！殺されるッ!!」

今の今までいつもの日常を生きていた者たち。それをあつという間に炎が包み込む。業火に巻かれ、絶叫を上げながら死んでいく人々。

阿鼻叫喚、死屍累々、ここは正に現世の地獄。

…辺りを見渡せば、墨のように真っ黒くなった人形ひとがたが無数に転がっており、強烈な異臭を放っている。

軍の流通を司る機関…PMT。その一部は焦土と化した。

大地は焼かれ、その上にあつた全てのは紅蓮の炎に包まれた。そんな猛火の中で。

「ゴオアアアアアアアアアアッ!!!」

耳をつんざくような咆哮。

不運にもまだその命を落としていない者たちはその叫びを聞いて、恐怖に顔を歪ませ

る。

「海軍は……六鐘はまだ来ないのか?!?」

生命の危機を感じ、恐れで顔面蒼白となりながらも必死で逃げ惑う人々。その後方から黒光りする巨体がとてつもない速さで迫る。

「ぎゃああああああああ!!!」

…刹那。

最早人の形を保っていない肉塊が血だまりの上に散乱しているその光景は筆舌に尽くし難い。

狼狽える者たちは口を揃えて言う。

深海棲艦とも艦娘とも、そして人間とも形容出来ない。

圧倒的な力で蹂躞の限りを尽くすその存在を。

「化け物」と。

「ば、馬鹿な！PMTが襲撃されるだど?!:敵は!?敵は何だ?!?深海棲艦か!?それとも誰かのクレーダーか!!」

縦にも横にも大きく揺れる建物に足を取られながらも、その人物はなんとか窓へと近づき、外の様子を伺う。

見る限り黒煙が各所から舞い上がり、火の手があがっている。

左を見れば焼け野原、右を見れば火の海。

だが果敢にもその火を消そうとしている者たちもいるようで、水を組んだバケツをリレーしながら必死で火に水を掛けている。その様子を見て、その人物は狂ったように吐き捨てる。

「馬鹿共があ!!!そんなの焼け石に水だ!とつとつここを襲ったゴミ共を叩き潰せ!!それでも優秀な兵隊かア!!?ここは:ここは俺の国だ!俺の、俺だけの王国なんだ!!!誰にも壊させはせん!!!」

「:そ、それがあ」

怒り狂ったその人間に恐る恐る声を掛けるのは、先程襲撃を報告に来た人物だ。

普段であれば勇猛果敢と市民から囃されるような風貌をしているはずのその顔はひどく強張り、今から口にしようとすることを言い渋っているようにも見えるが、何かを覚悟したように叫んだ。

「P、PMTに所属する戦闘員のほとんどが…その、戦闘不可能!せ、戦死しています!!!」  
「…な、に!?!」

「で、ですから…海軍に救援要請を…早急に」

「ふ、ふざけるなああああああ!!!」

真つ赤になった顔でそう絶叫したかと思えば、その人物は地面に這いつくばっている艦娘の胸ぐらを掴み、無理やり立たせると、ものすごい剣幕で彼女に捲し立てた。

「…いいか、神風!?!お前は忘れていないだろうな?俺が曰く付きの鎮守府から引き取つてやらなければ、お前は一生掃き溜めで生きることになったんだぞ!?!その恩に今こそ報いる時だ!命を懸けて俺を守れ!!!」

その人物の言葉に何の反応も示さず、ただじつと顔を見つめるだけの艦娘を乱暴に突き飛ばすと、彼は壁に備え付けられた電話を手取る。そして受話器に向かつて、再び怒鳴り付け始めた。

「…六艘はまだ来ないのか!?!阿野は!?!阿野はどうした!?!いいや、六艘でなくてもいい!!駆逐艦でもいいから増援を送ってくれ!!火の勢いが凄すぎて、逃げることも叶わん!」

そして叩き付けるように受話器を置くと、何やらぶつぶつ言い始めた。

「何故だ!?!なぜ!?!なぜ!?!何故なんだ!?!俺は化け物共を黜り、改造の手伝いをしっかり務めたんだぞ!?!だからこの機関に天下り出来たんだぞ!?!この安寧の地に!?!なのに、なのに」

なのになのに!!…アイツは何をしている!?早く援軍をよこしてくれ!!」  
まるで念仏を唱えるかの如し。

その人物は恨み言を言いながら、頭を抱えて苦悶の表情を見せている。そして同室する人間はその狼狽える姿に不安を覚え、反対に艦娘は清々しい笑顔を見せている。

そしてこの場にもダクトを通じて、とうとう黒煙が侵入し始めると人間たちはパニックになった。

そこへ……。

「あはっ！無様！無様ですね〜!?人間共!」

慌てふためく人間たちを嘲笑うかのような笑みを浮かべ、一人の少女が入室してきた。

そして室内にいた二人いる内の一人の人間の顔をじつと見つめたかと思えば、途端に狂ったように笑い始めた。

戸惑いを越えた言いようのない恐怖感が襲う。

「な、なんだ!?!お前は!?!」

「…誰でもいいじゃないですか、もう死ぬんですから!でも不思議ですね、人間!お前は初対面じゃない気がするんです!!…しかもすつごく昂ってるんですよ、身も心も全て!!!」

少女はそう言うと、自身の手に黒い靄もやを這わせる。そしてその靄が晴れた時、そこには手ではなく、先端部分に歪な歯を生やした深海棲艦を思わせるような生命体が宿っていた。

「グギユユウウルルル!!」

彼女の両手のそれがまるで呼応するように吠え立てる。

そして彼女はいとおしそうにそれを見つめながら…。

「ああッ!!可愛い!可愛いですよ!!!」

一人、悦を感じているようだった。

一方でそれをまざまざと見せられた者たちは、これでもかというくらいの恐怖に怯え、その場に立ち尽くしていた。

そしてそれを見た彼女は、手前にいた人間に近付くと、目を見開きながら自身の手をその人間の頭へと擦り付けた。

そんなことをすればどうなるか…。

体をガタガタと震わせながらも残された人間と艦娘は目を逸らし、耳を塞いだ。

そうしないと見えてしまうからだ、聞こえてしまうからだ。

ゴリゴリと骨を砕く音を立てながら、どす黒い血を巻き上げてその手、もとい生命体は人間の頭部を喰らっていた。



それを好機とばかりに人間は饒舌に語り出す。

「…フ、フフフ、フハハハハハッ!! そうか、そうだったか! お前は黒い艦娘なのだな!?! : フハハハッ! それなら話が早い! 俺はお前たちの産みの親: とまではいかないが、それに尽力したんだ!! つまり俺はお前たちの仲間なんだよ!! だ、だから殺さな:」

そこまで言うとその人物の視界は急に暗転し、闇に包まれる。それが生命体の口の中だと理解した時には、彼は既にこと切れていた。

体がドサリと床に叩き付けられる。

一瞬の出来事だった。

殺戮の一番最後に残された艦娘: 神風は絶望のあまり嘔吐する。そして待った。どちらの生命体に私は喰われるのだろうか: そんな思いが溢れだす。

いやだっ! いやだっ! 死にたくない……!!

ギョツと目を瞑り、必死に目の前の過酷な現実から逃避する。獣のような唸り声が自分の間近で聞こえても、彼女は目を開けなかった。

そしてふと聞こえた。

「貴方より人間の方が美味しいんですよ?」

その一言に今まで固く閉じていた瞼を開く。

目の前には誰もいない。

そして彼女は、自分一人だけが生き残ったという事実が気が付くまでに少々時間を要した。

「派手にやっていますね♪」

黄金色の片眼を煌めかせ、指についた血液を丹念に舌で舐め回すとその人物はゆつくりと腰を上げる。

：よくよく見れば、彼女が今まで腰を掛けていたのは死体が折り重なって出来た屍の山だ。

そして彼女が立ち上がった瞬間、漆黒の光が彼女の背中で瞬いたかと思えば、巨大な黒い羽が生え、上下に激しく振幅する。それは小さなものから次第に大きくなり、遂には空中へと彼女を誘った。

そのまま彼女はニコリと笑みを浮かべ、爆音轟く戦場へと飛び立った。

彼女が飛び去ってから間もなく……。

死体の山に隠れ、なんとか骸むくろにならずに済んだ生存者は後に語った。

PMTの救援へと急ぎ向かっていたところを空から飛来した謎の少女に強襲され、部隊は壊滅状態に陥ったと。

…少女だからと油断していたわけではない。

生存者は目を伏せながらも必死で自身が見た光景を話した。少女がその背丈に似合わぬ大鎌を一度振り回せば、多くの命がそれに刈り取られた。

一瞬でも反応が遅れたら……。

その生存者は発狂した。そして最後に呟いた。

「……悪魔だ」

「グオオオオアアアアアアアアアアアツツ!!」

その咆哮だけでPMTの建物全体を軋ませる鐵くろがねの局軀きよく。PMT敷地内で「化け物」が暴れていると緊急連絡を受け、六艘の叢雲と大和は急いで駆け付けた。

そして目にした。

全体的に黒光りした屈強な局軀。銃弾や砲弾を跳ね返すほどの強固な鋼の鎧。PMTの兵団をいとも容易く屠ったであろう六つの豪腕。鼓膜を破るような狂瀾怒濤きょうらんどとうの蛮声ばんせいをあげる巨大な口。

まるで何度もあげられるその咆哮は、殺戮を楽しむ歓声にも、無慈悲に命を奪うことへの慚愧ざんきの念から号哭ごうこくしているようにも二人は感じた。

「生存者は絶望的ですね」

「…まだ分からないでしょ!?!早くあの化け物を倒して仲間を救いましょう!」

敵と対峙しながらも、叢雲と大和は軽く言葉を交わし、化け物をしっかりと見据えるところは、さすが六艘と言わしめるところか。

だが二人は思っていた。

もうあの人には会えないかもしれない……。

「グエエエエエエエエアアアアアアアツツ!!」

一向に仕掛けてこない二人に痺れを切らせた化け物が絶叫しながら、その巨体に似合  
わぬ俊敏さで一気に突っ込んでくる。

たとえ……たとえそうだとしても……。

二人は示し合わせたように目を閉じる。

コイツは倒すッ！！！！

「艤装展開！」

ほぼ同時に両者がそう叫ぶと眩い光が二人を包み込む。

「これより人類の敵を迎撃する！！！」

## 元気でね

「なんて馬鹿力なの!? 槍が折れそうッ!!」

猛スピードで懐に飛び込んできた屈強な体。

そしてその豪腕から繰り出される猛攻を叢雲はお得意の槍で軽くないしながらもそう叫んだ。

化け物の拳が繰り出される度に巻き起こる暴風。

それに華奢な体が何度も持つていかれそうになるが、足にグツと力を込めてなんとか踏ん張る。

そして叢雲が化け物との接近戦で槍を振るう中…。

「いいですよ、叢雲さん。貴方がその木偶の坊を引き付けてくれる時間が長ければ長いほど…私の最高火力を以て相手を沈める可能性が高くなります」

大和はそう言うのと自身の砲塔を破壊の限りを尽くす巨大な体に向け、しっかりと狙いを定める。

寸分の狂いも許されない、決めるなら一撃で。

大和は大きく息を吸い込むと大きな声で叫んだ。



「…死んでないじゃない!!!」

「…ぼやあ?」

「大和ちよつとー!!!」

叢雲がそう叫ぶ中、大和は目を細めながらどこかバツの悪そうな顔をして立ち尽くしていた。

…叢雲の発言から分かるように、化け物は死んでいなかった。ただ無傷という訳でもないようだ。

六つあったはずの逞しい腕。

その内の三本が引き千切れてしまったようで、断絶した部分からおびただしい量の血が垂れ流されている。

だが残り半分腕は健在なようで、その巨体もおもむろにモゾモゾと動き出したかと思えば、激しく振動し、のっそりと立ち上がった。機動力もそこまで落ちていないように、呆然と立ち竦んでいる大和目掛けて一気に飛び込んできた。

「大和! しつかりなさい!!!」

叢雲が大和の手を強引に引っ張り、ギリギリのところまで化け物の突撃を回避する。だがそれで攻撃の手を緩めてくれる程、化け物も馬鹿ではない。彼女たちの後を執拗に追いかけて、隙有らば鉄の拳を叩き付ける。



聞こえてくる。

モーター音。エンジン音。機械が唸るような音。

化け物の咆哮に隠れ、そんな音が聞こえてくる。

そしてそれは次第に大きくなり、地鳴りのようになって彼女の鼓膜へと響く。

刹那、化け物の口……いや、口腔内が怪しく光り出したかと思えば、今まで聞こえてい

たはずの咆哮も機械音も止んでいる。

「……伏せて！」

そんな様子を伺っていた叢雲の体を無理やり地面に這わせるようにして大和が覆い被さったかと思えば、紫色の一閃が空を切る。

それが化け物の口から放たれた光線だと気が付いた時には、彼女たちの後方に広がるPMTの敷地が白い閃光に包まれていた。

「……助かったわ、大和」

「いえ、私こそ取り乱してすいませんでした」

二人はお互いを支え合いながら立ち上がる。

そして再び動き出した化け物をキッと睨み付けた。

「……本当に化け物ね」

「そうですね」

圧倒的な暴力を前に二人は冷静だ。

「叢雲さん。もう一度大和にチャンスをくれませんか？次は仕留めますので…」  
大和は化け物から目を離さずに、そつと呟く。

「…早くしなさいよっ…」

叢雲はそれに応えたと化け物へと向かって駆け出す。

「…ありがとうございます」

大和は隣を駆け抜けて行った艦娘の背中に静かに礼を言うと言を閉じた。

電は耳元に充てていた小型の機械をゆっくりと離すと、深くため息をついた。今の今までその機械を通して会話をしていた彼女は、何故かどつと疲れたような表情を見せている。

それもそのはずだ。

その会話の相手は彼女が時間を掛けて成そうとしていたことをいつの間にか、知らぬ間に成し遂げてしまったのだから。

当然、彼女は信じられないという顔をしている。

「…うーん、思ったより早かったのです！」

「そうみたいだね」

私の膝の上に座っている艦娘：電は少し驚いたような顔をしてそう言った。なので私もそれに同調するように返事をする、膝の上の天使の頭を優しく撫でることにした。

「…むー、なんか釈然としないのです。…それに何で榛名さんが？電は榛名さんがあの鎮守府に居るなんて報告は受けてないのです…うーん」

どうやら唸ってしまったって撫でるタイミングを間違えてしまったようだ。そう思つて手を頭から離そうとすると「…なんで止めるのです？」と不満げな顔で言われてしまった。

…やれやれ電は手厳しいね。

「司令官は何か聞いてるのです？ 榛名さんがあの鎮守府に居ることとか……木曾も怒っていたのです！ また俺になんの連絡も無しにやり始めやがって……って」

「いや、私も初耳だよ」

「そうなのですか？ ……うーん、訳が分からないのです」

難しい顔をして電は唸っている。

この間も私は彼女の頭を撫で続けている……そうしないと彼女が頬を膨らませ、さらに難しい顔をしてしまうからだ。彼女の悩ましげな顔を見るのは久しい気がする。

だが彼女の疑問も分からないでもない。この私もなぜあの鎮守府に榛名が居たのか、それを知らなかったのだから。

しかし私たちの元を訪れた来訪者の言葉……それによって私たちの疑問は払拭される。

「ああ！ 私が送ったんですよ！ 榛名さんを!!」

桃色の髪を靡かせながら、颯爽と入室してきた艦娘……明石。彼女の言葉に私の膝の上の艦娘は驚きながらも、珍しく怒りを露にした。

「……それならそうと言って欲しいのです！ あの鎮守府は司令官が……」

「……黒い艦娘の誕生には『憎悪』が必要なんですよ？ しかもかなり強いものが……ですか  
ら私が榛名さんを送って、人間への憎悪を増進出来るように仕向けたんです！ お陰でこ

れから私も忙しくなりますよー!!」

電の威圧的な言葉を明るく声で遮ると明石はそう言う。

「むー！司令官からもなんか言つて欲しいのです！」

「…ハハハ。明石はこうなると止められないからな」

「ざつすがあ！提督は分かつてらつしやる!!」

彼女たちのやり取りを見ていると昔を思い出す。

そして彼女の発言から察した。近いうちに再びあの場所へと赴くことになるのだらう。

私は静かに、目の前の喧騒を眺めながら、そう思っていた。

「…つととー！そういえば…吹雪ちゃんと古鷹ちゃん、松風ちゃんは無事PMTの襲撃に向かつたみたいですね！」

電の怒りを避けるためだろうか、明石は突然思い出したようにそう叫ぶ。だが電はお構い無しに明石に突つ掛かっているので代わりに私が返答する。

「そのようだね」

「フフ…提督！明石の最高傑作は如何ですか？」

彼女の言っているのは…松風のことだろうか。

私は思うところがあつてそれには返答せず、顔を伏せることにした。彼女はその反応

が意味することをよく理解出来なかったのか、電の追撃を避けながら、一人話続ける。

「そうですね！そうですね！！言葉にならないくらいに最高傑作ですよね！！フフ…提督は悪いお人だ！わざわざ吹雪ちゃんたちを始末に向かわせたのも、偶然ではないのでしよう！？明石には分かるんです！…フフフフ、あの人間もさぞお喜びなはずですよ！明石がせつかく整えてあげた顔が潰れてしまうのは残念なのですがね…フフフフ！」

「だあああ！一人で盛り上がるな、なのです！」

とうとう電が室内を逃げ回っていた明石にタックルをかまして、押さえ付けたようだ。

私は思わず笑みを溢すと、つい言ってしまった。

「…君たちは変わらないな。人と違って」

「…どう？傷口に槍を突き立てられた感想は！」

叢雲は槍を握る手に力を込める。

深く深く突き刺さる槍を黒色と言つても遜色ないような血液が伝い流れるが、その力を緩めることはない。

「ゴオオオオウウウウウウウツツ!!」

大きな体を小刻みに振りながら、必死で叢雲の槍を引き抜こうと化け物が暴れまわる。

だが大和の砲撃により断絶された腕を捉えて離さない叢雲の槍。動く度に深部へと食い込み、辺りに血が飛び散る。

「…馬鹿ねツ！暴れれば暴れる程、アンタの死期が迫るのよ!?!?!だから大人しく、くたばりなさいな！」

叢雲がそう叫ぶと、鐵の体は地面に横たわる。

そして、地面をゴロゴロと転がり始めた。

「…往生際の悪いツ!!!」

咄嗟に化け物から距離を取る叢雲。

…槍から手を離さなければ、その巨体に押し潰されることになったのだろう。だが彼女が戦闘において自分の武器から手を離れたことは今までかつて一度もなかった。やはりこの敵は…強い。

叢雲が改めて覚悟を決めた時、化け物は傷付きながらも悠然と立ち上がる。聞こえてくるのは咆哮、そしてあの機械音。

残された手で大地を掴み、明滅する化け物の口。

……来るッ!!!

あの一閃を受ければ、待っているのは死。

後方に広がる烈火渦巻く焦土。

叢雲はその閃光を避ける為、身構えた。

満身創痕の彼女は目を見開き、備える。

生きるために。戦うために。

「…大丈夫ですか？叢雲さん」

そんな彼女の耳に届いたのは大和…の声ではなかった。

だが叢雲は小さく笑いながら呟く。

「…やっと来たのね」

あんぐりと口を開け、紫色の光を宿したその部分に空から銃弾と爆弾がこれでもかと

降り注ぐ。

大爆発を引き起こす化け物の上空を見れば、旋回しながら飛び回っている数多の航空機。

「空の要塞、推参致します」

思わず力が抜け、座り込んだ叢雲の肩に手をそつと置くと置く空の要塞の司令塔である艦娘：加賀がそう言う。

「叢雲さん！お疲れ様！後で卵焼きたべりゆ？」

加賀に遅れながらも叢雲の肩を支え、にこやかに言うのは瑞鳳と呼ばれる艦娘だ。

「…相変わらずね、二人は」

叢雲はそう言うど静かに目を閉じてしまった。化け物との死闘を今までほぼ一人で引き受けていたのだ、その重圧を想像すると加賀たちは今しがた眠りについた艦娘に尊敬の念を送らずにはいられなかった。

「瑞鳳は叢雲を安全なところへ退避させなさい。ここは私が引き受けます」  
「…了解しました」

加賀の言葉に頷くと瑞鳳は叢雲を背負い、その場からの撤退を試みる。

だが化け物は爆撃によって舞い上がった黒煙の中から躍り出てくると、瑞鳳と叢雲を目掛けて突っ込んでいく。

「…させません」

加賀が手を天高く上げると、航空機が一斉に化け物へと向かう。そして瑞鳳たちを押し潰そうとする巨体に容赦なく銃弾や砲弾の雨が注ぎ込むと化け物は大きく仰け反った。

だが加賀の追撃は止まらない。

今しがた攻撃を行った航空部隊とは別の部隊を空中に待機させていたようだ…鋼の鎧に隠されていた腹が露になった瞬間、加賀は掲げていた手を振り下ろす。

すると待機していた航空機は急降下しながら化け物の懐へと攻撃を開始した。

「オオオオオオオオオオオオツツツ!!!」

化け物の体から炎が上がる。

高熱によって焼け爛れてしまったのだろうか、鉄の装甲が溶けだし、地面にポタポタと溶解した鐵が落ち始めている。

それを見た加賀が一言。

「…後はお願いしますよ、大和さん」

そして加賀が敵に背を向けた瞬間、大きな砲声が聞こえたかと思えば、辺りに爆音が響き渡る。

…大炎上する局軀の後ろには、自身の砲門から白煙を上げながらにこやかに笑う艦娘



…思い出した。思い出したんだよ、全部。

僕の体はどうなった？煙でよく見えないんだ…。

それなのに導かれるように僕の体は進んでいく。

体のあちらこちらが痛い。痛い痛い痛い。

僕は思い出した。全て思い出した。

…思えば、あの鎮守府へ配属されたのが僕の運の尽きだったな。姉貴がいたのは嬉しかったけどさ。

人間が最悪だった。

僕は、思い出した。

あの人間を殺して…：…それから僕は…。

ぼくは、おもいだした。

たくさんの命を奪った。

だけど悲しくなんてなかった。

むしろ高揚感があった。楽しかった。

だけどさ…ある時。感じたんだ。

僕の背中に触れる暖かい感じ。感触とかじやなくて、心に直接届くようなもの。懐かしい…本当に懐かしい気持ち。

…姉貴。

だけど、それを忘れてしまった。

一度ならず二度も…。

僕の今の醜い姿を見たら、姉貴はどう思うかな？

僕のこと分かってくれるかな？

私は砲を構えている。

歯を食い縛りながら、砲を構えている。

震える足で立ちながら、砲を構えている。



「おおおおおおおおおおおつ!!!」  
生きるために。

「おおおおおおおおおつ!!!」  
生き残るために!

「おおおおおおおつ!!!」

私は持てる力全てを目の前の敵にぶつけた。

煙で何も見えなくなる。

でも優しい風が吹いて、その煙がどこかへ消えてしまうと私の目の前には大きな体が静かに横たわっていた。

過ぎ去った脅威。私はそのまま腰を抜かす。

私は後ろから誰かに抱きつかれた。

だが私は後ろを振り返ることもせず、震える足を必死で手でさする。

そうこうしている内にまた見知らぬ艦娘が二人、血相を変えてこちらに駆け寄ってきた。

そのまま私は肩を支えながら、その場を後にする。

「よくやったわね、神風。お手柄よ」

弓を携えた艦娘が私にそう言う。

なんで私の名前を知っているんだろう……そんな疑問が湧き起こるが、ドツと来た疲労感に意識が遠のく。

そんな時だ。

地面に突っ伏した巨大な体が一瞬動いたかと思えば、開かれた口から何かが聞こえる。

「ア……………ネ……………キ……………」

咆哮でもない。断末魔でもない。微かな弱々しい声。

何故だか分からないけど……私は懐かしさを感じた。

「まだ生きていたのですね。……私が後処理をしておきますから、加賀さんたちはその娘たちを海軍へお願いします」

一人の艦娘がその場にとどまり、私たちは弓を携えた加賀さんという艦娘に連れられるままその場を後にする。

……振り返れば、力なく横たわる黒い塊。

私はそれから視線を外すと、目を閉じた。

そしてしばらくして大きな爆発音が轟いた。

そこで私は懐かしい声に囁かれたような気がしたが、意識はその爆発音を合図に遠の

いていった。

元気でね、  
姉貴。

## 夜明け

「とりあえず叢雲も大和も明日には復帰出来るって！顔色も悪くなかったし…ま、叢雲は空の要塞が援軍に駆け付けてくれなかったらヤバかったって愚痴ってたけどねえ…」

そう言いながら目を細める北上。

そして彼女の視線の先には、憂いを帯びた顔を覗かせながらも、悠然と椅子に腰を掛けた軍服の男が一人。

北上の言葉を最後にお互いに黙ってしまった両者だったが、唐突に軍服の男は言った。

「…敵の戦力を見誤っていたのは私のミスだ。そしてその些細なミスで叢雲と大和を危険に曝したことにお前が怒っているのも分かる。…以前大和が戦争の本質について独自の見解を述べていたな。結局、お前たちはその場で反論することはなかったが…内心納得がいていないというのも分かる。だがな、北上。六艦が海軍本部つまりは『ZEU S』から全機出撃した場合。当然ここは手薄になるわけだ…そして敵がそれに突け込んできたらどうする？六艦でさえ手を焼く相手を人間の兵士と艦娘だけで凌げると思うか？…答えは無理だ。まず間違いなくここは壊滅する。だからお前たち全員を…」

「…阿野つちらしくない！」

北上が大声を張り上げたことで、男の言葉は遮られ最後まで語られることはなかった。

突然の叫びに目を丸くする阿野。だがそんな彼にまるで言い聞かせるように、北上は言葉を続けた。

「…あたし達がどうしてもして阿野つちに付いていくのか、ちゃんと考えたことある？」

「……」

「最近の阿野つちはさ…縛られているような、自由を奪われているような…見ていて息苦しいんだよねえ、なんだか。もちろん阿野つちが海軍本部を大事に思う気持ちも分かるけど…あたし達六艦が付いていききたいと思ってるのはさ、無鉄砲で向こう見ずな…筋肉バカなんだよねえ」

「…そう、か」

「うん、少なくともあたしはそう」

北上はそこまで言うのと静かに息を吐いて口元を緩めた。そして北上の言葉に対して、歯切れの悪い彼に「ま、阿野つちがそう言うならしょうがないのかもしれないけどさ…」と小さく笑いながら呟くと、手をヒラヒラさせながら出ていってしまった。静かに閉まる部屋のドア。

「このままだとただの筋肉ダルマだよ〜!」

…と思えば、彼女は今しがた閉めた扉を半分ほど開け、顔だけ覗かせながらそれだけ言うと、今度こそ部屋を後にしたようだ。

遠ざかっていく足音が阿野の耳に聞こえた。

そしてその言葉を向けられた彼は、自身の体をチラリと眺めて笑みを浮かべると、静かに呟いた。

「…ありがとうな、北上」

「阿野さん! すごいことが分かったんですよ!」

北上が去ってからしばらくして、何か急いでいたのだろうか…私の元を息を切らした青葉が訪ねてきた。そして私が声を掛ける間もなく、上気させた顔で機関銃のように彼女は話始めた。

「…三日前のPMT襲撃に於いて、叢雲さん達が討ち取った怪物なんですが…その正体が分かったんですよ! 技術班の皆さんが徹夜で頑張ってくれたみたいで!」

「…!」

「かなり装甲が硬かったようで…当初解剖は絶望的だったみたいなのですが、驚くこと

に！思い切った技術班の一人が怪物の口腔内に入って解剖を試みたみたいなんです！  
そしたら…硬い表面の皮膚とは打って変わって、内部は軟らかかったようで、口腔内からあつという間に解体が進んだとか!!そして重要なのは、ここからなんです！怪物の所謂心臓部分と言うのでしょうか…中心部にまるで生き物の血管のような管で縛り付けられた艦娘の遺体があつたとか！そしてその遺体を回収して解析したところ…：…駆逐艦松風ということが判明したそうなのです!!」

「松風というと…行方不明になっていたあの艦娘か？」

「そうです！解析データが本部のデータベースにあつたものと合致したみたいで…」  
興奮気味に語る青葉。

そんな彼女の言葉を聞きながらも、私の頭は別のことを考えていた。

松風…後に彼女は黒い艦娘と判明したわけだが、いったい何故PMTを狙ったのだろうか？

軍の流通機関をストップさせ、各鎮守府への補給ラインを断つたのだろうか。確かに供給が停止すれば、各鎮守府の戦力は徐々に減退、弱体化を免れないだろう。

だがなぜ？なぜ今更？

PMTは比較的歴史の浅い、新設の機関だ。

それこそ元々あつた機関をわざわざ一新してまで作つた機関である。おそらく松風

はPMT開設当初からその身をPMTに置いていたはずだ。

ならば、なぜPMTをすぐに壊滅させなかった？

：今ところ、黒い艦娘は皆一様に改造を施されているということだが、その時は改造を受けていなかったということか？

なるほど、データを登録する際に深海棲艦のそれを持つ黒い艦娘であればすぐに分かるというものだ。だが特にそのような報告は入っていない。つまり改造を受けたのはPMTに配属されてからしばらくして…。

いや、おかしいな。

だとすれば、松風が一時的にでも行方を眩ますことがあつたはずだ。だがPMTからはそのような報告は入っていない。仮に例の鎮守府の前任が黒幕だとして、PMT新設時には、既に彼の行方が分かっていたのだから、どこか別の場所、例の鎮守府以外の場で松風を改造したと考えるべきなのだろうが…。

配送に向かった軍の職員が一向に帰ってこなかったら、配送先で何かあつたと考えるのが妥当ではないか？

ましてやPMTは軍の機関なのだ。どんな小さな異常でも敏感に反応すべきなのだが…。

改造にはあまり時間を要さないのか？

技術班からの話によれば、黒い艦娘は相当手の込んだ改造が施されているようだ。

それを時間を掛けずに行つたというのは信じ難いが、仮にそうだと考えても、改造を受けた松風がPMTに所属していて、PMTの方では何も気が付くことがなかったというのか。いや、それだけではない。松風はPMTを襲撃する前に例の鎮守府を襲つていたではないか。

つまり時系列的には、PMTを襲撃するタイミングは十分にあつたはずで…。

PMTは本当に何も知らなかったのか？

私の中に疑問が次々と浮かび上がる。

少し話が変わるが、PMTの長に就いた者も今まで海軍では見聞きしたことのないような人物だった。新機関に素性のよく分からぬ者を置くという判断。

それ故、海軍内部でも不信感を募らせる者も少なくなかつたのだが…。何かを隠蔽していた？

PMTは黒い艦娘と繋がりがあある？

そして今になってPMTが襲撃されたのは、軍の流通を止める為ではなく、別の理由？

だが真相は闇の中だ。まるで口封じと言わんばかりの事態。死人に口なし。先の襲撃で、PMTの職員は全滅しているのだ。艦娘を一人保護したと聞いてはいるが。

…全て私の取り越し苦労であればいいのだがな。

そんなことを考えていると、私はふと鋭い視線を感じてそちらを見やる。

するとそこには、頬を膨らました青葉がいた。

「…聞いてましたか？」

…どうやらもうしばらくは、青葉の長い話に付き合わないといけないようだな。

事態は深刻だ。

PMTから襲撃の一報を受け、海軍本部は救援部隊を直ぐ様送ったが、その救援部隊もPMTの地を踏むことなく全滅。遅れて叢雲と大和をPMTに向かわせたが、結局はPMTの完全崩壊で終わってしまった。

ふと窓に目をやれば、すっかり外は闇の世界。

まるで今の暗雲立ち込める海軍を示すかのように、暗い世界がどこまでも広がっていた。

私は今日北上と青葉に言われたことを思い出しながら、少し早めの就寝をとろうかと寝台に横になっていた。

そして目を閉じようとしたその時。

「…遅くに失礼致します！」

ノックされた扉はすぐに開けられ、一人の男が入室と共に敬礼をした。

まさか黒い艦娘の襲撃かと慌てて身を起こした私だったが、どうやらそういった類いのものではないらしい。

そして話を聞くに、どうやら素性の分からぬ者が私に面会を求めているようなのだ。

「ただ今、青葉殿が対応して下さっています」

ふむ。青葉が対応してくれているのか。

この時間帯に私…ひいては海軍本部を訪ねて来るなど怪しさが募るというもの。

なにせ黒い艦娘の黒幕は、元提督謂わば海軍の身内だ。警戒するのが…。

「阿野さん！お客さんですよ！」

…どうやら。

私はまだ眠れないということを知ると、その訪問者を迎え入れるべく寝台を離れた。

夜遅く、私の元を訪ねてきたのは…あの青年だった。

部屋の扉が開かれ、青葉と共に彼が入ってきたのを見た時、私は思わず目を見開いて

しまった。

そして驚いた。

お世辞にも提督とは思えないような格好で、彼は現れたのだから。護衛の艦娘も付かず、何かを持っているわけでもない。裸一貫というわけではないが、身に纏う衣服のみでの登場。しかもその衣服でさえ所々汚れ、ひどいところは破けてしまっている。当然、一目見れば門前払いされてもおかしくない状態だ。青葉が彼を知っていたからこそ、ここへ来ることが出来たというもの。

そして彼の顔は、ひどく疲れていた。

それでも彼はフラフラとした足取りで私に近付いて来ると、最後の力を振り絞らんとばかりに語ったのだ。

彼の鎮守府で起きたこと、その全てを。

彼の体調を考慮し、話は後日にしようとして私や青葉が言っても彼は首を横に振った。そして彼は話続けたのだ。何度も何度も口ごもりながら、懸命に話す彼にいつしか私は引き込まれていた。

「僕は本当は提督じゃないんです」

疲労の色が隠せない彼の表情が悲壮感でいっぱいになった時、私は胸に込み上げてくるものを感じた。それはいつしか私が忘れてしまったようなものを思い起こさせる位の強さがあった。

そして彼は、涙や鼻水で顔をグシャグシャにしながらも話続けたのだ。ようやく話終えたのか、彼の言葉が止まる。

それを見た青葉が彼を寝台へと連れていこうとしたのを私は制した。青葉は驚きの表情で私の顔を見ていたが、どうしても…今、今この時に聞いておきたい、いや聞かなければならないという想いに駆られ、私は彼の目を見据えるとハッキリとした声で彼に尋ねたのだ。

「…それで君はどうしたいんだ？」

私の言葉に、青葉の表情が驚きから怒りに変わったのを感じたが、私はその答えを絶対に聞き漏らしてはならないと耳を澄ます。

そして彼は、私の問い掛けに一瞬目を伏せたようだったが、すぐに私の目を力強く見つめると、覚悟を決めたように言ったのだ。

「大事な人たちを助けにいきます」

## 反撃の狼煙

次々に移り変わる景色。

車窓から見える眺めの変わり様は激しいものだ。そして朝の日差しが目眩しい。

小刻みに揺れる車内で思うのは、大切な人たちのこと。ふと視線を自分の手元に移す。震えている。だがそれは車内が揺れているからではないのだろう。

…恐れ、いったい何に対する恐れだろうか。いや、もしくは武者震いのようなものだろうか。

自分でさえ分からない、定義出来ない思い。

そんな混沌を心に抱えたまま、僕の体は海を漂う漂流物のように外から加えられる力にされるがまま。

先程まで舗装された道を走っていたのに、どうやらここからはデコボコ道が続くようだ。

でもそんな悪路でさえ、僕には懐かしい。

「…大丈夫か？」

ガソリンの匂いが開け放たれた窓から車内に入り込んでくる。そしてエンジン音だ

けが延々と唸っている車内に突如、明瞭な声が聞こえた。その声の主を見れば、ハンドルをしっかりと握り締め、視線こそ前方を見据えているものの、その声色から僕を案じてくれていることは痛いほど分かった。

「はい、大丈夫です」

「…そうか」

その人は僕の返答に眉一つ動かさない。

ただ真つ直ぐに。ひたすら前だけを見つめている。

でもそれが、今の僕に心地よかったのは間違いない。

二日間に急に押し掛けた僕を受け入れ、話を聞いてくれたこの人はきつと優しい人なんだろう。思わず同性ながら尊敬の念を送らずにはいられなかった。

「阿野つちさく!!もつと緊張を和らげてあげられるようなましな声掛け出来ないの!?

あ、無理か。筋肉バカだもんねえ」

「ちよつと!?!もつとましな道は無いわけ!?!」

「運転中なんだ!話しかけないでくれ!」

………うん。たぶん。

というか、後ろ側の小窓から凄い文句言われているのだけれど、憧れの人が。

「君もさく、はつきり言っていていいからね?阿野つち、もつと気を遣えよって!」

「北上さん、あまり彼を弄らないであげてください。彼はこれから…」

「わかっているつてば。でも気を引き締めすぎんのも考えもんだよ」

小窓を隔てて聞こえる声。うーん。

今まで閉めていたから気にならなかつたけどさあ…後ろの娘たち騒がしいぞ。

とは言え、彼女たちも僕のワガママに付き合ってくれているんだよな。そう思うと僕は申し訳なく思った。

「阿野ちゃん、ラジオでもかけたらどうお？気分転換に最適じゃないかしら？」

「お、いいね〜！」

…うーん前言撤回。

なんか遠足気分だよね、この娘たち!?

「ボリウム上げときなさいよ？こっちの荷台部分に聞こえるくらいに！」

「あら、叢雲さん。ワガママばかり言っではいけませんよ？それに大和みたいにちゃん」と耳を澄ませば、音が小さかろうと聞こえるはずですよ？」

「いちいち突っ掛かってくるのね、アンタ!？」

ギャーギャー!!!

あの…阿野さん。この車、トラックでしたよね？荷台部分、上げられましたよね？こんなこと言っではいけないと思うんですけれど、荷台部分上げませんか？

「…全く。これから鎮守府を奪還、取り返しに行くっていうのに呑気な人たちね」

「まあまあ…加賀さん。六鐘と空の要塞共同での作戦です。仲間割れはご法度ですよ？」

「……そ、そうですよね！鳳翔さん！」

「あゝ！加賀さん顔真つ赤か！…とりあえず卵焼きたべりゆ？」

…上げましょうか、阿野さん？

「君の言いたいことはなんだかんだ分かるぞ」

…さつきからトラックの荷台を上げるレバーを掴もうとしては手を震わしている阿野さん。きつと色々葛藤しているんだろうな…。

そして阿野さんは気分を切り換えるためだろうか、カーラジオをつけた。

車内に軽快な音楽が響き渡る。

あ、この曲は…。

その曲に聞き覚えがあつた僕は、思わず目頭が熱くなるのを感じた。後ろの娘たちはそれに気が付いていないようだったが、隣にいた阿野さんは僕の表情の変化に気が付いたようだ。黙ってハンカチを渡してくれた。

懐かしい思い出が一気に蘇ってくる。

本当に短い間だったが、僕たちは友だちになれた。

でももう二度と。

彼女の替え歌を聞くことは出来ない。

もう二度と。文句を言いつつも何だかんだ手伝ってくれた彼女に礼を言うことも出来ない。

もう二度と。時には凜とした顔で、時には優しい顔で見守ってくれた彼女に提督として認めてもらうことは出来ない。

僕はそんな『二度と出来ない』をもう二度と味わいたくはないんだ。それだけじゃない。仲良くなることはおろか、しっかりと話すことさえ出来なかつた娘たちがいるんだ。仲良くなる前に終わりだなんて、絶対に御免だ。

カーラジオから流れていた懐かしい曲が全く知らない曲に変わった。

でも僕は感じたんだ。これから僕がやろうとしていることを…見えないところで彼女たちはそつと背中を押してくれているって…！

「…いよいよだ。気を引き締めろ！」

阿野さんの鬼気迫る声に、僕は湿った自分の拳をこれでもかと握り締める。そして衝撃に備えることにした。

…思えば、この奪還作戦は付け焼き刃、思い付きのような作戦。

まさにぶつつけ本番というやつだ。

でも。僕はやるしかなかった。

「ふぁーあ…陽炎ちゃん、おはよう」

「あら、睦月？おはよう」

鎮守府の門にはまるで何かを警戒しているのか、見張りのように立たされた艦娘が二人、まだまだ早朝と言われるような時間帯で眠気眼を擦ったり、欠伸をしながら背筋を伸ばしたりしているようだ。

そして不意に陽炎が睦月に話しかける。

「…榛名さんも神経質よねえ。鎮守府の歩哨を怠るな、だなんて…」

「うん、そうだね。はあ、でも…みんなバラバラになっちゃったね。川内さん達は地下牢に幽閉されちゃうし…赤城さんたちは居なくなっちゃうし…」

「そう言えば、睦月は元々反長門……いえ、そんなことを言ったら長門さんに失礼ね。榛名さんの会合には呼ばれていなかったもんね。そりゃ混乱するわ、私も困惑してるし」

「うん、あれよあれよと話が進んで……でもみんなはバラバラで……もう何が正しいのか分からなくなつて……。それで赤城さんを頼ろうとしたんだけど、いつの間にか居なくなつちやつて……それで」

「睦月みたいな中立派が一気に榛名さんの指揮下に入ったわけか」

「……うん」

陽炎は思っていた。

睦月の発言からも分かるように、長門という支柱を失った鎮守府……そこに所属する艦娘の大多数が榛名の宣言の下、反人間へと舵を切った。もちろん陽炎もそれに従う一人なのだが、今は亡き長門や陸奥と同じくらいこの鎮守府に長年身を置いてきた艦娘……赤城や天龍、木曾の姿が一切見えないのだ。彼女たちのような古兵がこの鎮守府を見限つたとは到底思えないのだが……いや、それだけではない。艦種を問わず、榛名の宣言以来この鎮守府から姿を消した者が何人かいるようだった。

そして最初こそ反人間で一致団結していた自分たちだったが、榛名がその後何かをするということもなく、てつきりすぐにでも実力行使に移るだろうと思っていた私達は面喰らつたのだ。

唯一私達に任されたのは、今やっている交代制の歩哨くらいだろう。まだ彼女の宣言からあまり日が経ったわけではないが、あの日から私達は海へ出ることも禁止されている。また真偽は不明だが、数日前に素性の知らぬ艦娘をこの鎮守府に引き入れたという噂も出ている。戦力を拡大したということなのだろうか…だが何故私たちに何の報告も無いのだろうか？

困惑を隠せないのが本音だ。

「まあ、やるしかないのよ」

いったい何をやるというのか。

反人間と言つても、具体的に何をすればいいのかなんて私には思い付かなかった。だけど呟くように言った、まるで自分の判断が間違っていたと絶対に認めない…と言った具合に。

「…なんか聞こえない？」

そんなことを考えていると、耳元に手を充てた睦月が訝しげな顔で私にそう言う。

…確かに聞こえる。

唸るような音。機械音。

それがエンジン音だと分かった時、私と睦月は顔を合わせて疑問を口にしていった。

…珍しい。普段は風に揺られた木々のざわめきしか聞こえないのに。

そして私は目を見開いた。

目が一点だけを見つめてしまっているのです、隣にいる睦月の様子は確認できないのだがおそらく私と同じような表情なのだろう。

：最初こそ胡麻粒のように小さかった黒い点がどんどんとその形を認識出来るくらい大きさに変わっていく。

徐々に巨大化するそれに比例するようにエンジン音も大きくなるのだ。

「ま、まさか突っ込んでこないよね？」

ようやく見れた睦月の表情はひきつっているようだったが、きっと私も同じような顔をしているのだろう。

とてつもない鳴動。

地鳴りのような轟音を響かせながら、鉄の塊が鎮守府の門へと突っ込んでくる。クラクションが耳にうるさい。

そう言えば、前にもこんなことが……。

「ぎ、艤装を……！」

震える私の声。

何とかしなければという思いとは裏腹に後退りしてしまう足。荒くなる呼吸。

「無理！逃げるにやしい!!！」

結局、私は艤装を展開することも出来ず……睦月に手を引かれるまま、鎮守府の門から離れることだけで精一杯だった。勢いを殺すことなく迫る車輛に、思わず私たちはその場にしゃがみこむ。そして凄まじい風圧が私たちの目と鼻の先を駆け抜けていった。

そして間もなくして。  
無惨にも。

鎮守府の門は、数秒前に私たちの目の前を走り去っていったトラックによつて吹っ飛ばされてしまった。

## 川内の想い3

わき上がるのは怒りの声。

それは私たち、つまりは艦娘を虐げる者たちへの宣戦布告のようなものだろう。

どこからともなく聞こえた「人間を倒せ！」という叫び声は、強い憎しみを孕んでいたように私は感じた。

壇上から流れるように出てくる言葉。

それに皆は魅了されていた、突き動かされた。

鳴動と共に激震。

波のように押し寄せる憎悪に私は怖くなった。

心臓の鼓動が早くなり、息苦しい。

血走った目がまるで私の心を見透かすように爛々と煌めく。口角泡を飛ばしながら、人間への罵詈雑言で止まらなくなった口が私の鼓膜を激しく揺さぶる。

汗で湿った手が無意識の内に、隣にいた妹たちの手を握っていた。

私と同じように湿った手。

熱がこもり、痙攣しているかのように小刻みに震えている小さな手。

妹たちの顔を見れば、潤んだ瞳が私の心を捉えて離さない。微かに動いている口が何かを伝えようとしているのだけれど、熱狂する声に遮られて届かない。

熱を帯びているのか、真っ赤に染まった顔が現在起きている異様さを物語っている。怖い。

次第に高まる憎悪の声。

それが最高潮に達したと思われた時、私たちはその場で抱き合つて震え上がつていった。

怖い。怖い怖い怖い。

でも……。

「まずはこの鎮守府にいる人間にそれを教えてあげましょう」

その言葉は。

ざわめきの中でもはつきりと耳に、いや直接脳に届いたそれは不思議と私の心から一切の怖れを払拭した。

そしてひとりで動き出す体。

群衆を掻き分け、白い目で見られようと突き進む。

腕を捕まれたような気もしたが、乱暴に振り払う。

流れに逆らうように、ただ一心不乱に。

私の体は、さも正論と言わんばかりに暴論を振りかざす壇上の者へと向かつて突進する。

そして間近で、目と鼻の先で。

この異常事態を引き起こした煽動者を目に捉えた時、私はその人物と目が合った。顔は笑っているのに、体の底から凍えてしまうような目が私を貫く。

きつと昔の私なら……いや、昔の私であれば……そもそもこんなことはしないでだろう。むしろ今、隣でいきり立っている娘たちのように私も人間への憎悪を爆発させていたかもしれない。

でも私は知ったんだ、触れたんだ。

彼の……人の優しさに。

気が付かされたんだ。

アイツに。

きつと今、私は笑っているのだろう。

口角が上がっているのが分かる。心の底から手足の指先へと温かい気持ち広がっていきのが分かる。

「おらあああああああ!!!」

私は壇上によじ登ると、何も知らない……知ることの出来なかつた者の腹部目掛けて

突っ込んだ。

そしてそのまま彼女を押しさえ込む。

周りからは喧騒に交じって、悲鳴や驚きの声が聞こえたような気もしたが、今の私にはそんなことどうでもよかった。

お節介って言われてもいい。

ウザイって思われてもいい。

…もう会えなくても、いい。

私は…私のするべきことをするだけだ。

川内ちゃんが。

川内ちゃんが那珂ちゃんたちの手を振りほどいて、離れて行ってしまった時。

隣にいた神通ちゃんは悲しそうな顔を一瞬だけ覗かせたけど、きつと那珂ちゃんも一緒だよ。

なんだか寂しいような、切ないような気持ちでいっぱいになっちゃったんだよ。

でもね。

群衆掻き分け前進する川内ちゃんは、恐れを知らない戦士のような振る舞いは、間違  
いなく那珂ちゃんたちの心に光を灯したんだよ？

だからさ。

那珂ちゃんがとびきりのスマイルを神通ちゃんに向けたら、神通ちゃんも恥ずかしが  
りながらも笑ってくれたんだ。

ずっと前から打ち合わせしてたみたいに、神通ちゃんとは息がピッタリだったんだ。  
それに。

那珂ちゃんの心には何故だか……ううん、必然だよ？

あの娘の声が届いたんだ。

「きつと大丈夫」

そんなこと言われちゃったらさ、那珂ちゃんも頑張るつきやないよ？

なんてったって那珂ちゃんはあの娘のダンスの先生なんだもん！ここでへこたれて  
たら示しがつかないよね♪

「神通ちゃん！」

「那珂ちゃん！」

那珂ちゃんと神通ちゃんの声がぴったり合わさった時、お互いの体は、一足先を行く  
恋患いのお姉ちゃんの方へと向かっていたんだ。

「あーあ、派手にやっってるわね〜!!」

ざわめきの中であたしが見たのは、この騒動の発端となった口巧者に夜戦バカが飛び掛かる瞬間だった。そしてそれから少し遅れて、夜戦バカの妹たちも壇上へとなだれ込んでいった。

周りを見る。

どうやら一度統制されかけた空気に、僅かながらの誤りが生じたようだ。

まだ人間への恨み言がこの喧騒の大半を占めているが、困惑の声もチラホラ挙がり始めていた。

思わず。無意識の内にとめ息をついてしまった。

そして口からは、誰に聞かせるわけでもなく独り言。

「あたしも焼きが回ったわね」

アンタたちが側で守ってあげなきやいけないのに、なんで特攻隊長みたいなことをするのかしら？

ふと、そんなことを思う。

それからあたしは隣にいた雲龍と加古に目配せをしたのだが、やはり二人も大体同じようなことを思っていたのだろう：肩を竦めながらも自分たちのやることをやろうと動き始めていた。

「深海棲艦が攻めてくるぞー！母港へ走れー！」

…加古が唐突に叫ぶ。

繰り返し繰り返し、彼女は叫んでいた。

なるほど、追っ手は少ない方がいいわよね。

考えたわね、加古。

「ほーら母港へ走れー！」

彼女は依然として叫びながら母港の方へと走る。

…少々棒読みの台詞に、訝しげな表情で彼女を見つめる者も多かったのだが、所謂彼女を慕う一定層の娘たちがいた為、小規模ながらも中庭から母港へと急ぐ集団が瞬く間に出来あがった。

そして離れていく集団を尻目に、あたしも走り出した。

壇上の口達者を救うべく動き出した艦娘たち。

夜戦バカ共を飲み込むような大きな波に向かって、あたしは走り出した。

「乗るつきやないわよね？このビックウエーブに！」

「あんなの……あんなのワタシの知る榛名、妹じゃナイヨオ……」

金剛の弱々しい声に、私はどんな顔で、どんな言葉を彼女に掛ければいいのか分からなかった。

いつものようにおどける時でもない。

それになんだろう……今のこの状況はあまり居心地が良いとは思えない。まるで上から押さえつけられているような圧を感じる。とてもじゃないが、息苦しい。

でも川内たちが壇上で取っ組み合いを始めて、どうして彼女たちがそんな暴挙とも思われるようなことをしているのか分かった私は、思わず足が前に出る。

一步。そしてまた一步。

歩みから駆け足へ。

そして不意に肩を掴まれ、後ろを振り返れば、先程まで泣きそうな顔をしていた人物

が肩で息をしながら立っていた。

「…早すぎるネー！ぜかまし」

いつもの陽気な感じが鳴りを潜めてしまっている。

やはり無理をしているのだろう、だけれど彼女は穏やかな笑みを浮かべると、私に言った。

「川内たちがあそこにいるってことは、今彼をガードする娘が居ないってことネ！この状況で出口まで彼一人で行くのはさすがに無理ヨー。…つまりリードしてあげる艦娘が必要になりマース。それは、ぜかまし。アナタが適任ネー！」

「・・・」

確かにそうだ。

金剛の言うことは至極全うだ。

本来は川内たちがやるべきことなんだろうけど、今彼女たちは壇上にいる。

つまり川内たちの役目を負うべき者も必要になってくるといふ金剛の意見は納得がいく。

…だけど。

金剛は…。

金剛はそんな顔をして何をする気なの？

「大丈夫ネ」なんて言わないでよ。

無理をして笑わないでよ。

私は胸が苦しかった。

一刻も早く向かわなければいけないところがあるのに、足が震えて動かない。

さつきまでは簡単に動いたのに。

そんな硬直してしまった私に、金剛は努めて優しい声で言った。

「行つてクダサーイ。そしてメイビー、ウウン絶対にまた会いまショウ！ラストにはフェスティバルが待ってマース！」

震えているけど。

震えているけど、私の迷いを払うには十分な心強い声。

私は彼女の言葉に頷くと、踵を返す。

すぐ！

すぐに戻ってくるから!!!

私は自分の足に全神経を集中させ、力一杯踏み出した。

ぜかましの背中がどんどん小さくなり、遂にその姿が確認出来なくなった時。ワタシ

は震える足を何度も何度も力一杯叩くと、その場に踞った。

本当は怖かった。

島風に隣にいて貰いたかった。

でも島風が壇上に向かって歩み出した時、ワタシは思ってたんだ。彼女がやろうとしていること：それは駆逐艦である彼女には荷が重すぎるって。あの黒い波に華奢な体が飲み込まれたら、ひとたまりもないって。

ワタシは震える足を懸命に動かした。

それともう一つ。

確かめなければならぬ。

最愛の妹。

妹だった存在。

でもそれは妹の皮を被った何か別の存在だと、ワタシは気が付いた。だがだからと言つて、彼女を放つておくわけにはいかない。

彼女に引導を渡すのだとしたら：それはきつと。

雑踏が煩わしい。多勢に無勢。集団が暴走する。

島風が居なくなつた今、地に頭を付けたワタシに掛かる声は何もない。

いや。

ダメだ。

立ち上がらなきや！

立って、ちゃんと守るんだ！

自分を！友だちを！妹を！

約束を!!!

ワタシはグツと足に力を込め、立ち上がる。

そして頬を叩くと、もはや乱闘状態になっている壇上を見据えた。そして思いっきり走り出す。

…この騒動の元凶に引導を渡すのは？

「オフコース！もちろんワタシね!!」

…どうやって？話し合いで？心を通わせて？

答えは…NO!!!

ワタシは走りながら、両手の拳を突き合わせると大声で言った。  
「拳で!!!」

## 地下牢 8

ほんのりと。

ほんのりと血生臭さが漂う牢の中で、私は膝を抱え込むようにして静かに座っていた。

「もう一回、アイツと競争したいな……」

所々綻んでしまったタイルカーペットを優しく撫でるように触ると、思わず私は呟いた。

そして体の芯まで冷えてしまいそうな冷たさを臀部で感じながら、そのまま私は眼を瞑った。

乱暴に引き裂かれた壁紙、踏み荒らされたタイルカーペット。

牢の中を見渡すのはもう飽きた。

……というよりも私の大切な思い出が、まるで夢だったと言わんばかりに、無惨にも牢の片隅に放り出され、朽ちていくのをただ私が見たくなかった。

辛うじて、彼との思い出が残っているのだとすれば、今にも消えかかってしまいそうな弱々しい光で私を照らしているこの電球くらいだろうか。

あれから何日経ったんだろう？

朝も夜もない、ましてや時計なんてないこの地下牢。

時間の感覚なんて既に麻痺している。

そして不思議なもので時間の感覚が分からなくなると、自分が死んでいるかのような錯覚に陥るのだ。

実はもう、自分は朽ち果ててしまっているのかもしれない：そんな感覚に囚われる。でも思い出すのだ、彼のことを。

幸いにも私は彼のことを思い出す度に、「ああ、まだ私は生きているんだな」と感じることが出来た。

生きたいと思うことが出来た。

そして切に願う。

私と共に捕らえられた者たちが、生きる意志を捨てていないことを。

：そんなことを考えていけば、甲高い金属音が一つ鳴り響いた。かと思えば、反響するかのように次々と鳴り響く金属音。そしてその音を合図に私は目を開けると牢を強く殴り付け、同じような音を響かせる。

いつからか：誰かが狙って始めたわけでもない、偶然の産物なのだろう。だが今では私の希望となっているこの金属音はきつと捕らえられた仲間たちが響かせているもの

なのだろう。

もちろん確証はない。それでも…呼応するように響くその音が…確かに私が最初に抱いていた孤独感を払拭したのは間違いない。

次第に小さくなる残響音。

その音に静かに耳を澄ましながら、私は再びやって来る静けさに身を預けることにした。

「…野分さん、川内さんたちの様子はどうでしたか？」

重々しい空気が漂い、大きく雰囲気を変えた一室。その部屋は鎮守府の中心に位置し

ている。そしてそこで長い間指揮を執り、所属する艦娘たちの善き指針となっていた者  
はつい数日前にその命を奪われた。

「ただいま」と言うことはなくても…。

任務を終え、母港へと帰投した時に得る安心感。

そしてその思いを抱きながら向かうのは、凜とした表情を一切崩さずに、だが優しい  
声色で「お帰り」と言ってくれる艦娘の元。

憩いの場所とまでは言わないが、常に死が付きまとう者たちにとってその場所は、確  
かに心を落ち着ける場所であった。

だがとある時期を境に、その場を訪れる者は激減した。

もちろん、出撃任務がないのでその場を訪れる契機が減るのも当然と言えば当然のこ  
となのだが、その場に君臨する者が変わってしまったということがその理由の一端を  
担っているのは間違いない。

そして新たな指針：いや、指針などどうして言えるものか？支配者という言葉が相応  
しい。

外の様子を執務室の窓辺から静かに眺めていた艦娘は、いつもの笑みを浮かべなが  
ら、壁に寄り掛かっていた銀髪の少女に問い掛けた。

その問いに銀髪の彼女は伏せていた顔を上げ、凜とした表情を覗かせると、落ち着い

た口調で答えた。

「…相変わらずだ。それこそ何故あのような暴挙に出たのかが分からないくらいに大人しくしている。脱獄するような素振りも見られないが…：貴様が何か吹き込んだのか？」

「そうですか…」

銀髪の彼女にじーつと見つめられながらも、その笑みが消えることはない。そして「貴様の考えていることは分からん」と呟くように言うと、今まで視線を投げ掛けていた者は静かに部屋を出ていった。

そして依然として怪しげな笑みを浮かべる彼女以外に誰も居なくなつた執務室。

「その場の優勢勢力…：大衆に迎合するような烏合の衆よりも余程戦力になると榛名は思うのですがね。…もし仮にその強い意志や情熱を一気に反転させることが出来れば、マザーの理想にまた一歩近づくことが出来るでしょう…」

彼女はポツリと呟いた。

それと同時に、ビリビリに破かれた海図の上で小型の機械が小刻みに振動した。

それを手に取ると、榛名は耳に充てる。

「…これはこれはマザー。…：ええ、言われた通りに生け捕りにしていますよ…：…：はい」

不気味な嗤い声と共に彼女は話続けた。

まるですべてのことが見えざる手の上で滑稽に踊らされているのを嘲笑うかのよう  
に、何も知らずにただ流されていく大衆を侮るように……。

だが彼女、彼女たちはまだ知らないのだろう。

既に反撃の狼煙が上がり、会心の一撃がその懐に叩き込まれることになることを。

「睦月!!」

地面に力なく座り込んでいた睦月を抱き起こすようにすると、人間は血相を変えて彼  
女の名を呼んでいた。

そして隣に座っていた私のことも同じように名前を呼びながら抱き起こすと、人間は頭を下げて言ったのだ。

「ごめん!!」

突然の人間の謝罪に困惑を隠せない私たちだったが、人間が大袈裟なくらいの身振り手振りで説明することを要約するに、どうやら先程の暴走車輛はこの人間の仕業らしい。そしてどうしてそんな凶行に出たのかについても、一刻も早くそれを成し遂げたいこの人間は早口で私たちに話した。

「本当にごめん!!」

未だに震えている足が目の前の人間にバレないようにしながら、私は何度も私たちに頭を下げる者を睨み付けた。

「……今さらどの面さげて戻ってきたの?ここから逃げたかと思えばおめおめと帰ってくるなんて……バツカじゃないの!」

私の言葉を人間は黙って聞いていた。

ただ静かに、静かに聞いていた。そして何の反応を示さない人間に私は怒りを募らせ、殴り付けてやろうと拳を強く握り締める。

だけど……。

「……川内さんは地下牢にいるにや」

本当に消え入りそうな小さな声で。

私の隣にいた艦娘はそう言った。

「睦月!?!」

私は今日一番の困惑に思わず声が上がらずながら叫んだ。

「どういふこと!?!なんでそんなことを…!?!」

「…睦月は!!睦月は何も分からないし、人間は大ッ嫌いにや!!…だけど。だけど!!!」

私の怒鳴り声に似た叫びを意に介さず、むしろ遮らんと言わんばかりに、彼女は涙ながらに叫んだ。

そして彼女は…彼女は…彼女の涙で溢れた目でしつかりと人間…彼の目を捉えながら、必死に続けた。

「…川内さんたちは!川内さんたちは!大事な仲間にあ!!でも…その人たちを、その人たちをあの忌々しい場所に閉じ込めるなんて…この鎮守府で苦楽を共にしてきた娘なら…仲間なら、絶対にしないはずにや!」

そして目を乱暴に拭った彼女は「こつちにや!」と叫ぶと、人間の手を取って走り出した。

私はそれを…あの人間が睦月に手を引かれ、走り去っていくのをただ見つめていることしか出来なかった。

私と睦月…いや、もつと言えばこの鎮守府に関係してきた者すべて。一体どこで違えたのだろうか…そんな思いに私の全てが支配されていた。

「…動いたぞ！」

厳しい顔付きの中にどこか少年のようなあどけなさを伺わせながら、阿野はそう叫んだ。

そしてその顔を久々に見た彼の仲間たちは、これから始まるであろう大戦を前にして皆笑みを浮かべている。

「…叢雲、大和、加賀は私と共に来い！それ以外の者は彼を護衛せよ!!!」

「了解」

彼の指示を聞き、それぞれが迅速に動き出した。

小さな艦娘に手を引かれて、一足先に正面玄関の方へと走る人間を追い掛けていく者たち…彼女らの姿が鎮守府に吸い込まれていったのを確認すると、その場に留まった四人は大きく息を吐いた。

「…行つたわね」

唐突に叢雲が呟いたのを合図に、その場にいた者たちは艤装を展開し、身構える。臨戦体勢への移行。

そして大地を揺るがすような重圧を肌で感じながらも、阿野はトラツクの荷台に積んでいた機関銃を手につつと激しい殺気を放つ鎮守府の西館を睨み付けた。

—刹那。

西館の屋上部分から誰かが飛び降りた。

…かと思えば、着地点に大きな割れ目を作りながらもその者は悠然と立ち上がり、阿野たちのいる方向へと歩み寄ってきた。

そしてその者は大きな欠伸をするや否や…。

「…吾輩の眠りを妨げるなよ、小童？」

静かにそう呟いた。

そんな彼女に阿野は銃口を向けると、すぐさま引き金を引いた。

「戦闘開始だあ!!!」

そう叫びながら。

## 交戦そして崩壊

「きゃあ!？」

誰かが叫んだ。

耳をつんざくような衝突音。

そしてそれに続くようにして断続的な銃声が静かな鎮守府の朝に轟いた。歩哨に出ている者以外は、この事態が夢か現実かの区別さえ出来ぬまま、自分の寝台から飛び起きると状況を確認しようと部屋を飛び出す。

見れば廊下には、困惑した表情で右往左往しながら「何が起きたの!？」と叫ぶ者たちで溢れかえっている。

そして鳴動と共に、廊下の全ての窓ガラスが粉々に砕けて一気に吹き飛んだかと思えば、凄まじい風圧の熱風が吹き込んでくる。

「きゃあああああああああ!!！」

絶叫がこだまする。そして脳裏を過るのは前回の襲撃、あの時の悪夢が蘇る。

「もう長門さんは居ないのに…どうしよう!？」

「榛名さんは? 榛名さんはどうしたのツ!？」

「そ、そうだよ！榛名さんのところへ！」

硝子の破片が体に突き刺さった者が数名いるようだ。廊下が血の池と化す中、その場にいた者たちは動けなくなった仲間の肩を支えると、懸命にこの事態を打開しようとして歩き出した。

唯一の希望の名を念仏のように唱えながら、ただひたすらに歩いた。

そして絶望した。

「な、なんで……う？」

誰かがポツリと呟いた。

その場に居るべき艦娘は……唯一の希望は、跡形もなくその姿を消していた。

もぬけの殻となった執務室を目の前に、顔を青く染め上げた艦娘たちは静かに膝をつき、絶望した。

「おい！爆発が起きてるぞ!!」

天龍さんの怒声が目を閉じていた私を現実の世界へと引き戻す。そして黒煙がもうとうと上がる様子を木立の間から確認すると、私は驚きの声をあげた。

「どういうことだ、赤城？俺たちの鎮守府が攻撃を受けているじゃねえか!？」

私の驚きに応えるように、隣で血相を変えた天龍さんがそう叫んだ。そして厳しい顔付きで黒煙を眺めている。そしてその黒煙に交じって、次第に赤い光が明滅し始めたのだが、私には目の前で起きているこの現状を飲み込むことは出来なかった。

全くの想定外の事態。

：いや、そもそも長門さんが殺されたことを発端に始まったこの一連の出来事…その全てが想定外なのだ。

いつたい誰がこんなことを予想出来るだろうか。

確かに不穏な空気が鎮守府に流れていたのは赤城自身も知ってはいたが、僅かな期間でこんな……。

「…っおい！赤城！しっかりしろ!!」

天龍さんに肩を掴まれ、激しく揺さぶられる。

そして彼女の苛立った言葉を聞いて、私は気が付いた。

…このままでは皆が死んでしまう。

大きな爆発音と共に巨大な火柱までもが上がり始めている。そして耳を澄ませば、わずかに聞こえる絶叫。

気が付いた時には既に私は天龍さんに指示を出していた。

「加古さんと雲龍さん、摩耶さんたちを至急呼んできてください！…本来はもう少し時間を掛けてから潜入するはずでしたが、緊急事態と判断します！」

私の言葉を待っていましたと言わんばかりに彼女は力強く頷くと、樹海の奥深くで静かに反攻の時を待っている同志たちの元へ走っていった。

そして彼女の姿が樹林の中へと消えたのを確認すると、再び鎮守府の方を見据える。

この判断が吉と出るか、凶と出るか。

それは激しく流転するこの戦況に於いては分からない。

だが一つだけ。私は過ちを犯していたようだ。

先程、天龍さんを見送る私の横を一つの風が駆け抜けていった。その風を引き起こした、いや最早風となったと言ってもいいかもしれない存在を私は呼び止めることが出来なかった。

あまりの速さに横目で私とその姿を捉え、振り向いた時には、彼女は私の声が届かぬところまで行ってしまっていた。もちろん彼女がどんな面持ちでそんな真似をしたのか…その表情は何い知ることが出来なかつた。

だがほんの一瞬。私の横を通りすぎる時。

彼女は消え入るような声で一瞬だけ囁いたのだ。

「…行かなきゃ」

そんな小さな小さな呟きが私の心を捉えて離さない、私の脳内に反芻して消えない。そんな言葉を残して、彼女は行ってしまった。

「オラアアアアアアアアアアッ！」

阿野が構えた機関銃は、激しい発砲音を響かせながら弾丸をばら撒き続けていた。だが銃弾をもものもしないのか、何発もの弾丸で撃たれながらもその射撃の的となった者は呑気に欠伸をすると、笑みを溢した。

それならばと、彼が一頻り銃撃を行った頃合いに、槍を持った叢雲が接近戦を仕掛ける。だがその者は、自身に突かれた槍を手で掴むと、そのまま引つ張るようにして叢雲に肉薄した。そしてもう片方の手で叢雲の髪を掴んだかと思えば、一気に彼女を地面に叩きつける。

「…吾輩に接近戦を挑むとは、浅はかじやな」

「叢雲!!」

そして地に背を付けた叢雲の腹部を目掛け、追撃の一手を打とうとしている者に阿野は突貫した。

そして持てる力の限りを拳に込めると、それを敵の顔面に叩き込む。

だが痛みを感じたのは殴られた方ではなく、殴り付けた方のようだ。

「…ツ」

まるで鋼鉄の塊のように硬い。彼の拳には血が滲んでいた。だがその痛みを悠長に感じている暇はないようだ。

「…滑稽じゃな。人間風情が驕るなよ？」

するとその者は、彼の胸ぐらを乱暴に掴むと、腕に力を込め、勢いよく投擲した。

そしてそのまま放物線を描くようにして、彼の体は空を翔ると、鎮守府の窓ガラスに衝突した。粉々に砕け散る硝子音と共に鎮守府の廊下に叩き付けられた彼は呻き声を上げる。

「おのれええええええええ!!」

その一部始終を見ていた大和が怒りの咆哮をあげ、それと同時に大きな砲声が轟く。だが砲撃を軽い身のこなしで避け続ける敵。その状況に彼女は苛立ちを抑えられなかった。そして怒りに身を任せ、もつと近距離から砲撃を試みようとした彼女だったが、その肩は不意に掴まれる。そしていったい何事かと振り向く彼女の目が捉えたのは、睨み付けるような視線を投げ掛ける加賀の姿だった。

「…大和さん、落ち着いてください」

「………ツ！で、でも!!」

「敵は接近戦に長けているようです。無理は禁物ですよ?」

加賀の言うことは尤もだった。

砲撃に於いてその真価を發揮する大和。

たとえ遠方においてもその砲撃をまともに食らえば、間違いなく大きな損傷を与えることが出来る。それほどの火力を有しているのだ。それがわざわざ敵に肉薄する程の距離に迫る必要はない、むしろ格闘戦となれば、その長い砲塔が邪魔をして彼女は瞬く間に圧倒されてしまうことは火を見るより明らかだった。

「…それなら! どうすれば!」

狼狽える大和を尻目に、加賀は弓を構えると静かに矢を放った。そしてその矢が瞬く間にその姿を航空機の形に変えたかと思えば、日差しをそのメタリックな機体に反射させ、エンジン音を響かせると大空を縦横無尽に駆け巡る。

「弱点を…隙を探すんです。それがこの戦いを終わらせる唯一の手段です」

大和に言い聞かせるように加賀はそう呟くと、天高く挙げた手を勢いよく振り下ろした。それを合図と言わんばかりに、空を翔る航空機の一斉攻撃が敵に降り注ぐ。

激しい爆発音と共に火柱が上がる。

絶え間ない空爆に大和も、そして加賀でさえも吹き飛ばされそうになるが、必死で地面に食らい付く。

そしてようやく攻撃が止んだ時。

黒煙に乗じて、大和と加賀は地面に伏していた叢雲を抱え上げると、そのまま爆心地から距離を取った。

「…派手にやりすぎよ！私を殺す気!？」

叢雲のいつもの口調に大和も加賀も安堵した。

そして激しく立ち上る煙の中心地をキツと睨み付けると、叢雲は続けた。

「…あれは黒い艦娘よね？まさか普通の…私たちと変わらぬ普通の艦娘とは言わないわよね？」

口元から流れる鮮血を乱暴に拭いながら言う叢雲に、加賀が答える。

「…おそらく。…そしてあれは、利根型のネームシップである利根を基盤にした黒い艦娘かと」

「利根って…カタパルトがどうこうっていつも騒いでいるあの利根!?!…全然雰囲気が違うじゃないの!？」

「叢雲さん…。私たち艦娘はこの世界に姿形が同じ者が複数居るんですよ？ですがその性格、気質まで一緒かと言われればそんなことはない…。現に海軍にいる利根とは全くの別物だと、今まさに叢雲さんが仰ったじゃないですか？」

「アンタ…こんな時にも突っ掛かってくるなんて…大したもんよ」

「おや？大和は褒められたのでしょうか？」

「褒めてないわよッ!？」

加賀は目の前でギヤーギヤー言い争いをしている二人を見て、こんな時なのに…と思うのと同時に、先程までの嫌な空気が払拭され、いつもの六釐らしきが出てきたことに安心感を覚えていた。

だがこの喧騒の起点となった者は、どうやらまだ生きていらしい。

強烈な殺気を感じて身構えた三人。直後猛煙の中からまるでそれを嘲笑うかのよう  
に、利根がわざとらしく首や指を鳴らしながら三人の目の前に現れた。

「…面白い、面白いぞ!!吾輩の心が久々にときめいておる！」

そう言うと、彼女はまるでストレッチをするかのように体を伸ばし始める。その光景に呆気にと取られていた叢雲たちだったが、屈伸運動を止め、唐突に立ち上がった利根の姿に思わず体を震わせた。

「…さあ、貴様らの胸を穿つ一撃を吾輩が直々に叩き込んでやろう」

利根の言葉を合図に黒い靄もやが何処からともなく顕現したかと思えば、とぐろを巻くように彼女の手を包み込む。そして時折、紫紺の光を放っていた靄が晴れた時、三人が目にしたのは、先程とは比べ物にならないくらいに肥大化した利根の手だった。

しかもその手は単に巨大化しただけではない。その手を覆うのは生身の肌ではなく、

光沢を放つ頑丈な鋼。まるで触れる物全てを無慈悲に破壊し尽くさんと言わんばかりに、機械の拳が太陽の光を反射させ、煌めいている。そして明らかに生物の手とは思えない無機質なそれを利根は突き合わせると、力を込めるように大声をあげた。

「オオオオオオオオオオオオオオ!!!」

利根の声に呼応するように次第に大きくなるエンジン音。加賀はその音を聞いた当初、自身の航空機が地面すれすれを飛行しているのではないかと錯覚したほどだ。

だが突如そのエンジン音が止み、ニヤツと嗤う利根の姿を見て、三人は悟った。

ここからが本番なのだ、先程までは遊びなのだ。

このまま利根の射程圏内に身を置くことを危険と判断した三人は、散り散りになると、それぞれがあの利根の金属の手に捕まらないように距離を取る。

「……ふむ、距離をとられたか。そうかそうか! どうやら貴様らは本当に吾輩を楽しませてくれるようじゃな?」

——仕掛けてくるッ!

三人が身構えた時、利根の手もとい拳には変化が現れていた。握り締められた無機質な拳からは、黒光りした筒状の太い管が並列するように幾つも突き出す。そしてそれら飛び出した管からは、すぐさま黒煙が排気され始めた。

再び辺りにエンジン音がこだまする。

何とも不吉だが、三人はそれに惑わされまいと警戒を解かず、利根の動向を静かに伺っていた。

そしてその黒煙が紫色の炎に変わった時。

一斉に、そして一気に噴出した紫の炎が利根の体を大地から切り離す。その光景は信じられないものだった。

「…浮かんでる?」

三人の内、誰が呟いたかは定かではない言葉。

だがその言葉は目の前の信じ難い現象を如実に表していた。利根は拳から突き出した筒…そこから噴出する火の勢いを調整して自由自在に空を飛び回る。そしてそれをまざまざと見せつけたところで、彼女は嗤った。

「…潰れて無くなるがよい」

その一言を最後に…。

利根は一気に管から紫の炎を放出すると、ちょうど目が合った艦娘…大和を目掛けて一直線に突っ込んでいった。

「…青葉ちゃんたちは、そのままあの子を守ってあげてく？ここは私だけで大丈夫よ」  
鎮守府の長廊下。

対峙する者に睨みを効かせながらも、後方から自分の身を案じて声を掛ける者に龍田はそう言い放った。

しかしそれでも…彼女の言葉を聞いても尚、その場に留まろうとする艦娘に…彼女と共に戦おうとする艦娘に、彼女は優しく微笑みかけると穏やかな口調で諭すように言った。

「青葉ちゃんは優しいのね。うん、その優しさはずっと大切にしなきゃダメよ？」

…その優しさは間違いなくこの戦いを終えた時に必要になるわ。だからね、ここは私に任せてほしいわ。」

「で、でも……！」

「青葉ちゃん。…あなたの優しさはここでは余計なのよ。私の足手まといになられても困るわ。」

なかなか食い下がらない青葉から視線を外すと、龍田は間延びした口調を崩さずに、だが声のトーンを少し落としてそう言った。さすがの青葉も龍田の言葉に最初こそ沈黙したが、やはり譲れないものがあるようで、再びその口を開こうとする。

だが…。

「ほーらー！行けって言われてるんだからさっさと行くよー？」

「ちよっ?!北上さん!?!」

北上に強引に引つ張られる形で、青葉はその場を後にすることになった。だが青葉は次第に小さくなる龍田の後ろ姿を見て、叫ばずにはいられなかった。

「龍田さんツ!!絶対に死なないで!!!」

龍田はその呼び掛けに返事をしない代わりに、手に持った薙刀を横に大きく薙ぎ払った。それはまるで対峙する相手に青葉たちの後は絶対に追わせないという覚悟を見せつけたようにも青葉は感じた。

そして青葉たちの姿が見えなくなった頃、龍田はそつと呟いた。

「ありがとう。青葉ちゃん、北上ちゃん」

龍田は自分の髪をかき上げると、大きく息を吐いた。

その様子を静かに眺めていた銀髪の艦娘は、やれやれと言わんばかりに肩を竦めると、腰に付けた鞘から愛刀を抜いた。そしてそのまま刀の鋒きつぎを龍田に向けると、疑問を呈した。

「…なぜ自ら不利な状況にする？私の刀の錆になりたいのか？それとも仲間を守るつもりか？フツ、どちらにせよ、貴様を斬った後、今走り去っていた奴らも斬るのだが…なに無理に答える必要はない。死に逝く者は静寂の中で静かに消え去るのが美しいのだから」

「…うくん？難しくくてよく分からないわ」

「…フツ、そうか」

沈黙。

お互いの呼吸音が聞こえる位に…辺りは静まりかえっていた。いや、実際は爆発音やら銃声やら絶叫やらで大分騒がしいはずの鎮守府なのだが…彼女たちのいるこの廊下だけは、静けさに包まれていた。

だがその沈黙を先に先に破ったのは龍田だった。

足腰に力を込め、一步踏み出すと彼女は一気に加速し、銀髪との距離を詰める。そしてその勢いを殺さずに振るわれた薙刀は銀髪の手を取った…かに思われたが龍田の薙刀は、刀の鐔しのぎの部分で軽く受け流され、空を切っていたようだ。そしてそのまま流されて無防備になった龍田の腹部に、銀髪は刀の柄の部分強く押し当てると呟いた。

「フフツ…もしこの柄が鋒であれば、貴様は死んでいたぞ?」  
「…あら〜?随分と舐められているのね〜?」

龍田はすぐに体勢を立て直し、薙刀を大きく振り回す。まるで円を描くように振り回された薙刀の攻撃範囲は広く、その反撃に銀髪は刀でいなすことを諦め、間合いを取ることにした。

だがそのことを想定していたのだろう…龍田は突然薙刀を振るうのを止め、後退る銀髪の懐へと一気に飛び込んでいく。彼女の思わぬ行動に、銀髪は意表を突かれたようで、すぐに迎え撃とうとするが、なにしろ一気に肉薄されたので、後退していた足が纏れてしまった。そしてそのまま足を取られ、自由の利かない銀髪の体に、龍田は薙刀を払わずに、代わりにその腹部に強烈な蹴りをお見舞いした。

「…お返しよ〜」

「フツ…フフ…なるほど…ね」

そして交戦前の状態へ。

再び彼女たちは間合いを取ると、お互いに睨み合った。

「…野分ちゃん、だったかしら？ 貴方も黒い艦娘なんでしょう？」

「…貴様、前に一度刀を合わせたことがあるな？ はてさて、いつの頃だったか？」

噛み合っているようで、噛み合わない会話。

彼女たちは手に持ったそれぞれの武器を相手の顔に向けながらも、そんな不毛とも言える…彼女たちだけの会話を楽しんでいた。

…いや、正確には龍田は楽しんでいなかった。

なぜなら目の前の…この野分という艦娘が全力を出していないことが、龍田には嫌でも分かったからだ。そしておそらく…大きく距離を取った今…彼女は本気で自分に襲い掛かってくるだろう。そしてそれは龍田の予想通りだった。

「…フツ、貴様は相応しい。私の全力をぶつけるのに一点の迷いもなく断言出来る…そんな相手だ。そして悲しいものだ。ようやく巡り会えた好敵手と、もう今生の別れをしなければならぬとは…無念なものだ。だからこそこれだけは言っておこう」

野分はその後ろで結われた銀色の髪を解くと、まるで靡かせるように首を降った。

そして髪を下ろした野分は、憂いを秘めたような目で龍田を見つめると、名残惜しうに言った。

「私の愛刀にして妖刀…『風舞』は、今まで多くの血を吸ってきた。そしてその血を吸つ

てきたのは……龍田、貴様を屠る為だったのだな……。半ば諦めていた貴様のような存在との出会い……今や空前絶後は幻となった。……さあ、御託はここまでだ！最高にして最後の宴を始めよう！」

野分の言葉を合図に静かだった廊下にこだまするのは、何か脈を打つ音。ドクンツ、ドクンツと不安を煽るような不快な音。龍田はその音の出所を探り、気が付いた。まるで生き物の心臓のように鼓動を打つのは……野分が持つ刀、それだということに。

思わず薙刀を握る手に力がこもる。

そして悟った……これは先手必勝であると。

——何かを仕掛けられる前に。たとえ倒すことは出来なくても、深傷を負わせる必要があると。そうしなければ自分だけでなく、皆が死んでしまうと。

龍田は悟った。

「はああああああああああああああつ!!!」

決死の覚悟で突っ込む龍田。

たとえ手足がもぎ取られようとも、命を落としたとしても、この野分が今からしようとするのを止めなければならぬ——そんな思いに龍田は駆られていた。

だが。

それは少し遅すぎた。

「……ツクー！」

凄まじい風圧に足を取られ、よろめく龍田の体。

彼女が今しがた突つ込もうとしたところでは、竜巻のように黒い風が渦巻いており、目を開けることさえ憚られるような強い風が吹いてくる。

だが龍田は必死で食らい付いた。

そしてその暴風が止んだ時、彼女が目を開けるとそこには…翡翠色の瞳を煌めかせながら、黄金色の閃光を放つ刀を手にした野分が立っていた。

こんな時にこんなことを言うのはご法度かもしれない。だが龍田は思わず呟いてしまった。

「…綺麗」

敵であるはずの野分が構えたその金色こんじきの刀は本当に美しかった。目を…いや、命でさえ奪われることを厭わないような美しい輝きを放つそれ。

龍田は釘付けになっていた。

そして野分が軽く刀を振った時、龍田は驚いた。

先程の暴風に押され、ある程度野分とは距離が空いていたはずなのに…龍田の腕は斬られていた。

「…ッ!!!」

幸いにも傷の程度は軽いようだが、鮮やかな血が傷口から流れ出る。

…一体いつの間に？

見ていた限りだが、野分は刀を振るう以外、微動だにしなかつたはずだ。そしてこれだけの距離が空いていて、なぜ斬りつけることが出来る？

だが次の瞬間、龍田はその理由を知ることが出来た。

野分が振り上げた刀、それは今まで放出していた光をさらに増長させ、輝きを増したかと思えば、上へ上へと伸展していく。どうやらその刀は自在に伸縮させることが出来るようで、なるほどそれなら先程斬り付けられたのも理由がつく。そして見る者全てを魅了するように、天高く真上に掲げられたそれは、激しい光を放ちながら、大きく大きくさらに膨張していく。

そして遂には天井を突き破り、それはまるで天をも穿つような巨大な光の柱となった。

美しい光の集合体。

龍田はただ黙ってそれを見上げていた。

そしてその光の大元となっている艦娘は、そんな龍田の状態を知ってか知らずか、一歩踏み出す。

そして大声で叫びながら、真上に掲げていたその手を一気に振り下ろした。

「墮ちろオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!」

燦々と耀く巨大な光が、今まさに龍田の身を葬らんとばかりに迫っていた。

## 再会

「……さっきの娘は大丈夫なのかい?」

「……龍田なら平気。……今は自分たちがやるべきことをやるだけだよ」

僕の問い掛けに、真つ直ぐ前だけを見ながらその娘は答える。そしてその通りだと言わんばかりに周りにいた者たちもその言葉を聞いて、小さく頷いている。

……そうだね。やるべきことをやる。当たり前のようにだけど、それが現状最も重要なことなのかもしれない。

思わず僕の手を引く者の手を強く握り締める。

一瞬手を強く握ってしまったことに申し訳なさを覚えたのだが、僕の手を握る者はほんの一瞬手を強張らせながらも強く握り返してくれた。

想いは一緒だと信じたい。いや、たとえ一緒でなからうと関係ないな。信じられてるから信じるんじゃないやなくて、自分が信じるから信じてもらえる、そう思う。

鎮守府内に爆発音や何かが崩れるような音が断続的にこだましている。

……おそらく負傷者も出ているだろう。

これは早めに川内たちを救いだして、以前のように救助活動に奔走するか、もしくはは

避難誘導を行わなければならないだろう。焦る気持ちでいっぱいになり、足に力がこもる。そしてふと、車内で北上という艦娘が言っていた言葉を思い出す。

「阿野つち達が戦闘を始めたら、多分だけど見境ないからね…君も仲間を助けたらすぐに退避した方がいいよ」

微笑みながら言っていた彼女の言葉はどうやら本当らしい。その後彼女は、隣にいた別の艦娘たちに同意を求めるように、阿野さんの話をし始めたのだが…。

「阿野つちは愛娘が囚われた要塞を普通に爆破してるからね、結果的に娘が無事だったから良かったけど…誤爆しちゃうとか考えなかったのかね？」

…とんでもない会話をしていた様だった。

「…着いたにゃしい」

そんな不毛な回想に一時的に思考を奪われていた僕を引き戻すかのように、先導者の凜とした声が僕の耳に届く。そして目の前には、僕たちを誘うように地下牢へと続く入口が…消したはずの血生臭さを放ちながら、静かに待ち構えていた。懐かしい思いが込み上げてくる。

僕の前にいた小さな体は震えている様だったが、大きく息を吸い込み、呼吸を整えようと再び僕の手を強く引く。本当に頼もしい限りだ。

「…行くう」

今度こそ…今度こそ必ず。

僕は決意を胸に歩み出した。

□

静かな空間だからこそ耳が冴え渡る。

だから気付いた、どうやら鎮守府で何か動きがあったようだ。けたたましい音に耳を澄ませる、この地下牢にさえ反響するほどだ…何が起きている？

私はそんな疑問を抱きながら、牢の鉄格子を力強く殴打する。すると直ぐ様、その音に呼応する同じ音が鳴り響いた。どうやら皆、同じようなことを考えていた様で、その音が鳴り止むことはない。

この異常事態に於いて、地下牢に閉じ込められてはあまりに情報が乏しい。

…とは言え、頭は冷静だ。

今までにあつた数々の変動…その片鱗が積もりに積もつて、今日この日に爆発しただけ。

この鎮守府が襲撃され、長門さんも殺され、統率のない鎮守府はバラバラで…なにもかもぐちゃぐちゃになった。

突如として大きく揺れ始めた地面に足を掬われそうになりながらも、私はなんとかこの騒ぎに乗じて、この地下牢から脱出出来ないかと思考した。

…いつもより激しく鉄格子を叩く音が聞こえてくる…まるでそれを打ち破らんかと  
言わんばかりに。

どうやら私たちはどこまでも考えが一緒なようだ。

それはそうか…。

思わず笑みが溢れる。

目を閉じれば昨日のこのように思い出される。ライブを共に盛り上げたこと、アイ  
ツを守るために共に戦ったこと…そして今度は…。

「…やっぱり一緒にやりたいな」

独り言。私の心が吐露した本音。

本当はこんなこと思っていないのかもしれないけど…それでも、それでももし！  
もし叶うのであれば、私は彼に会いたい！彼に会って伝えたい！

その為に私は、私が今果たすべきなのは…！

…どうしてか今日に限っては、見張りと思われる銀髪の少女の姿もない。

私は一か八かの賭けに出ることにした。

「艷装展開!!」

私は…自分、最愛の妹、最高の仲間、そしてかけがえのない人の為にこんなところで  
止まっているわけにはいかなかった。

鉄格子を蹴破る音が辺りに……いや、辺りから一斉に聞こえた気がした。

□

「どこだ!? どこにいるんだ、川内!」

焦りを隠せない叫び声が地下牢にこだまする。

だがその拭いきれない焦りの気持ちをとんとか堪えながら、とにかく手当たり次第、牢の中を覗いて見る。

そして常に冷静でいたいという思いとは裏腹に、その焦りは一気に加速していった。もぬけの殻……どの牢を見ても、そこに川内はおろか仲間の姿はない。

「……脱走したんじゃない?」

まるで弾き飛ばされたかのように。

……乱暴に取り壊され、横たわる鉄格子を見つめながら、北上は言う。

……それならいいのだけれど。

よくよく考えれば、川内たちが艤装を展開すれば、この程度の牢など容易く抜け出すことも出来よう。だが、今自分の横で驚いた顔をしている睦月の言葉を信じるのなら、川内たちはこの牢にしばらくの間いたわけだ。

おそらく、脱走を阻む何かがあったのだろうけど、それが解消されたということだろうか? それとも脱走したわけではない?

とにかく案じるのは彼女たちの身だけだ。

地上ですすでに戦闘が起きている訳だし、出来ればその無事な姿を確認したかったのだが……致し方ない。

「……川内たちがいない以上、この牢には用はない……となれば、とりあえず鎮守府の皆に避難を促さないと！このままだと取り返しをつかないことになる！」

僕は叫んだ。

先程から鎮守府の揺れが激しくなってきたいて、軋むような鈍い音がずっと鳴り渡っている。

阿野さん達が戦闘を開始しているということを考えてれば、僕たち以外の者はこの鎮守府に長居は無用だ。

何かしらの手段で避難誘導を行わなければならない。

僕はそんな思いに駆られ、そのまま地上へと続く階段を駆け上がろうとした。そんな時……。

「おやおや、せっかく遊びに来てくださったのに……。もうお帰りになるんですか？」

一体誰だ？

僕たちは顔を見合わせ、そして皆一様に驚いた顔を見せている、もちろん僕もその一人だ。

そして先程まではなかったはずの……いつの日にか見た、怪しげに灯った橙色の光の群れ。地下牢の壁に埋め込まれる形で規則正しく並ぶそれは、相変わらず不気味な感じを醸し出していた。

……気が付けば、辺り一面を橙色の光が支配していた。呆気にとられる僕とは対照的に、皆は身構えているようだった。そしてその視線は、ぼんやりと灯る光源の先……通路の奥に注がれているわけだが、そこから誰かがゆつくりとこちらに近付いて来るのにも分かった。

足音が大きくなるに連れ、緊張感が増していく。

そしてその姿を間近で見た時、僕は自分の体が竦み上がっていることに気が付いた。

「……はじめまして。こうして面と向かってお話しするのは初めてですね？」

恐怖が体現したとは、このことを言うのではないか。背筋の凍るような笑み……口元こそ緩んではいるが、心を射抜くような鋭い目付き。震えそうになる体を必死で奮わせる、そうしなければ僕は発狂してしまいそうだった。

「……あなたは鎮守府から無様にも尻尾を巻いて逃げたと榛名は記憶しているのですが……おやおや仲間を引き連れてまで、一体なにをしに来たのですか？フフツ……」

……つく。怖い、怖すぎる。

叫びそうになるのを必死で堪えながら、榛名と名乗った艦娘の顔を見る。彼女とは一

定の距離があるはずなのに、その目がまるで僕の目と鼻の先にあるかのように錯覚するほど大きく見開かれ、不自然に上げられた口角がなんとも気味が悪い。

「…あなたは、一体?…いや、それはもはや愚問でしょうね。榛名さん…と仰いましたか、あなたたち黒い艦娘は一体何を企んでいるのですか?」

弓を携えた艦娘が一步前へ歩み出る。

そして静かに僕の前に踊り出たその艦娘は弓を構え、低い声で榛名に問いかけた。

「…はてさて、何のことやら」

「とぼけないで下さい!!!」

張られた弓の弦がキリキリと音を立てる。

だが矢を向けられた者は、一切の焦りや恐怖を見せず、静かに微笑んでいる。そしてその微笑が高らかな笑い声へと変わった時、息を呑むような声が僕の近くで聞こえた気がした。

「フフツ…フフフフフ…これはこれは失礼しました。つつい一人で盛り上がってしまつて、榛名の悪い癖ですね、クククツ…。ですが…フフツ…想像してしまつと、どうしても昂る気持ちだが、悦びが抑えられないんですよ!!!」

目に涙を浮かべ、腹を抱えて嗤う彼女の姿は、まず間違いなくこの状況において異常、それ以外のなにもでもなかつた。そしてまた僕の恐怖も頂点へと達していた。

「…一っただけお教えしておきましょう、大きな力の前では強者も弱者もないのです。全てが平等なんですよ」

一頻り嗤ったのか、肩を震わせながら榛名は意気揚々と語った。

「でもそれつてとても素敵なことですよ？ 虐げられることもなければ、誰かを貶める必要もない…そんな理想的な世界！それが！それがマザーの理想郷なんですよ！…尤も、マザーの高尚な考えなど、一介の人間や艦娘風情には理解する能力も…いや、理解したくても出来ないでしょうね？…さあ、そろそろ無駄なお喋りは止めましょうか？…どうやら利根さんや野分さんが掃除を始めてくれたみたいですし、榛名はマザーを母港で出迎える必要がありますからね…」

「…ま、待ちなさい!!!」

弓を構える者の制止する声を見無視して、榛名が小さく嗤うと、フツと一斉に怪しげな光源はその光を滅した。そして一気にその場の明かりがトーンダウンしたのに乗じて、榛名はその姿を眩ました。

僕たちはただ立ち尽くしていた。

榛名に捲し立てられ、訳の分からない内容に頭がこんがりそうだった。だがそのまま棒立ちしている暇はない。

「…阿野っち!!!」

まるで何かを思い出したかのように……北上という艦娘が急に駆け出したのを皮切りに、僕たちは走り出した。

そして走りながらも、震える口調で僕は言った。

「……皆は阿野さんたちの援護に向かつてくれ！僕は……僕は鎮守府の皆に放送を使って避難を促してくる!!」

「……つな、何を言っているのですか!？」

丁度地下牢からの階段を登りきり、部屋へと出たところで僕は肩を掴まれ、無理やり後ろへと振り向かされた。そしてそこには驚きと怒りが混じったような表情があり、僕の顔を覗きこむようにして言った。

「……私たちは阿野さんから貴方を守るように指示されているのです！貴方を一人になど……」

「大丈夫!!」

「……!？」

僕の怒鳴るような声にその艦娘は少し驚いているようだった。だが今の僕にはそれを気にしている余裕も器量もなかった。だからこそ自分の思いを真っ直ぐに伝えた。

「……大きな声を出してごめん……だけど、だけどさ！さっきの榛名つてやつのお話を聞いた限り、ここから先どんどん敵が増えるんじゃないの?……つまり今ここで戦力の分断

はすべきじゃないよ!…しかも僕だけの為に…そんなこと絶対にダメだ!!!」

「…ですが!貴方は人間なのですよ!?!生身の人間なのですよ!?!…貴方も仰ったじゃないですか、敵が増えると…。そうです、その通りなんです!ここは最早戦場なんです、ですから貴方を一人にしたらどうなるかなんて想像に易くありませんか!?!」

だが言いながら鳳翔は驚いた顔を浮かべる。

今まさに鳳翔たちの横を通り過ぎていくのは仲間の姿。

「ごめん、鳳翔!先に阿野つちのところへ行ってるから、その子のことよろしく!!!」

「…!?北上さん!?!」

この押し問答を見て、埒が空かないと思ったのだろう北上は足早に行ってしまった。それに続くようにもう一人の艦娘も深々と僕たちに頭を下げる部屋を駆け足で出ていった。

「鳳翔さん!北上さんも青葉さんも行っちゃったよ?瑞鳳たちは…瑞鳳たちも阿野さんたちの援護に行った方が…」

「……」

今起きた一連の出来事に思考を停止させられてしまったのか、鳳翔と呼ばれる艦娘は目を見開きながら固まってしまっていた。

なので僕もそのままその場を後にしようと思えば彼女に背を向けたのだが、さすがにそれは

無理だったようで、再び肩を掴まれてしまった。

そして今度は、無理やり振り向かされることはなかったが、後ろから問い掛けるように声を掛けられる。

その声色は、まるで僕の覚悟を問うようにも感じられた。

「…貴方の身を保証するのが私たちに課せられた指命なのです。ですが北上さんも青葉さんも行ってしまった…私はそれを悲しいと思うと同時に羨ましいと思ってしまうです」

「…えと、つまりそれは」

「…ですが！貴方の護衛を解くわけにはいきません！なぜならそれが私たちの使命なのですから！」

肩を掴む力がどんどん強くなってくるので、僕は思わず顔をしかめた。…つていうか、痛いんですけどオ！

とうかこの艦娘…身に纏った服からなんとなく感じてたけど、律儀で真面目な人なんだろうな…。

でも僕の気持ちは揺るぐことはない。

時間が経つに連れ、厳しくなるこの戦況。

鎮守府の様子を考慮しても、長期戦ではなく、短期決戦にした方がこちらの勝算もま

だあるんじゃないのか？

それなのに、僕の為だけに戦力を分断するなどダメに決まっている。ひとり一人が全力を出した時、初めて奇跡というものが起きるはずだ。それに……。

「大丈夫だよ、鳳翔さん」

僕は努めて柔らかな口調で、でも絶対に折れないといった思いを彼女に吐露した。

「……ッ！どこまでも話の分からね」

「僕には最強の護衛が付いてるんだ、安心してくれ！」

僕の言葉に鳳翔は息を呑むような声が聞こえた。

そして僕は彼女の手をそつと肩から外すと、振り向いて彼女の顔を見据えた。彼女は顔を少し上気させていたが、僕は息を吸い込むとはつきりとした声で言った。

「……行くぞ、睦月！いや……にやしい將軍!!」

「……つにやしいッ!!」

□

「……ッ！撃ち落とすッ!!」

大和の砲門は直上から急降下してくる利根に向けられ、その姿が至近距離と言えるところまで来た時、大和は容赦なく砲火を浴びせた。

断続的に砲撃音が辺りに響き渡り、一時的に視界を煙に奪われながらも大和は呟い

た。

「…やった？」

だが白煙燻る砲門を一旦下げようとした大和はその横目で見てしまった。目を見開く。

紫色の炎を纏った巨大な拳を構える利根の姿…それを至近距離で見てしまった。

「…素晴らしい威力じゃ。だがな、吾輩の鉄の拳を砕くには、ちと火力が足りぬな」

急速に迫る黒い鉄の塊、それが大和の体に強い衝撃を与え、次の瞬間彼女の体は風に煽られた塵のように空中を舞っていた。

「…ツがハア！」

「大和!!!」

そう叢雲が叫んだ時には、地面に叩き付けられる大和の体。耳に不快感を与えるような破裂音と共に、彼女の口から吐き出された血が大地を赤く染める。

「…よくもツ!!!」

叢雲が槍の先を利根に向け、そのまま彼女目掛け、勢いよく走り出した。それをニタニタと余裕そうな笑みを浮かべ見つめる利根、突如その拳から突出した管から炎を噴射したかと思えば、その身を空中へと浮遊させる。

「…ツ卑怯者！降りてきなさい!!!」

「全航空機に攻撃指令！目標、低空を飛ぶ黒い艦娘！」

地団駄を踏む叢雲に対し、加賀は空中に待機させていた航空機を反転、そのまま急降下させると、空中を自由自在に翔る利根の体へ空爆を行う。

再び黒煙が辺りを支配するが、直後その黒煙に紫色の光が反射したかと加賀たちが錯覚した時、まるで体にまとわりつく煙を振り払おうとでも言うかのように、猛煙から黒光りした体突出する。

煙を掻き分けるように現れたその黒い体は、その拳からけたたましい爆音を轟かせ、一気に炎を噴射すると空を縦横無尽に駆け巡り出した。かと思えば、徐々にそのスピードを上げ、加速し始める。

そしてたった今爆撃の為に低空を飛んでいた航空機へ急接近すると、その拳で一機、また一機と破壊し始めた。

加賀は慌てて航空機を散開させたが、驚いたことに利根の急速に上がった速度は、散り散りに逃げる航空機の飛行速度を上回っていた。

そしてあつという間に、加賀の指揮する航空機の半数以上を空中で爆散させた利根、その姿に加賀は戦慄を覚えた。

だがここで彼女の侵攻を許すわけには…。

そこで加賀は残りの機体を一度鎮守府の上空から退避させると、攻撃の隙を探ること

にした。

その為には…。

「…少し時間を稼いでくださいッ！」

加賀は叢雲に顔を向けると、決死の形相でそう叫んだ。そしてその言葉を待つていたかのように叢雲は力強く頷くと、槍を大きく振り回し、空の支配者に向かって怒鳴った。

「…かかつてきなさいよ!!私はいつでもやれるんだからあ!!!」

まるで空気が振動するかのよう、軽い音を立てながら叢雲の槍が振るわれた。そしてその様子を見た利根はより一層の笑みを浮かべ、その身を地に墮とすと、固く握り締めた両手を前へと突き出した。

「吾輩を挑発するとは面白い!捨り潰してくれろッ!」

叢雲はそのまま利根が肉薄してくることを予想したのだが――

彼女の後方――今にも崩れそうな建物をまるで二分するかのよう――突然、天高くそびえる光の柱が出現した。

眩い光に叢雲たちはおろか利根までもが目を伏せるが、出現からわずか――そのまま光の柱は凄まじい勢いで横に倒れると強い衝撃波が彼女たちを襲った。

足に力を込め、必死で大地に食らい付く叢雲と加賀だったが遂にはその体は倒れ、地面を転がるようにして、その衝撃の元となったところから遠く、後方へと飛ばされた。

だが寝転がっている暇はない、満身創痍の体を無理に起こすと彼女たちは状況の把握を急いだ。

どうやら謎の光が西側の建物を直撃したようだ、まるで鋭利な刃物で斬られたかのよう  
に断絶され、鉄筋が露となった建物はその後瞬く間もなく崩落した。

そして今や消えてなくなったその光は、おそらく自分達にとつては、不吉なものであると彼女たちは結論付け、背中を合わせながら今後の戦闘について作戦を練る。

「…あの光、黒い艦娘によるものかしらね?…ふう、大分追い込まれてるじゃないの、私たち」

「ええ…ですがこのまま引き下がるわけにはいきませんからね。まずは…」

そこで加賀は言葉を切ると、睨み付けるように空を見上げた。

「あの化物を撃破する…それだけを考えましょう」

彼女の視線の先…そこには噴射させた炎を微調整し、空中に留まる利根の姿があった。そして加賀たちを見下ろすように睨む彼女に、加賀は手の平を上に向け、差し出すと挑発するように指だけを前後に動かした。

「…ちよつ?!アンター!」

「見せてあげましょう、空の要塞…いえ、一航戦の誇りというものをツ!!!」

利根は加賀のハンドサインを見逃すことはなかった。顔には笑みを浮かべながらも、

激しく齒軋りすると、今までにないくらいの炎を放出させ、加賀の元へと突っ込んできた。

「舐めるなよオオオオオオ!!」

利根の肥大化した鉄の拳は、大地に巨大な裂け目を作り、その拳を寸でのところで避けた彼女たちの体を宙へと舞わせる。そして彼女の拳が穿った地点を中心に、大小異なる岩石の塊が地表から突き出すように現れ、あわやその尖った巨岩に加賀たちの体は貫かされそうになった。

「……そっおッ!」

叢雲は宙に投げ出されながらも、手に持った槍を利根の体へと突き立てる。

「……なんだこれは? 吾輩の拳に蚊でも付いたか? こそばゆいッ!!」

「……ツク、浅かったか!」

乱暴にスイングされた利根の拳に、突き刺した槍だけで必死に食い下がる叢雲。ブンブンと振られ、思わずその風圧に飛ばされそうになるが、決して槍を離すことはない。

加賀は土埃をあげながらも、なんとか地に足をつけ、体勢を立て直すと空中に待機させていた航空機へと攻撃を要請した。そして急降下する航空機が搭載された機銃を光らせながら、利根の元へと迫る。

「……離れなさいッ! 叢雲!!」

だが叢雲は絶対にその槍を離さなかった。

その姿に加賀は悟った。決死の覚悟で挑む叢雲の思いを無下にしてはならない、だからこそ絶対に利根を仕留めなければならぬと。

「全機、一斉掃射!!」

加賀の声を合図に、銃弾の雨が利根たちの体へと容赦なく降り注いだ。だが利根はその鉄の拳を頑強な盾に、銃弾を跳ね返している。

これは作戦失敗か…。

それでも加賀は攻撃を止めなかった。

とにかくあるだけ…全弾を利根へとぶつけなければならぬ、そんな強い執念のようなものに彼女は突き動かされていた。その目にはボロボロになりながら、必死で耐える叢雲の姿が映っていた。

そして最初こそ、加賀たちの頑張りを嘲笑うかのように余裕の笑みを浮かべていた利根だったが、徐々にその表情に変化が表れ始める…もっと大きな変化と言えば、彼女の拳の至るところから黒煙が燻り始め、火花を散らし始めているのだ。そして遂にその顔に焦りが見て取れた時、加賀は心の中で何度も同じ言葉を反芻していた。

…このまま押し切るッ！

「…弱者が調子にのるなあああッ!!」

——刹那。

叢雲はその身に風を切るような感覚を覚えた。そして強い衝撃に襲われたかと思えば、間髪入れずに激痛が叢雲の体を走った。

「——ッあああああああ!!！」

あまりの激痛に彼女は七転八倒、地面をのたうち回っていた。しかしながら利根は利根で、ブルブルと体を震わし、苦悶の表情を浮かべている。そして特に目をひくのは先程まで蹂躪の限りを尽くしていた彼女の拳——それを失った彼女の片腕だろう。断絶部分からはおびただしい量の血が流れ出し、その腕を必死で地面に擦り付ける利根の姿はなんとも痛々しいものだ。

そしてその一部始終を見ていた加賀はポツリと呟いた。

「…本当に化け物ね」

加賀の艦載機による猛攻。

それによって利根の固い装甲で覆われた拳は、徐々にではあるが傷付き、摩耗していった。だが一向に銃撃が止む気配はない。そこで利根は一度空へと退避し、体勢を立て直そうと試みた。しかしながらそれを阻む存在がいたのだ。無様な格好で拳にまわりつく、取るに足らないと利根が嘲笑った存在…叢雲だ。

空中へ飛び立つことなど造作もない。

だが問題はその後だ。空中移動をするには、噴出する火の加減をしながら、手を器用に動かさなければならぬのだ。しかし火こそ調節出来るものの、手に異物が付いた現状では思うような動きは取れないだろう。それに無理に空中へ逃げたとして、加賀の航空機から逃れられるだろうか、いや一時的に逃げることは出来ても、時間の問題だろう。空中分解するのが関の山だ。

とは言え、叢雲を薙ぎ払おうと腕を振るえば、加賀に大きな隙を与えてしまい銃弾の雨に晒されてしまう。

——悩んだ結果、利根は諸刃の剣を使用した。

最大限の炎を管から放出する。

管が破裂し、さすがの鉄の拳も熱で所々融解し始めているが、利根は構わず炎を噴射し続けた。そして利根の腕からミチミチと肉がちぎれるような音が聞こえ始めるや否や、突然不快な破裂音を響かせる。そしてその巨大な拳は叢雲を貼り付けたまま、鎮守府の壁へと向かって飛んでいったのだ。

——そして現在に至る。

「…煩わしい虫けらも消え去った…残るは…貴様だけじゃ!!最早片方だけでは空を飛ぶことも叶わんが、貴様の羽虫ごとき…この残された拳だけで充分ッ!」

額に尋常ではないほどの汗をかきながら、血走った目を加賀に向ける利根。そして手

の平を繰り返し開いたり、閉じたりすると、利根は大声をあげ始めた。

——先手必勝ね。

加賀はそう考えた。

そして航空機の幾つかを降下させ、それらは再び利根に標準を合わせると、機銃を掃射しようとした。

だが…。

「くうおらあああああああッ!!」

力いっぱい大地に振りかざされた鉄腕…それは地表を砕き、岩盤まで届くとそれをも粉碎し、衝撃によつて飛ばされた巨岩は、まるで砲弾のように乱雑に辺りに飛び散った。

「…ッ!!今ので何機か墜落した!」

利根に追撃を加えようとした航空機の幾つかは、岩石の餌食になってしまったらしい。ならば…と加賀は他の航空機に攻撃命令を下すが…。

「これで終わりじゃあああああッ!!」

加賀の目には、自分の体を握り潰そうと迫る巨大な手が映っていた。そして次第に暗くなる視界、己の死期を感じた加賀は静かに目を閉じようとした。

一瞬の静寂。全ての騒音から切り離された静かな世界。

そこにこたえましたのは…。



その言葉を利根が耳にした時、彼女の残存していた方の腕は鮮やかな血飛沫を上げながら、宙を舞った。

「…な、なああああああああッ!?!」

彼女の絶叫とは対象的に、その巨大な手は土煙をあげながら静かに地面に落下した。

## 後悔

あたしの人生は後悔の連続だった。

常に後手に回る、思い通りにいかない毎日。

あたしが考えて成すこと全て——無意味だった。

…そのせいであたしは大切なものを失った。

重い瞼に木漏れ日が差す。

自分の名を誰かが呼んでいるような気がして、あたしは目元を擦りながら、その眼を開いた。

「…こんな時まで寝やがって！お前は本当にぶれない奴だな！」

そんな呆れた声があたしに投げ掛けられる。

…それはそうか。

「こんな時」にもあたしは居眠りをしていたのだから。  
でも。

——あたしが目を閉じたいのには理由がある。

…目を閉じさえすれば。

あたしはこの現実から一時的に乖離される。

直視したくない、対峙したくない世界を一瞬でも忘れることが出来る。

あたしの愚かな選択によって産み出された「負」。

あたしはそれから目を背けたかつたんだ。

だけどそんなのは結局、現実逃避以外のなにもでもない。その目を開ければ最後…瞬時に過酷な現実があたしに凄まじい勢いで襲い掛かってくる。

「赤城からの伝達だ…鎮守府が攻撃を受けている。潜入には時期尚早…とは言ってられないみたいだ。…すぐに鎮守府へ向かうぞ！」

——あたしはその言葉に何の感情も抱けなかった。

あたしの鎮守府が、あたしの仲間が危険に晒されているというのは分かっている。頭では分かっている。

だから一刻も早く、援軍に駆け付けなきゃいけないのも分かっている。  
…でも。

あたしは心にポツカリと穴が空いたように。

全くもって、何の想いもその心に宿すことが出来なかった。

「…ああ」

結局出たのは、生気を感じない返答。

だがあたしの生返事を聞いて、その者は軽い会釈をすると、大きな剣を片手に踵を返した。

ならばあたしもその後を追うのが筋というもの。

だけどあたしの足は一步も前へと進まない。まるでその場に固定されてしまったかのように、あたしの足は動かなかった。

——どうして川内はあんなに必死になれたのだろうか？

……いや、川内だけじゃない。

神通に那珂、さらには阿武隈や雲龍まで……

——なぜ自分以外の存在の為に必死になれるのか？

あたしには分からなかった。

いや正確には——分からなかったというよりも、理解したくなかった、忘れたかったんだ。

……誰かの為に自分の身を切るなんてこと。

そんな後悔しかない……後悔しかなかった選択をまた選ぶなんて絶対に嫌だった。

結局そんなの独り善がりだった。

あたしは自分の自己満足の為に、大切な人にあたしの「犠牲」を押し付けて、きつと

心のどこかで愉悦を感じていたんだ。

だから失ってしまった。

…大切な人を。

ふと蘇るのはあたしの勝手な判断、それをあのクソ野郎に進言した時のこと。

——この思い出は謂わば、あたしの背に重くのし掛かる十字架だ。

あたしが二度と光の元へ浮上出来ないように…その身を深い深い海の底へと沈める為にそれはあたしの心に強く刻まれている。

思い起こされた記憶は、あたしにあの時の自分を俯瞰させる。

…大切な人を守る為に「解体」を申し出たあたしは笑みを浮かべていた。

きつと…いや絶対に感じていた。

自己満足、自己憐憫、優越感。

もちろん、あたしは悲劇のヒロインになりたかつたわけじゃない。大事な人を守りたかつたのは事実だ。

だけど——

知らず知らずの内に抱いていたんだろう、そんな「負」を。

だから罰が当たった。

大切な人はあたしを見てくれなくなった、あたしの言葉を聞いてくれなくなった、あ

たしを信じてくれなくなつた。

見透かされたんだ…あたしの驕りを。

それが悲しくて、悔しくて……。

あたしは大切な人をもう一度振り向かせる為、わざと彼女の元から離れ、それでも尚、自己満足を押し付け続けた。

まるで子どもじゃないか…。

思わず自嘲する。

そしていつまでも——あたしは成長しなかつた。

だから変わりたかつた。

こんな矮小なあたしを少しでも大きく見せたかつた。

そしてもう一度、見て欲しかった。

…阿武隈たちと共に行動したのも、ライブに参加したのも結局は気紛れとかじゃなくて、全部あたしが独りじや変わることが出来ないから…あわよくばあの娘に振り向いてもらいたかつたから。

暖かな風があたしの頬を撫でる。

そしてふと、何気なく呟いてしまった。

「…いつまで囚われてんの？」

：いったいどの口がそんなことを言えたのだろう。

この言葉は間違いなく自分を言い表した言葉だ。

なのにあたしは卑怯だから自分のことを棚に上げて、そんな言葉を以前冷たく言い放つたんだ。

あたしの言葉を聞いて、その娘は何を思ったのだろう？ 今ではそれを知る術はない。

——あの娘は遠いところへ行ってしまった。

ああ、またあたしは後悔するのだ。

——あたしの言動は常に「負」を纏う、「負」を引き起こす。

——いつのまにか優しい風は止んでいる。

そして一転：周りの木々がざわめき始め、不気味な音を立てている。

：まるであたしの心のざわめきと一緒だ。

そして再び静寂が訪れ、あたしは悟った。

「……こんな形で再会するなんて、やっぱりあたしのすることは全部間違ってただね」  
何もかも諦めるように、ぶっきらぼうに呟く。

そして続ける。

「……どこ行つてたんだよはこっちの台詞だよ。古鷹」

蒼天に黒い影。

そしてそれは天高くから直下——巨大な黒い翼をはためかせ、彼女はゆつくりとあたしの前に降り立った。そして歪な鎌のようなものを携えながら、彼女は静かに嗤っている。

「…随分とイメチェンしたんだね、古鷹」

あたしの問い掛けに彼女は答えない…代わりに大きくその羽を羽ばたかせた彼女は、黄金色の瞳を爛々とさせ、ニヤリと嗤う。

そして手に持った鎌を高く振り上げると、抑揚のない声で…一方でその表情には愉悦を浮かべながら彼女は言った。

「貴方を見ていると…すごい興奮するの」

## すれ違い

「貴方の名前は？教えて頂けませんか？」

古鷹が嬉々として振りかざした大鎌。

それはその先端から鮮やかな血液を滴らせながら、まるで加古の体を傷付けたことを喜ぶかのように、太陽光を反射させ黒く輝いていた。

対して流血の止まらない上腕を苦悶の表情で抑える加古は、その腕から伝い落ちる血液を地面に滲ませながら弱々しい声で言った。

「…古鷹、ごめんな」

「——どうして私の名前を知っているんですか？」

「ごめん…本当にごめんな」

俯いたまま、掠れるような声で喋る加古に、古鷹は何故だか言い様のない気持ちの昂りを覚えた。そして恍惚の表情を浮かべ、手に握った鎌を再び大きく振り上げる。

「——いいですよ…とてもいい!!とつても気持ちがいい!!名前さえ知らない貴方に、私はこんなにも胸の高鳴りを抑えられないなんて——最高ですッ！」

加古は振り下ろされた鎌に横殴りされ、その身を地面に転がした。そして小さな呻き

声を上げながらも、消え入るような声で古鷹——大切な人に謝り続ける。

「……ごめんよ、古鷹。あたしが悪かったよ……ごめん」

「私は貴方を知らないのに、貴方は私を知っているんですね——いいでしょう……本日、只今をもって私が貴方を知ってあげますよ——尤も私に無惨に切り刻まれた屍としてですけどね……！」

横に大きく薙ぎ払われた鎌が臙装を纏わぬ加古の体を容赦なく傷付ける。だが次第に身動きのとれなくなる体を庇いながらも、加古は決して戦おうとせず、どこか泣きそうな顔で謝罪を口にするのみ。

その姿により一層の加虐心を増幅させた古鷹は絶叫にも似た歓喜の声をあげ、加古に迫る。

「——その首！掻き切らさせて頂きます」

加古の白い首筋。

そこに黒光りした鎌が充てられた——かと思われたその瞬間。

「何してんだ!?!お前!!!!」

古鷹の体はそんな怒りと驚きを孕んだ声を聞きながら、大きく横へと突き飛ばされた。いた。

「大丈夫か!?!加古!——」

そして視線を先程まで自分がいた場所へ遣れば、加古の体に寄り添いながらも自分に砲を向ける複数数の者たち。

古鷹は強い苛立ちを覚えた。

——理由は分からない。でも敵が増えたからとかそういう次元ではなくて……なぜかその者——加古と呼ばれた者が自分以外の存在に囲まれている光景——それは見ていて心地よいものではない……いやむしろ——

「……不快。不快不快不快!!!」

「すっごく不快ですッ!!!」

呟くような声はいつの間にか憎悪を露骨に表したものにへと変わり、対峙した者たちの元へと響き渡る。

「——というかお前……古鷹か？いや、お前は確かか……」

「姐さん、お知り合いの方なんですか？」

——どうやらこの者たちも自分のことを知っているようだが……それに古鷹はさらなる怒りを燃やした。そしてそれを言葉に表出する。

「……私を知ってていいのは——その……そこにいる加古だけなのおッ！貴方たち……いやお前たちに私を知る権利はないッ!!」

——刹那。

古鷹の翼に黒い閃光が瞬いたかと思えば、彼女は怪しげに灯ったそれを大きく羽ばたかせる。そしてそれに呼応するように漆黒の輝きに包まれた大鎌は、彼女がそれを地に振り下ろした時、大きな衝撃波となって大地を割った。地表から溢れ出した黒い一閃は、地面を捲り上げながらとてつもない破壊力で周りにあるものを薙ぎ払っていく。

「…つうわあああああッ!!」

「…秋月、みんな——うわああああ!!」

古鷹のいる場所を中心に、まるで波紋のようにして広がったそれは周囲の木々を薙ぎ倒し、そこにあつたはずの木立を一瞬にして消滅させてしまった。

そして破壊の中心点に位置していた者は、不気味な笑顔を見せながらゆつくりと辺りを見回した。

「…フフフツツ…少し派手にやり過ぎました——まだ物足りないですが…もうここには用はありませんね」

剥げた大地に山積する樹木。

そこにあるのはそれだけ。先程まで自分の感情をすこぶる揺さぶった者たちは跡形もなく消え去った…古鷹はそれに多少の虚しさを覚えながらも、再び翼をはためかせ空へと舞う。

そしてもうもうと激しく黒煙の上がる目的地へその身を進めようとした——その

時だった。

真下から砲撃音が聞こえるや否や、宙を浮かぶ古鷹は突如真横で発生した爆風に煽られ大きく体勢を崩す。

そして間髪入れずに巻き起こる爆発——瞬く間に蒼穹は煙と明滅する激しい光で覆われた。

「…まだしぶとく生きていたのですね。結構——それでこそ私も楽しめるといいます」

猛火も衝撃波も——閃光でさえも…華麗に空を飛び、回避すると巨大な漆黒の翼を激しく振幅させ、一気に天上へ。そして突然その動きを止めたかと思えば羽を大きく広げ、空を掴むようにすると、古鷹はその頭を眼前に広がる大地へと向ける。

直後広げた翼をその体に這わせるように密着させると、古鷹は嗤った。そして抵抗を失った体は、徐々に加速しながら降下し始める。

急降下する古鷹——隻眼から放たれた金色の光は宙に残像を残しながら…まるで稲妻のように空を走る。

そしてその視線の先には…歯を食い縛りながらも砲塔を天高く掲げ、必死の砲火を行う者たち。

(——力の無い者たちが無駄な足掻きを見せているのはなんとも滑稽だった)

古鷹は降下する体をゆっくりと——それはそれはゆっくりと捻り始める。そして体を一回転——それを何度も何度も繰り返す。

最初こそ緩やかな速さで……しかし次第にその回転は速度を増し、渦を巻くように急速に回転。すると高速回転する古鷹の体に共鳴するように……その身にまわりつくような風の流れが出来始めた。そしてその風が何もかもを巻き込むような勢いに成長し、その場の空気を文字通り変えた。

——荒れ狂う風の鎧。

もはや巨大な竜巻と化した古鷹——それは地表へ到達した瞬間、自然の理を無視した縦横無尽な動きで大地に根差す全てのものを蹂躪した。

□

——力の差は歴然だった。

さつきまで抱いていた自分の楽観的な観測を呪う。

数ではこちらの方が圧倒的優位に立っていた。秋月たちもいる、負傷しているとは言え加古もまだまだ重傷という感じではない。

——全員が一丸となって戦えば勝てると思った。

……無理だ、無理だ無理だ無理だ。

今まで味わったことのない恐怖に自身の体が震えていることに気が付いた。そして

同時に感じた。まだ恐怖を感じられるだけ——自分は生きているのだと。

「…ね、姐さん」

ところどころ傷を付け、血を滴らせた秋月があたしを呼ぶ。その痛々しい姿にアタシは思わず顔を背けたくなったが、よくよく見ればアタシの周りにいる者たちは自分を含め、皆一様に同じような格好だった。

——砲弾を意に介さず…むしろ砲弾が破裂した時に生じる爆風を呑み込みながら、その巨大な風の集合体はアタシたちのいた場所を襲った。

なんとか倒木の影に隠れてやり過ごすことが出来たが、おそらくあれがもう少し自分たちの側を通っていたら、まず命はなかっただろう。

強い力にねじ切られたような巨木に、砕けた岩盤を剥き出しにした大地。

——アタシたちの相手は深海棲艦のそれとは比にならないほどの破壊力を有している。

「…さん…姐さん!!」

ふと呼び掛けられた声が、残酷な現実世界へとアタシを引き戻す。そして不安げな表情を浮かべた秋月たちがアタシの顔を覗き込んでいる。

——怖い。

そんな言葉を発さなくても分かった…アタシたちの現状なんて——風前の灯火だっ

て。

「……………」

「…え？」

だからこそアタシは言うしかなかった、言つてやつたんだ。腹から声を出すようにして、言つてやつたんだ。

「…お前たちは逃げろ。ここはアタシが引き受ける」

顔が強張つちまつて上手く笑えたかどうかは分からないが、秋月たちに己の恐怖を悟られないように最大限口角を上げる。

「そ、そんな！ダメ！絶対にダメです！」

秋月を始めとして、アタシのことを取り囲むように「ダメ」だとか「嫌」だとかいう言葉が皆から発せられる。

——本当に優しいなお前らは…。

アタシはそんな言葉に胸から込み上げてくるものを感じながら、それをなんとか呑み込む。

そして大声で秋月たちの言葉を制した。

「無駄に死のうとするんじゃないやねえ!!どう見てもこんなの負け戦だ！活路も希望もなんもありませんよ！」

「…そ、それなら尚更」

「…バツカ！古鷹がそれを許してくれると思うか!? やんなきやいけねんだよ！古鷹を引き付けて、逃げる時間を作る奴が!!」

「…で、でも。でも姐さんを置いていくなんて!」

「…秋月、みんなよく聞いてくれ。——お前ら五人が無事だったこと…それはアタシにとつてすごく嬉しいことだったんだ!——その拾った命をどうか大切にしてくれ!頼む!」

「…姐さん」

息を呑むような声が、アタシの下げた頭の上から聞こえてくる。そして静かに顔を上げると、涙ぐむ秋月たちの姿があつた。

——荒くれ者、臆病者。

それがいつもアタシを揶揄する言葉だつた。

もちろん鎮守府の仲間たちだつて悪気があつて、そう言っているわけではなかつたのかも知れない。

アタシだつて気に病むほど気にしていたわけじゃない。だけど居心地が良かったわけでもない。

そんな悶々とした想いを抱えていたアタシに。

そんなアタシに秋月たちは「姐さん」と言つて、慕つてくれたんだ。

——妹分を守るのはあたり前だよな。

「オラア！お前らはアタシを姐さんつて呼んでるんだから、姐さんの言うことはちゃんと聞かねえとな！」

アタシはそう言つて、腕を掴もうとする秋月たちを押し退けると、隠れていた倒木の上に躍り出て大声を張つた。

「アタシは防空重巡洋艦——摩耶様だあ!!」

そして乱雑に…無闇やたらに砲撃を行った——まるで天地に轟かせるように。するとでたために放たれた砲弾は、着弾して大きな爆発音を轟かせた。

ただひたすらにそれを繰り返す。

これだけ派手にやりやあ……!!

「…さあ！お出でなすつたあツ!!」

アタシの猛爆はどうやら古鷹を誘きだすことに成功したらしい…：地表すれすれを滑るように飛び彼女は、アタシの間近へと迫ってくる。

——姐さん！

そんな声が耳に届く。

そしてアタシはその声のする方向を一瞥するとただ叫んだ。

「行けえッ!!秋月!皆を連れて早くここから離脱しろオ!!」

声にならないような何かが聞こえる。押し殺すような何かが聞こえる。それでも——それでも最後にはアタシの望んだ答え——離れていく複数の足音が聞こえた。

——それからアタシは二度と振り返らなかつた。

古鷹の自由自在な動きに何度も砲身が右往左往する。

そして低空飛行のまま、徐々にその姿かたちがはつきりと分かるくらいに彼女が近付いて来た時に、アタシは砲塔が破裂するんじゃないかというくらい砲撃を行った。

「——オラオラオラアッ!!」

激しいフラツシユに目を眩ましそうになるが、決して目を閉じることはしない。

——もし目を閉じてしまつて、秋月たちの元へと古鷹を行かせてしまつたら……ダメだ!それだけは絶対にダメだ!

幾つもの閃光が空を駆け、弾雨となつて……そして消えていく。

今のアタシはいつたいどんな顔をしているのだろう。

迫り来る古鷹は、その手に握つた鎌を地面に這わせて不快な音を立てながら、アタシの喉を捉えようと嗤っている。

——せめて。

せめて秋月たちが逃れる時間を稼げれば……そんな想いでアタシの頭はいつぱいだつ

た。

□

——体のあちこちが痛い。

だが地に背中を付け、青空がどこまでも広がっているのを見るとそんな痛みは忘れてしまふ。

ふうと息をつくと再び目を閉じようとして、あたしは気が付いた。そして重い瞼を無理に開け、今自分の頭を過つた「それ」について想いを巡らす。

そして思わず笑みが溢れた。

——なんだ、意外と簡単なことだったのかもしれない。

あたしは上体を起こすと、大きく伸びをする。体の至るところからポキポキと骨の鳴るような音が聞こえたが、不思議とそれが心地よい。

——あたしもあの人間さんやあの娘みたいにちゃんと向き合えば良かったんだ。

かっこつけずに、ありのままの自分で……!

あたしの本当の想い……それを伝えれば良かったんだ。

「今度ちゃんと礼を言わなくちゃね」

あたしは膝に力を込めるとそのまま勢いよく立ち上がった。そして「んー」と再び伸びをする。

…まずは。

あたしの大切な人——古鷹を探さないで。

薙ぎ倒された木々の間を駆け抜ける。崩れかかった大地を飛び越える。そして断続的な砲声を耳にしたので、急いでその方向へ走り行く。

…案外居場所なんて簡単に分かるんだね。

あたしの視線の先には、摩耶が張った弾幕を軽やかに回避しながら突っ込んでいく古鷹の姿があつた。

「…ひゆう、さすがあー！」

あたしは多分、今最高の表情を浮かべているに違いない。そしてあたしの瞳は、今最高に煌めいているのだろう。

「艤装展開！」

今のあたしの気持ちを表すように、全砲門が唸り声をあげながら稼働する。

——着弾地点はもう決まってるッ！

あたしの砲塔…その全てが同じ方向を向き、砲火を浴びせるのを今か今かと待っている。

そしてその時は来た——

古鷹が摩耶にその巨大な鎌を振りかざそうとした時…あたしは叫んだ。

「古鷹にそんな武器は似合わねえええ!!!」

あたしの想いを込めた全力の砲撃。

——その光景はまさに砲煙弾雨。

硝煙の匂いが心地よい。

着弾時に轟く爆音が耳に心地よい。

そして猛煙の晴れぬ間に、あたしは全速力で着弾地点へと駆け出した。砲身から白煙が出ているがそんなものであたしの視界は揺るがない。

あたしの視線は……いや心は間違はなく標的へと向かつてずれることはない——そこそ寸分の狂いもなく。

そしてそこへ辿り着いた時には、煙も晴れて大分視界もクリアになっていた。

「……ゲホッ！ゲホッ!!!」

「お、摩耶！生きてたね」

爆心地から少し離れたところ。

そこで踞りながら咳き込んでいる摩耶の元へとあたしは駆け寄る。

「か、加古?! お前無事だったのかよ!?!」

「もちろんよ。摩耶こそあたしの砲撃喰らってよく無事だったね……と思ったら足がかなり損傷してるじゃない」

摩耶はあたしの言葉に絶句していた。そして目を丸くして、急にワナワナと震え始めたかと思えば、顔を赤くする。これは助けを呼んで来ないのかな。

「…て、てめえ——アタシを殺す気か!？」

「いやいや、ちゃんと狙ったから大丈夫でしょ」

「…んなつ!?!ば、バカヤロ————下手したらアタシは…」

そこまで言い掛けると、彼女は辺りを急に見回し始めた。そして耳打ちするように言う。

「…古鷹は?」

その答えに返答する必要はないだろう。なぜならあたしも彼女もすぐにその答えを知れたのだから。

「やってくれましたね…?」

——黒煙の燻る翼。

古鷹がそれを引き摺りながらこちらへ迫ると、その綺麗な黒色の羽の断片が少しずつ抜け落ちていく。

「…お、おい!?!」

あたしは制止する摩耶の声を無視して、ゆっくりとこちらに歩み寄って来る古鷹の元へ。

「…フ、フフツ！ 貴方の方から私の元に来てくれるとは——いいでしょう…最高の晴れ舞台にしてあげます」

嗤いながら、鎌を構える古鷹。

でもあたしは構わず彼女に近付いていく。

そして立ち止まり、息を大きく吸い込むと、頭を下げずと伝えたかった想いをぶちまけた。

「…古鷹、本当にごめんなさい!!」

「…何の真似ですか？」

——グチャツ！

肉を抉るような音が鼓膜に響いた時、あたしの腹部には激痛が走っていた。

見れば鎌の先端部分があたしの腹に深く突き刺さり、おびただしい量の血が鎌を伝って流れ落ちている。

だけどあたしは、そのまま鎌を両手で掴むと笑った。

「…もつと古鷹に自分を見せれば、自分のことを話していたら…こんなことにはならなかったのかな…」

「…ツいったい何を!? 何をわけの分からないことを言っているんです!」

鎌に力が込められたのが分かった。ズブズブと腹部に食い込む異物を感じながらも、

あたしの目は、爛々と輝く瞳を捉えて離さない。

「…何なんですか!?! 貴方は!?!」

そう言えば…古鷹の顔をこんなにもちゃんと見たのはいつ振りだろう。相変わらず可愛らしい顔をしているな。そんなことを思う。

そしてあたしは、もう少しで触れられそうな古鷹の体へと向かって一歩また一歩と踏み出した。

「…ッ!」

腹部にさらに食い込む鎌。

口元からどす黒い血が吹き出した。

だけどこんな物の為に…ようやく古鷹に触れられそうなのに…。

——痛みなんかもうどうでもよかった。

「か、加古お! 何してんだよ!?!」

「く、くそ! 足が…!?!」

——誰かの声が聞こえる。

だけどあたしにはそんなのどうでもよかった。

どうやらようやく古鷹にちゃんと向き合えそうだ。

あたしは古鷹を思いつきり抱き寄せた。

——ズサアッ!

「…な!?み、自ら貫かれにくるなんて…!?死の間際に立たされ狂いましたか!」

「…古鷹」

あたしはそのまま力強く…今まで出来なかった分を取り返すかのように力一杯彼女を抱き締めた。

「…古鷹、古鷹」

——彼女の名前を呼ぶ、何度も何度も。

——彼女を抱き締める、何度も何度も。

——彼女を感じる、あたしの全てで。

「——あ、貴方はいつたい!?!…ツ、アアアッ!!頭が、頭が痛いッ!!」

苦悶の表情を浮かべ、鎌から手を離すと古鷹は頭を抱え込んだ。

「…ああッ!——ああアッ!!な、何が…何が私の中で起きていますか!?!た、助けてマザー!!!」

「——グアアアッ!!痛いッ!痛い痛い痛いッ!頭が割れるように痛い!!」

「…う、ウグアアッ!や、やめて…私を…私を」

「…うあああああああッ!!!」

古鷹の叫び声を聞きながら、あたしは徐々に弱まっていく手の力に必死で力を込めようとしていた。

…ああ、やつと。

やつと古鷹に向き合えそうだったのに…。

霞んでしまった目では古鷹の顔がもうちやんと見えないじゃないか…。

弱くなった腕の力ではもう古鷹をしつかりと抱き締められないじゃないか…。

震えるだけで音の出ない喉ではもう古鷹とお話が出来ないじゃないか…。

——次第に遠くなる意識。

もう古鷹の声でさえ聞こえない。

だけどあたしは心の中で言ったんだ。

(…)(めんね、古鷹)

□

——その光景は異様だった。

そこだけこの世界とは切り離されたような異空間。

そんな風にあたしは思った。

でも加古が静かに倒れた時——そんなことなんか頭の片隅に追いやつて、あたしは

役立たずの足を引き摺りながら、なんとか彼女の元へと行こうとした。

そんな時にアタシは、消え入るような声を聞いたのだ。

「……か………?」

その声の主はすぐに分かった。

ほんの少し前、絶叫を上げたかと思えば、頭を抱え込んだまま黙ってしまった古鷹が虚ろな瞳で加古を眺めている。

そして横たわる加古の体を何度も何度も揺さぶり始めると、次第に光を取り戻す古鷹の瞳。

「加古！加古オ!!!いや、嫌だよお!!!」

「違う、違う違う違う!!!加古が謝る必要なんかないの!!私が…私が加古の優しさに気付けなかったの!」

「——お願い!お願い!!!目を開けてよ…加古!!」

必死の形相で加古に叫び続ける古鷹を目の当たりにして、アタシは思わずその場から動けなくなってしまうた。

でもアタシは嫌な予感がした。

——古鷹が目から涙を溢しながら、狂ったように笑い始めたのだ。そして加古に突き刺さった鎌を引き抜く。

アタシは彼女の名前を叫ぼうとした。



## 絆

「龍田さんッ!!絶対に死なないで!!!」

目を閉じて、立ち尽くしていた自分の心にこだましたのはそんな言葉だった。轟音を耳にしながら、迫り来る衝撃波に呑み込まれそうになる——そんなギリギリのところ  
で私は思い出したんだ。

——死ねないッ!

私は目を開ける。

そしてついさつきまで諦観していた自分を奮い立たせるように、必死で思考を巡らした。

——なんとか生き残る方法はないか。

この身を滅しようとして野分が放った——おそらく最大の斬撃…逃げるところなど——

(……あ)

そこで私は気が付いた。

そしてすぐに行動に移った。

——やるしかない。

私の目に映っていたのは、暴風で粉々に砕かれた窓。

その先には黒煙が舞い、火柱がところ狭しと上がっている。おそらく阿野ちゃんたちが戦っているんだろう…。

だからこそ転がるように駆け出した。

そして窓辺に身を乗り出した時——私はその背中に大きな衝撃を受け、弾き飛ばされた。

一瞬、宙を舞う感覚に戸惑う私…だがすぐに理解した。空気がすり抜けるような感触を肌で感じながら、私は手を伸ばした——何も掴めやしないというのに。

そして迫り来る地表に、私はただただ体を丸めることしか出来なかった。

「…………ツガア!!」

…自分の口からこんなにも鈍い音が出るのかと思いつながら、私はその身に受けた激しい痛みと衝撃に顔を歪ませる。そして崩落音が私の耳に届いた時、ようやく自分が生きていることを実感した。

「阿野ちゃん…青葉ちゃん…」

立ち上る猛煙の間に、綺麗な青空が見える。地に完全に背を付けて倒れた私の体は、そんな場違いな——尊い光景…守るべき日常に身を震わしていた。

——この程度の痛みなら…。

私は艦娘だ。

砲弾をその身に受けようと最期まで戦い続けた…誉れ高き艦船の生まれ変わりだ。ならばこんなところで倒れたままとというのは——

——阿野ちゃんたちを守らないと…。

私は鈍い音を響かせながら自分の体を起こす。そしてどんな時でも手放さなかつた薙刀をしつかりと握り締めると、それで体を支えながら一步、また一步と歩みだす。

空気が震撼するような爆発音や航空機のエンジン音を耳にしながら、私の進むべきところは決まっていた。だから歩みが止まることはない。

「…絶対に守ってみせる」

そんな私の小さな眩きは、大きな覚悟を孕んでいた。

□

「…つたくよお！酷い有り様だぜ、こりゃあ！」

俺の言葉に赤城と雲龍が頷く。

その顔はひどく強張つたような表情を浮かべていた。

——まあ、俺もただけどな。

山林を抜け、目の当たりにしたのは黒煙燻る自分たちの鎮守府。木立から見た時と

は、その被害の甚大さというのが全く違つて見え……これはもう再建不可能なんじゃないかと俺は感じた。

絶え間ない爆発音。

黒煙に交じつて見え隠れする炎。

瓦解した鎮守府はその内に秘めていた鉄筋コンクリートを剥き出しにして、見るも無残な外観になってしまった。

「——やはり鎮守府の正面で、戦闘が起きているようですね……まずは敵の捕捉、尚且つ迅速な避難ルート確保が先決です」

赤城の凜とした言葉にハツとする。

そして『この時』はまだ無事だった西館の方を指さし、赤城は続けた。

「私と雲龍さんで避難ルートを確立、同時に避難誘導を行います。……交戦しているのが同じ鎮守府の仲間であれば、すぐにでも助けに入るべきなのですが——状況が不透明な上、そうでない可能性のことも考慮するとここは……」

「……なるほど、敵の正体も掴めてないしな……おし！了解だ！戦闘の方は俺に任せときな！」

言い淀んでいた赤城の言葉を代弁する。

彼女は凜とした顔をしながらも、どこか心配そうな……申し訳なさそうな顔をしていた

が——なに俺には好都合だ。それに赤城たち空母の航空機の攻撃は、攻撃範囲が馬鹿デカイ——対して俺は白兵戦で臨むわけだから仲間を守りながら戦うのは俺の方が向いてるだろう。

「…申し訳ありません、天龍さん」

赤城は俺に一礼すると、すぐに雲龍を引き連れて鎮守府の西館へと走って行った。

「…さてと」

俺は剣を持つ手に力を込めると、呟いた。

「ヒトの鎮守府で——しかも俺抜きで好き勝手暴れやがって——俺が直々にブツ飛ばしてやるよ」

そのまま俺は剣を力一杯薙ぎ払うと、鎮守府の正面玄関の方へと走りだす——

——はずだった……。

轟音と共に、突如として天高くそびえる光の柱が鎮守府のど真ん中に顕現する。激しい閃光に思わず目を瞑りそうになるが、間髪入れずにその光が横倒し——西館の方へ倒れるのを見て、俺は叫んでいた。

「……っお、おい!!!」

俺の叫びも虚しく…それは赤城たちが走って行った西館へと直撃した。大きな崩落音を轟かせながら、ガタガタと崩れ落ちる西館。俺はその光景を呆然と眺めていた。

——そして感じた。  
体の震えを。

まるで全身の血が煮えたぎるような……強い衝動に俺は駆られる。走り出しそうになる。

——上等じゃねえか。

俺は崩れ逝く西館へ向かって全速力で駆け出した。

——赤城たちは死んでねえ！この程度の攻撃……数々の修羅場を乗り越えてきた俺たちなら……絶対！

どうしてそんなことを言い切れるかなんて野暮なことは聞くな。ただ俺と赤城、そしてこの鎮守府の同胞なら絶対にこの異常事態を乗り越れると俺は確信していた。

「……赤城の言う通りだぜ」

俺は小さく笑みを溢す。

——赤城が避難誘導をかって出たのは、なにも自分の航空攻撃が仲間を危険に晒すからだけではないのだろう……俺という存在をよく分かってやがる。

絶体絶命——

——そんな状況だからこそ俺は笑う。

「三銃士の意地見せてやるよオ!!!」

□ 「生きていたのか！」

嬉しそうな笑みを浮かべながら、そんなことを面と向かつて言われれば、誰もが死に別れたと思っていた仲間との再会を思い浮かべるだろう。

だが今回の場合それは当てはまらない。

龍田は背筋に嫌な汗をかきながらも、手に持った薙刀を大きく横に薙ぎ払った。土煙が上がり、一瞬対峙していた者の浮かべる恍惚の視線から逃れることに成功したが、だからどうだと言うのだ。状況は変わらない。

「…龍田と言ったな？ 私の最大の一撃を一体どうやって回避したかは知らないが——それは称賛に値することだ。そしてそんな貴様に私はしっかりと敬意を払わなければならぬ…この意味が分かるな？」

——正直、何を言っているのかは不明だが…。

龍田は身構える。

そして目を閉じ、息を整えた。

そして自分の心音が直接耳にこだまするのを感じながら、ゆっくりと目を開いた。

「ああ！ 貴様のその弱々しい姿…脆弱な姿は私の嗜好に合わない——だが貴様の心…そこまですりながらも私へと戦いを挑む——戦いに身を投じる姿は私の愛刀で斬る

に値する——いや斬らなければならぬのだ」

大きく両手を広げ、それは饒舌に語る野分。

そして直後——龍田の目には、戦いに悦びを感じる戦闘狂がその手に持った刀から一気に光を放出し、伸縮させる姿が映った。

「……ッああああ!!!」

斬り刻まれていく体。

斬られる度に鮮やかな血が飛び散り、痛みに龍田は苦悶の表情を浮かべる。

だがなんとか防御姿勢を取りながら、野分の元へとジリジリと歩み寄る。一步、また一步と着実に。

そして野分に近付くにつれ、その斬撃は鋭いものになっていく。それでも龍田は……何度もよろめきそうになりながらも、歯を食い縛りながら前へと進んだ。

伸縮自在な光は確実に龍田の体力を奪っていく。

——龍田の信念が勝つか、無慈悲な閃光が勝つか。

結果は明らかだった。

「……ああああああッ!!!」

遂に野分の猛攻を前に、龍田は前進することが出来なくなってしまう。だが後退出来るわけでもない。必死で身を縮こませるが、肉を抉る鋭い斬撃に成す術もない。

「——動けなくなつてしまつたか……。この胸躍る時間がいよいよ終わりを迎えようとしてゐるのは、とても残念だが——仕方ない」

野分の冷酷な言葉に龍田は目を見開く。

そして痛みで麻痺してしまつたはずの感覚が一気に蘇つてくる。それは迫る死を前に龍田の体が最期の意地を見せようとした結果なのかもしれない。

「……フツッ！ 貴様の最期にはやはりこんな姑息な斬撃では罰が当たる——私の最大の一撃で葬つてやらねば」

野分の刀に光が収束する——そして龍田は唇を強く噛んだ。

——ごめんね、阿野ちゃん……青葉ちゃん……皆。

——約束、守れないみたい……。

龍田は自分の身を消し去ろうと伸び上がる光の輝きを前に笑顔を浮かべた。そしてこれが自分の最期だというなら……せめて六幢らしく華々しく散つてやろう。

龍田は握り締めた薙刀を一瞥する。

そしてそれを支えに、ゆっくりと立ち上がる。

「まだ立ち上がるか……！ 見事！」

野分の口角が上がる。

そして龍田もまた同じように口角を上げる。

——あの光が大きくなる前に一撃を叩き込めれば、少なくとも阿野ちゃんたちは助かるかもしれない…。

——ここで私がやらなければ…誰が、誰が守るといふの？

「はあああああああああああッ！」

龍田の咆哮が空気を揺らす。

そして走れなくなった体を引き摺りながら野分の元へ。

——分かっている、こんなに遅ければ…野分の元へ辿り着くまでに死ぬなんてこと…でも！それでもツ！

龍田はその足を止めなかった。

「——嫌いじゃないぜ？そういうのツ!!!」

——刹那。

「…ば、馬鹿な!?!」

野分は自身の体を貫く刃…その鋒を目に映していた。

## 増援

——ここを訪れるのは本当に久々な気がする。

僕の前には古びた扉が——心地のよい懐かしさを感じさせながら佇んでいる。そして僕はドアノブを握るとゆっくりとそれを開け、一步一步を噛み締めながらその先へと進んでいく。

「…だ、誰ですか!？」

すると僕の瞳には、驚きの表情を浮かべながら、眼鏡越しに僕の顔を見る娘の姿が映っていた。僕はその娘の顔に見覚えがなかったので、自分の後に続いて執務室に入ってきた艦娘…睦月にそつと耳打ちする。

「…えつと、あの娘は?」

「あ、ああ…この娘は大淀さんなのね!」

突然名前を呼ばれた大淀という艦娘は、背筋をピンと伸ばすと綺麗な直立を見せる。そしてそのまま固まってしまった。

でも今の状況を考えれば、それは無理もないだろう。見知らぬ人物が急に現れたら警戒するのは尤もなことだ。

「…あ、あの」

「もしかして貴方は…長門さんが言っていた…」

——そんなことを考えていると、大淀は僕の顔を見ながら恐る恐るといった感じで声を掛けてきた。そして今は亡き大切な人の名前に、思わず顔が熱くなるのを感じた。

「…大淀さん！急だけど…この人に放送器を使わせてあげて！」

睦月の叫ぶような声に僕は我に帰ると、そのまま彼女に背中を押され放送器の前へ。大淀は特に放送器を使うことについては何も言わなかった——おそらく何が起きているのか分からないのだろう…落ち着かない様子でアタフタしている。

この放送器のスイッチを入れることには、大分因縁があるが…状況が状況だ。

気付いたら僕は、放送器の電源を入れ、マイクに向かって語りかけていた。

「敵襲！敵襲！！鎮守府に所属する艦娘は直ちに避難して下さい！繰り返し！——敵襲！敵襲！！」

スピーカーを通して、僕の声が鎮守府内にこだまする。

「ただ避難しろだけじゃダメにや！どこに逃げるのかもちゃんと言及するのね！」

後ろから睦月の声がする。

確かに…その助言は尤もだ——だけどどこが安全なんだろうか。

僕は繰り返し避難を呼び掛けながら、考えられる限りの安全地帯を模索した。だがあ

るのか!? そんな場所!?

鎮守府は火の海だ：：となると海上へ逃げてしまった方がいいのだろうか? そうだ、彼女たちは艦娘なんだから彼女たちが真価を發揮する環境へ誘導しよう。

ならば：：避難場所は鎮守府の母港か：：!

早速僕は必死で考えた避難場所を伝えようとマイクに顔を近付ける：：が。

「：：避難場所はどこにしたんですか?」

僕は不意に肩を掴まれ、放送器から離される。そして訳も分からず振り返るとそこには、眼鏡をクイツと上げる大淀の姿があつた。

「：：へ?」

突然の出来事に僕は思わず固まった。

だがそんな僕に、彼女は容赦なく避難場所について問い掛け続ける。

———というか彼女の眼鏡が光を反射しているせいなのだろうか、瞳：：表情が見えずなんか怖いんですけどお!

「ど、どうしたにや!?! 大淀さん!」

すかさず睦月の援護が入ってきたのは救いだ。そしてその言葉が大淀の真意を吐露するきっかけとなる。

「：：正直何が起きているのかさっぱりですが———この異常事態、私もなんとかしなけ

ればと思っていました。そして今しがた貴方が避難を促すのを見て、思ったんです」

そこまで言うのと、彼女は僕を押し退けて、放送器の前へと歩み出る。

…お、大淀さん？

「貴方の言葉では響かないんです!!!ここを追放された貴方の言葉では——すると避難の遅れに繋がる…救える命も救えません!ですから!!」

「( )は私…軽巡大淀にお任せ下さい!!!」

ドーンと胸を張って彼女はそう言い放った。

…というか僕が追い出されてたこと知ってたのね。

口を開け、呆然としてしまう僕と睦月。

そんな僕たちを尻目に、大淀は眼鏡を再びクイツと上げる。

——でも確かに…その通りかもしれない。

ここを追放した者と追放された者の間には、残念ながらも溝というものも存在するわけで——それが避難の遅れに繋がって最悪の事態を招いたら…。

時間はない…僕は即決した。

「大淀さん!皆に鎮守府の母港へ避難するように伝えてくれ!そして状況に応じては海上へ避難すること!」

「…承知しました!!!」

大淀ははつきりとした声で返事をする、すぐに放送器の方へと向き直り、避難を呼び掛け始めた。

僕はその様子を一瞥すると、すぐに次の一手を打つことにした。

——あの時と一緒だ。自力で避難出来る娘ばかりじゃないだろう……誰かが支援しなければ！

僕は口を開けたまま直立不動している睦月の肩を揺さぶると叫んだ！

「……にやしい將軍……台車を取りに行くぞ！」

「……にやしいッ!?!」

□

乱暴に引き抜かれた剣——それを滴っていた血液が辺りに飛び散った時——野分は血反吐を吐きながら、よろよろと歩き出した。

「……ッああ！な、なにが……何が——!?!」

彼女の胸からドバドバと流れ出る血は、大地を真っ赤に染め、錆びた鉄の匂いを想起させる。そして必死で胸を抑える野分だったが、血の流れは一向に止まる気配がない。

野分は己の肉体にこのような傷を負わせた者の顔を拝もうと、ゆっくりと振り返る。するとそこには眼帯を着けた顔に笑みを覗かせ、自分を貫いたのであろう剣を携えながら悠然と構える者の姿。

野分は怒りを露にした。

「——おのれ！おのれおのれおのれえ!!! 私たちの至高の戦いに水を指すとは——許せん！許せん!!」

口元からどす黒い血を垂れ流しながら野分は叫ぶ。

しかしそれに負けじとその者は大きな声を張り上げた。

「…至高の戦いだあ？バーカ、戦いに至高も最低もねえよ！戦つつうのは生きるか死ぬか…ただそれだけだろうが!!!」

そしてそれを言い終わるや否や、その者は勢いよく踏み込むと、一気に野分の懐へと肉薄する。

そして野分が自身の胸を庇うように置いていた手もろとも剣で突き刺すと、彼女はジリジリとその手に力を込める。

「…があああああああッ!!!」

絶叫を耳に、尋常ではない量の返り血を浴びながらも剣を握る力が緩まることはない。

しかし野分はその身を貫かれながらも、その眼にまだ絶望を灯さず…むしろ彼女の翡翠色の瞳は、電撃が走ったように爛々と輝く。そして苦悶の表情がフツと消えたかと思えば、彼女は一度は弱まった光の束を手に、それを大きく上へと投擲した。

「!!!」

上空へと投げ出された光……それはその形を——刀から氷柱つららのような形に変貌させ、瞬く間にその数を増殖させた。そして幾つもの閃光がまるで円を描くように宙に並列する。

「……フフ、フフフツ——ククツ……クククツ……ッア——ハッハッハ!!! いいだろう——  
——いいだろういいだろうオ!!! 生きるか死ぬか……か気に入ったア!!! そこまで言うのなら  
この無数の光の刃を掻い潜り——生き残つてみせるオオオオ——」

黄金の煌めきを伴った光の刃——それは宙を埋め尽くす程の数で……そこから想像される破壊力、展開範囲は標的に後退という選択を与えない。

——尤も彼女たちが後退を選択をするということは……。

□

「てめえ! 何しやがったあ!」

剣を突き刺したはずなのに……ソイツは全く死への恐怖というものを感じさせないどころか、大声で笑い始めやがった。だからソイツの胸ぐらを掴むと、俺は大声で叫んだんだ。

——そして気が付いた。

投擲された光の塊があつという間に空に展開したのに気を取られて気が付かなかつ

たが…ソイツの翡翠色の瞳は血がまじったからだろうか——深紅の色を映していた。そしてソイツの息が途絶えていることを知った俺は、眩い光を前にどうするかを考えていた。

——いや、考えても仕方がなかったのは言うまでもない。

宙を漂う幾つもの閃光が一齐にこちらに射出されれば、まず逃げることは不可能だ——ならば。

「…上等だ、やってやろうじゃねえか!!!」

俺はソイツの体から引き抜いた剣を大きく横に薙ぎ払った。それに伴って血が辺りに飛び散る。

——俺は覚悟を決めた。

——この猛攻、全部受けきってやる。

無謀なのは分かっていたが、やるしかなかった。

この剣が毀れようとも、そして本末転倒だがたとえこの命が尽きようとも…俺はソイツの言った言葉に立ち向かわなければならなかった。

そしていざ閃光が一齐に地に降り注ぐかどうかというところで俺はその背に暖かさを感じた。

そしてそれが誰かが俺の背にぴったりと背をつけているんだと認識した時には——

——宙に浮かんだ幾千の閃光が大地を覆っていた。

——まさに一閃だった。

俺は無我夢中で剣を振るった。

そしてふと我に返った。

見ると俺の体は血だらけで、辺りもすっかり先程とは地形が変わってしまった。

ただ痛みを感じることで生きていることを実感した。

そして——

佇む俺の隣には……静かに横たわっている一人の艦娘の姿があった。艦装は激しく損傷し、粉々に砕け、露出した白い肌からは赤色の液体が止めどなく流れている。

そして俺が跪いてまだ息のあった彼女を優しく抱き寄せると、彼女は虚ろな瞳を浮かべながら、弱々しい声で語った。

——俺が耳元で聞いたその言葉は……おそらく俺は忘れることはないだろう。

そしてその言葉を向けられた者はつくづく幸せ者なのだと思う。

「……あ、青葉ちゃんに……伝えて……貴方は足手まといなんかじゃない

……素敵な艦娘よ……って……お、ね……がい……」

俺は血だらけの手で彼女の冷たくなった手を握ると、無意識のうちに叫んでいた。

「……ああ、絶対に伝える。だから——」

——もう休め……

俺が最後までその言葉を続ける前に、その艦娘は微笑むと「……ありがとう」と言つて静かに息を引き取つた。

名前も知らない艦娘だが——ボロボロな体で必死に強大な敵に立ち向かう姿は俺の胸を打つには十分だった。

そして同時に俺たちの鎮守府を救つてくれた恩人を失つたことは激しい喪失感を俺に与えた。

「……名前くらい聞いとけばよかつたぜ」

俺はそう言つて、静かに目を閉じている彼女の髪を撫でる。そして砕け散つた艦装の一部を手にとつた……彼女が最期に望んだ想いを届ける為に。

「……ツと、俺も少し……休ませてもらうか」

もう一歩たりとも動けない体を地につける。

そして穏やかな表情を浮かべて眠る彼女の隣で、さつきまで光に包まれていたはずの蒼天を眺める。

そして朦朧とする意識の中で、名も知らぬ彼女に言い様のない想いを寄せながら、その瞳を閉じた。

## 川内の想い 4

牢を飛び出した時——相変わらず鎮守府の揺れがこの地下にまでズンズンと響く  
中、私はとにかく何が起きているのかを見極める必要があると感じていた。

「…つとその前に」

私にはやることがある。

想いを馳せるのは、同じように地下牢へ幽閉された妹たちと阿武隈、金剛のことだ。

「…確か音がしたのは」

私が出した想いを貫いた結果…彼女たちを危険な目に遭わせてしまったのは本当に  
申し訳なく思う。だけどそれでも…私は止まるわけにはいかなかったんだ。

大切な人のことを想うと、相変わらず胸にチクリと痛みが走る。でもそれは不思議と  
不快な感じではなくて、むしろ心が温かくなるのだ。

「…川内ちゃん!!!」

ふと呼び掛けられ、ハツとする。

そして私の目の前には、自分と同じように息を切らしながらも、覚悟を決めたような  
顔をした妹たちの姿があった。

「神通！那珂！」

私は二人に駆け寄ると思いっきり抱き締める。

そして先刻抱いていた想いを彼女たちに吐露した。

「…ごめん！私のせいで二人を…！」

でもその言葉が続けるより前に、二人が私に負けないくらいの力で私を抱き締め返してきたので、いろいろな意味で胸が詰まった。

「…川内ちゃん、ここまで来てそういうのはやめよう？もう那珂ちゃんたちだつて覚悟を決めてるんだからさ」

耳元で聞こえたのは穏やかな妹の声。

——うん、ありがとう…。

私は感謝を示すべきだったのかもしれない。

ちゃんと言葉で「ありがとう」と伝えるべきだったのかもしれない。でも込み上げてくる熱いものに私は眉の一つでさえ動かさなかった。

そして妹たちの体に顔を埋めて、上げることが出来なかった。上げたらしきと…。

「…ふう、相変わらず夜戦バカとその妹たちは空気が読めないわね」

「…What!?!どう考えても、感動の再会デシヨウが!?!空気読めないのは阿武隈…Yo uネ！」

「…んなっ!？」

…どうやら阿武隈も金剛も無事みたいだ。

二人の変わらぬ振る舞いに私はクスリと笑みを溢すと、顔を上げてそのまま乱暴に目元を拭った。

そして今度こそ…私は大きく声を張り上げた。

「…ありがとう!!!みんな!!!」

私の精一杯の想いをその場にいた誰もが穏やかな表情を浮かべて聞いていた。そして事態は急を要していたこともあり、私は一言…たった一言を皆に告げた。

でもその一言こそが、今私たちの果たすべきことを表すのに最適だった。

「守るんだ…私たちのかけがえのないもの全部!」

□

「敵襲かどうかは定かではありませんが…度重なる爆発音——異常事態と考えないのは無理な話です」

走りながら、神通の言葉に耳を傾ける。

そして彼女は凜とした表情で言葉を続けた。

「…しかもあらゆる方面から爆発音に紛れて悲鳴や航空機のエンジン音まで聞こえます

——特にひどいのは鎮守府の正面でしょうか」

「…つまり」

「この目で見るまでは確信は持てませんが…以前の襲撃事件のように——敵が襲来したと考えるのが妥当でしょう」

神通の冷静沈着さにはいつも助けられる。

そして、そんな彼女の言葉から滲み出る焦りは、事態の深刻さをより一層私たちに感じさせた。

また、この中で最も強い艦娘である彼女だからこそなのだろうか…神通はグングンとスピードを上げ、私たちよりも前へ前へと出ると、その距離を開けていく。

「姉さんたちは怪我を負った娘たちの救護にあたってくださいー！」

その言葉を最後に、彼女は風のように駆け抜けて行ってしまった。だがここで無理に彼女を追うというのが愚策なのは、誰の目に見えても明らかだ。

最強の剣客…その一角の言葉だ。

私たちは仲間の救護活動に奔走することにした。

ただ金剛は自身が戦艦であることを考慮し、救護よりも戦闘に参加した方が良いと判断したようで、私たちにその旨を伝えると神通の後を追っていった。

「ま、パワーだけなら神通に引けを取らないし、敵の戦力が分かっている以上、金剛には戦闘を任せられた方が無難じゃないかしら？」

阿武隈もそう言っていることだし……大丈夫だとは思うのだが……どうも胸騒ぎがしてならなかった。

「川内ちゃん！歩みを止めてる暇はないよ！」

一抹の不安を覚えながらも、那珂に背中を押されるがまま、私は走る。

そしてとにかくまずは、負傷した艦娘を探そうとしたのが……。

「……川内さんッ！」

突然後方から私を呼び止める声があった。そして振り向いた先にいたのは……。

「……大井」

□

遠くで鳴り響く砲声や破裂音を潮騒の中に聞きながら、ニヤツとほくそ笑む者は、一体その頭になにを思っているのだろうか。

彼女の大きく見開かれた目は、水平線の先へと注がれ、荒々しく吹く潮風によつて彼女の美しい黒髪が靡く。

そして彼女の近くにあった——鎮守府の母港に設置されたスピーカーから声が発せられる。

「敵襲！敵襲！！鎮守府に所属する艦娘は直ちに避難して下さい！繰り返します——敵襲！敵襲！！」

スピーカーから流れる声は、途中その主を変えたようだったが、依然として避難を促す内容が語られている。すると鎮守府の母港へ避難を促す放送を耳にした彼女は、狂ったように笑い出すと、その背中に幾つか突起物を隆起させた。そしてそのままギョルツギョルツと不快な音を立て膨張する突起物は、一気に伸びあがると彼女の後ろで蠢いた。

…彼女の背から生えた線状のそれらは——触手、そう表現するのが最も近いだろうか。そして粘着液を垂らしながらモゾモゾと蠢くそれらを一つ一つ大層いとおしそうな顔で眺める彼女は、誰に聞かせる訳でもなく唐突に呟いた。

「…マザーから聞いておいて正解でした。しかも川内さんが榛名に掴みかかってくれたお陰で——感動の再会を演出してあげられそうです」

そう呟くや否や——不規則に蠢いていた触手が一斉に動きを止め、ブルブルと小刻みに震えだす。

そして各々の触手はその先端部分を膨らませ始めたかと思えば、徐々に丸みを帯びた形へ——そして大きく振幅し、最終的には人の形を形成した。

——触手が自身の望んだ完全形へと移行した時、彼女は高らかな笑い声をあげた。そして造られた者たちの頬を順々に優しく撫でる。

——虚ろな瞳。

——何も発しない口。

——そして何よりそれらは生を感じさせない。

「…榛名もマザーの真似事をしてみましたよ。尤も、マザーの足元にも及ばない贋作です。がねえ」

——その者たちは『還つてきた』のに喜びを表さず、ただ静かに佇むだけ…。いや、本来は還るべき場所に還つて、安らかに眠りについていたはずだった。

それを彼女は呼び覚ましたのだ。

そして大きく手を広げた彼女は、意気揚々と語った。

「…さあ皆さん！ここに貴方たちの大切な仲間たちが来てくれるみたいですよ！存分に味わいましょう!!!」

「——感動の再会を!!!」

………

………

…

この様子を物陰から覗いていた艦娘…島風は言いようもない恐怖に自分の体が震えていることに気が付いた。

そして目を疑った…。

「な、なんで……」

信じられない光景を目の当たりにしたせいだろうか、彼女は心臓がバクバクと脈打つ音を感じていた。

そしてやつとのことで絞り出した声、それは大きな戸惑いを孕んでいた。

「なんで朝潮たちが……」

彼女の視線の先——そこにはかつてこの鎮守府を守るためにその命を散らした者たちの姿があつた。